SHOXX

1992
Vol.10
750 YEN
7月号
隔月刊

ヴィジュアル&ハードショック・マガジン
ショックス
VISUAL & HARD SHOCK MAGAZINE

鮮烈なヴィジュアル&ハードショック

ZIGGY
LOUDNESS
橘高文彦 with DEN
ZI:KILL
幻覚アレルギー

HIDE
COLOR POSTER

YOSHIKI
A to Z Monologues

LUNA SEA
時代が生んだ幻の華

時代が生んだ、幻の華…。

SHOXX

7月号(Vol.10)

Vol.11(9月号)は7月21日発売!

★特製カラー・ポスター

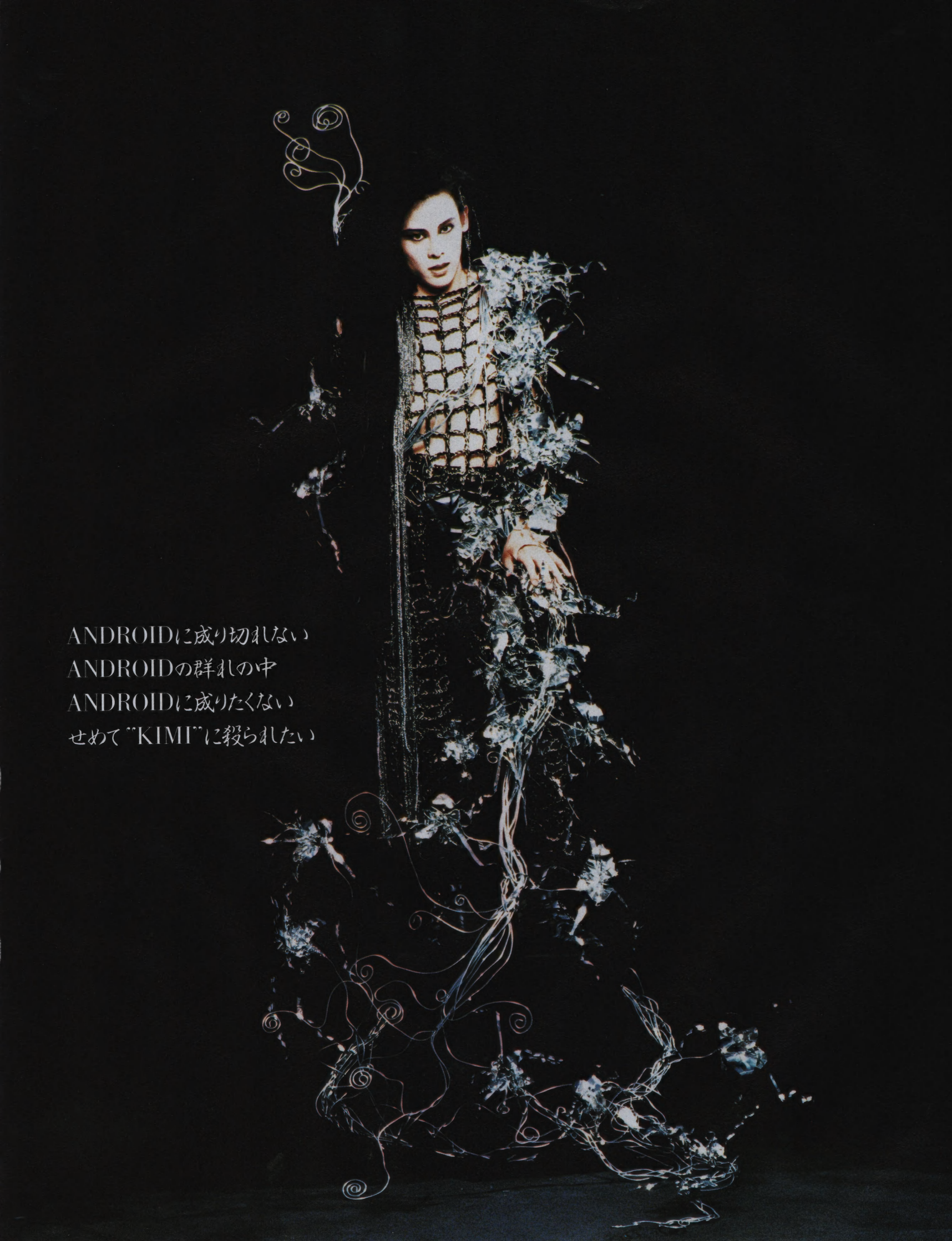
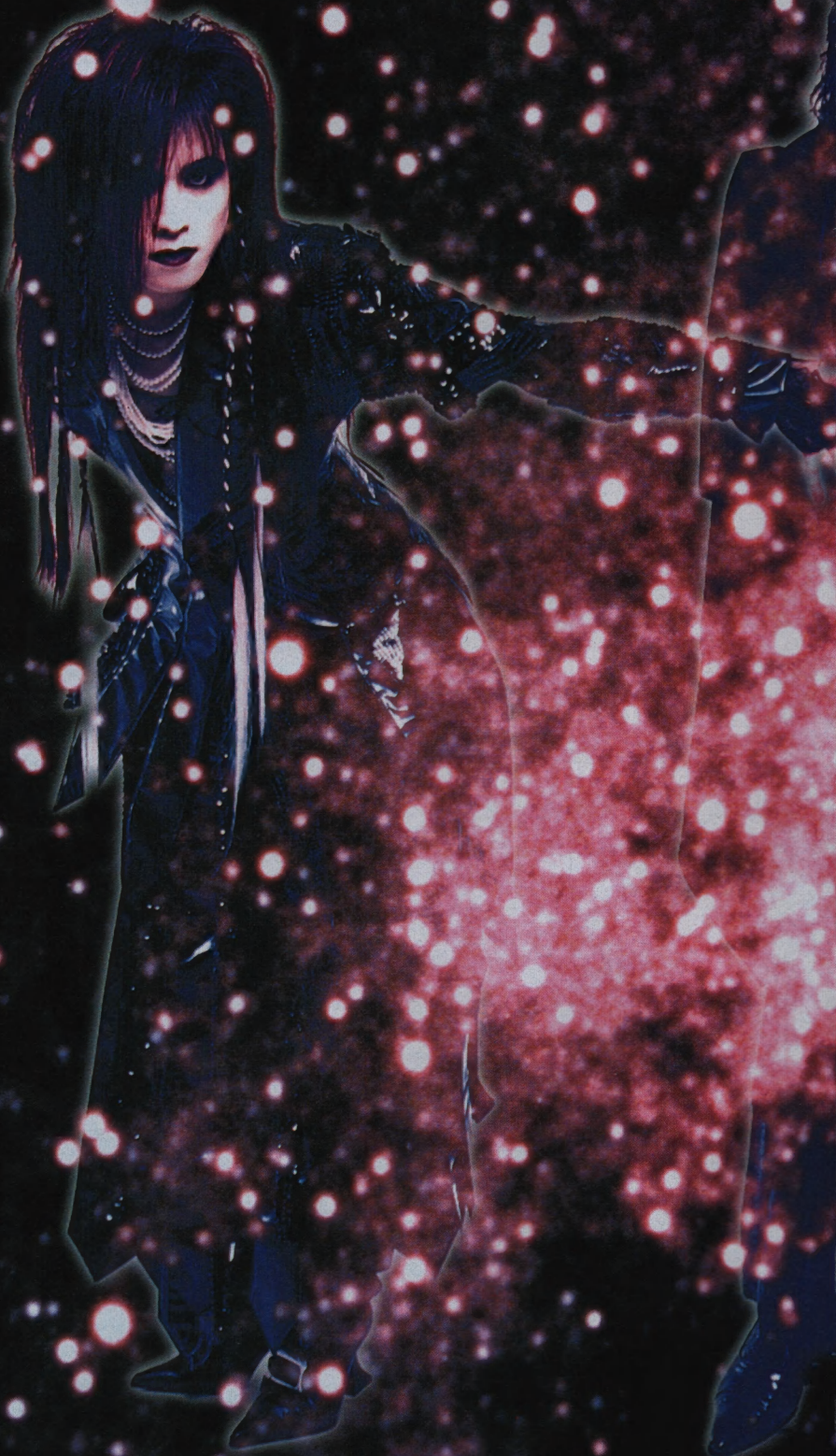
付録 HIDE (X)

発行所：株式会社音楽専科社 〒104 東京都中央区銀座5-1-7数寄屋橋ビル ☎03・3574・0201
発行人：荒井敏行　編集人：星子誠一
製版・印刷：株式会社プロスト
発行日：1992年7月1日
定価●750円(本体728円、送料260円)

CONTENTS

COVER MODEL:LUNA SEA　PHOTO:HIDEO CANNO

STAFF ●Editorial Direction→Seiichi Hoshiko ●Editors→Seiichi Hoshiko/Naoko Endo/Reika Iwashita
●Art Direction→Page
●Design→Page/Katsunori Miyake/Kie Nara/Chiharu Doi

LUNA SEA
時代が生んだ幻の華・・・・
毒を風に乗せて狂い咲く
はかなきは花の命のごとく
うつろいやすきは人の心のごとく
あらゆる存在は刹那。
生まれた瞬間から消滅へと向かう。
闇に瓜をたて　何を傷つける？
時の流れを走り　何を逃れる？
何を追い求め　そして何を手に入れる？
愛しきものを愛しむ　漂う夢の中
瞳ひらけば　すべて――――。
"Image is calling you"
Photography:HIDEO CANNO
Computer Graphics:CANNO & DUB-FACTORY
Hair & Make Up:TETSUYA KAMEYAMA
Stylist:SAYURI CHIHARA
Object & Costume Produce:EMI TAKAHASHI (Special Thanks:KAORU SUTOH)
Design:KATSUNORI MIYAKE

CALL FOR LOVE

ANDROIDに成り切れない
ANDROIDの群れの中
ANDROIDに成りたくない
せめて"KIMI"に殺られたい

予言が聞こえて来る

ただ一人待てば良い

I want You To Bleed For Me
Light Of Sorrows

嘘の世界に閉じ込められたあなたの為に
飾りの愛と死にましょう

I Wish For……

穴の開いた空が想う

拒否反応
愛情の骸

何所かに見た二人の時　愛情も執着

衣装協力｜SKINHEAD/CONFUSION

今は心の中で、嵐のように混ざり合ってるから。
INTERVIEW REIKO ARAKAWA
RYUICHI
VOCAL

自分でこんな詩が書けるとは思ってなかったという程、新しい一面を見せている「Image」の歌詞。一体RYUICHIの中でどのような変化が起こったのだろう？これまでの活動の中で彼を変えたものは何か？これから表現していきたいと考えているものは何か？この歌詞が示すこれからの方向性、描いていきたい世界をこのインタビューを読みながら感じとって欲しい。

――今回のアルバムの中で特に「Image」と「WISH」の歌詞が、今までの歌詞と違うなっていう印象があるんだけど。

RYUICHI そうですね、「WISH」に関しては、Jの言葉使い？とか伝えたい気持ちっていうのもあって、重なる点が凄い時間かかったのね。録る寸前まで2人でいろいろ言葉とか考えたりしてたから、メロディは決まってたんだけど、結構時間かかったかな？そういう意味ではまぁ、Jにも思い入れがあった曲だなっていうのは印象にあるけど。

ただ今回のアルバム、例えばこれが2年前に同じイメージで作ったとしたら、もっと閉鎖的だったと思うのね。それが、閉鎖的なら、なぜ閉鎖的であるべきか？っていう自分の中での位置付け？それがハッキリしてたから。やっぱり閉鎖的なだけでは……、例えば閉鎖的なものを歌うんであれば、それを肯定化してしまう程、ワザと肯定化してしまう程逆説的な文章にしたかった。

――閉鎖的というならば、開放的とでもいうの？今回の詩っていうのは。

RYUICHI っていうか、閉鎖と開放っていう言葉もそれほどビシッと当てはまってるとは思わないんですよ。だから、自分に対して嘆いてる文章？それを閉鎖的と指すならば、ちょっと今回は作りたくなかったのね。

嘆きではなくて、ある意味ではそれを肯定化してしまっている自分？認めてしまっている自分？そういう事実に気付いてるんだけど、悲しみはあったとしても悔やんだり、嘆いたりしてない自分がいる文章だけをピック・アップして書いた。本当に嘆いて嘆いてしようがない、どん底の文章はない。ある程度先に光が見えてて、だから今後どうするんだ？っていう部分を鍵として残したかったし。

――そういう気持ちにさせたものって？

RYUICHI もう生活観しかないかな？光の中心に立って書いてる訳じゃないけど、昔見えなかったものがどんどん見えるようになってきて、おぼろげながら形が見えるようになったとかね。でも、どの位距離が縮まったのか？とか、いつ到達するのか？っていうのは考えないようにしてるんだけど、昔より物事全てに理由とか、自分の中での自信？何か起こす時、発言する時、自分の中の意味？そういうのが必要になってきてるのは確か。自分の中に意味のない言葉を発したならば、それはワガママでも何でもなくて、何かに影響され左右され放った言葉でしょ？それだけはどうしても自分の中で許せない。

それより、自分がここが嫌いだ、とか俺のここはちょっと子供だな、って思ったとしても、それが本当に自分の思ったことだったりするでしょ？他人がどう思おうが好きなものとかってあるでしょ？そういうのをハッキリさせたいっていう自分がいたから、まぁ今の人生観って言うんですか？生き方そのもの。

――そうだったんだ。

RYUICHI うん、それとお客さんには凄く感謝してるのね。だから満足っていう言葉は使いたくないの、お客さんに対しては。今は今で充実した空間があるけど、もっと充実した意識の疎通が欲しい、もっと大きい空間での。

だからそういう意味でも何を、彼等お客さんに対して訴えてあげられるか？って思って……今言えることって言ったら、偽物の自分をこうですって表現することよりも、きっと素直に自分の好き嫌いを見せてあげた方が喜ぶんじゃないかな？って。もう、それしかないからね。下手に彼等はこれを求めてるから、それになりきってあげよう、とかっていうのも変だし、どんどん回りが自分を求めるようになり、自分も回りを求めるようになった時の力関係？引力みたいな、それの軌道をある程度自分で守る為、自分ってものを持たなきゃいけない。それがいい意味での生き方になってる。

――アルバムの中で特に今の自分だなっていう曲は？

RYUICHI 全部そう。その中でも「Image」って曲は、自分ではこんな詩が書けるようになったか、っていう感じのある曲。この詩はちょっと今までの俺には書けなかった詩だな、と思うから。

――どういう感じで考えていったの？

RYUICHI 僕の場合、詩はメロディと一緒に考えることが多いのね。例えば曲によっては、こんなサビで歌ってもらいたいんだけど、どうかな？ってくるの、曲の持ち主から。で、自分の歌い回しにピッタリくる場合と、どうしてもピッタリこない場合があるでしょ？そういう場合はどうやって、そこを到達点として持っていくか？じゃあAメロはこう歌おうって、とか。どんな曲でも絶対自分の歌い回しって入ってるのね。「Image」はほとんどメロディも考えちゃった曲だから、もう考えてる時に……こう言ったら変だけど、偶然の産物だけど、言葉がのってくる訳。で、キーワードだけが残るの。勿論要らない言葉もあるし、思いつきで放ってる言葉もあるし、ただ曲のイメージと、その自分の人生観とその場の雰囲気、空気全ての要因が混じり合う中で、キーワードが残るの。それが「Image」では時間だったり、イメージって言葉だった。

――他のメンバーも書いてるんじゃない？この歌詞は。そんなことない？

RYUICHI どうだろう？これは俺にしか絶対に分からないっていう言い方絶対にしたくないのね。っていうのはお客さんが「WISH」を読んだり、「Image」を読んだりして、自分なりにこれは恋愛の歌だとか、これはきっと人間関係の歌だとか、これはもっと宇宙レベルでの歌だとか、当てはめられると思うのね。そのシチュエーションって、その人が生きてきた過程の中で、自分が1番心地良いとか懐かしいと思ったり、哀しいと思ったりする喜怒哀楽の感情の中で1番好きであったり、印象深いものだと思うんだよね。全曲きっとそのそれぞれの絵を詩の中に描けると思ってるのね。だから全員、俺がこう思ってるから、それを思って欲しいっていうのは全然ないの。ただその詩に関しては、ビックリしただろうなって。まず、言い切ってること。今までだったら、名詞があって、自分の言葉として"何々していたい"とか"きっとこれには、もう届かない"とか、そういう感じだったんだけど、回りに対して言い切ってる感じ？

――それはあるね。

RYUICHI それは、この詩が初めてだし、自分でもこれから、こんな詩書けるのかな？っていうのもあるし……。前にも言ったことあるけど、絵を見せたいって話したでしょ。やっぱり意思の疎通だよね、自分がそれをライヴとか、CDの中でも勿論表現しなきゃいけないし、その存在を吹き込むってことはきっとそういうことなんだろうと思うけど、ただ詩だけを読んだ時には、その日その日で曲に対する見方って変わってるんだよね。変わってって成長していってるんだよね。だから、今後はこんな絵を歌いたいな、って考えなくても浮かんでくるし、それが素直な自分だし、その方がお客さんとの関係は面白いんだよね。神経衰弱をやってるみたいで。裏返したら同じ絵だったみたいな……、新鮮な感じがある。それは持ち続けていたいし、今の自分だと思うし。でも最終的には何もかもハッキリ言えるような自分にいつかなりたいと思う。ただそれを、どのように表現するかは分からないし、今は心の中、嵐のように混ざり合ってるから、私はこれですーって言い切れない自分がいる。でもどこで言い切るか、だろうけど……言い切ってしまったら音楽、ヴォーカリストとして、表現者としてどう生きていくか？っていうのが厳しくなってくるかもしれないし……、だから背伸びせずに、っていうのが本当にピッタリ。今出来ること？解からないこと無理矢理解かろうとしないし、自分が思ってることだけを書いてるって感じ。

――ヴォーカルもいろいろと試みがあったようだけど、それは意識的に？

RYUICHI うん、やってみたかった。やっぱりメンバーが成長しようとしてるじゃない？全員。俺も勿論そうだし、同じことやっても成長って見せられるけど、今って何でも出来ると思うのね。だから、それはメロディにしても詩にしても、いろんなことしたなって。

――歌詞を作るうえでの苦労はある？

RYUICHI 葛藤はありますね。言葉に対する憧れってどうしてもあるからね。ステージに立ってる人間として、今まで観てきた自分とか居て、やっぱり憧れってあるじゃない？だからどこまで本当か？っていうのに時間がかかる。この言葉本当に俺の言葉か？って何度も確かめる。

――タイトルは誰が？

RYUICHI アルバムの方は皆で、各曲の題名は結構自分で考えますよ。

――前作同様ワン・ワードが多いですね。

RYUICHI ワン・ワードにしてるのもあんまり説明しすぎると、その一言でも説明しすぎてるのもあるけど、やっぱり考えてもらいたいし、それから僕の詩はあくまで、自分のソロとしての自我じゃなくて、それよりも5人の共通したもの。

――前回から今回のレコーディングまで、考えたことも多かったんじゃない？

RYUICHI 今回は、全部意味が欲しかったな。何故レコーディングするのか？とか。どんな歌をどんな気持ちで歌うのか？とか、この歌をアルバムに入れる理由。勿論5人やスタッフとの関係もあるけど、最終的にはメンバー間で話す訳じゃない？皆の自我があって、その中で相手を理解すること、自分を理解させるっていうキャッチ・ボールの中で理由が欲しかった。自分の残したものってメロディにしても詩にしても、5人で残したものだなって思えるし、逆に言えばそれ以外のなにものでもない。これは自分ですーっていうのものじゃなくて、5人ですっていうのがピッタリかな。

ギタリストとしてのこだわりより、
曲を最大限に生かしたい。
INTERVIEW:AKEMI OHSHIMA
SUGIZO

SUGIZOは、いつもとてもエネルギッシュだ。常に前向きで明るく、きらきらと輝いている。とくに、ありあまる音楽への情熱を語るときは、さらにパワフルになる。言葉が次から次へと湯水のように溢れ出て、そのひとつひとつが説得力に満ちているのである。やりたいことやいいたいことがたくさんありすぎて、それを必死で表現しようとしているSUGIZOを見ていると、こちらまで元気になってくるから不思議だ。

―SUGIZOは、小さい頃から、バイオリンを習っていたんだって?

SUGIZO うん。両親が音楽家だったんで、物心ついた頃からバイオリンを弾いてた。3才の時からやってたんだけど、昔はすごくイヤだったんですよ。好きでもないのにやらされてて、いちばん遊びたい盛りの頃に、家に帰ると2時間も3時間も練習させられてたからさ。いっつも、指に気をつけろっていわれてたし。だから、体育の時間にドッチ・ボールとかして突き指すると、「やった、今日はこれでバイオリンの練習が休める」って、喜んでましたね（笑）。

―何年くらい、やってたの?

SUGIZO 小学校の時は、ずっとやってた。高学年になったらやっと面白さもわかりかけてきたんだけど、中学に入ったらいろいろ反抗し始めて、やらなくなりましたね。でも、なんだかんだで練習してたから、高校くらいまでは弾いてたかな。自分でも面白さがわかってからは、遊びながらとかロックをやりながらも、弾いてはいましたね。

―ご両親は、SUGIZOをバイオリニストにしたかったんじゃないの?

SUGIZO みたいですね、口ではいわなかったけど。

―そういうご両親の期待に対して、SUGIZOはどう感じてた?

SUGIZO 幼い頃は何も考えてなかったんだけど、イヤだったのは、クラシックって偉大な昔の作曲家が作った音楽を、いわばコピーするわけでしょ。今ではそれはそれで素晴らしいことだなって思うんだけど、当時はそれがイヤだったのね。やるんだったら、自分で曲を書きたかった。だから、小さい頃から、作曲家にはすごく憧れてたね。

―ロックに最初に触れたのは?

SUGIZO 中学1年の時。YMOとジャパンとRC（サクセション）だった。あれはもう、カルチャー・ショックでしたね。そのあとは、もうこれ一辺倒。「これだ」と思った瞬間に、俺は音楽をやっていきたいと思ったし、その時には既にステージに立ってる自分の姿を自分の中に描いてましたよ。でも、中学の時は方法論がわからなくて、ただ「やりたい、やりたい」って思ってるだけだった。

―ギターを選んだのは?

SUGIZO そのカルチャー・ショックを受けてすぐに、楽器が欲しくなったのね。それで、なぜかわからないけど、アコースティック・ギターを買っちゃったんですよ。今、考えてみると、その辺の音楽が好きだったら、キーボードでも買えばいいのになぜか、アコースティック。何、考えてたんでしょうね（笑）。でも、その時はコードをひとつふたつ覚えただけで、弾かなくなっちゃったんですよ。そのあとは、ベース。当時はすごくベースに興味があって、曲を聞いてもベースの音ばかり耳に入ってきてた。他にも、いろんな楽器を試してみたな。きっと、楽器は何でも良かったんでしょうね。今はギターが体の一部っていうか、話すための道具みたいなものなんだけど、あの頃はきっと、自分にいちばんフィットするものを探してたんだと思う。ベースの他に、ピアノやキーボード、（トラン）ペットもやったな。親父がペットなんで、小さい頃から習わされてたんですよ。でも、中3になると、今度はパンクが好きになって、パンクスもどきの真似小僧になっちゃったんですよ。それで、高1は何もしないで遊んでたの。フラフラ遊びながらも、「俺は何をしたいのかな」って、結構、悩んでた。それで、最終的に、いきついたのがやっぱり音楽なんですよ。

―そして、ついにバンドを始めた?

SUGIZO 先輩のバンドに誘われて、最初はベースとして入ったんです。でも、何か納得いかないものがあって、結局、ギターと再び、出会ったんです。その時は、「やっと巡り合えた」っていう感じでしたね。

―二度目にギターと出会ったのは、何か特別なきっかけがあって?

SUGIZO 特別に好きなギタリストがいたわけじゃないし、本当に感覚だな。俺って自分の中に、本能だけで動く自分と、理論的に分析しちゃう自分と、二タイプいるのね。その時も理論的にどの楽器がいちばん可能性があるかなんて考えたりもしたんだけど、結局は手で触った感覚がギターがいちばんしっくりくるっていう理由で、ギターを選んでしまった。そのあとはもう、完璧なギター小僧。

―その頃は、どんな音楽をやってたの?

SUGIZO 俺自身は、これをやりたいっていうのは、なかったのね。ただ、たまたまやったバンドがヘヴィメタル系だったし、その頃はテクニックを磨くにはヘヴィメタルがいいと思ってたんだ。いちばん、耳に残るからね。だから、最初はギターのトレーニングのために聞き出して、だんだんのめり込んでいったんだ。

―ひずんだサウンドに、いきついてしまったのね?

SUGIZO そう。最初はジャパンとかあのへんのニュー・ウェイヴ系で、それから、パンクになって、高一の時はちんぴらみたいな格好して遊び回ってて、高二の時からはギター一辺倒。だから、音楽を本当にやりたいと思ってから4年間、自分の中で葛藤があったし、何かを探したり迷ったりし続けてたね。それで、やっとギターがみつかって、自分が何をやりたいかが確認できた。だから、確認できた時は、すごく嬉しかったですね。

―最初に、自分で曲を作ったのはいつ?

SUGIZO 曲といえるかどうかはわからないけど、ピアノを弾きながら音を譜面に書くっていうことは、小学校の低学年からしてましたね。初めてちゃんとした曲を作ったのは、16才か17才で自分のバンドを作った時。その時、もう真矢は一緒だった。

―え、本当?

SUGIZO 真矢は、俺がベースを弾いてるバンドの時に、「一緒にやろう」って誘ったんですよ。それで、俺がギターに転向してからも、ずっと一緒。その頃から、二人で「よし、このバンドで絶対にプロになろう」っていってた（笑）。

―高校2年の頃から、プロになりたいと思ってたんだ?

SUGIZO プロになりたいと思ったのは、最初にロックを好きになった13才の頃。漠然とだけど、絶対、音楽でプロになるんだって思ってました。

―小さい頃、クラシックを習っていて良かったなと思ったことは?

SUGIZO そういうふうに思い始めたのは、LUNA SEAを始めてからかな。ただ、曲を作り始めた頃は、作曲がすごく難しかった。クラシックの理論や知識はあったから、それに縛られちゃった部分があったんですよね。音っていうのはこういうふうに重ねるものだからとかって考えちゃって、それがかえって自分の発想を邪魔して、うまくいかなかったんですよ。最近は本当にピュアな気持ちで、感覚だけで作れるんだけど、最初の頃は試行錯誤してた。半端に理論とか作曲方法を知ってたから、余計に苦労したみたい。ちなみに、最初に作った曲は、メタル・コアみたいな曲でしたね（笑）。

―その真矢くんと作ったバンドは、どのくらい続いたの?

SUGIZO 結構、続きましたよ。明るいロックになったり、ロックンロールっぽくなったり、いろいろやったけど。でも、最初にオリジナルを作り始めた頃から、基本的には今と変わらなかった。ジャンルがこうじゃなくちゃいけないっていうのもなかったし、今のLUNA SEAみたいに何でもありの自由なバンドだった。それはもう、自分で曲を作り始めたときから、まったく変わってない。クオリティはすごく変わったけど（笑）。基本精神の「やりたいことは何でもやっちゃえ。音楽に法律はない」っていう部分は、昔から変わってないね。

―それって、基礎にクラシックがある人にしては、めずらしい発想だよね?

SUGIZO そうですよね。でも、それは、昔、クラシックを拒否してたからだと思う。その当時は、クラシックとか様式美とか、大嫌いだったから。そういう変な偏屈がすごくあったんだ。パンクも「あんな下手なのは、駄目だ」って思ってたし。だから、すごい一生懸命腕を磨いたし、テクニック面を突き詰めてた。今はうまいだけでいいとは思わないけれど、あの頃は自分のギターテクニックをあげることばかり、考えてました。

―それを思い出したきっかけは?

SUGIZO LUNA SEAを始めてからだな。もっと全体を考えるようになった。このメンバーになってから、歌っていうのは大事なんだなってことを再認識したね。それまで、俺にとって音楽っていうのは、ギターでしかなかったから。それで、振り返ってみたら、昔に好きだった音楽は、みんな歌が良かったのね。LUNA SEAを始めてからより視野が広がったし、どんどんナチュラルになってきてる。今でもその経過の途中なんだけど、どんどん偏見がなくなってきてて、いいものはいいといえるようになってきてると思う。今は、曲があってのギターだと思うから、曲を壊すプレイはしたくないし、その曲の欲しがる音しか入れたくない。

―それは、今回のアルバムにも、すごくいえることだよね?

SUGIZO そうですね。今は、ギタリストとしてのこだわりより、曲を最大限に生かしたい、いちばん光らせてあげたいっていう欲求のほうが強い。ギターのことだけ考えるより、曲全体アルバム全体を考えるほうが楽しかったし。それが、今回のアルバムはすごくはまったんじゃないかと思います。

前向きになりましたよ。前は後ろ行っちゃってたもん。（笑）

INTERVIEW: REIKO ARAKAWA

最近、生活のペースが速くなっちゃったよ、と笑いながら話すINORAN。アルバム『IMAGE』の「VAMPIRE'S TALK」「Image」の作曲をしている彼。その彼にとって今回のレコーディングはどんな意味を持つレコーディングだったのだろう?自分が納得出来るまで作品は出さなかったという話しから、作品、音に対するこだわりを中心に聞いてみた。

――まず、この間のインディーズ・ラスト・ツアーはどうだった?

INORAN ツアーは渋公、名古屋、大阪って行きましたよね、その前にTVジャック・ツアーをやってて、やっぱりその初日の青森で〝2ケ月半のブランクが〟って言ってたでしょ?そのブランクに関してはちょうど名古屋で元に戻りました(笑)。あ、渋公の最後かな?アンコールぐらいに戻りました。でもアンコールにいくまでは個人的には……ある程度は出来たけど……。

――東京しか観ていない人を目の前にして言いますねぇ。(笑)

INORAN (笑)でも一生懸命やってましたよ。やってたんだけど、勘っていうのが取り戻すのが難しいなって。いくら家で弾いてても、リハーサルで合わせてても、やっぱりライヴをやらないと勘って戻らないよね。

――強行軍だったけどTVジャック・ツアーがあって良かったんじゃないの?

INORAN 良かった、その点では。気持ち的には渋公をやって、落ち着いてっていうのはなくて、そのまま流されるままに……って感じで。

――いい区切りっていうか一段落したっていう感じじゃないの?

INORAN そうですねぇ、でもそんなにないですけどね。なんかつながっちゃってるから、分からないですよ。1日1日密度が濃くて……最近。人より早くフケちゃうんじゃないか?って心配しだした(笑)。

――(笑)そう?でも、INORAN個人のペースって速くなったんじゃない?

INORAN 速いよ!……だって寝る時間がないんだよね、1番大好きな(笑)。最近3時間ぐらいですよ。本当はもっと寝られるんだけど、やっぱり帰ってすぐ寝るっていうのは悔しいし、絶対に煮詰まっちゃうでしょ?音楽のことやって家帰って寝て、また起きて音楽のことっていったら結局睡眠抜かして音楽でしょ?だからTV見たり……気分転換。

――バンドのINORANとそうでない自分っていうのを分けておきたい気持ちが強い?

INORAN っていうか、バンド、音楽活動をより良くする為に……分けたいとは思ってないけど。

――なるほど。ではニュー・アルバムについての話しに移りましょうか。INORANの作曲の作品は「VAMPIRE'S TALK」と「Image」、まず「VAMPIRE~」について聞きたいんだけど、これって去年の4月のパワー・ステーションで初めてやった曲でしょ?

INORAN そう、パワステの前に原案がありまして……。

――この曲1回ひっこめちゃったでしょ、どういうところが気に入らなかったの?

INORAN なんか納得いかなかったんですよ。その時の気持ちっていうか、湧いて出たものが…。俺の曲っていうのは、骨組みがあってそれに任せっきりっていうか、メンバーにちょっとだけ、コード進行ぐらい教えて、それにニュアンスを伝えて、あとは皆に作ってもらうんですよ。で、皆で作ってる時に骨組みまでも何か違うかなって思って、ライヴでも2回…大阪でもやったんだけど、違うかなって。それから皆に〝違うから、ひっこめさせて〟って言って…それからずっとツアーだったでしょう。だから作る機会がなくて、その途中の感情とかアレンジの案が混ざってああいう曲になったんですよ。

――そうだったんだ。

INORAN いい曲になったぞ、と。1年がかりで作ったっていう。「SANDY TIME」もそうなんですけどね。あれも1回作って結構やったんだけど、それをひっこめてまた作り直したっていう。「VAMPIRE~」は凄い思い入れがある曲で、気に入ってるんですよ。

――思い入れって、何か出来事があったの?

INORAN あったんですよ、ああいう切ない想いが。

――この歌詞に似た?

INORAN いや、歌詞はまた……RYUちゃんにつけてもらって凄く好きなんですけど、俺の作ったイメージっていうのがあるんですけど、それは内緒です。(笑)だから、レコーディングの時、凄い力入れちゃった。

――(笑)じゃあ、もう1曲の「Image」の話に移りましょうか。この曲はいつ頃作ったものなの?

INORAN 10月の合宿か、その前の合宿。3回合宿行って……その前に大元はポッと浮かんでた。

――これはスンナリいけたの?

INORAN これもね、骨組み考えて……案外そうですね。構成は皆で結構悩んだんだけど、悩んだっていうか、最後に自分のパートだけ残っちゃったんですよ、作る時。それが出てくるのに時間がかかった。出てきたらパッと終わっちゃったけど。それが出てきたのがデモ録りした2、3日前ぐらい。

――ゆっくりしすぎじゃない?

INORAN ゆっくりしすぎ!(笑)やっていけない?浮かぶまでがねぇ……。

――やっぱり、ファーストと今回のアルバム製作を考えたら、今回の方が忙しいと思うんだけど、あまりにも忙しいと曲ってそう簡単には浮かんでこないものなの?

INORAN いや、そんなことないよ、もう1曲浮かんでるもん。

――なんだ、早いじゃない?(笑)「Image」っていうタイトルだけど、これは?

INORAN これは後からついたの。なんか……これって輪廻系、人生繰り返し系……何て言ったらいいか分からないんですけど、そういう曲を作りたくて、今の俺の好みがモロに出てるかな、何か今までと違うでしょ?

――そう、それはありますね。別に洋、邦と分けるつもりはないんだけど、INORANの中で昔から聴いてきたものの影響が自然に出てくるんじゃないの?

INORAN それはあるかも。だとしたら俺って日本のものが90%ぐらい占めてるかもしれない。洋楽って本当に聴かなくなっちゃったもん。

――洋楽離れさせる原因って何かあったの?

INORAN 何なんでしょうね、俺は考えたことないんですけど。歌詞が解からないっていうのもあるかも?節と歌詞が…日本の方が演歌調で好きなんじゃないかな?こういう言い方も変だけど。泣きのAマイナーっていうのが好きなんですよ(笑)。俺、泣きっていうのが好きで…だから明るい曲とかあんまり好きじゃない。

――そうなの?

INORAN 嫌いじゃないけど、切ない感じの曲の方が好き。

――明るめの曲が好きでそれを抑えてるのかなって思ってたんだけど。

INORAN いや、抑えてない。自然に出ちゃうの、そういう音が。日本人なんでしょうねぇ(笑)。いきつくところはAマイナー。だって前にTVでCHARさんが日本人はAマイナーから始まるって言ってた。アメリカ人がCとかCメジャーとか、イギリス人がDとかDマイナーって。納得しちゃった〝そうだよなぁ〟って(笑)。

――国民的体質のコードってあるんだ?

INORAN あるんでしょうね。

――じゃ、INORANは自分で典型的日本人コードって気がするの?

INORAN うん、する(笑)。でも昔聴いてた洋楽が記憶の奥の方がポッと出てくる時があるんだよね。

――別にこう作らなきゃって決めてる訳じゃないんでしょ?

INORAN そう。それがまた三者三様で面白いんですよ、ウチってね。皆が聴いたらどう思うかな?「Image」とか「WALL」とか早く反応を見たくてね。

――その三人三様の音って色にたとえたら、自分の曲ってどんな色?

INORAN そうだなぁ、今回作ったのは青かなぁ。透明な青。

――じゃあSUGIZO、Jの作った曲は?

INORAN SUGIZOの曲は白っていうイメージがある。Jのはハッキリしてる色で透明感がって、それが赤とか青とかいろいろある。

――今後、作っていきたい色は何色?

INORAN 淡い赤。綺麗な赤が作りたいですね。

――じゃ、次の作品では是非その淡い赤を、というのは気が早い話しだけど、INORANとしては総体的に見て今回のレコーディングって前回と比べたらどんなレコーディングだったの?

INORAN 前回よりはやっぱり、やりたいことに近付けるっていうか、近くはなった。機材的にも、テクニック的にも。今、振り返ってみるといいレコーディングでした。前回よりは、全然疲労感が違う。前のアルバムはある意味で逃げたいっていうのが凄くあったからね。今回も苦労したけど、それなりにちょっとは成長したのかな?みたいな。

――今回、特別にチャレンジしたことって何かある?

INORAN うん、「Image」って全部アコースティックなんですよ。1曲まるまるエレキを使ってない。

――それはどういう風に考えたの?

INORAN SUGIZOと話してて、それしかないなって2人でひらめいた。

――出来に関しては?

INORAN 超スペシャル・スーパー・満足(笑)。アコースティック・ギターって好きだけど、自分の気持ちっていうか、精神状態や体調がエレキよりも素直に出ちゃうんですよ。そういう意味では難しいし、奥が深いっていうのを感じましたね。

――最近前向きですね。

INORAN 前向きになりましたよ。前は後ろ行っちゃってたもん。(笑)何て言うのかな?自分自身今までギターを弾くことや音楽を作るっていうことが分かってなかったのかもしれない。今はだんだんそれが分かってきてアッチが見えてきたって感じ。

何が変わらないかって言ったら、
〝俺たち〟がかわらないんだから。
INTERVIEW:FUZUKI WATANABE

ステージ中央に腰を据え、ドラムでLUNA SEAを表現する真矢。だが、胸の中の思いは、なかなか言葉にしてくれない。感情を音楽で表現するのがミュージシャンにとって当り前なことのように、真矢にとっては、どんな思考も〝体現〟するのが当然らしい。彼もまた、高い精神性と実行力を持った、相当な完璧主義者なのかもしれない。ここでの発言から、そういう真矢の裏づけを感じてもらえるのではないだろうか。

——地味になりがちなリズム隊だけど、いかに目立つかということについては……

真矢　今は意識してません。一年ぐらい前は、それで悩んでたけど。うちのバンドは、ドラムだけがリズムを引っ張るんじゃなく、あるときはギターに引っ張られ、あるときはベースに引っ張られ……。一般的な印象だと、ドラムはリズムを刻むものだろうけど、俺はドラムもメロディー楽器だと思ってるんで。

——視覚的なアピールに関しては、どう？　ライヴでも、ドラムはステージのまん中に位置しているわけだけど。

真矢　あんまり考えてないな……。ドラム・セットには、こだわってるけど。俺の考えの中では、ドラム・セットはドラマーのいちばんのステージ衣裳で、ステージ・セットの一部なんで。

——例えば？

真矢　派手でなきゃいけない、とか。派手好きなもんで（笑）。でも、あんまり考えてないですよ（笑）。

——それだけ自分にとって、自然なものになってるってことでしょうね。

真矢　好きなことやってるだけだからね。こうじゃなきゃ、っていうのは特にないですよね。派手であること以外は（笑）。

——アーティスト写真のようなヴィジュアルの面でも同じ？

真矢　いつも帽子かぶってますよね。何だか（笑）。好きなんですよ、帽子が。ドラマーって、あんまりかぶってる人いないでしょ、すぐ落ちちゃうし。それを落ちないように工夫するのも好きなんですよ（笑）。ドラマーの中で、今いちばんいろんなモノを頭にくっつけてますよ、俺（笑）。やっぱり（ステージでも）上半身しか見えないからかもね。

——LUNA SEAの中の自分の役割みたいなものには、どんな意識を持ってますか？

真矢　何でしょうね（笑）。

——（笑）まわりの人は、どう言ってます？

真矢　どうなんでしょうね（笑）。俺、インタビューとかでも、あんまり喋らないんですよ。

——それは、なぜ？

真矢　意識しちゃって、喋れなくなっちゃうんです（笑）。

——活字になってしまうとうまく感情が伝わらないことや誤解があったり、それを敬遠している部分がある？

真矢　それは、ない。ただ俺は、カッコつけて喋るのが嫌いなんですよ。言うより行動で表してやれ、って思ってるから。本を読んでる人は活字でしかわからないのかもしれないけど……人間て、言葉では何とでも言えるけど、それを実際行動にできてる人って何人いるのかな、って。エラそうですけど（笑）。自分でも、カッコつけたこと言っても、それをすべて行動で表せるかっていうと疑問だし。

——不言実行の人？

真矢　どうなんでしょうね（笑）。まわりからは〝真矢って（ドラムの）練習、好きだね〟って言われるけど、俺、自分では練習嫌いだと思ってるから……あんまり練習しない人だと思ってるから〝練習、好きですか？〟って聞かれたら〝嫌いです〟って答えますよ（笑）。

——（笑）そうかぁ。ところで、作詞・作曲はしないの？

真矢　したいんですよ！。俺、ギター買ったの！　でもぜんぜん弾けなくて、人に貸しちゃった（笑）。

——何てことを……（笑）。ギターを買ったのは、いつ？

真矢　アルバムのレコーディング中です。突如、何を思ったのか〝次のレコーディングまでに曲を作るぜ！〟ってみんなに言って、でも弾けなくて貸しちゃった（笑）。

——とりあえず、弾くための努力はいろいろとしてみたの？

真矢　してみた。でも、才能ないみたいですね。細かい楽器はダメみたい。俺、ギターはぜんぜん弾けないや（笑）。

——でも、ドラムもかなり繊細な楽器だと思うけど……。

真矢　そうかなぁ。

——そりゃ、叩けば音は出るけど、だからこそ音のニュアンスとか……。

真矢　それ以前の問題だもん、ギターは（笑）。ニュアンスよりも、どこ押さえれば、どういう音が出るのかわかんないし、SUGIZOとかに教えてもらっても、ぜんぜん……（笑）。でも、曲は作ったことないからね……。メロディーは浮かぶけど、次の瞬間に忘れちゃう。形にする能力がないからね。それを努力して、曲を作ってみたいっていう願望はある。自分がどういう曲を作るのか、わかんないしね。すごくいい曲ができちゃったら、どうするんだろう（笑）。

——（笑）今回のアルバム『IMAGE』では、生みの苦しみが感じられるところもあるけど、真矢さんにとっては？

真矢　ドラム自体のレコーディングはラクで、ほとんど一発か二発でOKだったけど、他のメンバーを見てると、結構ツラかったというかね……。ハマってしまうというか、厳しい状況で録ってるのを見ると〝少し休めば〟と言ってあげたいけど、俺も少しでもいいものを作りたいから〝もう一回、やってみて〟と言わざるをえなかったり……。

——そういう中で、よりメンバーを身近に感じたようなことは？

真矢　いや、メンバーは昔からメンバーとしての意識があるから、それよりもレコード会社の人やマネージャーをすごく身近に感じましたね。俺たちにつきあってくれて、文句一つ言わないで好きなようにやらせてくれて……レコーディングが終わってみて、ホントによかったなぁ、と思いましたね。

——今回のアルバムで、真矢さん自身がいちばん表現したかったことって？

真矢　素直な自分ですね。あ、やっぱりドラム録ってるときも闘いがあったわ（笑）。プレイ自体はラクだったんだけど、俺個人としてはホントに一発録りで、そのままの自分を出したかったのね。だけど、一回叩いたきりだと、やっぱりマチガイもあるし、〝それじゃマズイかなぁ〟とか、そういう自分の中での闘いはあった。だけど、気持ちとしてはフラットで、素直な自分を出そうとしたんで……テイク数は少なかったですね。

——LUNA SEAとして音で表現したいことというのは……

真矢　それは個人で別々だと思う。

——トータル性を持って〝コレだ〟というのは、ない？

真矢　それに関しては、うちの場合〝この5人〟としか言いようがない。

——それは、ヴィジュアルでも同じこと？

真矢　そう。どういうバンドにするとか、これからどうするとか話し合ったことないし。5人がそれぞれ個人を認めあってるから、お互いに考えを出しつつ……口数の多い、少ないはあるけど。だからリーダーっていないし、誰かが仕切って引っ張りだしたら、うちらは、うまくいかなくなると思う。

——では、真矢さんがプレイする上で大切にしていることは？

真矢　歌ですね。でも、ステージではモニターで歌を返してません。なぜかっていうと、歌を聴いちゃうとボーカルと自分だけの世界になっちゃうんですよ。もしRYUICHIだモタッたら、一緒になってモタッちゃう。ステージでは、やっぱり全体を見てたいですからね。

——真矢さんにとって、歌がそんなにも大きな比重を占めているのは、なぜでしょう？

真矢　やっぱり聴く人にとっては、歌がいちばんドンと入ってきますからね。自分も他の人の曲を聴いてると、歌がいちばんに入ってくるし、曲を口ずさむときって、やっぱり歌でしょう？　まさかドラム音で♪ズッタン♪とはね（笑）。

——（笑）なかなかいないですよね、そういう人は。ところで、今、具体的な目標は？

真矢　ありすぎて、いちがいに言えないですね。ギターも弾けるようになりたいし、曲も作りたいし、かと思えば、髪は次はどうしようかな、とかね（笑）。

　俺、感情の浮き沈みが激しいんですよ。人の2倍・3倍……怒るときはものすごく怒るし、でも、すぐ変わるの。次の瞬間に笑ってたり。そういう感情の浮き沈みと共に、興味の対象もかわるんですよ。だから、一言では言えないですね。

——では、アルバム・リリースと日を同じくして発売される本誌ですが、今だからこそファンの方へ伝えたいことがあれば……。

真矢　言いたいことは、いっぱいありますからね……。俺は〝ファン〟とか〝お客さん〟って言い方もしたくないんですよ。

——どんな呼び方がふさわしい？

真矢　そうですねぇ……。とにかく応援してくれてるのはすごく嬉しいし、ありがたいし、教えられることもあるし……〝先生〟かもしれない。で、メジャーもインディーズも俺たちにとっては変わらないけど、そういう（応援してくれる）人たちにとっては変わるものだろうし……。でも、何が変わらないかって言ったら、〝俺たち〟が変わらないんだから。形は変わるかもしれないけど、心は最初から変わらないんだから、そこは安心してほしい。

　アルバム制作に関しては確かに苦労したけど、フラットな状態で聴いてほしい。何が苦労したかって言うと、フラットな状態にすることだから（笑）。構えず、聴く人それぞれのイメージで自由に聴いてほしい。それから……いっぱいあるけど、言葉にできないんですよ（笑）。

——言葉にならない思いは、音で伝わる？

真矢　そうですね。〝ライヴで会いましょう。ライヴで、すべて返します〟ですね。

完成じゃなくて完璧ね。完成したいとは思わない。

INTERVIEW:FUZUKI WATANABE

BASS

3月20日に行なわれた渋谷公会堂でのライヴで、ひとつの〝社会〟が出来上がっていることを感じたと言うJ。LUNA SEAと、彼らをとりまくスタッフや観客によって構成されたそれは、一般の社会とは関係のない独立したもののようで、それが嬉しかったと言う。世の中の流れに劣らぬ勢いで、めまぐるしく動き続けるLUNA SEAという社会。その中に生きる彼は、そこに何を感じ、何を思い、何を抱いているのだろうか。

——まずは、軽くバンド・ヒストリー的な話から……

J　RYUICHI以外は、地元の友達だったんですよ。お互い、バンドをやってて。ある時期、本気でやりたいと思い始めて、そのためのメンバーを探してて……〝類は友を呼ぶ〟じゃないですけど、必然的に集まったっていうのが、このメンバーは大きいですね。

——自分自身、バンドを組んだ当初からプロになることを意識していた？

J　何をもって〝プロ〟と言うかはわからないけど、とりあえず認められたいというのはありましたね。バンドで。それは、テクニック的にどうということでもなく、ただ漠然と。俺も、何をやっても続かないタイプの人だったんですよ（笑）。でも、ベースはロックに興味を持ち始めてからずっと好きで、自分でも不思議に思ってたけど、〝俺にはこれしかないんだろうか〟みたいな。

——バンドとして認められたいと思いながらも、どちらかというと目立たない存在になりがちなベースを選んだのは、なぜ？

J　最初は、バンドをやるヤツが、たいていギターだったから、人と同じことをするのがイヤで。でも、ベースって、やればやるほど深いんですよ。家ではギターも弾くけど……と言っても、そんなに弾けないんだけど（笑）、ベースの方が俺には魅力的で。他のライヴを見に行っても、ベースの場合、耳から入ってくる音って少ないじゃないですか。足元から響いてくるような……ね。そういう聴こえ方とか、感覚的にも自分に合ってた。

それに、俺がやり始めた当時は、ベースでも派手な人が増え始めた頃で、以前は〝ベースは、こうでなきゃ〟みたいなものが一般的にもあったと思うけど、それが崩れ始めた時期に俺がベースに目覚めたというか。だから、自分の方法論としては〝何でもあり〟だな。

——その中で、他のベーシストがしていないことをやってやろうという気持ちは？

J　それはあるけど、現時点で自分はそこまでいってないかな。やっぱり、出るばっかりじゃなく……。俺、すごく好きなところは、ベースって奥ゆかしいところがあるでしょ。出れるし、引っ込めるし。そこに惹かれてるところもあるかな。

——現メンバーになってから現在まで、LUNA SEAの中での自分のプレイや役割に対する意識は変わってきてる？

J　基本的には変わってない。だけど、もっと瞬間を大事にしたいと思うようになったかな。前は、ガーッと音を鳴らしてればそれでいいんだって考え方もあったけど……今は、前以上にガーッと鳴らしてる自分がいたり、引いてあげられる自分がいたり、その瞬間を大切にしたい。あとは、LUNA SEAの中で刻んでる時間。それをどれだけねじ曲げられるか。

——ねじ曲げる？

J　例えば、ドラムがポンと鳴るより少し前に自分の音が鳴るか、少し後に鳴るかで曲のニュアンスが変わってくるでしょ。その程度のことなんだけど、大事にしてる。あとは、俺はムード・メーカーかな、バンドの中の。

——作曲するときは何を使って曲を作るの？

J　歌です。歌から作る。掃除しながら鼻歌で、とかね（笑）。あとは、何か好きな言葉をキーワードに、それをテーマにして作ったり。それを楽曲的にするのはギターで。

——そのとき自分の中で軸にしていることは？

J　作りすぎないこと。もちろん、ある程度のアンサンブルは考えていかないと、0から無限大まで可能性があるわけだから、みんなどうしたらいいのかわかんなくなっちゃう部分があるけど、その筋道だけしか作っていかないようにしてる。あとは、いちばん伝えたいこと、やりたいことを明確にすること。

——骨格的なものだけを作って、それに肉づけしていくのがメンバー全員のサウンドであり、RYUICHIさんの詞である、と？

J　もちろん。俺は言いたいことがあるから曲を作る人で、曲から先には生まれないのね。中には例外もあるけど。だからRYUICHIとは、すごくミーティングをする。とらえるイメージが違って、もどかしいときもあるでしょ。だから、お互いの接点を見つけて……それはすべてに言えるんだけど、言葉（詞）がいちばん表面的だからね。

——その〝言いたいこと〟って外から何かを感じとっての部分？　それとも、もともと自分の中にあることを吐き出す感覚？

J　現時点では、10代のときに思ってたことや過去がキーワードになってる。今の自分も徐々に出てきてるけど……過去があっての自分だし、いちがいには言えないけど、難しいですよね。あんまり言いたくないんです（笑）。

——やっぱり、それは音で表現していることだろうし、その音を聴いて感じることが最も正しいんだろうしね。

J　だから今回のアルバムも、タイトル案がいっぱいあがったけど、俺は〝IMAGE〟が、いちばんシックリきたし。

曲って、すごい思い入れがあるし、生みの苦しみもすごく味わったから、カワイイもんなんですよ。でも、〝だから聴け！〟とか〝こうだ！〟とは言えないじゃないですか。メンバー5人それぞれの思いも入ってて、それでいいと思ってるし、全部が〝イメージ〟でいいと思う。ライヴとか、そのときの感情で曲は変わるものだから、アルバムはレコーディング時点の感情をパッケージした記録的なものだし、〝おうちでLUNA SEAが聴けます〟みたいな感じで（笑）、参考書というか、LUNA SEAのガイドかな。聴いて自分なりの答えを出してくれたらいいと思う。

聴いてくれる人やライヴのお客さんが〝LUNA SEAってこういうバンドだ〟って言ったら、俺はいつでも〝そうだよ〟って言いたいし。（自分にとっても相手にとっても）いちばん最初に感じたものを大切にしたいと、最近すごく思う。

——では、JさんにとってLUNA SEAとは？

J　〝全部〟。それよりふさわしい言い方は〝今〟かな。もちろん、未来もある〝今〟ね。だけど、どうなるかわからないし、この先どうやって成長していくのか、俺は見えないし。それが、おもしろいしね。先が見えちゃうものって、つまらないでしょ。（LUNA SEAには）希望があるし、もちろん願望もあるし、野望もあるし。

——先が見えないことへの〝もどかしさ〟はない？

J　ない。いつも思うんだけど……何に関しても、思っていればすべて叶うような気がするの。今まで、ずっと生きてきて。ワガママに生きてるのかな？（笑）

——（笑）でも、私もそう思う。信念のパワーって、ものすごくいろんなものを動かす力があるなぁ、って。

J　うん。活字にして（読む人に）どう写るかわからないけど、それ（思うこと）を動作にするときのパワーって、素晴らしいと思う。例えば〝こうなりたい〟と思ったとき、〝じゃ、何をしたらいいか〟っていうポジティヴな考え・発想、それが行動に出るときの感情って、すごくいいなと思う。今はすべてが結果論で評価されるから、挫折する人も多いのかな、と思う部分もある。ただ……前向きにいけたらいいなと……なに言ってんだかわかんないや、俺（笑）。

——（笑）いや、伝わると思うよ。そういう状況の中での目標・具体的なヴィジョンはある？

J　〝究極〟。すべてにおいて完璧でありたい。完成じゃなく完璧ね。完成したいとは思わない。でも、完璧っていうのは完成してるものなのかな？　それもわかんない（笑）。感覚で喋るからね、俺。

——（笑）〝完成〟っていうのは、〝完璧〟に向って進んで、それが果たされたときの結果のことを言うような気がするなぁ。そういう意味で理想としてる人物は、いる？　架空の人物でもいいけど……。

J　好きな人は、いっぱいいるんですけどね。俺は俺かな、という気もするし。……スーパーマンかな。ダメだ、イメージが崩れる（笑）。でもホント、単純にね。〝空を飛べる〟とか、そういうんじゃないよ（笑）。スゴイ人になりたいな、という部分で〝スーパーマン〟。

——（笑）スーパーマンね。ところで、この時期、何かファンへのメッセージはある？

J　ま、〝一生懸命やってます〟っていうのと、それによって〝何かの支えになれれば〟というのがすごくありますね。

ライヴとかでも、見に来てくれてるお客さんを前に、ステージで嬉しくなっちゃうんです。俺は、このみんなのために何をやってあげられるんだろうって、ツアーでも自問自答をくり返して。それによって今まで伸びてきたバンドだし、これからいろいろ伝わらない部分も出てくるかもしれないけど……適当に信じてくれてれば……適当ってことにしといてください（笑）。これも、あんまり言いたくないんですよ。

——（笑）こうやって聞いてると〝何かを与えてあげたい〟っていう気持ちが、すごく大きいみたいだね。

J　そうだね。欲張りな人間だから、そう思うのかもしれない。でも、ある程度冷めちゃうときもあって〝カンケーない！〟って（笑）。時と場合によるんですよ、すべて（笑）。だけど最近は、みんなが俺たちに何かを求めてきてるでしょ。それには俺は、絶対に答えてあげたい。

——その〝何か〟が何なのかは……

J　わからない。だけど、ライヴハウスで手を伸ばしてくるお客さんも、俺たちに触りたいだけじゃないような……。だから、自分のためにも、その〝期待〟は絶対、10倍にしても20倍にしても返したいですね。

LUNA SEA

10 ITEMS INTERVIEW

エネルギー
悲しみ
友情
嘘
やすらぎ
夢
愛情
自分の性格
怒り
喜び

INTERVIEW:AKEMI OHSHIMA
PHOTOGRAPHY:HIDEO CANNO

エネルギー

SUGIZO ライヴとかレコーディングとか、自分がいちばん集中したときに感じる。それは、打ち上げの場でもそうですが（笑）。何にしろ、自分が本当に集中したときには、自分が考えている以上のパワーが発揮できるような気がするな。
J やっぱり、ライヴやってるとき、エネルギーを感じる。常に、何に対してもエネルギーを感じていられるポジティブな人でいたいですね。最近は、ちょっとガス欠気味なんだけど（笑）。
RYUICHI 俺はひとりの時に感じる。
SUGIZO 本当かよ（笑）。
真矢 二人のときじゃないの（笑）。
RYUICHI ライヴのときとかはまわりから感じたりするけど、やっぱり、いちばん感じるのはひとりのとき。俺、意外と、ひとりのときって多いんですよ。
SUGIZO 彼は女性をものとしてしか見てないから、ひとりのときが多いんです（笑）。
RYUICHI せっかく、真面目に考えて答えてるのに。
真矢 俺は、ドラムをたたいているときと、メシを食い終わったあと（笑）。だって、人間、それがいちばん、自然だと思わない？食べ終わったあと、ウォォ〜ってパワーがみなぎってくる。
RYUICHI 俺、メシ食い終わると、疲れるけどな。
SUGIZO そう。メシ食うことにエネルギーを使いすぎて、あごが疲れて、フラフラになる（笑）。
真矢 だから、ドラムたたくときはエネルギーを消費して、メシ食ってエネルギーを補給してる。これ、人間の基本だよ。
INORAN 俺は、ライヴやってるときと、睡眠の直前（笑）。あと、自分にとってのエネルギー源は、コーヒーと煙草です。それがないと、俺、死んじゃう。
SUGIZO 俺とJのエネルギー源は、酒だな。
真矢 俺は、酒を飲んだら、エネルギー・ダウン。駄目です。
J 俺は、ライヴのために、普段はなるべくエネルギーを使わないようにしている。
SUGIZO 俺、使いまくってる。
真矢 俺もだよ（笑）。

悲しみ

SUGIZO ときどき、周りの誰もが信じられなくなるときがあって、そういうときに悲しくなってしまう。あと、自分の底辺を見てしまったとき。これが自分の限界なんだってわかったときは、すごく悲しい。だけど、そういう悲しみは上に向かう反動になるんだよね。女関係の悲しみは反動にならないんだけど(笑)。
真矢 でも、女関係の悲しみって長い目で見たら、すごい反動にならない？
SUGIZO そういうときは、長い目で見られないんだよ（笑）。
J 俺は、悲しい体験ってあんまりない。ていうか、人にいえないようなことが多いから。悲しくても、悲しくないふりをするタイプだな。
RYUICHI 精一杯、出来なかったときが、いちばん悲しい。自分で自分の限界を認めちゃったときだな。
真矢 俺は普段明るい分、悲しむとどん底にいっちゃうような気がして、あんまり悲しまないようにしている。だから、一つのことをあまりクヨクヨしないようにしてる。
RYUICHI その気持ち、すごくよくわかる。俺は、そのどん底にいっちゃうほうのタイプだから。
INORAN 僕は、煙草がなくなったとき……嘘です（笑）。悲しい映画を見たとき。
J ときどき、意味もなく切なくなることってあるよね。
SUGIZO 俺、昔、INORANとバイトしてたとき、急に切なくなったことがある。「なんで、俺、好きでもないのに、こんなことしてるんだろう」って。
INORAN ん〜、そういうこともあったよね〜。

やすらぎ

INORAN 睡眠、以上（笑）。
真矢 INORANが、真っ先に答えた（笑）。
J いいね～。
SUGIZO やすらぎって、願望であってほしいっていう気がする。本当に感じてしまったら、なんか夢がなくなってしまいそう。だから、俺は感じたことない。やすらぎって隠居っていうイメージがあるから、それは老後にとっておけばいいんじゃないかな。
J 俺も、感じたことない。ライヴが終わったあと2秒くらい、感じるだけで。すべてに対して小さな目標があって、それを成し遂げたあと1秒か2秒だけホッとするけど、あとはほとんど感じない。
RYUICHI 普通に生活しているなかにはないけど、ちょっとの間、現実を忘れることに没頭しているときにはあるような気がする。やすらぎのなかに、何日もいたっていう体験は、最近ではないな。小さい頃はあったんだろうけどね。
真矢 何がやすらぎか、よくわからないな。体が休んでいるときがやすらぎか、頭が休んでいるときがやすらぎかって考えてみると、その両方のような気がするんだけど、それって寝てるときしかないでしょ。でも、寝てたら、感じられないからね。
SUGIZO それを味わえるのは、INORANだけだよ（笑）。

友情

SUGIZO 仁義。男気。友情は守りたいし、裏切りたくないもの。バンドのメンバーに関しては、友情以上のものを感じてる。家族みたいなものだからね。
J 俺は、愛情より友情を大切にするかもしれません。昔から、そういうタイプなんです。
RYUICHI 言葉に出来ないもの。その言葉によって縛りつけられるのもいやだし、相手に期待するのもいや。お互いに相手を思い合っているのであれば、周りがそれを「友情」と表現するだけで、本人たちは形にする必要はないと思う。あと、相手に対して、いつも素直でいたいです。
真矢 俺は、いろいろたくさんの友情に囲まれていると思う。ただ、愛情でも友情でも、相手に見返りを期待したら存在しなくなってしまうものだと思う。
RYUICHI それは、同感。
真矢 だから、相手のためになにかしてあげようと思ったら、気が付かれないようにやってあげたいと思う。
J 妙にシリアスだな。
SUGIZO 金八先生かな（笑）。
INORAN かけがいのないもの。あとは、なんか、握手って感じがする（笑）。
SUGIZO 絶対にないと生きていけないものだよね。
真矢 でも、言葉で確認することって、あんまりないからね。
SUGIZO 「俺とお前は、友情でつながれているんだ～」なんて、いわないよ（笑）。

嘘

真矢 俺、嘘つき。
INORAN 俺も、大嘘つき。
SUGIZO うちなんか、嘘つきの集団ですからね（笑）。
真矢 毎日が博打だから。
SUGIZO 俺は、生まれてから一度もついたことがありません。
真矢 その言葉自体、大嘘つき。
SUGIZO でも、いい嘘と悪い嘘があると思うし、嘘も方便っていうし。ただ、音楽をやる上で嘘はつきたくないし、自分には嘘をつきたくない。それくらいかな。
J ついていいときもあれば、悪いときもある。つかなきゃいけないときもあるし。ただ、今は周りに、本音でやりあえる人が多いから、それは嬉しい。
RYUICHI 価値観の差かなって、思うことある。敵意のある嘘は良くないけど、相手は嘘をいってるつもりがないのかもしれないし、責任の所在を求めるものではないと思う。
真矢 一年間、嘘をつきとおしたやつもいるしな、RYU（笑）。
RYUICHI 俺、エイプリル・フールっぽい嘘は、好きなんですよ。
真矢 自分とこの地元にね、「ラーメンしかださない『ガンコ・ラーメン』っていう店があって、そこがうまいんだ」とかいって、それがまったくの嘘なの（笑）。
J 一緒にRYUのうちの近所で遊んでるとき、「うまいっていうラーメン屋に、連れてけよ」っていうと、「あ、木曜か。残念、今日は休みだ」とかいって。
SUGIZO それが、価値観の違いか。
真矢 カッコつけてても、こんなもんだからな（笑）。
J それを、1年間、つき続けた。
RYUICHI それは、シリアスなのとは別。でも、俺、小さい頃、しょっちゅう、お婆ちゃんに嘘いってたもん。「あ、廊下にワニがいる」とか（笑）。
真矢 この世の中、何が嘘で何が本当か、わからないからね。自分が気がつかなければ、関係ない。
INORAN 嘘って漢字、書けない（笑）。

愛情

SUGIZO　いいときはすごいいいけど、悪いときは最低。あんまり、いい思い出がない。苦手。早くいい相手と、巡り合いたい。今まで、異常な愛とか、バイオレンスな愛とか、そんなのしかないから（笑）。でも、待ってるだけじゃ、巡り合えないんだよね。自分で探さなくちゃいけないんだろうけど、今は出会う機会もないし……。苦手です。
J　わたしも、苦手です。あんまり、よくわからないし。友情と愛情の境目って、難しいしね。まあ、自然に出てくるものだったら、よろしいんじゃないでしょうか。難しいですね。もっと勉強します。
RYUICHI　今の価値観でいえば、自分のなかで愛情だなと認められるものは、行動や言動のあとからついてくるような気がする。あとから、感じるっていう意味で。ただ、言葉にすると、執着に変わってしまうような気がするな。
真矢　難しいですね。形のないものだから、相手を信じるしかないと思う。いくら言葉で「愛してるよ」っていっても、相手の受け取り方で違ってくるだろうし。これから、徐々にわかるようになりたいですね。
INORAN　いつも伝わらないもの……。
真矢　簡単に伝わっちゃっても、つまらないよ。
SUGIZO　でも、ないよりあったほうがいいよね（笑）。
RYUICHI　そりゃ、そうだ。
SUGIZO　なければ生きていけないものなのかどうか、それは俺にはわからないな。

夢

SUGIZO　夢は大好き。よく見る。俺の夢って、人がいっぱい出てくるんだ。それで、通常では考えられない四次元の雰囲気みたいのを、味わえる。ただで映画見てるみたいで、楽しい。でも、夢ってその人のなかにあるものが出てくるわけでしょ。絶対に下地のないものは出てこないわけだから、そういうのを考えていると面白いよね。
J　俺は、最近、あんまり記憶がない。多分、見てるんだろうけど、忘れちゃってるんだと思う。おっかない夢とかは、覚えているけどね。あと、夢と現実がごっちゃになっちゃうことが、ときどきあるんだよ。夢でどこかを歩いてて、朝、起きたとき、「あれ、昨日、そこにいったっけな〜」とか。
INORAN　あ、そういうの、よくある。
RYUICHI　見ないときっていうのは、寝て一瞬したら、もう朝なとき（笑）。見るときはね……俺、瞑想とか空想が好きなんだけど、本当の夢なのか自分の意志で考えているのか、わからないことが多い。道を歩いてて、空を飛びたいなと思ったら、羽根が生えて飛んでたとか。最近の夢は、そういうファンタジーっぽいのが多いな。
真矢　知ってる？　夢って、コントロールすることが出来るんだって。それは本で読んだんだけど、それを聞いてから、出来るようになったらいいな〜って思ってる。それから、最近、ちょっとした予知夢みたいなのを見るんだよ。友達が泣いている夢を見たから気になって電話したら、本当に泣いてたとか。恐いんだけど、この能力をのばしてみようかな〜って思ってる。あと、昔は夢のなかでまた夢を見るっていうこともあった。
SUGIZO　起きたときに、どっちが夢でどっちが現実かわからないこともある。
真矢　夢のなかで笑ってると、実は寝てる自分も笑ってるとか。
RYUICHI　俺、笑ってることって、よくあるんだよ。やだな。人が見たら、気持ち悪いよね〜。
INORAN　最近、海で足を猫に噛まれた夢を見たんだけど、起きたら足を猫に噛まれてた。あと、昔、三日間同じ夢を見たことがあるんだ。高台で女の人が向こうを見てるっていう止まった夢。
J　意味、わかったの？
INORAN　ううん、わかんない。
J　なんだ、オチがないんじゃん。
RYUICHI　猫の話を最後に持ってきたほうが、良かったんじゃないの（笑）。

LUNA SEA
10 ITEMS INTERVIEW

自分の性格
SUGIZO　いちばんわかっているようで、わかってないみたい。ただ……なにかに対しての欲求は、すごい多い人だな。なかなか満足しないし、我慢もしない。あ、それはいい意味でね。
真矢　悪い意味でもじゃないの（笑）。
SUGIZO　喜怒哀楽は極端。欲しいものは、必ず手に入れたい人だと思う。
J　基本的には、気分。熱しやすくて、冷めやすい人。すごく熱くなってるときでも、必ずどこかに冷めてる自分がいる。だから、「無茶しなくて済むんだ」って思うこともあるし、逆に「熱くなれない自分がいる」って思うこともある。それをわかっちゃってること自体、冷めているのかもしれないよね。
RYUICHI　わりと冷めてるけど、寂しがり屋かな。簡単にいっちゃうと、普通の人よりは明るいかもしれない。
真矢　本当の性格は、わからないです。俺の今の性格っていうのは、周りの環境とか規則とかで作られたものだから、本当のフラットな性格はわからない。ただ、他人の百倍、二百倍は喜怒哀楽が激しい。それだけは、自分でもわかるな。Jとは正反対で、熱くなるときは何も考えずに熱くなっちゃうし、泣きたいときには泣いちゃうし、冷めたときは「もう、どうでもいいや」ってなっちゃうし。クソですよ、クソ。いい意味でだけど。
SUGIZO　いい意味でクソって、どういうことかよくわからないけど（笑）。
真矢　でも、努力したら、もっといい性格になれるかもしれない。結構、多重人格っぽいんだけど、いつもそれを隠して明るく振る舞ってる。基本的には、いい人ですよ（笑）。
RYUICHI　自分でいうなよ（笑）。
INORAN　僕は、この5人のなかだと、あんまり考えない性格かな。あと、よくわからないけど、喜怒哀楽がない（笑）。

怒り
SUGIZO　小さなことですぐ頭にきて、すぐ冷める人。本当に怒ると、怪獣になる……っていうと大げさだけど、暴力が出ることもある。チョコチョコ怒る回数は、多いかもしれない。「なんだよ、これ」とか。それを怒るというか、文句というかはわからないけれど。ただ、怒った分、笑いもあるから、いいんじゃないですか。
J　俺も、よく怒る。それで、怒ると黙っちゃって、「なんでこんなことになっているんだろう」って、分析し始める。そうやって自問自答しているうちに、最初の怒った感情が増幅されて二倍になってて。ん〜、やっぱりよく怒るし、怒ったら恐い人かもしれないですね。
SUGIZO　俺はね、怒ったらなにかわからないけど、とりあえず、ワーッといっちゃうタイプだな。
RYUICHI　俺も、やっぱり、「なぜ」って考えちゃう。だから、堪忍袋というものの、緒が切れた瞬間って経験したことないような気がする。そりゃ、普通に生活してて、怒るっていうのはあるけど、本当の意味で切れたことはないんじゃないかな。
真矢　俺は、怒らないですよ。
SUGIZO　あれ？
真矢　いや、真剣に怒ったことは、ないですよ。
SUGIZO　よく怒ってるじゃん。
真矢　だから、RYUと同じで、緒が切れたことってないんじゃないかと思う。ただ、俺の場合、パントマイムみたいに表現がオーバーだから、怒ったら本当に怒ってるんだぞっていう表現をしてる。小さな怒りでも、大きく見せてるからね（笑）。針のような怒りをいかに大きく見せるかってとこ（笑）。ただ、ほとんどの場合、自分に対して怒ってる。だから、他人に対して怒ることは、滅多にないな。他人に対して怒ってるのは、被害が自分に振り掛かってきてるからで……なんて、俺ってすげーわがままなやつだな（笑）。どうしようもないや。
SUGIZO　こういうインタビューをしてると、自分がすごくいやなやつに思えてきて、いやになっちゃうな（笑）。
INORAN　俺は、怒る回数は少ないほうだと思う。怒りを忘れちゃうこともあるし、自分でもみ消しちゃうこともある。うん、あんまり怒らない人です。

10 ITEMS INTERVIEW

喜び

SUGIZO　やっぱり、ライヴのとき。自分に納得したときは嬉しいし、ライヴだとそれをみんなに確認してもらえるから、さらに嬉しい。自分にとって、LUNA SEA 自体、喜びであり悲しみであり怒りでもある。個人的には、よく喜ぶ人だな。

J　俺も、やっぱりライヴかな。喜びも瞬間的なもので、長続きはしないんだけど、その瞬間はすっごく嬉しいよね。

RYUICHI　自分の経験するすべてに、当てはめたいと思ってる。

真矢　現実的なことで、いっぱいある。病気が治ったときも大喜びだったし、俺のギャグでみんなが笑ってくれたら大喜びだし。でも、そういう現実的なことでの喜びはたくさんあるんだけど、もっと深い生きてく上での喜びはまだないかもしれない。

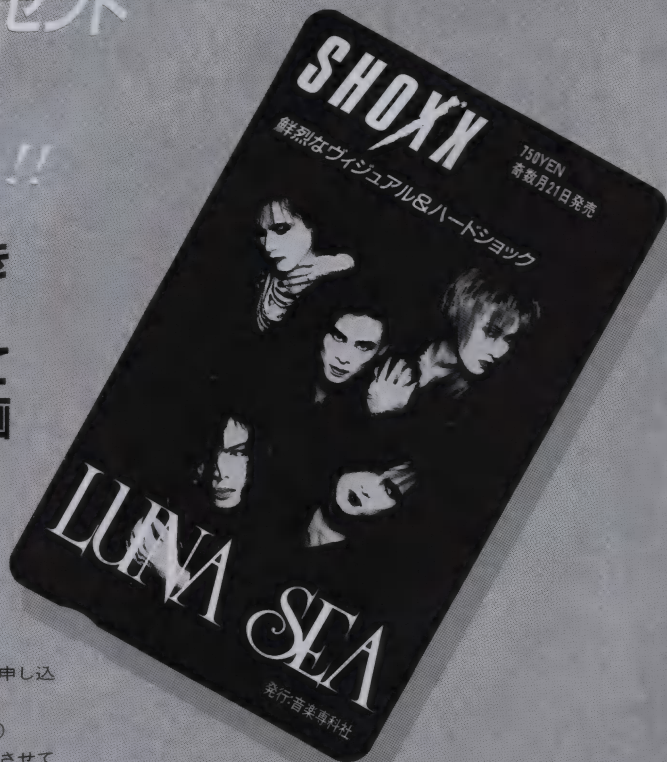
INORAN　いちばん喜ぶのは、睡眠の前。これから寝られると思うと、喜びに満ちあふれてしまいます。

RYUICHI　なんか、スヌーピーに出てくる黄色い鳥みたいなやつだな。

INORAN　でも、悩み事とかあるとき、眠れない人って多いでしょ。俺、平気で寝れちゃうの。それで、いろんなことを解消してるのかもしれない。

SUGIZO　結局、このインタビューはほとんど INORAN の寝る話で終わってるような気がするな（笑）。

INORAN　それで、いいんだってば（笑）。

《ツアー・スケジュール》5月28日＝川崎クラブチッタ、29日＝新潟音楽文化会館、31日＝札幌ペニーレイン24、6月2日＝宇都宮文化会館（小）、4日＝仙台イズミティー21（小）、6日＝浦和埼玉会館（小）、8日＝福岡都久志会館、7月18日＝名古屋ダイヤモンドホール、20日＝大阪御堂会館、26日＝日比谷野外音楽堂　●問い合わせ先＝バックステーションプロジェクト（☎048・883・2711）

《バックナンバー》■VOL、2→インタビュー■VOL、3→幻惑カラーフォト&インタビュー7ページ■VOL、4→カラーフォト&インタビュー7ページカラー6ページ■VOL、6→全メンバー・インタビュー■VOL、8→日本青年館2days 完全密着レポート、真矢単独インタビュー■VOL、9→RYUICHI/INORAN 単独インタビュー

TOYOKAWA(ds)が突如、脱退!!
GRAND SLAM
Live At Shinjuku-Power Station 92.5.3
INTERVIEW:MARI ITOH
PHOTOGRAPHY:MOTOI OHNISHI

今年2月にNHKホールでのコンサートを成功させたグランド・スラムだったが、その後、異変が起こった。TOYOKAWA（Ds）の脱退。ショッキングな事実ではあった。どうしても、〝何故?〟というところに話題は集中する。が、これはグランド・スラムとしての前向きな結論である。そこへ至った原因や過程をとやかく言うより、今後のグランド・スラムを、そして今後のTOYOKAWAを見ていれば、きっと、納得できる。

彼らは、またひとつ新しいステップを踏み出した。パワステ・2DAYS。結成以来、そのユニークなキャラクターとセンスでみんなを楽しませてくれながらバンドの一角を支えてきたTOYOKAWAの姿がないのは少し淋しかったが、HIROこと本間大嗣の超強力な援護射撃を得たグランド・スラムの攻撃力は、凄かった。

ここでレポートするのは、2日目。おなじみのオープニングSEからアップ・テンポの「COOKIES」でスタート。地鳴りのように響くヘヴィなドラムに支えられ、BANがとてもワイルドだ。RUDYのギターも吠える。ハードなものは、よりハードに、そして、バラードは、よりドラマチックに……そんな感じだった。だから、盛り上がりもいい。前半、ステージのバックを白にして照明を効果的に使うという演出も手伝ったかもしれないが、それ以上にバンド自体が、またスケール・アップしたと感じさせるものがあった。

特に、中盤の「FARAWAY」からギター・ソロやドラム・ソロをはさんでエンディングに持っていった後半。ギター・ソロは、リズム隊を加えてヴァン・ヘイレンの「I'M THE ONE」をインストゥルメンタル・ヴァージョンで……というもので、RUDYが敬愛するエディ・ヴァン・ヘイレンばりのギター・プレイを、たっぷり披露。この日の彼のプレイは一段と冴えていたように思えた。そして、HIROのドラム・ソロは2～3分の短いものだったが、シンプルに、かつ、迫力たっぷりに、全体に勢いをつけてくれた。

また、印象に残ったのがバラードだった。「FARAWAY」に続いて「CRY AGAIN」、アンコールで「TELL ME」と、2ヵ所の聴かせどころをガッチリ押さえたという気がした。主にノリのいいナンバーで、コンサートのもう一方の主役である客にどんどん歌わせ、みんなで楽しむ……というグランド・スラムのショーのスタイルはすっかり定着したが、バラードではJUNYAの歌も、客を聴き入らせる歌になっていた。

やはり、グランド・スラムのパワーは拡大している。大きな拍手と歓声が、そのことを証明しているだろう。それに、2回のアンコールを終えると、ショーはすべて終了……のはずだったが、客が動かない。そして、予定外の再々アンコール。この日2回目になる「I WANNA BE SOMEBODY」が、最後を締めくくったのだった……。

——まず最初に聞きたいのが……。

JUNYA 離婚原因でしょ? 性の不一致。満足してくれなかったの（笑）。

BAN 新しい男ができたの、彼に（笑）。

——あのね（笑）……だから、TOYOKAWAの脱退までのいきさつをですね、わかるように……。

JUNYA だから、結婚したときから……。

RUDY 誰が結婚してんのや（笑）。

——真面目な話、こうなる兆候が見え出したのは、いつ頃だったの?

BAN 具体的に見え出したのは、今年のアタマぐらい。NHKホール（でのコンサート）のリハーサルしてる頃。でもNHKまでは、そういうこと考えてるとテンション下がるんで、とにかく考えずにやった。そのときの目標はひとつだったからね。で、終わったら冷静になれる部分もあって……結果的に、そういうことになったんだけど。

——率直に、何が原因だったのかな?

BAN 性の不一致（笑）……じゃなくて、見てる方向が違ってきちゃったというか……。

——音楽的に?

BAN いや……難しいんだよね。〝音楽的に〟って言っていいものか……。

JUNYA どう言ってもカドが立つから、ホントは今は言いたくないんだよね。まぁ、何なりかのズレが発生したのは事実。各自がグランド・スラムなり自分自身のことを考えて、考えてやってきた中で、1人だけズレが生じたっていう事実があった。彼が考えてなかったわけじゃないんだ。だから、ヤバイな、と。この時期にバンド内でグラついてたら話にならないし。

——TOYOKAWAのほうも、自分と他の3人とのズレを感じてたのかな?

JUNYA いや、たぶん彼は自分の考えをアピールすることで精一杯だったんじゃないかな。みんな、自分の考えにもとづいてアプローチするじゃない? たとえば自分のパートに対してとかね。それがいいか悪いかはわかんない。でも、グランド・スラムとして考えたときに、ズレてた……っていう感じかな。

BAN で、彼の頭の中では、彼なりの考えが固まりつつあった。考えてなかったら、まだ楽だったんだろうけど、彼が考えつくしたことに俺たちが「それは間違ってる」とか言えないじゃん。説得して、とりあえずこっちの方向に行っちゃえば、彼の妥協になっちゃうわけで、自然じゃないでしょ?

JUNYA そう。ガキじゃないからさ。大人が考えて考えてしたことなのに、「おまえ、違うぜ」って言って引き戻すっていう問題ではないと思うんだ。そうするのは、グランド・スラムっていうバンドが後退することじゃないかなと思ったわけ。これがグランド・スラムを始めた頃だったらね。それこそ、ケンカごしのミーティングもしたし……。

——バンドとしては、彼のことも尊重したわけかな?

BAN ……というより……バンドを尊重したのかもしれない。

——で、TOYOKAWAがバンドを離れるという形しかとりえなかった、と?

BAN うん。だから彼は、自分の考えを生かせるところに行くだろうし。俺たちは、よりグランド・スラムに近かったから、自分たちの考えを生かせる場所を選んだら、グランド・スラムになっちゃうし。

JUNYA そのほうが、あいつのためにも俺らのためにもいいことなんだって思わなくちゃ……。だって、お互い、共倒れになるのはイヤなわけ。TOYOKAWAの可能性を俺らが潰すことになるかもしれないし、あいつが俺らの可能性を潰すかもしれないし。このままのメンツでグランド・スラムが続いていったら、いつか、きっと、そういう日が来るだろうから。

BAN そのときは、もっと大きな問題になってるだろう、と。

——だから、早いうちに解決したわけだ?

BAN そうは言っても、簡単じゃなかったけどね。悩んだし、かなり辛い状況もあったし。でも、すごい葛藤はあったけど、いつまでもウダウダやっててもしかたないから。

——そういうバンドの意思が確定したのは、いつ?

JUNYA 3月アタマ（TOYOKAWAは3月9日付けで脱退している）。

——大人だな……というより、みんな悩んだんだろうけど、見方によっては冷めてるとか、わりとさっぱりしてるような感じがある。いい意味でね。

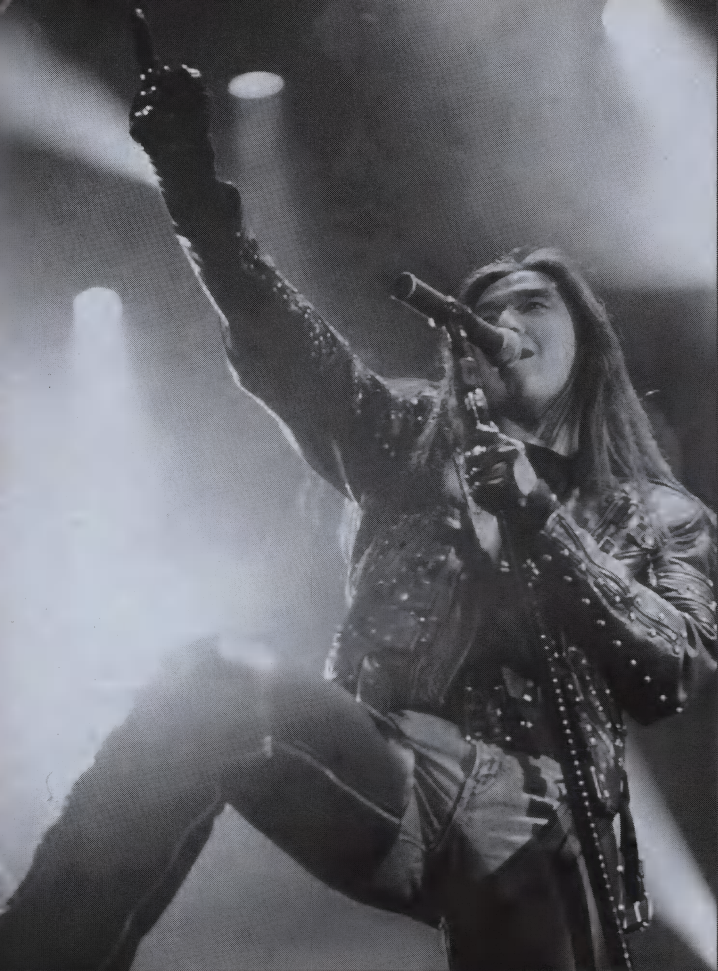
JUNYA そう見えるかもね。ドライだと思うよ。でも、その根底に深いものがあったから、なおさら、そういうふうにやっていかないと。俺らは信頼関係で成り立ってるから、それが崩れたときはホントにヤバイし、なあなあで誤魔化しながらやるのはイヤなわけ。それって、もっともネガティヴだよね。先を考えていくと、これしか方法はなかった。

BAN ヘタしたらカドが立つかもしれないけど、作り笑いして楽しそうにやることは、役者じゃないからできないんだ。それでカネとれないもん。この結論を出すまで、みんな辛かったと思う。TOYOKAWAも辛かっただろうし。でも、騙しながらやることを拒んだわけだからね。

——TOYOKAWAも、それがわかってたわけだよね。グランド・スラムにすがろうと思えば、「考えを変えるから」というようなことも言えたんだろうし……。

JUNYA いや、そういうこともあったの。「変わるから、ちょっと待ってくれ」的なことが。でも、彼は彼なりに考えてやったことで、それは彼の中から出てきてるものなんだから、それを変えて俺らと同じ考え方になれっていう次元じゃないのよ。みんな、自分で考えなきゃいけない。で、それでグランド・スラムとして、うまく輪っかができてるってことに、俺らがグランド・スラムにいる意味がある。俺らは自分として、グランド・スラムでいい音を作っていくためのエゴは持ってなきゃいけないわけ。彼は自分を信じてやるんだったら、それを貫くだろうし、そのほうが俺らも彼を男として好感持って見れるのよ。

BAN 「変わる」って言ったら、「じゃ、それまで考えてきたことは何だったの?」ってことになるわけでしょ? 俺たちも考えて出した結果だから、すごい責任は感じてるし、それといっしょじゃないかな。だから、彼は自分の考えを生かせることをやって、絶対、出てくると信じてる。

JUNYA 彼がグランド・スラムとしてやってきたことにプライドを持ってたらね。ハンパなことはできないだろうから。俺らも、元某っていうレッテルがあったわけだけど、自分が前にやってたことにプライドは持ってたから、俺らのほうで「それは言わないでくれ」とか言ってはいなかった。でも、自然と

消えたじゃない？

BAN　それを越えて、グランド・スラムとしてのプライドを持つところまで来たよね。

JUNYA　うん。彼も、プライドがあればドラムやめないだろうし、俺らよりもっとすごいことやるかもしれないしね。

——TOYOKAWAがいなくなるのは淋しいけど、前向きな結論だもんね。これでよかったんだよっていうのを、TOYOKAWAも残ったグランド・スラムの3人もそれぞれ、言葉であれこれ言うより、今後の活動で証明してくれればいいんじゃないかと思う。

JUNYA　うん。ライヴとかアルバムとかで、ファンが自由に判断してくれればいい。

——で、現在のグランド・スラムだけど、後任のドラマーは？

BAN　今度、白田一秀っていうドラマーがですね……（笑）。

RUDY　なかなか味のある……（笑）。

——それもいいかもしれないけど（笑）、5月2・3日のパワステでは、浜田麻里のバックで叩いてるHIRO（本間大嗣＝元EZO／フラットバッカー）が叩くわけだよね。彼を起用することになったいきさつは？

BAN　TOYOKAWAが抜けたときにパワーステーションが決まりかけてて、どうしようかって思ったけど、時期的に（ライヴを）やったほうがいいってことになった。で、そのとき、パッと名前が浮かんだの。で、話してみたら、「いいよ」って。

——彼は、ヘルパーなんだよね？

JUNYA　とりあえずね。

BAN　うん。"とりあえず"って、太字で書いといてもらうのがいいかも（笑）。

——他に考えた人は、いないの？

BAN　うん。だから、たった一回のライヴしかないとしても、自分たちのバンドのメンバーだと思ってプレイすると思う。

——HIROとやってみて、感想は？

BAN　初めて合わせる前の日はワクワクした。元EZOのドラマーってのは知ってたけど、音を合わせてみるまでわからないからね。やる前の印象は、怖い（笑）。ヘヴィなドラムだよね。自信持ってるんだよ。「俺はこれしかできない、これしかないんだよ」っていう……それが音に出てると思う。でも、会ったら、ぜんぜん怖くないんだけど。

RUDY　いいっすよ、やっぱり。BANちゃんとJUNYAより前に、俺はエッグマンかどこかで会ってるんだけど……。

JUNYA　中学校もいっしょなんだよね。

RUDY　そう、そう。俺の先輩なの。あとから知ったんだけど（笑）。

BAN　すごい、いいロック・ドラマーだよ。音、デカいんだ、もう。

——彼のドラムが加わることで今回、グランド・スラムはどう変わった？

BAN　より、ロックになったね。

JUNYA　面白いことがあるんだ。よくバンドで、ふざけて外タレの曲とか合わすじゃん。そういう時にやる曲が、ぜんぜん変わったもん。今、ヘヴィ・メタル（笑）。

BAN　そう。いきなり、ディオだぜ（笑）。

JUNYA　前はTOYOKAWAがスチュアート・コープランドが好きだったし、ポリスとか、あとラッシュとかやってたんだ。

——HIROって、生粋のハード・ロック・ドラマーって感じなんだろうね。

JUNYA　うん。そう思うよ。

——話は変わるけど、今、ちょうどアルバムが完成したところだよね。これは、アコースティック・アルバムだということだけど……。（7月10日発売）

BAN　うん。ドラムが入ってる曲も2曲あるけど。

——それは、HIROが叩いてるの？

BAN　そう。

——ところで、どうして今、アコースティック・アルバムを？

BAN　アルバムのローテーションからいって、正式なアルバムを作るところだったんだけど、メンバー・チェンジとかがあったから、3人で今できることをやろう、と。だから、原点なのね。デモ・テープでも何でも、曲作るときって俺ら、アコースティックでやってるから。自分たちの原点にいちばん近いところをもういっぺん見つめ直して、ここで踏んばってやろう、と。

——世間では、ここ数年、ハード・ロック・バンドがアコースティック・サウンドをやるのが流行り、みたいな流れにあるよね。そういうことも意識の中にあるかな？

JUNYA　そういうのは、ぜんぜんない。

BAN　ドラムいねぇんだから、3人でできることって、これしかないじゃない？

——曲は、新曲？

BAN　1曲だけ前の曲のカヴァーがあるけどあとはみんなで曲を書いた。最初は4曲の予定だったんだけど、7曲もあがってきちゃって、全部やっちゃえ！って（笑）。

——それで、ドラムが入ってる曲以外は、ほとんど3人でやってるわけだ？

BAN　うん。シンセとかも入ってるけど、主要な部分は、ほとんど三人でやってる。

——ひとことで言って、どんなアルバム？

BAN　ひとことで？　なかなか言えないけど、グランド・スラムの原点、バンドとしての足元を見直した様なアルバムかな。

《ライヴ・スケジュール》8月27日＝名古屋クラブクアトロ、28日＝大阪アムホール、30日＝渋谷公会堂●問＝バックステージTOKYO（☎03・3226・7312）

A TO Z OF YOSHIKI (PART 3)

R ADIO／ラジオ
S ECRET／秘密
T AIJI／沢田泰司
U NFORGETTABLE／忘れられない事
V ACATION／休暇
W AR／戦争
X ／エックス
Y ELLOW／黄色人種
Z ／ゼロ

INTERVIEW:AKEMI OHSHIMA
PHOTOGRAPHY:HIDEO CANNO

R RADIO

出ないんですよ、俺。嫌いなの。テレビも撮影もあんまり緊張しないんだけど、ラジオは緊張しちゃうんだ。(ラジオだと)表情が一緒じゃないから、駄目なんですよ。何年か前に1回出て、あと、1カ月くらい前にTOSHIと一緒に出たんだけど、その時も、俺、何もしゃべらなかったもん。一言もしゃべらなくて、ずっと黙ってた。「こんにちは」もいわなくて、みんなに「本当にいたんですか?」っていわれちゃった(笑)。なんか、わからないけど、声だけ聞かれるのがいやなんだ。

前に出たときはデビィット・ボウイと対談だからっていうんで、出たようなもんだし……。あと、デビューした当時にちょっと出たくらいかな。早口だし、うまくしゃべれないから、駄目なの。俺、電話とかも嫌いだし。体でしゃべっているから、声だけっていうのは、大変。ま、活字も大変だと思いますけど。とりあえず、ラジオはTOSHIにまかせます。

S SECRET

俺の秘密？　ありすぎて、なんだかわからない(笑)。たとえば、PROFILEとかに生年月日や本名を載せてないっていうのもあるし。でも、あれは、今の自分を見てほしいし、今の発言を聞いてほしいからなんだ。過去は過去だから、今の自分には関係ないし、興味もない。誕生日は、「おめでとう」っていわれるのがいやだから、いわないっていうのもあるけど。そりゃ、みんなからお祝いしてもらえば嬉しいんだけど、それよりテレちゃうんだよね。

ま、年は知ってる人はいっぱいいると思うけど、知らない人の中にはいろんな説がいっぱい飛んでて、面白い。すっごい上手だと思ってる人がいれば、すごく下手だと思ってる人もいるとかね。

あと、血液型は、根本的に信じてないからどうでもいいんだ。もちろん、多少の関連性はあるのかもしれないけど、人間を4つのタイプに分けようとすること自体が無理だと思うんだ。外人は血液型じゃなくて星座のほうを信じてるみたいだけど、それだって12しかないからね。もう、なんだっていいじゃん。

「あなたは血液型が何で、何座の星座だから、こういう曲が書けるんだ、こういう人なんだ」って決め付けられること自体、嫌い。それって、逆にいうと、それだけの可能性しかないっていうことにもなるしね。今の自分は、今の自分でしかないんだから。だいたい、人間なんて、何日かでからだ中の細胞が全部入れ替わっちゃうんでしょ。それなのに、星座だとか血液型だとか、無意味だと思う。

あとは……本名ね。これも、どうだっていいんですよ。そんなこといってるから、(YOSHIKIっていう名前も)作ってるっていわれちゃうんだけどね(笑)。でも、それも本当にどうだっていいことだから。だから、別に隠しているというより、いいたくないだけだな。いわなくてもいいものだと、思っているから。ただ、それだけですよ。

T A I J I

すごい寂しがり屋。情に熱くて、すごく純粋なやつ。ステージとかではクールに見えるみたいなんだけど、俺なんかは敢えてそうしているような気がするな。そこが、彼のカッコいいとこでもあるしね。でも、やるときはとことんやるし、根性がすわってる。ミュージシャンとしても、人間としても、尊敬してる。素敵なアーチスト。他のバンドにいたとしても、尊敬できるやつだな。

UNFORGETTABLE

……いっぱい、ある。倒れたことも忘れられないし、忘れられないステージもあるし、忘れられない悔しさもあるし。でも、それを引きずったりすることはないな。いちばん最近で忘れられないのは、やっぱり、(横浜)アリーナかな。すごく悔しかったから。でも、そういう感情が沸いてきたのはあとになってからで、最初の何時間かは何がなんだかわからなかったんですよ。ステージでも、ドラムソロの頃から、記憶がないですからね。

あの日は最初から調子が悪くて、「出来ない」っていってたんだけど、いろいろあって、「じゃ、自分たちとファンのためだけにやります」ってなったんですよ。だけど、「調子が悪いな」って思うと、いつもよりももっと激しくたたいてしまって、だんだん記憶がなくなってしまった。あれは、体が覚えていたから、たたけたんでしょうね。それからしばらく記憶がなくて、気がついたら、楽屋で叫びながら泣いてた。

先生にピタピタって頬をたたかれて、記憶が戻ったんだよね。それで、先生と二人だけで話をしたんだけど、先生も泣いちゃって、「もうやめてください」って。それで、先生が「ドクター・ストップです」って言いにいってる間に、俺はまた「ステージに戻ります」とかいって、メイク直しを始めてたんだって。そのへんのことは、自分でも記憶がないんですけどね。

でも、まわりのみんなは、「もうYOSHIKIはわかってないんだろう」って思ったらしくて、そのまま救急病院に連れていかれた。あの時は本当に、次の日まで何がどうなったのかわかってなかった。だから……本当は、思い出したくないんだけど、でも、そんなふうに逃げてちゃいけないと思うし、やっぱり、忘れられない思い出ですね。

※この取材は91年12月に行なわれたものです。

すべてを捨てて、ゼロになってしまうっていうのもいいですよね。

V VACATION

たま〜に、企画するんですよ。みんなで海に行こうとか。アメリカに行く前にも、みんなで海に遊びに行こうって俺が企画したのに、当日になったら風邪ひいて倒れて俺だけ行けなくなっちゃったの。みんなは、俺をおいて行っちゃったけど(笑)。

スキューバ・ダイビングをやりたくて、それで企画したんだよね。なんか、「あれをやると世界が広がるから、絶対に音楽に跳ね返ってくる」っていわれて、それでやりたいと思ったんだ。あと、泳ぐのもすごく好きだからね。海もすごく好きだし。なのに、俺だけ行けなかった。HIDEもTOSHIも行ったのに。残念(笑)。

今、暇が出来て休暇がとれることになったら、とりあえず、スキューバ・ダイビングとスカイ・ダイビングがやりたい。(「YOSHIKI、威張ってもいい? あたし、スキューバのライセンス、とったんだよ」というインタビュアーの言葉に)え、うそぉ、いいなぁーやっぱり、すごくきれいでしょ? いいな、いいな。よ〜し、俺も絶対にとるぞ! 絶対に暇を作ってライセンスをとろう!

なんか、今の言葉を聞いたら、燃えてきちゃった。でも、ライセンスの前に、ど〜にかして休暇のための暇を作らなくちゃね。ふぅ……(と、ため息)。

X X

好きです。いい名前ですよね。字の形も好きだし(笑)。もともと最初は、俺たち、バンド名をちゃんと決めてなかったんですよ。とりあえず、Xにしておこうっていってたの。でも、そのうちに、一文字だからプログラムで目立ったり、未知の可能性とかスーパーとかハイとかいろいろな意味があるっていうことがわかってきて、ますます好きになってきたんだよね。それで、「これがバンド名だって、いいじゃないか」って、思うようになったんだ。今はもう……好きですよ(笑)。

でも、ファンの人の中には、数学の授業で「X+Y」みたいなの見て、気になる人がいるみたいですけどね。パッと見て目立つし、気になる文字ですよね。EXSTASYも、本当はECSTASYなんだけど、Xの文字を使っているし。なんかもう、今となっては他人とは思えない(笑)。血がつながっているような気がするな(笑)。

W WAR

戦争は、やっぱり嫌いです。前にも言ったけど(Vol.9のNの項〜NOW〜を参照)、「なんで、同じ人間同士なのに、傷つけあわなきゃいけないんだろう」って、すごく思う。戦争じゃない解決法を見つけるように、もっと人類は努力すべきなんだと思いますね。

Y

YELLOW

今のところ、外国に行っても、YELLOW（黄色人種）だと感じることは少ないな。逆に、みんなが考えすぎなんじゃないかな。実際に人種差別があるところはあるんだろうけど、俺はまだあったことはないし、（自分が黄色人種だということに）誇りを持つべきだと思いますよ。日本人って、頭いいと思うし、教育レベルも高いし。

だってさ～、こんなこと言っていいのかどうかわからないけど、外国の人って数学、苦手でしょ。買物行ってお金払うとき、「どうして、こんなのがわからないの?」って思うこと、いっぱいある。引算が苦手だし、九九も苦手だよね。ときどき、信じられないこともあるもん。ただ、日本人はその分、教育が平均的に行なわれすぎちゃって、個性がないっていうか、優れたアーチストが出にくかったっていうのはあるかもしれないよね。

うん、デザイナーとかですごい人はいるけど、一般的にはやっぱり平均的な人が多いでしょ、日本人って。でも、優れているところもたくさんあるわけだから、へりくだる必要もないと思うし、自分自身に誇りを持っていたいです。

Z

ZERO

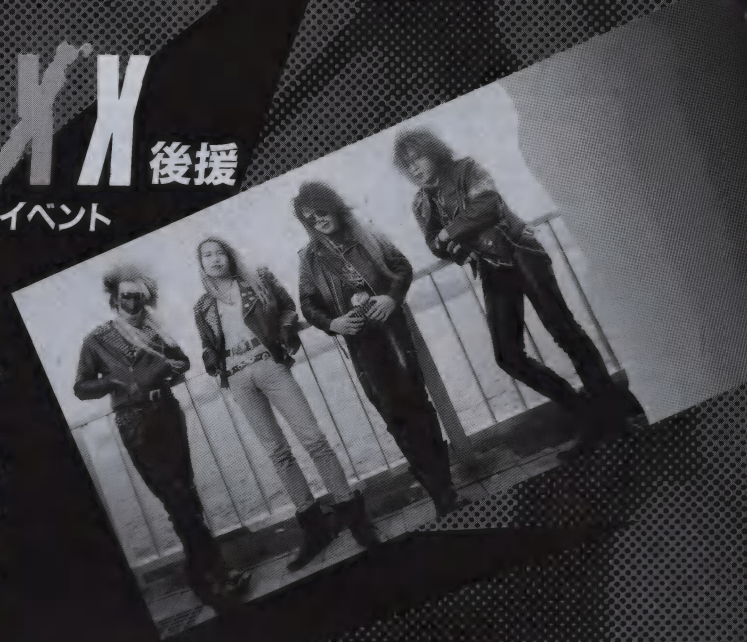
ゼロからの出発……っていうより、やっぱり、一からの出発って思うけど。でも、すべてを捨てて、ゼロになってしまうっていうのも、いいですよね。

あとね、昔、なにかの科目で零点とったことがあって……（笑）。たしか、美術だったかな。あと、漢文でもとったことがある。それは別にわざとやったわけじゃなくて、勉強していかなかったら出来なかっただけなんだけどね。あの時はショックっていうよりも、もう、おかしくて笑っちゃったな。漢文とかって、試験前に勉強しないと、出来ないでしょ。

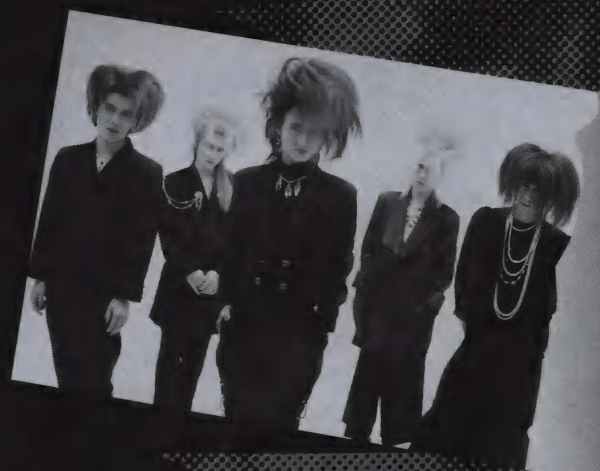
それでも、一回零点をとると次は仕方なく勉強するから、赤点は一度もなかったけどね。ただでさえ目をつけられてたから、そのくらいやんないと落第になっちゃうからね（笑）。

勉強すること自体は好きだったんだけど、俺、すごい極端でね。たとえば、数学で百点とって、漢文は零点って感じ。通知表って、5と1ばっかりだったような気がする。「そういうの、めずらしい」って、驚かれたような記憶があるな（笑）。

後援

夏休みスペシャル・イベント

一撃必殺舞踏会 in 名古屋 Vol.2

出演

ガーゴイル
東京ヤンキース
デカメロン
幻覚アレルギー
シルバーローズ

ワイワイワイ!!
きんさんぎんさんも
ブッ飛び!?(笑)

92年8月8日(土)

18:00スタート

クラブ・ダイアモンドホール

(旧フレックスホール)

前売=¥3,400 当日=¥3,800

5/31(日)プレイガイド一斉発売

チケットぴあ(☎052・320・9999)
チケットセゾン(☎052・264・8211)

●お問い合わせ

主催:ミュージックファーム(☎052・772・2314)
企画・制作:キョードー名古屋(☎052・962・0511)
後援:SHOXX(音楽専科社)

脊Vol.11予告 (副題＝オヤジの主張)

7月21日一斉発売

ようやくYOSHIKIのAtoZも
無事に完結編を迎え、みなさん、**ホッ**と
胸をなでおろしてることでしょう。
「セコイ、3回にも分けやがって」と、
お怒りの方もいらっしゃったことでしょう。
まぁ、これでだ、
わがSHOXXも他誌と同様に、
しばらくエックスとはお別れです。
……………………………………。
な〜んて思ったら**大間違い!!!!**
まさかのまさか、
誰も考えつかなかっただろうけど…ククククク、
HIDE、YOSHIKIに続いて
PATAのパーソナル大特集だ!!
ど〜だ、驚け。
"取材おっくうがり屋"のPATAがど〜して?
と、お思いの方。フフフ**口説き文句**はただ一つ、
「PATAンちの**猫ちゃん**と一緒に撮ろうね。
その後、インタビューは**居酒屋**で
ノンビリやろうね♡」──こ・れ・だ・け…(笑)。
バリかっこよくなったラウドネスは、
やっぱし**TAIJI**
の加入が影響してるよなぁ。
思いっきり、ロケ撮影と
超ロング・インタビューで特集だ!!
トドメは、
ZI:KILLとLUNA SEAの
オオオォォ!!スペシャルパート別対談&撮影さ!

特典付（詳細はP108）

Vol.1
90年11月発売 ¥700

■ZIGGY35ページ大特集／①カラーグラフィック・フォトギャラリー②森重・松尾・大山・戸城の個別インタビュー③国立代々木競技場ライヴ ■かまいたち14ページ特集／①SCEANA、KAZY、MOGWAI、けんCHAN個別インタビュー②ロケーション・カラーフォト集 ■ZI:KILL with COLORスペシャル対談10ページ ■LADIES ROOM カラー

Vol.2
91年1月発売 ¥700

■BUCK-TICK33ページ大特集／①大型カラーポスター②「狂った太陽」の全貌③BUCK-TICK進化論④ビデオ「スピード」撮影現場密着取材⑤ライヴat武道館 ■LADIES ROOM12ページ特集／①百太郎、GEORGE、NAO、JUN個別インタビュー②カラー・スタジオフォトセッション ■かまいたち15ページ特集／①カラー・グラフィックフォト集②対談―けんCHAN & SCEANA、KAZY & MOGWAI

Vol.3
91年3月発売 ¥700

■ZI:KILL29ページ大特集／①大型カラーポスター②TUSK、KEN、SEIICHI個別ロング・インタビュー③ロケーション・カラーフォト集 ■かまいたち and LADIES ROOM 14ページ特集/①ハチャメチャ爆笑座談会②スペシャル競演レポート ■STRAWBERRY FIELDS13ページ特集/LEZYNA with SEISHIRO、福井 with SHU-KEN対談 ■LUNA SEA幻惑カラーフォト&インタビュー7ページ

Vol.4
91年5月発売 ¥700

■かまいたち35ページ大特集／①SCENAロング・インタビュー②KAZZY & MOGWAI対談③けんCHAN & SCENA10項目インタビュー④スタジオ&ロケ特写集⑤クラブ・デイト速報 ■BY-SEXUAL 9ページ特集／SHO and RYO、DEN and NAOスペシャル対談 ■LUNA SEA カラー7ページ ■LADIES ROOM カラー8ページ特集／百太郎 & GEORGE、NAO & JUNリラックス対談

Vol.6
91年9月発売 ¥750

■X42ページ巻頭特集／①新潟産業センター／東京ドーム・カラー速報②HIDE、PATA、TAIJI、YOSHIKIヴィジュアル・フォト集③TOSHIの東京ドーム公演第一声インタビュー④全メンバー11項目独白インタビュー ■GRAND SLAM カラー15ページ特集／個別ロング・インタビュー ■かまいたち/SCEANA with けんCHAN ■D-EEP／本誌独占／デビュー・インタビュー ■LUNA SEA／暴動寸前／

Vol.8
92年1月発売 ¥750

■X45ページ巻頭大特集〜YOSHIKIの神秘世界／①ヨシキ激美フォト集〜ヴィーナスの誕生②ヨシキの心象風景インタビュー③ヨシキ最新独占ロング・インタビュー16000字④ヨシキのAtoZ（Part 1）⑤Xジェラシー・ツアー全記録⑥V2⑦X with オーケストラ⑧東京ドーム公演カラー速報 ■ZI:KILL／本誌独占／新生Zi:Killの正体 ■LUNA SEA／日本青年館2days完全密着取材

Vol.9
92年3月発売 ¥750

■X44ページ巻頭カラー大特集/①HIDE with RYO(By・Sexual)異色フォト・ストーリー〜堕天使の抱擁②スペシャル対話③HIDE写真集「無言激」メイキング・インタビュー③YOSHIKIのAtoZモノローグ（Part 2） ■15ページ巻末カラー特集／レディースルーム〜あの余韻 ■師弟対談／STRAW BERRY FIELDS & LUIS-MARY ■LUNA SEA／押し寄せる忘却のベールとの闘い

Vol.5 **Vol.7**

売切れ!! 売切れ!!

つ〜わけでVol.1〜9はとっくに書店から姿を消しているので、ど〜しても欲しい人は、定価金額(¥700、5〜9は¥750)に送料(1冊＝¥260、2冊＝¥310、3冊＝¥360、4冊＝¥410)を加えて、切手代用または小為替で、〒104東京都中央区銀座5-1-7数寄屋橋ビル5F 音楽専科社経理部「SHOXX バックナンバー Vol.○」(○の中に号数を入れてくれ)係まで申し込んでくれ。また、近くの書店でVol.11(7月21日発売)を買いそびれないようにするには、下の注文書を今のうちにその書店へ出して予約しておくと便利かな。

雑誌注文書

●書店(番線)印	●受注　　月　　日	●部数	●担当者
	●書名 ショックス9月号（Vol.11） 定価750円(税込) 7月21日発売		
	●あなたの住所 〒		●TEL
	●あなたの名前		
	●出版社名 ㈱音楽専科社 〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F ☎03(3574)0201 FAX03(3574)8548		

※この注文書はコピーしたものでもかまいません。

警告!!音楽業界の悪たれを討て!

Zi÷Kill

何故、Zi÷Kill は姿を現さないのだろうか…いろいろな憶測が飛び交う中、いよいよ Zi÷Kill が本格的に活動を始めた。今回SHOX X は、TUSK、KEN、SEIICHI、EBI の4人のパーソナルインタビューを試みた。現時点で発表できる Zi÷Kill の活動状況〈7月→3rd シングル・リリース! NHK ホールにてライヴ予定! 9月→アルバムリリース!? …etc〉を満載! Zi÷Kill フリーク必見!

INTERVIEW:TATSU USHIKU
PHOTOGRAPHY:SAORI TSUJI

箝口令解除!?

マジ、ツアーなんてなったらブチ切れそうだよ、オレ。

(b) SEIICHI

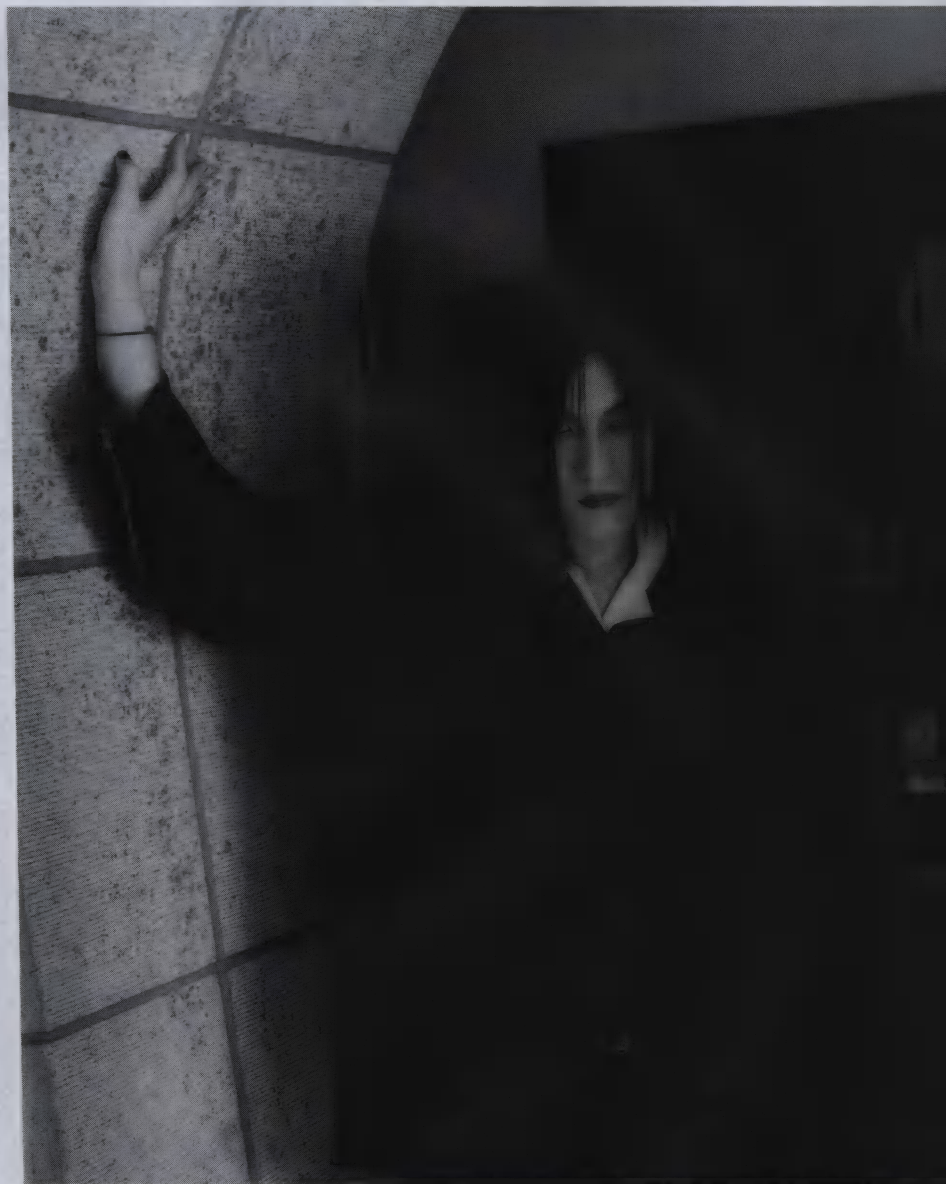
――こんどのシングル、結構好みでしょ?
SEIICHI：うん。好き。
――どっちがフィーリングが合ってる?
S：漠然とレコーディングしやすかったのは『DON'T ASK ME』の方かな。フレーズ的にも、『CRACK EYE』はちょっとややっこしかったから。
――これで通算5枚*めの音源だけど、確実に成長してると思わない?
S：上手くなったところはあるんじゃないかな(笑)。自分でもそんな気がするし。
――今回、新たに取り入れたものというと…
S：ホッピーさんのキーボードとかね。あーゆーのはやっぱいままでなかったでしょ。あのぐらいのキーボードだと、オレもやってて違和感ないし。キーボードいっぱい入ってるからポップスになるってワケじゃないしね。
――嫌味じゃない程度に入ってるからね。
S：そうね。曲のアクセントとして入ってるけど膨みが同時に派生してるし。
――「IN THE HOLE」って前衛的だけど、誰の案?
S：やっぱSEになるようなのがね…ライヴに使えるものが欲しかったから。それだったら打ち込みっぽいヤツの方がいいかなって。ホッピーさんとTUSKでね。
――7月にライヴを演るし、秋にはアルバム出すし、やっと始まりだしたって感じ?
S：うん。ネッ…始まればいいけど(笑)。
――まだ不安がつきまとってる?
S：でも、やるしかないでしょ。早くライヴを演りたいわぁ。
――やっぱりレコーディング作業よりもライヴが良い(笑)
S：ぜーんぜん。もう格段の違いがあるよね。
――体を動かしながら…ってヤツ(笑)
S：うん(笑)。何かライヴって一発勝負じゃない。その一発勝負をお客さんが観ててさ。で、客がワァーッとなればオレらも持ち上がるし。オレらがガーッと音出せば客も持ち上がるし…アレは好きだね。ブランクに対する不安は少しあるけど、そんなの演りはじめたらすぐに解消するでしょ。まあ、お客さんが来てくれるかどうかですけどね(笑)。
――来るでしょう(笑)
S：そうかな(笑)。ならいいんだけど。

――でも落ち着いてきたよね…昨年の12月よりは。
S：そうだね。実際の作業があるからね…シングル録ったりとか。やることあるし。昨年なんか、別にやることもなけりゃ、先のことなんか全然わかんなかったからね。ただイライラしてるだけだったからさ。"アノヤロー"ってさ。でも最近はさ、悪いけど頑張ってますよ…ベースも。
――これから忙しくなるじゃない。
S：ね、忙しくなればいいけど。やっぱ忙しくなくちゃ実感ないもの。
――10月からツアーも始めるみたいだし。
S：ね。マジ、ツアーなんてなったらブチ切れそうだよ、オレ。いままで溜ってたものを吐きだすからね。イイものが観せられると思うなぁ。熱くやりそうだよ、オレ。一人で動き回りそうだな。一回、一回が見逃せないライヴをやっちゃおうかな。発狂しそうだもん。

――で、その第一弾のライヴが7月にあると。
S：もう、それはすごいだろうな。動き回るんじゃない。もう誰にも止められない系の!はたまた誰か止めろ系の!(笑)。
――EBIちゃんとバッチ決めーの(笑)
S：うん(笑)。ルックスは全然違うけど。わりと向こうは渋い系の。……オレもねぇ、渋くスーツでヒューッってこう決めるのもいいかな…と思うんだけど。まだね、全然…早いかなと思ってる。まだまだね。
――スーツで登場したい?
S：ううん(笑)。というか、ふと思うのよ、時々。あーゆーのも渋くてかっこいいなって。でも…まだ何か…まあいいやオレは。まだビニールパンツでいいよ、オレは。ビニールパンツにブーツで十分だよ(笑)。何かまだ背中にロック・キッズってのはとっておきたいなって。…そういうの背負っていたいな…なんて。
――そういえば、SEIICHIが一番ロック色強い衣装だもんね(笑)
S：だからね(笑)、多分みんなとは違う位置にいたいんだろうね。オレはそうなんだよ。
――そういうSEIICHIを待ってるファンも多いだろうし。
S：まあね。待ってるヤツもいるし、待ってないでいろいろ浮気してる客もいる…だろうけど…ね(笑)。まあ、そういうコが戻ってくるのも良し。戻らないで本気になるのも良し。
――でも戻ってくるでしょう(笑)。いいんじゃないんですか(笑)。
S：戻らせますよ(笑)。夢をみさせますよ(笑)。
――このシングル聴く価値あるし。
S：そう思ってますか…ホントに(笑)
――ホントだよ。何でそうかなあ(笑)
S：嬉しいよ。確認したがりなんだよ、オレ(笑)。

＊新曲のみで限定すると5枚

TUSK (vo)

でももう…言わなくちゃいけないんだなって思ったね。

TUSK：もう疲れたね。

――いきなり(笑)

T：いきなり(笑)。もー、疲れた。もういままでは事務所のゴタゴタとかね、レコード会社のゴタゴタとかをさ、あまりいってもしょうがないと思ったワケよ…雑誌とかに。で、まぁいったことによってさ、〝オレたちはこれだけ苦労してますよ〟〝オレたちはこれだけ大変な思いをしてますよ〟ってアピールしてもしようがないと思ってたのね。でももう…言わなくちゃいけないんだなって思ったね。

それは何故かといえば…圧力が重くのしかかり、自分たちを羽交いじめにして、音楽業界とはやはり…ぬるま湯につかってるとすぐに毒されるよね。ぬくぬく生きようと思ったらダメだね。常にやっぱり緊迫してなきゃいけなかったんだね。それはやはり…自分の甘さもあり、音楽業界の恐ろしさもあり…何ていうの…上はまだ天高く昇りつつ、空はまだ高かったって感じだよね。…空は高かったよ。バタバタして…バタバタして…問題は解決せず…みたいなね(笑)。

――チラシに「箝口令解除」ってあるけど(笑)

T：〝解除せず！〟だよ(笑)。ホントに。だから今後何とかして化けの皮剝ぎたいよね。やっぱ腐った奴等はゴロゴロのさばってるのよ(笑)。

――いるよね(笑)。音楽だけに正直になればなるほど無理よ。うまくいかない。

T：ねっ。…気持ちはわかるのよ、各個人の気持ちはね。でもその会社の体制とかね、上からの圧力とかね、横とのつながりとかね…結局そういうものにみんな負けちゃうんだよね。個人を尊重できないんだよね。

――会社機構ってヤツ。

T：そう。でもオレたちみたいなのって、個人を尊重してるワケじゃん。個人を尊重して個人で突っ張っていくのは簡単なことじゃなかったよね。で、すごく悔しいのはさ、音楽業界ってところ関係なく活動できれば嬉しいんだけど、それじゃやっぱりダメなんだよ。音楽業界の持ってる力ってものがあるからさ。それをどっかで頼りたいっていうかさ、そういうのがあるんだよね。自分たちもすごく矛盾してるんだけど。だからもう…ホントにいい人見つけるしかないよね。上に金があっちゃダメよ。まず金だ！…っていうのは。先立つ物は金っていうのはヤバイね。先立つ物はやっぱり愛であってほしいよね。

でさ、オレが人にいわれたのが、〝お前は自分に引っかかるモノを持っている人を尊敬したり、ついていこうとか思いがちだ〟っていうわけ。自分では警戒心があるように思っていたけど、そのきっかけになる小っちゃなモノでもさ、自分の中にひっかかるモノに弱いんだろうね。

――でもさ、別にTUSKのリズムは壊さなくてもいいと思うけどな。

T：そうね。だからオレも自分でそれは考えてさ、自分の生き方とか、やり方とか、リズムとかね。…そういうものが間違ってたのかなって。だけど、どう考えてみても間違ってないもんね。まだ22歳の人間だけどさ、大人の社会にオマケでくっついていってるんじゃなくて最前線に立ってるワケじゃん。22の学歴もない男がさ、歌ひとつでガーンッとここまで来てるワケじゃん。それだけで立派だと思うけどね(笑)。

でさ、フカフカの椅子に座っているオッサンたちが、オレたちに振りまわされもしてさ、オレたちでいい思いも嫌な思いもしたりさ、そういう人たちにいくらか少なからず…通り過がりにせよ何らかの傷跡を残したワケじゃん。

今後もそれはどんどん傷つけてやりたいよね。もうさ…みんな終ってるよ、マジで(笑)。

――ところでさ、今回の「CRACK EYE」の歌詞、TUSKにしては長くない?

T：そうだね。長くなっちゃったね。

――2曲めの歌詞なんかも、いまの状況ビシバシだしね(笑)

T：そうだね。個人的には2曲めの歌詞って、すっごく愛情あるんだよね(笑)。で、自分で自分の歌詞を批評するのっておかしいけど、2曲めは、Zi:Killというバンドのボーカル TUSKの心だよね。1曲めは、Zi:Killというバンドのボーカル TUSKの言葉の羅列だよね(笑)。

――2曲めの2番の歌詞なんかモロじゃん(笑)

T：でもこれなんかまだいい方よ(笑)。もっとモロあるから(笑)。『Mr・マーケット』って曲あるんだけど。それなんかもう歌いだしが「たとえお前が嫌なヤツだって〜」だもん。

――それってアルバムに入るの(笑)?

T：アルバムに入るよ(笑)。

――見逃せないじゃん(笑)

T：見逃せない、見逃せない(笑)。サビが…もういっちゃうけど…〝Mr・マーケット オレの心を…叩くのはやめてくれ！ Mr・マーケット オレの体を…粉々にしていく〟(笑)。

――そこまで(笑)。では最後に一言。

T：警告!! 音楽業界の悪たれを討て！

——どう？　今度のシングル

EBI：いい出来に仕上がりましたね。

——一曲めってポリス意識してない(笑)

E：そうなのよ(笑)。あれはね、本当は変えようという話になってたのよ。だけどあの曲はあのリズムで歌メロ付けちゃったから、変えようがなかったの。ポリスぽいといわれちゃうとそれまでだけど、しょーがないの(笑)…あれは。

——レコーディングって初めてだっけ？

E：ちゃんと名の売れた人がミキサーやってくれたりとか、プロデュースやってくれたりとかでは初めてだよね。

——結構リラックスしてたんじゃない？　テレビで時代劇をみてたでしょ(笑)

E：いや、緊張してたのよ(笑)。リズム録りの初日なんか特にね。やっぱり自分から〝これはイイや！〟っていえない…っていうか。

——じゃあ、レコーディング前日なんかは…

E：すごかったよ、結構。だってさ、〝今日でスタジオは終わりで、週明けレコーディングね〟といわれても困っちゃうわけよ。で、〝やっぱちょっと恐いから、スタジオ2時間でいいから入れてよ〟といって、セイイっちゃん呼びだしてやったしね。録りが終わるまでは緊張の連続だったよ。

——ところで一曲めの『CRACK　EYE』って、スタジオにEBIちゃんが入ってすぐぐらいにやってた曲じゃない？

E：そう。その頃には出来てた曲だよね。で実際録るまでに時間があったから、やっぱずっとやってるとポリスぽいとか意見が出てくるわけよ。それで〝そうか！〟と思って変えようと思っても、もう馴れ親しんじゃってるから…リズムから作っちゃったから、もう変えようがなかったんだよね。

——『DONT　ASK　ME』は新しめの曲だよね。

E：そう、もうこれはシングルって形でヤルと決まったとき、〝もう一曲何か欲しいね〟ってことになって、KENが持ってきたんだ。

——もう大分、下地ができてたんだ。

E：もう割とズンドコで演ってくれといわれて…テンポが速かったからさ。…辛かったですよ(笑)。

——でもさ、一曲めと二曲めって顕著に違いが出てるじゃない。EBIちゃんの存在が自然と浮かび上がってくるよね。

E：そう(笑)。嬉しいな。できることしかやってないからな。それしかできないし。

——ところで、このシングルが出た後の7月に、渋谷某所で記念すべきライヴが行われるそうですが(笑)

E：とにかくガンバリます。Zi:Killはー:Killのやり方があるんで、それを守ってやっていきますよ。基本は変えることないし、変える気もないからね。

——で、続いて突っ込みます(笑)。何か秋にアルバムが出るという噂がちらほらと…(笑)。

E：出るでしょう(笑)。かなりクオリティーは高いです。やっぱね、大分進歩した、という言い方は変だけど、クオリティーは上がってるよね…すごく。

——どのくらい曲はできてるの？

E：アルバム一枚分ぐらいは作ってあるよね。だからもう、いいモンできると確信してますよ。

——アルバムが出たら次は当然ツアーでしょ

E：ええ。でも、いままで止まっていた分を取り戻しますよ。自分が加入してからここにきて、やっと前が見えて来たからね。

——このシングルを出したことでフッ切れたというか、心構えが変わってきたでしょ。

E：それはあるよね。これでやっとひとつ形として残るワケだし…。まあ、加入しての第一歩がこれだから…加入する前もかなり気合い入ってたしさ。何か自信が付いたよね。だから後はもう進むだけですからね(笑)。

——ライヴではEBIちゃんとしての個性を出していくと思うんだけど。

E：うん。やっぱりそうなるとセットの話になっちゃうけど。オレはワンタム・ドラマーだから、ワンタムでいままでの曲をノリを変えずに出来たらいいなと思いますよ。手数とかちょっと違うかもしれないけど、それはあくまでもクセの話で、基本的なノリは出していきたいな。

——EBIちゃんのセットって、いまの時代では珍しいほどシンプルでしょ。

E：(爆笑)そうねえ、周りを見渡すとね。みんなすごいジャングル・ジムのようなドラムセットだし。それはそれでいいんですけど。

——増やす気ないの？

E：全然ない…っていうか、あれ以上並べても叩けないのよ(笑)。ワンタムのクセってあるじゃない。それに並べるの面倒臭いし(笑)。

——でも、逆にそれだけのセットであれだけ叩けるってやっぱすごいよ。

E：単純にこれ以上できないだけなんだけどね。ツーバスやったらできなかったの(笑)。

大分進歩した、という言い方は変だけど、クオリティーは上がってるよね…すごく。

(ds)EBI

撮影協力：PRINCE HOBBY（☎3443・1521）

KEN (g)

生の姿を見せてあげたいよね。ライヴハウスで育ったバンドだからさ。

―7月末日にライヴがほぼ決まったそうだけど。

KEN：ようやくね…ホントに演れればイイね。いまはとにかくわかんないからさ…どんなものになるのかさ。とりあえず新しい4人の第一歩で…久し振りな活動の第一歩で…って感じだよね。だから、人のライヴも一生懸命観て、自分たちのライヴのビデオとかも見直して…体のどこかから抜け出たライヴ感覚ってのをどうにか元通りにしたいよね。元々オレたちってライヴバンドだったからさ。

―ライヴに対してのイメージって考えてる？

K：とりあえず久し振りだからって空回りしたくないよね。不慣れになったなって思われたくないし、やりたかった素直な気持ちを体全体で表わしたいよね。…いろいろ深いこと考えずに本当はライヴしたかったんだよ…っていうのがわかるような、そんなライヴにしたいね。別にステージセットで山を造ろうとかさ…そういうことを考えるよりもノーセットでもいいから、生の姿を観せてあげたいよね。ライヴハウスで育ったバンドだからさ。

―ところで、そのライヴは渋谷某所ということだけど、具体的に発表はしないの？

K：いや、○○○ホール。もういまさら隠したってしょうがないじゃん。どうせバレるんだから、早く知ってもらった方がいいしね。

―○○○ホールといえば2回めだよね。

K：そうだね。イイ場所だと思ってるよ。

―ハコ的にも動きやすいんじゃない？

K：ステージも広いし…ただ客席も広いから早い話お客さんがいっぱい入るところだからね。まあオレたちのことを忘れた奴等なんかいないと思うけどさ…3階の後ろまでしっかり見えるぐらいの余裕は欲しいよね。…オレ目がイイからさ。

―結構後ろまで見えるの？

K：滅茶苦茶見えるよ。セイイッちゃんとかTUSKがスゲエなというくらいだもん。やたらと目がイイからさ。だから、お客さんも緊張せずに素直に観てくれたらイイなと思うよ。熱狂してくれれば嬉しいね。久し振りな分、絶対いいライヴになるよ。

―ライヴの組み立てなんか考えてない？

K：あんまりそれは考えないな。長くしようか、短くしようかも考えてないし。とにかく新人バンドじゃなくて、オレたち中堅バンドだからさ。結構時間的には自分たちで調整できるくらいの曲数はあるから。短い曲で絞り込むか、割と全体的に聴かすか…なんてことはまだ考えてはいないね。まあ、そこら辺のツボみたいなところは抜けちゃっているけど…しばらくやってないからさ。でも、ライヴはたくさん積んできたから…大丈夫だよ。うまく組み立てられると思うよ。

―シングルもライヴの前にリリースされるみたいだし。

K：何かそれも決まったそうだしね。まあ…ようやくだけどね。いろんな障害とかがあったからさ。納得ができるくらいの話じゃなくちゃ。

―でも、しっかりと前が見えたから良かったじゃない。

K：そうだね。

―ところで、今度のシングルじゃ結構ギター小僧してるでしょ

K：うん。思ったより弾いてる（笑）。一曲めはね、歌といっぱい絡めたくて…そんなにギターというギターは弾いていないんだけど、2曲めは俗にいうハードなシャッフル・ナンバーでさ。うちらって素直なシャッフルって使ったことなかったからさ…そういう意味でシャッフル使ってみたら…やっぱりシャッフルってリズムがクルもんだけど、ギターもクルね…みたいな。でもってボーカルもキテルから…みんな、まあ全員キテルんだけど、たまたまオレの場合はさ、あんまりソロとかにハードな音数の多いソロなんか入れたことないからさ。今回は反して音数が多かったから。他の人がやるんだったら普通なんだろうけど、オレがやったから「弾いてるね」…といわれる（笑）。

―でも、全体的に前に出てるでしょ

K：特に2曲めね。まあ1曲めは、いままでの雰囲気を流しつつ少しダイナミックになった感じで、2曲めは…ハードロック・ヘヴィメタルっていう流れのないところで、勢いのある曲だね。何かいままでだとさ、うちの勢いのある曲って2ビートとか…そういう意味で速い…スカみたいなヤツだったけど、今回のは小気味良いって感じだからね。…そういう曲も始めたね。

―アルバムは9月ぐらいには出てきそうだよね。

K：そうね。アルバムは9月に出して、その後すぐツアーやるよ。

―ということは、9月売りのSHOXXではかなりの露出が期待できるね（笑）。

K：そうだね（笑）。またこんな話だ（笑）。星子さんタジタジだ。表紙やらざるを得なくなって（笑）。

AION

IZUMI & NOV INTERVIEW

NOV (vo)

次は、一体どんなアルバムが生まれるのか!?

3月某日、都心から1時間半、目の前に海の広がる某スタジオでAIONのレコーディングが行なわれていた。ちょうど、リズム録りということもあって、スタジオ内は緊張した雰囲気が漂う。
今回のインタビューは、自分のパート録りを目前に控えたNOV、IZUMIに前作『AIONISM』から今回のレコーディングまでの精神的な変化、今回の作品で表現しようとしていることは何か?を聞いた。

INTERVIEW:REIKO ARAKAWA
PHOTOGRAPHY:MASAHIRO KOMACHI

緊張した空気の流れるスタジオのすぐ横にある小さな部屋は意外にもくつろいだ雰囲気。海の見えるその部屋で、まずはNOVに歌詞のことを中心に聞いてみた。

今までの3枚のアルバムで独特な世界を展開しているNOV。歌詞は曲を聴いてから作ると言う。

「曲が出来て、メロディがあって、歌詞を考えていくパターンが多い。今回もそういうパターンでストックっていうのは、まずないね。間際にならないと書けない人間だから(笑)」と笑いながら話す。どうやって歌詞を作るの?の問いには、こう答えてくれた。

「俺の歌詞っていうのは、まず自分なりに〝こう思う〟っていうのを考えて、それを文にして、そこから歌いやすいような言葉を選んで作っていくんですよ。

大事な部分が1小節だけあればいい!と思うんだ、歌詞っていうのは。ここを聴いて欲しいみたいなね。あとは詩を読んだ人や、聴いた人が自分なりに考えてくれたら、いいなと。俺の詩を読んでNOVは何が言いたいのかな?って思ってくれなくてもいいんだ。ただ〝私もこうだなぁ〟とか〝私はこう考えてしまったな〟とか、そういう風に思ってくれればいいんじゃないかな、と」

こういう作り方は意識的にしているのではなく、自然に……と言う。

「たまに政治的なことを言ってる詩もあるけど、途中で変わっていくんだよね。雰囲気とか。曲と照らし合わせながら、〝あ、ちょっと世界が変わってきたな〟って思ったら、別の世界を考えてみようとか……そういうこともあるかな。

1番が政治のことを直接書いたとしても、2番は違う意味の……男と女のストーリーとして考えられるような文が出来てしまったりするんですよ。自分で書いててそう思うから、読んだ人もいろんな意味にとれるんじゃないかな?悪魔的であったり、政治的であったり、

IZUMI (g)

ラヴ・ソングであったり……そういう楽しみ方をして欲しいなっていう気持ちがありますね、今までの詩は。今まであまり言わなかったけどね。

改めて『HUMAN GRIEFMAN』や『MAIGIMA』の歌詞を見て、俺は一体何を書きたかったのかな？と思いながら読んでたら、〝あ、こういう風にも捉えることも出来るな〟って気付いたんですよ。自分でも違った解釈をしてしまう位だから……時がたつにつれ、自分も変化してるのかなぁっていうのを感じますよ」

自分の書いたことと違う解釈をされても構わないと言うNOV。昔の歌詞を読み直して、自分が知らない間によく使ってる言葉ってないですか？の問いにはこんな言葉が返ってきた。

「う〜ん、哀れ（笑）とか現実。あと安らぎかな？この3つは自然に頭の中に出てくる」

確かにこの3つの言葉は、よく響いてくる言葉であり、NOVならではの世界を作っている言葉でもある。今回のアルバムの作詞に関して、作風をガラッと変えようという気はなかったと言うNOV。

「前作以上の……、今回の新しい歌詞を作っていこうっていう気持ちだけ」

この言葉に、精神面でプラスされたものが大きく反映されそうだ。

「ちょっと前までの自分だったら、悲況で結論は哀れな私、で終わってたと思うんだ。今の状況を考えたら、東京に出てきて1から出直しみたいな感じでしょ？だから、落ち込む詩になると思ってたんだけど、結構希望を持ってる詩が書けた。単純に言えば、今我慢すれば何かが待ってるぞ！みたいな（笑）。その為の苦労っていうか、苦労っていう言葉好きじゃないから、今我慢すればいいことが起きるよ！大丈夫だよっていう。

前の「鎖と雨」って哀しいだけで終わってしまったでしょ？それを意識した訳じゃないんだけど……ま、自信かな？そういう感じの詩かな。最初哀しいと思わせといて、いや大丈夫／光が見えてるよっていう感じの詩が書けたね」

NOVの自信ある言葉にアルバムへの期待は増すばかり。続いてはIZUMIに今回の曲作りが前回の時とはこういったところが違う、という話からしてもらった。

「前回は自分のソロ・アルバムを出した次のアルバムだったから、曲作りは結構同時進行だった。ギターに関しては、あの時ちょうど怪我してたのもあって、自分が出せてなかった。別に言い分けをするつもりはないけどね、そういう要因が重なってAION4人の1／4は出せなかったと思う。ソロで出した自分の色をもう少しアルバムの方で出したかったっていうのもあるけど、実際それが出来るような状況でもなかった。

今回の曲作りに関してはすぐに出来た曲もあるけど、1ケ月位かけて作った曲が1曲ある。大作……っていうか、俺は大作とは思ってないけど、そういうのがある」

そういう作り方したのは今回が初めてだ、そうだ。

「『HUMAN GRIEFMAN』は1日で3曲作ってみたりしたからね。今回はリフ中心ではないし、いろんなことをやりたいっていうのもあったし、チャレンジしてみたいっていうのもあったしね」

前回のインタビューでの〝必要以上に進化してるはず〟という言葉が気になっている人も多いはず。そういう気持ちにさせたものは何だったのだろう？

「俺は常に聴く立場で作るから、自分がやりたいものを押し付けるんじゃなくて、自分がリスナーとして、俺にこういうものをやって欲しいなっていうのを逆に求めてる。1人のミュージシャンに同じことをやり続けて欲しくない。

例えばVAN HALENだったら、1枚目で攻撃的なことやってて、2枚目から変わって、3枚目でもっとポップになって、いわゆる売れ線狙いにはなっていったけど、そのままだったら面白くない。そこからまたハードになったりで、変わっていって欲しいっていうのがあるね」

今回、1曲ずつ凄い時間をかけ、メロディにも気を使ったというIZUMI。なんと今作では詩も書いたそうだ。

「詩を書いたっていうのは、何て言うのかな……完璧なものにしたかったからかな。いつもだったら、詩はNOVに任せてとか、ある程度のメロディはNOVで、重要なところだけ指示してっていうくらいだったけど……、今回何で詩を書く必要があったか？っていうと、曲作りの段階でこのメロディには、この言葉が合う、っていうような、ひとつずつ細かく計算して作っていったから。それで時間をかけたっていうのもあった」

メロディという意味では、前作『AIONISM』でも新しいAIONの側面を見せてくれたが、今回はそれを上回る作品になりそうな気配が漂う。メロディを必要とする気持ちは、今までと違うことをやりたいという意識の中から出てきたものなんだろうか？

「自分で意識してないところで影響は受けてるかも知れない。街の中で耳にするメロディが良く思えてきたのかもしれないし……。俺はソロ・アルバムで、ギターで今までにやってきたことにはピリオドを打ったから、ある程度0に戻ってる。作曲者としての俺も見て欲しいしね、テクだけじゃなくて。このままいったら、オタクになってきそうだから、ギターの（笑）」

と笑うIZUMI。一体どんなアルバムが生まれるのか？あと数ヶ月の辛抱だ！

本当はネズミくんの話も聞いたのだが、あっ、もう行数がない！ということで……また次の機会に。最後、速弾きに関してはこう話してくれた。

「もう意識しない、ただ速弾きが必要なら、そこに入れるし、今まで以上の速さでいれるつもりだけどね」

《ライヴ・スケジュール》6月5日＝横浜ゴーストウォール、7日＝市川GIO、11日＝大宮フリークス ●問合せ先＝ディアフレンズ（☎03・3404・4535）

《バック・ナンバー》■VOL.3➡メンバー全員インタビュー■VOL.4➡IZUMI・パーソナル・インタビュー■VOL.6➡メジャー・デビュー・インタビュー■VOL.8➡NOV & IZUMI■VOL.9➡全メンバー・インタビュー

I Need You DEEP

オムニバス・アルバムでようやくDEEPが聴ける。

『DANCE 2 NOISE』といえばバクチクの今井寿&ソフトバレエの藤井麻輝ユニット、バクチクの桜井敦司&ザイモックスユニットなどなど、当世一流のミュージシャンが参加しているオムニバス・ダンス・アルバム。その第3弾（7月21日発売）に我等がDEEPが参加することになった。彼らにとっては初の音源となるこのオムニバス参加、いやがおうでも期待は高まります。しかし、当の本人はいたって冷静なようでして……。

――まずは今回『DANCE 2 NOISE 003』に参加することになったいきさつを聞かせてくれる？

RAY　僕がUKのオムニバスに参加したんですよ、ベルベット・アンドロワのギターとジョイントで。それでUKの人がビクターの人に『DANCE 2 NOISE』また作るんだけどなにかいいバンドない？」って聞かれたときにDEEPを紹介してくれたんですよ。

――もちろん『DANCE 2 NOISE』の001や002は聴いてたんでしょ？

JUN　存在は知ってましたけど、聴き込んではいませんでした。

RAY　つまん……おっとヤベェ（笑）。

ATSUSHI　楽しい人たちとつまんない人たちがいましたね（笑）。

JYUICHI　俺は001しか聴いたことないんですけど、企画自体はおもしろいなと思いましたね。

――で、今回入る曲が……

RAY　「I NEED YOU」という曲です。

――これは書き下ろし？

JYUICHI　はい、『DANCE 2 NOISE』のために作った曲です。

――作曲は誰が？

JYUICHI　みんなで作ったって感じだよね。

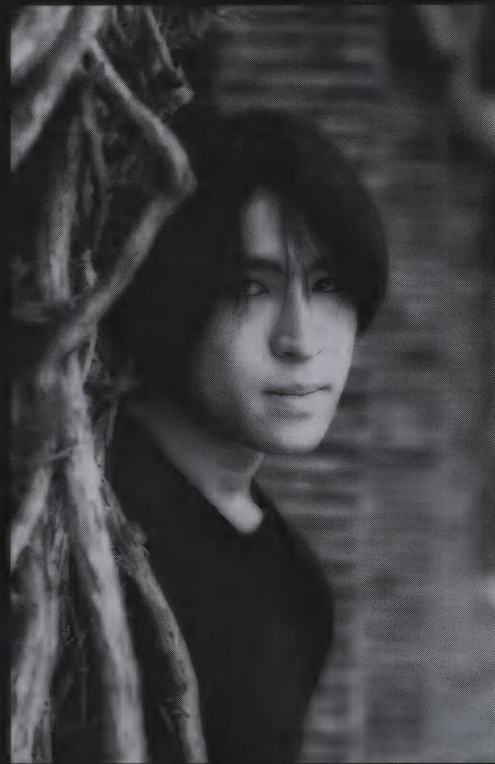
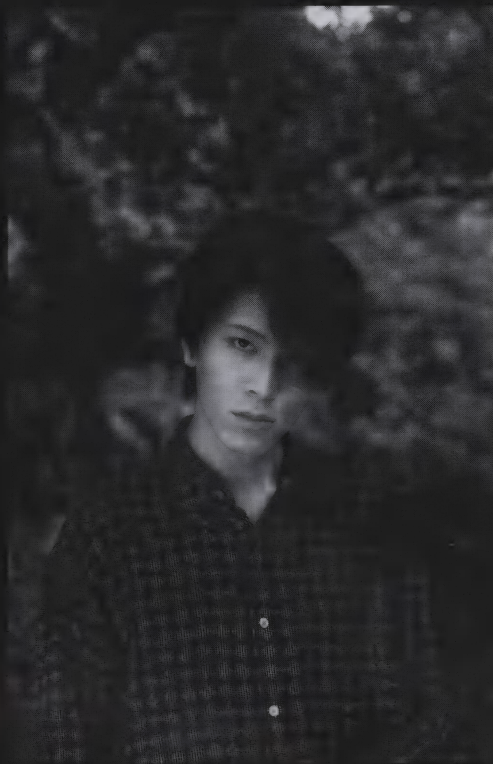
ATSUSHI　スタジオに入って、各自こんなフレーズどうかな？　的な感じで広げて行ったから。

――じゃあいつもの作曲方法とは違うの？

JUN　うん、あんまりなにもないところからは始めないですからね。

RAY　最初の頃はあったよね。結成して初期の頃はスタジオに入って曲をそのまま作ったって感じですけど、最近はそういう作り方はあまりしませんね。

――やっぱり『DANCE 2 NOISE』に合うような曲にしようっていう考えはあったのかな？

INTERVIEW:YUSUKE KATOH
PHOTOGRAPHY:KAZUKO TANAKA

JUN　合わせた部分はドラムのリズムだけっていうか、ビートを最初から最後まで同じ感じにしようっていう。あんまりコロコロとリズムが変わっちゃったら踊れないかなと思って。

JYUICHI　でも特別そんなに変わった作り方はしてないんじゃないかな？

——聴くところボーカルがいつもと違うなと思ったんだけどな。

RAY　そうですか？　自分ではモロに自分ぽいなと思うけど、メロディー・ラインは。でも重ねてるから違うように聴こえるんじゃないですか？

ATSUSHI　聴いてどうでした？

——『DANCE 2 NOISE』してるなって思った（笑）。

一同　爆笑

ATSUSHI　カッコ良くありません？

——もちろんカッコ良かったけど、いつものDEEPに較べると素直な感じがしたよ。それはさっきJUNがいったように〝踊る〟っていうことを前提にして作ったからだと思うんだけどね。

でもさ、今回だけでじゃなくてこれまでもDEEPはダンスを意識して来たバンドだと思うんだけど。

JYUICHI　いえ、別に。

RAY　僕は全然ないです。

ATSUSHI　だから、ロックですよ(笑)。ただ今回は反復のビートを使うっていうのは意識しましたけど、それ以外は別に。

——でもやっぱりこの曲で踊ってもらいたいっていうのはあるんでしょ？

RAY　僕は全然ないです。異種なら異種なほどいいなっていうだけで。もし踊ってもらおうと思ってたんだったらもうちょっと違ったメロディー付けましたよ。

JUN　僕も個人的にはこういうリズムだから乗れなきゃしょうがないんでノリには気をつけましたけど、それ以外は特に。だから『DANCE 2 NOISE』に合うよりはその中でスッと聴き流されるんじゃなくてちょっと異種でもいいから引っ掛かる曲にしたいなと思ってましたから。

——その引っ掛かりっていうかDEEPらしさってなんだと思う？

JYUICHI　他のバンドの曲をまだ聴いてないんでなんともいえないっていうのがあるんですけど、今までのDEEPからかけ離れた曲ではないんで、聴いた通りDEEPの音ですって感じなんですけどね。

ATSUSHI　カッコいいからいいんじゃないですか？　それがDEEPのカラーですから。

——だから、今まではメンバーそれぞれがカッコいいと思うモチーフをスタジオに持ち込んで曲を作って行ったっていってたじゃない？　でも今回は『DANCE 2 NOISE』に入れるっていう大前提があるから作業としても意識的な部分でも違いがあるんじゃないかと思ってたんだけどね。

JYUICHI　ああ。でもそんなに考えなかったですよ。「どうしよう、こうしよう」っていってて「じゃあこんな感じ？」「あ、それでいいじゃん」って作ったからいつもと変わりはないですよ。

——それと同時にDEEPにとってはこれが初の音源になるわけじゃない？　それが『DANCE 2 NOISE』だとDEEPを知らないリスナーにとっては〝DEEPはダンス・バンドだ〟っていう先入観がついちゃうんじゃないのかな？

ATSUSHI　ああ。でもこれ聴いてカッコいいなと思ってくれてDEEPのライヴ来てくれて、そこで「ダンス・バンドとはちょっと違ってるけどカッコいい」と思ってくれればそれはそれでいいんですよ。

RAY　イメージはどうでもいいですよ。ライヴに来ればわかりますよ。

JYUICHI　『DANCE 2 NOISE』を聴いてどういうイメージを持ってライヴに来てくれるかはわかりませんけど、とりあえず「こういうバンドもあるんだな」っていう感じでライヴ観てもらって、いいかわるいかはその後判断してもらえればいいです。

——じゃあ別に初めての音源だからDEEPというバンドを一番理解しやすい曲を選んだというわけじゃないんだ？

ATSUSHI　もちろん自信作のひとつですけどそれはないですね。バンドの全体像って1曲だけじゃわかんないですからね。まぁこれで客層が広がってくれればいいなと（笑）。

——はっきりいっちゃえばそんなに深くは考えてなかったわけだね（笑）？

ATSUSHI　「おいしいな」ってそれだけ（笑）。でも『DANCE 2 NOISE』っていろんな人が聴いてるでしょ？　それでライヴやって客席が真っ黒状態からカラフルになれれば嬉しいな、と（笑）。客席のリボンがハンチングになってくれると嬉しいな（笑）。黒い人たちもいてくれて嬉しいけど色つきもいてくれて、♪色つきの女でいてくれよ♪って（笑）。

——古っるー（笑）。

JYUICHI　タイガース再結成じゃないんだから（笑）。

ATSUSHI　みんなカラフルに着込んで来てほしいですよね。あんまり真っ黒ばっかだとちょっとうんざり気味かなっていう（笑）。

RAY　人種のルツボと化してくれー

——なんや、それ！（笑）

RAY　何派、何派でケンカになったりして（笑）。空いてるんだよね、間が（笑）。「なんか通り道が空いてるなぁ」って（笑）。

ATSUSHI　でもアレだよね、黒い服装で来るよりそういうので来た方がメンバーの目にもつきやすいよね。

JYUICHI　それはちょっと違うんじゃないか（笑）？

——（笑）。でもぼちぼちこれだけじゃなくてちゃんとした音源も出したいよね。

JYUICHI　出したいですねぇ（笑）。

JUN　出したくないわけではないんですけどねぇ（笑）。

——具体的には話は進んでないの？

ATSUSHI　年内には1枚ぐらい出したいなっていう希望はあるんですけどね。曲もたくさんあるしチョロッと出してもいいんじゃないかと思うんですけどね、出し惜しみ系で（笑）。アナログ12インチ5枚セットとかで（笑）。

——でも正直なところいつぐらいになるの？

ATSUSHI　明日とかいって（笑）。

JYUICHI　絶対だな（笑）〜　ひとりでレコーディングして来いよ（笑）！

《バック・ナンバー》■VOL. 6 →RAY 単独インタビュー■VOL. 8 →全メンバー・インタビュー■VOL. 9 →全メンバー・インタビュー

この胸のときめきを、どうぞ！

——そもそもロンドン・ポップって、どういう音楽を言うんですか？

青木：いわゆる第二のビートルズを目指して、イギリスにいろんなバンドが出てきたんですよ。例えばベイシティローラーズとか。結局はポシャったバンドが多いんだけど。ただ、その辺のバンドの楽曲って、すごくわかりやすくてクオリティが高いんですよね。まぁ、バンドでそれをポップに表現したのがロンドン・ポップかなと自分の中では思ってて。例えば一番その言葉に合うバンドと言えば、スレイドとかグラムロック時代のスウィートとか。でも音楽だけでみると、ビートルズであったり、ベイシティローラーズであったり、いわゆるイギリスのポップス全般を指してる言葉ですね。

——確かにラヴミサイルって、ポップさが一番基盤になってるバンドだもんね。

青木：そうです。だからロックバンドと言うよりは、ポップスバンドと言った方が確かじゃないかな。

——でも何でロックじゃなくポップスにいってしまったわけなんですか？

青木：ポップスがすごく好きだというのもあるんですけど。ロックの雑さに自分の中で気づいたというか。要するに、遊び心のある音楽が好きなんですよ。やっぱ音楽をド真面目に取り組んじゃうと、聞いてて楽しめないというか。熱意は伝わるけど、弾まないなというのがあって。でもポップスというのは、確かにオチャラケに捉えられるかも知れないけど、音楽自体には遊び心がけっこう表現されてるし。歌の基本である詞とメロディがダイレクトに伝わってくるでしょ。そういう部分が、僕の心を捉えた原因ではないでしょうか。

——ほんとラヴミサイルを見てると、そんな大上段に構えてバンドを演ってるって感じじゃないですもんね。

青木：でもみんな一人一人になると熱血なんですよ。ただ、表現する上でそれはマズいだろうというだけですから。

——例えばグラムロックに対してのこだわりって、バンドとして強かったりもするんですか？

青木：と言うか、グラム自体がそんなに定義をつけてこだわるような大層なものじゃないと思ってるんですよね。そういうポリシーの類はなくて、とりあえず楽しもうかみたいな感じで、メイクも面白いなみたいな。だからグラムロックって、すごく軽いジャンルだと思うんですよ。ただ、そういう部分ではこだわってると言えばこだわってるかな。でも、真剣にグラムを愛してるとかいう、そういう類のものじゃ絶対にないです。

——いわゆるグラムの本質を突き詰めていくわけじゃないと。

青木：だからそのグラムの本質自体が、僕はインチキ臭いものだと思ってるんです。

廣野：グラムって一見マニアックで決まりきったものなのかなと思いきや、実は自由なんですよね。だから何でもありと言っちゃ何でもありという所はありますよ。

——例えばイエローモンキーって、きらびやかさの中にある頽廃的な感覚にグラムの本質を求めてますよね。でもラヴミサイルって、それとは全く対象的にチープで軽いポップさの中にグラムを求めてるのかなって気もしてたんだけど。

青木：いわゆるデカダンスですよね。だから彼らがデビッド・ボウイとか、いわゆる通の人達に認められた音楽的な所でグラムを捉えてるとしたら、俺らはスレイドとかスウィートというように、みんなにわかりやすい部分で、グラムを捉えてるって感じです。

——確かにラヴミサイルの曲って、聞いてて すごく親しみやすいメロディだし、素直に耳

LOVE MISSILE FIRST KISS

青木秀樹(G)

シングル『涙のラストキッス』そしてアルバム『ファーストキッス』で、遂にメジャーデビューを果たした哀愁の"ロンドン・ポップ"バンド、ラヴミサイル。メンバー廣野麗香（Vo&G）青木秀樹（G）大谷正敏（B）栗田"TAKUTEN"卓展（Dr）の4人。とにかく個人的には大プッシュしたいバンドである。彼らの奏でる、哀愁漂う切ない歌謡ポップを聞いて、何度瞼を濡らしたことか。ホント外見で判断せずに、音を聞いてから判断して欲しい。個人的には絶対支持します。お前ら聞け！

INTERVIEW : TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY : MOTOI OHNISHI

◆デビューシングル「涙のラスト・キッス」が毎週木曜日19:30～20:00TV朝日系全国17局ネット「3匹の子ブタ」のエンディングテーマで聴けるのだ。みんな、要チェック！

に入ってくるもんね。

青木：わかりやすいというのも、グラムロックの基本の一つかなって感じがしますね。

――先程ロンドン・ポップの話をしてましたけど、でもラヴミサイルって歌謡曲に近い要素が物凄く強そうな気もするんですけど。

青木：ただ、一口に歌謡曲と言ってもパターンが全然違うでしょ。僕の場合は70年代の歌謡曲が基盤なんですよ。やはり80年代の歌謡曲になると、メロディに浮遊感が出てきて違っちゃうんですよね。

――いわゆる松田聖子以降は違ってくると。

青木：そうです。だから70年代の地に足のついたメロディと言うか、もうふんだんに泣きの入った臭いメロディが好きなんです。

栗田：歌謡曲と言うと、昔はメロディしか耳に入ってこない作りをしてたけど、今の歌謡曲って、メロディと同時に楽器の音も聞こえてきますよね。だから僕らは、当時の歌だけ聞こえてればいいという、楽曲の作り方に近いのかも知れないですね。

青木：いわゆる詞とメロディがダイレクトに伝わってくるという部分では、歌謡曲にはすごく影響を受けてます。

――だからと言って、決してサウンドをおざなりにするわけでもないし。

青木：おざなりにはしないけど、意識的にシンプルにアレンジを心がけてますね。

――それよりも逆にコーラスやハミングにバンドとしての持ち味を出してこようと？

青木：そうです。それこそが僕の中でのポップスの定義ですから。そのチープなサウンドに熱いコーラスという基本は、絶対に抑えておきたいですよね。

――ところでラヴミサイルって、歌詞の面でも親しみやすい言葉が多いですよね。

青木：まぁわかりやすい詞っていうのが基本ですから。でも詞を書く作業は地獄ですよ。やっぱりラヴソングが基本ですから、表現の仕方にしてもギリギリの使っていい言葉ってありますよね。その臭さって言うか、アイラヴユーという言葉を出すタイミングとか。その辺で時間はかかりますけど。

――それと廣野君の甘ったるい声も、ラヴミサイルの親しみやすさのキーワードになってるのかなって気もしたんだけど。

廣野：こんな声でいやみを言われたら心に残りますよね（笑）。やっぱ普通の人の声とは違うから、耳には残るでしょうね。というか、強引に耳に入ってくるみたいな所があるみたいですね。

青木：やはり、こういう声で歌われるアイラヴユーと野太い声で歌うアイラヴユーでは全くニュアンスが違ってきますから。

――でもラヴミサイルとしては、大衆的な歌謡曲として親しまれたいというのも当然あるんでしょ。

青木：あぁ、それはまたグラムロックの話になっちゃいますけど、やっぱグラムロックというのは大衆の支持がないと存在しないジャンルだと思うんですよ。マニアックじゃないし。そういう意味では支持されたいですね。

――当然ヒットチャート狙いもあるし？

青木：それは結果ですから。ホントは心の中ではそう思ってるけど、それを口に出して言うのは嫌だなと思って。

――そこで今回シングルに「涙のラストキッス」を持ってきた理由というのは？

青木：この曲は自分達の中での王道だと思ったんです。この曲だとラヴミサイルの本質が端的にわかりやすいのかなと思ったし。

――例えばアルバム「ファーストキッス」って、自分達にとってはどういった作品に仕上がったのかな？

青木：俺らはロックバンドの中における究極のポップスアルバムを作りたかったんです。だからポップスバンドじゃなくて、ロックバンドがここまでポップな曲を演るかという面を狙ってるんですよ。

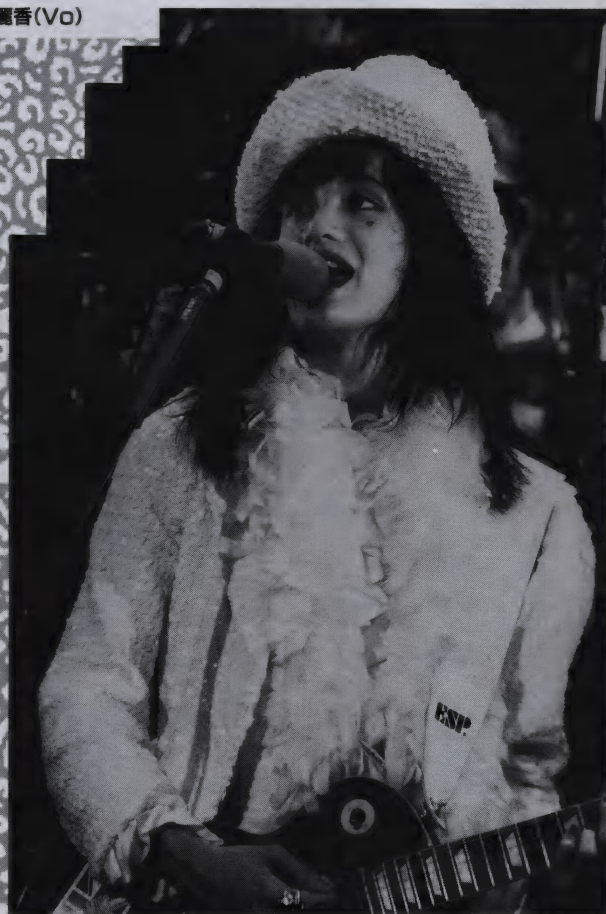
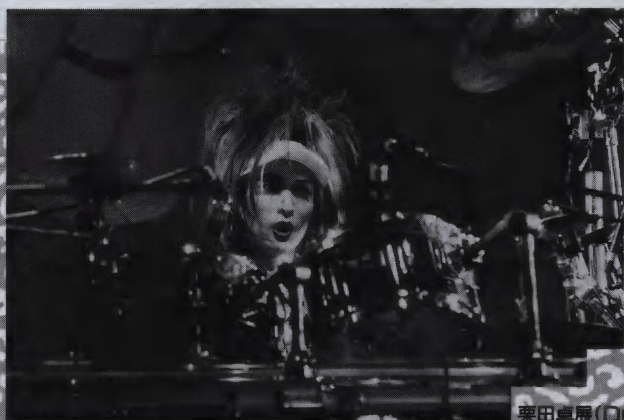
――じゃあ最後にしめの言葉をお願いします。

青木：僕らが一番与えたいのは、この胸をときめきをどうぞってやつですから。

――確かに聞いてて切なくなる曲って、そうそうないもんね。

青木：刹那さって重要な要素ですもんね。ただ明るいだけのポップスって苦手だし。

やっぱ聞いててジワッとくるような曲じゃなきゃ。

廣野麗香(Vo)

栗田卓展(Dr)

大谷正敏(B)

〈ライヴ・スケジュール〉
5月23日＝市川クラブGIO、25日＝京都ミューズホール、26日＝広島ウッディストリート、27日＝博多Be-1、29日＝大阪ミューズホール、30日＝名古屋Electric Lady Land、6月4日＝札幌ペニーレイン24、6日＝青森クウォーター、7日＝仙台BEヨB、17日＝渋谷ON AIR●問＝PCM(☎03・5273・8173)

ARTIST DIAL COMMUNICATION

アーティスト・ダイヤル・コミュニケーション

No.	Artist
101	EARTHSHAKER
102	AION
103	OUTRAGE
104	UP-BEAT
105	あぶらだこ
106	荒木真樹彦
107	ALCARD
108	THE RC SUCCESSION
109	THE ALFEE
110	ANTHEM
111	安藤秀樹
112	THE YELLOW MONKEY
113	E-ZEE BAND
114	石川よしひろ
115	泉谷しげる
116	稲垣潤一
117	井上陽水
118	今井美樹
119	忌野清志郎
120	INGRY'S
121	INFIX
122	THE WILLARD
123	THE WELLS
124	X
125	ARB
126	江口洋介
127	EDITION DE LUXE
128	え　び
129	M-AGE
130	エレファント・カシマシ
131	L.L. BROTHERS
132	AURA
133	横道坊主
134	大江千里
135	大沢誉志幸
136	岡村孝子
137	岡村靖幸
138	奥野敦士
139	尾崎豊
140	小田和正
141	織田哲郎
142	織田裕二
143	オルケスタ・デ・ラ・ルス
144	THE ORIGINAL LOVE
145	KAI FIVE
146	カステラ
147	GARGOYLE
148	KATZE
149	KATSUMI
150	カブキロックス
151	かまいたち
152	KAMIKAZE
153	嘉門達夫
154	COLOR
155	GALAPAGOS
156	川村かおり
157	KAN
158	KIX・S
159	THE KIDS
160	吉川晃司
161	鬼頭径五
162	GWINKO
163	筋肉少女帯
164	KUSU KUSU
165	楠瀬誠志郎
166	久保田利伸
167	窪田晴男
168	グラウンド・ナッツ
169	GRASS VALLEY
170	CRACK THE MARIAN
171	GRAND PRIX
172	グルーヴァーズ
173	THE GREAT RICHIES
174	黒沢光義
175	GEN
176	幻覚アレルギー
177	KENZI
178	小泉今日子
179	児島未散
180	子供ばんど
181	GO-BANG'S
182	小比類巻かほる
183	COBRA
184	米米CLUB
185	THE COLLECTORS
186	GONTITI
187	Zard
188	PSY・S
189	SIGHTS OF LOVE POTION
190	坂本龍一
191	SAKANA
192	佐久間学
193	さくらさくら
194	サザンオールスターズ
195	佐野元春
196	サディスティック・ミカ・バンド
197	さねよしいさ子
198	しいもんきい
199	SION
200	Zi:KILL
201	ZIGGY
202	SHADY DOLLS
203	GENDA×BENDA
204	SECRET GOLDFISH
205	詩人の血
206	16TONS
207	SISTER'S NO FUTURE
208	G.D. FLICKERS
209	シーナ&ザ・ロケッツ
210	Z-BACK
211	GYMNOPEDIA
212	JACKS'N' JOKER
213	JUSTY-NASTY
214	The Shamröck
215	SHOW-YA
216	ZINGI
217	JUN SKY WALKER(S)
218	陣内大蔵
219	ジル・ド・レイ
220	THE SILVER DOGGS
221	SILVER ROSE
222	ZOO
223	SKAFUNK
224	すかんち
225	杉山清貴
226	THE STAR CLUB
227	スチャダラパー
228	STALIN
229	STILL ALIVE
230	THE STREET SLIDERS
231	THE STREET BEATS
232	Strawbelly fields
233	THE STRUMMERS
234	SPARKS GO GO
235	SUPER BAD
236	関口誠人
237	聖飢魔II
238	SEX
239	Sepia'n Roses
240	Z.O.A.
241	SOFT BALLET
242	大事MANブラザーズバンド
243	DIAMOND YUKAI
244	Die in Cries
245	高木完
246	高野寛
247	高橋幸宏
248	竹内まりや
249	谷村有美
250	た　ま
251	CHIKA-BOOM
252	チェッカーズ
253	CHAGE&ASKA
254	CHARA
255	TWIGGY
256	辻仁成
257	DECAMERON
258	TMN
259	T-BOLAN
260	DEEP
261	De-LAX
262	D'ERLANGER
263	Der zibet
264	電気グルーヴ
265	TOY BOYS
266	To Be Continued
267	DOVE
268	東京スカパラダイスオーケストラ
269	東京ヤンキース
270	徳永英明
271	TOPAZ
272	TRACY
273	Dreams Come True
274	NIGHT HAWKS
275	永井真理子
276	中島みゆき
277	中西圭三
278	Nav Katze
279	長渕剛
280	中村あゆみ
281	NEWEST MODEL
282	ニューロティカ
283	人間椅子
284	NOKKO
285	NORMA JEAN
286	野村義男
287	BY-SEXUAL
288	HOUND DOG
289	BAKU
290	BAKUFU-SLUMP
291	BUCK-TICK
292	PERSONZ
293	THE HEART
294	BAD MESSIAH
295	バビロン大王
296	BARBEE BOYS
297	バブルガム・ブラザーズ
298	浜田省吾
299	浜田麻里
300	BA-RA-VA-LA
301	HARRY JANE
302	HARLEM JOKERS
303	PEARL
304	パール兄弟
305	THE BARRETT
306	PANTA
307	PAN PAN HOUSE
308	BEGIN
309	B'z
310	VisioN
311	B#
312	The ピーズ
313	P.J.
314	ピチカート・ファイブ
315	VENUS PETER
316	Bonnie Duck!?
317	VIBRASTONE
318	B-FLOWER
319	氷室京介
320	P-MODEL
321	平松愛理
322	Billy&The Sluts
323	THE PILLOWS
324	PINK SAPPHIRE
325	フィッシュマンズ
326	FAIRCHILD
327	FENCE OF DEFENSE
328	福山雅治
329	THE BOOM
330	THE PRIVATES
331	FLYING KIDS
332	THE BLANKEY JET CITY
333	Flipper's guitar
334	THE BLUE HEARTS
335	PRINCESS PRINCESS
336	HEAVEN
337	BABY'S BREATH
338	THE BELL'S
339	ベルゼルブ
340	BOφWY
341	BO GUMBOS
342	THE POGO
343	布袋寅泰
344	ホッピー神山
345	THE POTATO CHIPS
346	本田恭章
347	槇原敬之
348	The 真心ブラザーズ
349	町田町蔵
350	松岡英明
351	THE MAD CAPSULE MARKET'S
352	松任谷由実
353	マルコシアス・バンプ
354	MALUTI-MAX
355	MR.CHILDREN
356	THE MINKS
357	ムスタングA.K.A.
358	MESCALINE DRIVE
359	MOJO-CLUB
360	THE MODS
361	本木雅弘
362	MORRIE
363	森川美穂
364	森田浩司
365	矢野顕子
366	YAPOOS
367	山下久美子
368	山下達郎
369	憂歌団
370	遊佐未森
371	UNICORN
372	UNI-SEX
373	妖　花
374	吉田栄作
375	米川英之
376	THE RYDERS
377	LOUDNESS
378	RABBIT
379	LAUGHIN' NOSE
380	ランキンタクシー
381	RIO
382	Little Creatures
383	remote
384	りんけんバンド
385	LINDBERG
386	Luis〜Mary
387	LUNA SEA
388	RUKES
389	麗蘭
390	REG
391	LADIES R♂♀M
392	Resistance
393	Rē-selve
394	Replica
395	Les VIEW
396	ROSY ROXY ROLLER
397	LONG VACATION
398	WILD THING
399	WILD FLAG
400	渡辺美里

☎ 0990-308-260

●プッシュ/ダイヤル回線どちらでもOK!

(発信地/東京都杉並区)

この番組は、アーティストのファンのための新しいネットワーク。ファン同志の交流の場としてどんどん利用してね! ただし、他のアーティストの悪口を入れたり、アーティストのプライバシーに関わる情報を入れるのはやめましょう。また、肖像権、著作権に関するものの売買は法律で禁じられています。なお、この番組はアーティスト公認のファンクラブとはまったく無関係です。

総合ガイダンス 999

利用方法				
まず上の番号 0990-308-260 をPUSH!	➡ 発信音のあとに 認識番号 0 をPUSH!	➡ 発信のあとに 好きなアーティストの番号 □□□をPUSH!	➡ 伝言を残す人は 3 をPUSH!	または 伝言を聞く人は 7 をPUSH!

この番組は1分40円の情報料+通話料がかかります。
地域によっては遠距離通話料が加算されますので必ずＮＴＴの料金ガイダンスで確認して下さい。

E-NET 東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂521 ☎ 03-5458-9441

PHOTOGRAPHY:NORIO KAJIKI
HAIR & MAKE:KAZUYUKI NAKAJIMA

新生ラウドネス

LOUDNESS

WELCOME TO THE SLAUGHTER HOUSE

TAIJI(ex-X)、MASAKI(ex-EZO)が正式加入し超強力ラインナップを確立！

日本のロック・シーンに、大きな地殻変動が起きている。しかも、その動きが急速で激しいものであるだけに、その余波で起きる地震の規模も、けた外れに巨大なものとなっている。その震源地ともいえるラウドネスのニュー・アルバム『LOUDNESS』が、ついに完成した。デビューから11年目に突入して、新メンバーのMASAKIとTAIJIを迎えたこのニュー・アルバムが、日本のハードロック・シーンを変えるはずだ！

タイジにしてもマサキにしても俺らにしても、ゴミ４人が集まった。

高崎に会うのは１年ぶりだ。世界でも十分に通用する彼のギター・テクニックとセンスには、誰もがへへーッとなってしまう。10年前にデビューした時は、まだ幼なさが残った"ギター少年"って感じだったのに、今や貫禄十分だ。おまけに、いつのまにかヒゲまで生やしちゃって……オジサン、びっくりしたぜ。開口一番、「星子さん、変わらないですね」って言ってくれちゃって、単純に喜んだ私は「今度、酒おごる」と約束したのである。

INTERVIEW:SEIICHI HOSHIKO (Chief Editor of SHOXX)

──まずはマサキとタイジが正式加入っていうことで、最初この2人をバンドに誘おうと思ったきっかけっていうのは？ まずマサキの方から。

高崎「二井原実がバンド脱退した時に、その時もいっぺん声かけてて。昔から目ぇつけてたっていうか、彼の歌っていうのは日本を代表するハード・ロック・ヴォーカルやと思ってたからね。自分のギターと絶対合うのは、もう予想ついてたし。

たまたま去年の夏は、俺らアメリカ・ツアーやってたんですよ。で、まあマサキがニューヨークに住んでんのは、もう前々から知ってて。1回ジャム・セッションしたん、ニューヨークのなんかきたなーい地下室のスタジオでさ。ほんならもうバッチシていうか、お互いバッチシやと思うたんやな。」

──彼は、全部今回のアルバムの詩とか書いてるんだけど。

高崎「フラット・バッカーの時から彼の詩て、すげえ個性的やと思ってたから。始めはね、もう全部日本語いこうかなとも思うた時あってんやけど、それじゃあまりにもアメリカとかに対して失礼にあたるっていうかさ（笑）。2バージョン作るっていうのもなんかウソみたいでヤだったの、2つの顔を持つみたいでさ。

だからアメリカで出すのも日本語入ったまま出すつもりでおるし。あのバージョンのまま世界どこでも、あのまま出ますよ。」

──その後、長年連れ添った山下君が脱退。

高崎「いろいろ音楽的方向の違いっつうか、ま、10年間やってきて若干価値観の違いとか出てきて。で、彼からの脱退表明みたいな部分もあったし。で、バンド側で考えて、正月の間とかもずっと考えてて。その問題、年越しちゃったんだけどね、去年の暮れから。いろいろ考えて。

別にその時タイジが入るとかそういうのは考えてなかったんやけど。で、うまいことベーシストを探してるバンドと、バンドを探してるベーシストがうまくはまったって感じで、そういう自然なふうにとらえてもらえば幸いなんですが（笑）。」

──個人的な交流みたいのはあったよね。

高崎「それはもうデビューする前からあったんです。XがちょうどSONYと契約結んでレコーディングしてる時ぐらい──その時俺が初めてタイジと会ったんです。

Xのレコーディングしてるスタジオに俺が遊びに行ったんです。その時に初めて知り会うて、そっからキラー・ギターていうのやってるから、ベース使うようになったりして、一緒に飲みに行ったりとか、いろんな交流があって。」

──とっちかっていうと友達関係みたいな感じなんだ？

高崎「うーん、まあ、ええかげんだからそういう感じっていうか、同じバンドのメンバーとしてつきおうていったらええのやけど、タイジはずっと今でも『アキラさん、アキラさん』て言うてるけど（笑）。

実力的にもすげえタイジってきてると思うしな、ホントに。別にXにおったとかさ、彼が日本で有名やからとか、ぜんぜんそんなん関係ないし。Xとか、はっきり言ってあんまり聴いたこともないし。コンサートはまあタイジがいるから何回か見に行ってるけど。キラー・ギターの人間として（笑）。

タイジて、若いのにファンキーなセンスとかもあるしね。けっこうこれから楽しみなミュージシャンと思うんだよな。可能性すごいあると思うし。」

──実際にレコーディングしてどう、このメンバーで。

高崎「思った以上にスムーズに運んで。今までレコーディングいうたら、大体予定より押すのが常やってんけど、今回は大体予定通り終わって。いつもより2〜3週間早く終わったって感じで。」

──オリジナル・アルバムっていうと何年ぶりになるのかな？

高崎「前のはリメイクっつうのもあって、それを除いたらオリジナルとしては10枚目ですかね。前作のリメイク入れたら11枚目だけど。全曲新曲いうのは『ソルジャー・オブ・フォーチュン』以来やから、けっこう久し振りになりますね。」

──その辺の期間ていうのはかなり曲作りにも影響したのかな？

高崎「曲作りにももちろん影響してるし──自分の中ではたぶんちょっとずつ自然に変化してってると思うんやけどね。変化っつうか成長していってると思うねやけど、結局聴く人にとったら、その変化ていうのが突然──3年間出てなかったものがいきなり出てくるわけやから、『お、えらい変わったなぁ！』と思うかもしれへんけど、自分の中ではこれはもう自然に毎日起こってることだから。積み重ねやから。」

──自分でプロデュースしてるけど、それは何か意図があったの？

高崎「まあ、誰か有名なプロデューサーとやるのももちろんええことやと思うねんけど、今回もできるだけ早く仕上げて、早い時期に出したかったていうのがまずあるし。で、自分の楽曲やし自分のバンドのことは自分が一番ようわかってるからさ、俺がやるのが一番手っ取り早いし、ええやろっつうことで。」

──混乱とかはない？ いわゆるミュージシャンとしての高崎晃と、プロデューサーとしての高崎晃の間の混乱というのは。

高崎「混乱ていうか、どっちかいうたらプロデューサー的に物事を考えることの方が今回は多かったかな。ただ今までやったら自分のギター・スタイルとか、ギターのことをずっとレコーディングの終わりの方になってきたらカッと入って考えるところを、やっぱりずっと最後まで全体を見通して考えてるから、ある種、ギター・パートでラフな部分とか残ったりしてんねんけど。まあ、そやけどそんなんは微々たるもんやと思うからね。

なんか全体を考えれるようになってきたかな、ようやく今になって。」

──アルバム・タイトルが『ラウドネス』っていう、えらいシンプルに…。

高崎「シンプルでしょ。」

──シブいっていうか、なんかそこに意気込みを感じたんだけど。

高崎「バンド名をそのままアルバム・タイトルにするっつうのは、今までなかったし、ある意味でとっといたっていうのもあるのやけど。

普通やったら、デビュー・アルバムがそうなる場合多いけど、俺らの場合はデビュー・アルバムは『誕生前夜』ていうタイトルで、ずっと使ってなかったし。今回のアルバムの音聴いて、それで行こうという気になりましてね。」

──生まれ変わったっていう意味？

高崎「生まれ変わったっつうか──別に変わったとはぜんぜん思わないんだけど。もちろん今までのラウドネスの核っていうか、元は何も変わってないと思うのね、自分の中で。

ただその回りのいろんな装飾っていうか、そういう部分が変わってきてるから、聴いた感じ、そう感じるのかもしんないけど。核となってる部分はなんにも変わってないと思うんだよね。」

──今回えらくヘヴィーになったっていう感じ。いい意味でね。

高崎「今回プロデューサーでやるていうことになって、まずドンカマを使うのをやめたというだけで、役割はかなり果たしてると思う（笑）。ほかのプロデューサーやったら、たぶん樋口っつぁんとか『いや、やっぱり使うー！』とかて言うてたかもしれへんし（笑）。

ドンカマ使ってないっつうのがそういうヘヴィーさていうか、ラウドネスののりが出てきたっていう意味で、すげえ大きいと思うね。」

──それは狙いでもあったわけ？

高崎「もちろんそうですね。あと、チューニングを半音下げたんですよ。ギターやベースのチューニングね。全部がダランとなってね、それがヘヴィーさを出してる一因でもある。」

──その2つが一番の影響で、ああいう。

高崎「それはだいぶ影響してると思うね。具体的な例で挙げるとね。あとはもう、精神面でやっぱりみんな成長した部分もあるし。はたから見たら休んでたように思うかもしれんけど、いつでも俺らは毎日毎日、自分らの中で活性してたっつうか、どんどん成長してた部分ていうのはあると思うから。

だから、久しぶりに聴いた人とか『あれ、なんでこうなっちゃったんだ!?』とか思うかもしんないけど、それってごく俺らにとっては自然な変化やったと思うし。聴いた感じ、絶対今までより極悪な音してると思うんや。今までのラウドネスて、もっと健康的やったと思う、どっちか言うたら。完璧さばっかり追及してたし。そういう部分が完璧に変わっちゃったかもしんないね。」

──それは何かをきっかけに？

高崎「結局今の俺ら4人ていうのは、ある部分みんな捨てられてる部分ていうのがあるのよね、マネージメントなりマネージャーなりにね。タイジにしてもマサキにしても俺らにしてもね。そういうゴミ4人が集まって（笑）、それでまたこれを作ったたっつうところに、すごい部分があると思うな、今回。

だから俺らこれからもずっとやっていける自信があるし。」

──今の言葉はすごいな（笑）！ タイトルに使っちゃお。

高崎「偉大なゴミやと思うよ、この4人は。」

──意気ゴミが伝わってくる（笑）。じゃあ、今度チッタ行きますからね。2デイズであっという間に売り切れたらしいけど。

高崎「そうですね。全部タイジのファンらしいから（笑）。どういうお客さんが来るのか、自分らでもぜんぜん読めないんですよね。

けど、今のメンバーになって最高やと自分らで思うてるから。がんばりますよ。」

AKIRA TAKASAKI (g)

MUNETAKA HIGUCHI (ds)

みんなビックリするんじゃないのかな。これが音楽だー！ってかんじでね（笑）

自他共にみとめるトップ・ドラマーの一人である樋口さん。メンバー・チェンジをして間違いなく日本最強のヘヴィメタル・バンドとなったラウドネスについて、そして一時はテレビのゴルフ番組に出るまで熱中していたゴルフについて聞いてみた。いつもながらの自信のある発言は凄いが、その確かな実力と豊富な練習に裏づけされたものだけに、とても説得力があった。

INTERVIEW:KAZUHARU TSUKUSHI

——MASAKI君加入のいきさつから伺いたいんですが。

樋口　「アメリカ・ツアーを去年の夏にやってて歌が全然よくなくて、あとライヴ5本残ってたんですけど急拠キャンセルしてマイクをクビにしてね。でMASAKIがNYに住んでいるというのを聞いてたんで、日本とかに電話して連絡先を調べてもらって彼に電話をしたんですよ。それでNYで一緒にセッションして彼になったわけです。」

——じゃあマイクがだめとなった時、メンバーの頭の中にはすぐにMASAKIのことが浮かんだんですね。

樋口　「ええ、まあ昔二井原からマイクに変わる時も誘ったんだけど、まだその頃はEZOがあって、そっち頑張りたいと断わられてね。僕らが今回電話した時はタイミング良くEZOが解散してたんですするすると決まりました。」

——かなり昔から一緒にやりたかったんですね。

樋口　「昔彼らがフラットバッカーをやってた時から、凄いヴォーカリストが出てきたなと。ずっと前からどうしてもラウドネスに入れたかったんですよ。」

——念願かなったと。

樋口　「そうですね。3度目の正直ゆう感じですね。」

——TAIJI君なんですが。山下さんの脱退は突然でしたよね。

樋口　「よくある音楽的な違いというやつですね。ラウドネスに対するスタンスの違いというか。

　TAIJIはね、僕らが東南アジアツアーにいってる時に遊びにきててね。最初はタッカンと仲がよくて、二人で酒飲みいったりしてて、その頃あんまり口きいたこととかなくって。で、今回山下がやめるってなった時にTAIJIがエックスをやめるっていうのを聞いて一緒にやろうかと。色々と噂が流れてますが、たまたまタイミングが合っただけで引き抜きとかじゃないです。僕なんてTAIJIと一度も合わせた事なかったし、だけどタッカンが実力は保証するというのでね。オーディションもしませんでした、今回。

　彼は東京ドーム終ってからうちのデモテープ聞いて、いきなりレコーディングですよ。でもなぜか僕とあってね。なんでかなとか思ったんだけど、やっぱり昔から(TAIJIが)ラウドネスのコピーしてたからじゃないでしょうか言うてね、みんなで笑ってたんだけど。」

——ドラマーにとってベーシストが変わるのは一大事だと思うんですが、音も出さずに決めてしまったんですか。

樋口　「そのへんはもう（実力は）一緒にやる前から分ってたから。大体しゃべったらどの位弾けるのか分るしね。」

——樋口さん自身に変化とかはないですか。

樋口　「新しいバンドになったという事でみんなそれぞれ変化していると思いますよ。TAIJIは昔ギターだったからテクニックあるんですよね。ベースってバンドの中でわりと地味じゃないですか。もっとプレイの中で目立っていいと思うんでね、毎日『もっと弾けー！』と言ってます。新しいアルバムでもわりとハデだと思うし。」

——新しいアルバムではポップな曲やバラードの入いってない本当にハード&ヘヴィな物になりましたが。

樋口　「今回は自分達だけでやったんでね。外のプロデューサーを使っていないんで。」

——外部のプロデューサーをつけるとポップになりますか。

樋口　「やっぱりプロデューサー連中はアメリカのマーケットを凄く意識するよね。だからラジオでかかる事を意識して作りたがるというか染めたがるわけですよ。だから今回はそういうのじゃなく自分らの思ったものをストレートに出すってやつで。」

——今迄はマーケットを意識して作ってたと。

樋口　「いや、僕らはしてないですよ、彼らがね。やっぱり商売やし。」

——今回は高崎晃プロデュースという事で、外部の人を呼ばなかったのは初めてですか。

樋口　「ラウドネスプロデュースというのは日本国内だけで出してた頃にはあるけど。アメリカのレコード会社は有名所のプロデューサーをつけたがるのよ。」

——売れる一つの条件ですかね。

樋口　「というより発売する一つの条件やな、人がつくということは売れても売れなくても人のせいにできるから。今回はそういうごちゃごちゃした事はおいといて、自分らでやってみたかったんです。」

——アメリカでも日本でも硬派なHMシーンは下火になってきてると思うんですが、そんな中でスーパーバンドしてやっていくプレッシャーはありますか。

樋口　「全然ないね。只、ラウドネスは3年間日本ではほとんど活動してないし、ちょろっと武道館でやった位で。フルアルバムも出してないし。ベストとかしか出してないしね。ま、シーンはそうなってるかもしれないけど自分らが今年活躍しますから日本のシーンは変りますよ。やっぱり世の中、本物志向にどんどんなってると思うんで。そのへんは自信ありますね。それにアメリカもね、メタリカが一位になったりして状況は少しずつできてると思うな。」

——日本ではビジュアル系のバンドが最近は、増えてきてますが。その辺はどう思いますか。

樋口　「何とも思わない。ラウドネスもビジュアル面でも一杯でるしね。それに音とかテクニックがそなわっているから怖いもんなしやね。」

——かなり自信がありますね。

樋口　「自分のやってる事にはいつでも自信がありますよ。全員、メンバーは百戦練磨だし本当に日本選抜メンバーだと思うし。オリンピックに出るつもりで頑張りますよ(笑)。」

——うん、ファンは凄い期待してますよね。ひとつくらいアメリカで成功する日本のバンドが欲しいと思ってるし。

樋口　「僕らの最終目的はアメリカで成功する事です。だから来年はアメリカへ行きますよ。ラウドネスはビルボード64位迄行ったことあるんやけど、やっぱりトップ40に入りたい。ただね日本を休みすぎてるからね。ピシっと日本をやろうと。全国ツアーもン年ぶりやしね。今回初めてライヴハウスでもやるし。」

——樋口さんはライヴハウス初めてですか。

樋口　「僕はヘヴィメタル・スーパーセッションというのを昔に鹿鳴館でやったきりで、ラウドネスとしては初めてですね。」

——なぜ今さらライヴハウスなんですか。

樋口　「久し振りに日本でやるし、メンバーも2人変わったし、それを日本のファンのみんなにみてもらいたいと。半分シャレもあるんですけどね。そんな長い時間演奏もしないけど。ファンのみなさんとのふれあいを大事に！ゆう感じでさ(笑)。おもしろいと思うよ。ライヴハウスだと酒も飲めるしね。客の盛り上りが見えるしね。大きいホールだと見えないからね。もちろん僕らは飲みませんが。」

——ところで最近はゴルフはしてますか。

樋口　「今迄はね、時間があるとゴルフばかりしてたけど最近は時間がないしね。アメリカのミュージシャンてねゴルフばかりやってんのよ。アリス・クーパーとかグレック・ジェフリアとかシングル級の腕前やし。モトリーとかラットとかね。向うではロックグループチャリティーコンペというのがあるんです。で、それに出たいと思って始めたんだけど、結構うまいところ迄いったから…今迄の最高が35、39の74なんですよね。（ゴルフを知らない人には分からないと思うがこれは凄い成績です）そこ迄に2年で行ったからあきちゃってね。日本ではジャンボ尾崎のファンでね。そのジャンボ軍団てのがあるんですけど、ジャンボ軍団のあるプロの結婚式に招かれて行ったら、ジャンボ尾崎の息子に会ってね。

　その子はフロリダにゴルフ留学してて、『樋口さんですか一緒に写真とってくれませんか』言われて、何で？と思ったら『MTVみてました』とか言われて、僕は僕でジャンボ尾崎のファンでその息子にそういう事言われてうれしかったですけどね。」

——でも、そのゴルフも最近はやってないと。

樋口　「最近は忙しくてやってませんね。今まわったらハーフ50くらいじゃないかな。休みなしだしね。メンバーと会ってる事が多いですね、ミーティングを兼ねてね。」

——では普段はどんな音楽を聴いてますか。

樋口　「普段はイージーリスニング。シャーデーとか、結構大人しめですよ。」

——日本のHMとかは

樋口　「全然。興味ないし。メタリカとかも持ってないしね。ただメンバーが聴いたりしてるのが耳に入る程度ですよね。」

——ライヴを見に行ったりはしますか。

樋口　「ライヴも全然いかへんな。」

——じゃあ今はラウドネス以外の事はあまりしてないんですね。

樋口　「ないですね。僕こり性でね、ゴルフやってた時も毎日打ちっぱなし行ってたからね。それで、手から血が出るまでやってましたから。そのこり方をね、今度はまたドラムに向けようと思いましてね。今迄ドラムのことってパールとかローディーが全部やってくれてたんですけど、全部自分で一度気にいったらずーっと同じの使うタチだったんだけど、又一から決めていくという。だから今ドラムにこってますよ。セッティングから何から。」

——それじゃあ今は音楽がすべてだと。

樋口　「そうですね。コンサートもね、お客がくる限りやりつづけようと思って。休んでた分をとり戻すつもりでね。それに今回のツアーではラウドネスを初めて見る人も結構いると思うんですけど、みんなビックリするんじゃないのかな、これが音楽だーってかんじでね。(笑)。」

日本に帰って来たら、頭の大きなミュージシャンが多いんでビックリしたな（笑）。

NYに住んでアメリカで挑戦し続ける、日本最強のヴォーカリストMASAKI。彼に、EZO解散からラウドネス加入までのいきさつと、NY生活を聞いてみた。

ライヴやレコードで接する彼はかなりコワオモテな感じなのだが、実際はナイーヴで大人しい好青年といった感じ。本人も、回りの人にライヴだと人格が変るねとよく言われるといっていたが……。

INTERVIEW:KAZUHARU TSUKUSHI

――EZO解散からラウドネス加入までのいきさつについて話してもらえますか。

MASAKI　「EZOはね、みんなの音楽性がバラけちゃったのと、それぞれが私生活でもそれまで一緒に住んでたんだけど、別々に離れて暮すようになって、関係まで壊れちゃって……。」

――それはいつ頃？

MASAKI　「2年位前の春かな。それで音楽だけで食べていけなくなって。NYのアベニューBにある洋服屋で働いてたんですよ。ものすごく小さくて汚ない所。それが2年位続いて、その間もギタリストとか見つけてね。」

――それはアメリカ人の？

MASAKI　「そうです。ただバンドを結成する迄にはいたらなくて。で、去年の7月にタッカンから『何やってんねん』て感じで電話があって『いっぺんジャムってみないか』って。ラウドネスの曲とEZOの曲、何曲かやって凄く感触良かったんですよ。ラウドネスの曲って何か俺が思っていた以上にタイトだったし。年期物って感じでさ。即席でジャムやってたときに自分と彼らの違いというのが感じられて、とても気持ち良く入っていけて。その夜にはもう自分がラウドネスに入ること決めてましたね。」

――その後すぐ曲作りを始めたのですか。

MASAKI　「そう。テープを一本もらって、タッカンがギター一本でリフばっかりガンガン弾いてるやつ。それ聞いて自分なりにイメージ膨らませて。で、こっちへ帰ってきて全員で合わせてみてほとんどカタチになってた。」

――レコーディングはいつ頃から始めたのですか。

MASAKI　「1月から日本で始めて、ヴォーカルは2~3月にNYで録りました。俺の友達でプロデューサーやってるジョディグレイて奴がいて、そいつと一緒に詞とか書いたりしながら。」

――日本語の曲も2曲入っているよね。

MASAKI　「今回日本に帰ってきたら日本語が新鮮に感じちゃって。なんか自然に出て来たんですよ。」

――アメリカ発売する時には英語で歌いなおすとかは。

MASAKI　「いえ。このままです。まあ、外国で日本語の歌が流れるのもおもしろいかなと思って。その辺深く考えてるわけじゃないです。」

――詩の内容とかは？

MASAKI　「公害とかテーマにした曲もあるし。スローターハウスって曲ではアニマルテスティング(動物実験)という、向うのニュースで見たんだけど動物を使ってガンの活療の実験をしたりしてて、そんな事をしていいのだろうかと思ったことを書いたり。わりとヘビーデューティーな物が多いですね。」

――詞を書くスタイルに変化は、

MASAKI　「昔から変ってないですね。その場その場でわき上がるインスピレーションを基にしてるというスタイルは。」

――詞とメロディのバランスは。

MASAKI　「それはフィフティ・フィフティですね。どうしても詞の方が時間がかかりますけど。最初はメロディから書くんですよ。あとコーラスとかでビルドするようにツイストさせたりとかね。」

――詞で影響受けた人とかいますか。

MASAKI　「フラットバッカー時代は日本語でやってたんで遠藤みちろう（スターリン）とか、洋楽だと、ブラック・サバスとかレインボーとかかな。」

――英語の詞を書くのは大変だと思うんだけど、どうやって英語は勉強したの。

MASAKI　「英語はね、向うで家庭教師が付いててくれて、マンツーマンでずっと教えてもらって、あとはバーに行ったり友達と会ったりとかライヴ行ったりで日常会話ならなんとか。」

――でも日常会話と英語の歌詞では全然違うでしょ。歌詞だと韻をふんだりしなくちゃならないだろうし。

MASAKI　「うん。それはジョディと一緒にやったり、いろんな曲の詞とか見てね、なるほどこうするのかとか。あとライミング合わせる辞典みたいのが向うにあるんですよ。例えばNIGHTとICEとか。おもしろいですよ、やりだすとパズルみたいでね。それが合ったりすると気持ちいいし。」

――もう慣れた？

MASAKI　「まだまだ勉強たりないと思うけど、慣れたといえば慣れたかな。」

――ところでEZOでは、アマチュア時代から一緒にやってきて年令も同じ位だし凄く仲のいい友達がバンドを一緒に初めたと思うんだけど、ラウドネスは全然違うよね。

MASAKI　「確かにEZOはそうだったけど、皆で一緒に住んだりとかベタベタくっつきすぎてダメになったというのもあったしだけど、今のバンドも今のところ何の違和感もないし。プライベートはプライベートで確立してね音楽やる時はワーッと集まるという。それにこれから家庭的な部分は出来てくると思うしね。別にその辺のことは全然気にしてないですね。」

――日本で一番歴史もあって、頂点にたってるHMバンドに入ったわけだけど。

MASAKI　「んー、あまりプレッシャーみたいのは無いんだけども、たくさんの人に見にきてもらいたいな。それにフレッシュな気持ちですね。新しく生まれ変わった様な。」

――MASAKI君自身、久し振りの日本でのライヴだと思うんだけど。

MASAKI　「EZO時代は一度もやってないからね。」

――日本の状況も変ったと思うんだけど。

MASAKI　「日本に帰ってきたら、頭の大きなミュージシャンが多いんでビックリしたな（笑）。まあその辺も全然気にならないですね。アメリカだろうが日本だろうが、それこそヨーロッパ、中国でもスタンスは同じですから。MCが日本語になる位かな。」

――MASAKI君から見た他のメンバーはどんな人物かな。

MASAKI　「樋口さんは凄く奥行きのある人、お酒とギョーザが大好きで(笑)。この世界が長いなって感じで。集中力も凄いし。タッカンはやっぱりクリエイティヴで、するどい面持ってて……。」

――TAIJI君は？彼のことはいつ頃知ったの？

MASAKI　「最初はキラーギターのカタログ見て、何だコイツは外タレか（笑）とか思うほどインパクトある奴で。実際会ってみると、やっぱり存在感があった。ベース弾きだすと、もっとそれを感じる。普段は大人しくてあまり口きかないんだけど、凄いベーシストだと思う。」

――Xを見たことは？

MASAKI　「無いです。レコードは聞いたことあるけど。一回NYに皆きたときに、まだEZOある頃ね、会ったことあるだけ。あいつ、そん時も大人しかった（笑）。」

――NYの家はどうするのかな。

MASAKI　「そのまま。あくまで住むのはNYと。これからアメリカでの活動もあるし。この間、NYでヴォーカル録りの時タッカンも来てね、ギターのオーバダブもちょっとやってたんですよ。で彼もNY気に入ってたみたいですし。」

――じゃあラウドネスのアメリカの活動拠点もLAじゃなくてNYだと。

MASAKI　「それはまだ決ってないですけど。まあ俺がいる限りNYに来るんじゃないですか。」

――MASAKI君はLAじゃなくてNYがいいと。

MASAKI　「俺はLAは大キライ。何もない。一日いたら疲れる。(アメリカを)色々回ってみんなそれぞれ好きだけど、LAは嫌い。」

――なぜNYなのかな。

MASAKI　「みんなの生きてくパワーが凄い。東京の人もいろいろ考えてると思うけど、もっとシビアな街ですよね。日本人みたいに全然やさしくはないんだけども、好きなんですよね。」

――NYではどんな生活を、

MASAKI　「犬をかってるんですよ。だから犬の散歩いったり、自転車乗ってブラブラしたりとか。あんまり出歩かないですね。犬と公園行く位だな。」

――普段はどんな音楽聞いてるの？

MASAKI　「サウンド・ガーデンとかアウトレイジとか……あーいうバンドに売れて欲しいな。」

――普段からHM聴いているんだ。

MASAKI　「聞いてますよ。でも最近いいの無いなあ。アリスインチェインズとか好きだったけど、あとは自分バンドのテープかな。」

――ソフトなのはあまり聴かないのかな。

MASAKI　「聴いてる時期もあったんですけどね、ブライアン・フェリーとか。只、はっきりしねーとか思って(笑)。あとヴァン・ヘイレン好きになった、ずっと嫌いだったんだけど、この前のアルバム聴いたら良かった。」

――へぇー、嫌いだったんだ。

MASAKI　「うん。エアロスミスもアメリカ行く迄嫌いだったし。キッスは今でも嫌いだもの。昔からジューダスとかビリー・アイドルとか、恐っぽいものが好きだった。」

――それじゃあ、ポップなのを自分が歌うとかは考えもしない？

MASAKI　「さまにならないでしょう。そういうボン・ジョヴィみたいなのは、その人にまかせました一って感じで。タマに聞く分にはいいけどね。ネルソンとか（笑）。」

――最後に日本のファンに何かあったら一言どうぞ。

MASAKI　「ライヴ見に来て下さい。」

――それだけでいいの？

MASAKI　「いいです（笑）。」

MASAKI YAMADA (vo)

TAIJI SAWADA (b)

とにかく自分というものを出してみて、ぶつかってやろうと思ったよ。

1月7日、東京ドームで見せた涙を最後に、Xを離れたTAIJIが戻ってきた。しかも、彼が音楽を始めるきっかけとなったバンドのメンバーとして……。
　アグレッシヴかつテクニカルなベースで、かつて憧れていたミュージシャンをあおる彼が、Xから脱退して初めてくちを開いたのだ。そこには、XのTAIJIではなく、沢田泰司というひとりの男が立っていた……。ここから、その男の新しい歴史が始まる。

INTERVIEW:YOSHIYUKI OHNO

——ひさしぶり。元気だった?

泰司　「ウン、元気だよ。」

——泰司が昔からラウドネスを好きだったのは知っているけれど、いつ頃から好きだったの?

泰司　「中学3年生のとき。でも、もともと、レイジー（高崎晃と樋口宗孝がラウドネス結成以前に在籍していたバンド）の最後のスタジオ・アルバム『宇宙船地球号』っていうのがあるでしょう。あれが好きだったのね。高崎晃っていうギタリストが好きで……。
　それから、中学3年生の頃にラウドネスが浅草国際劇場でデビュー・コンサートをやって。」

——それは観に行った?

泰司　「観には行かなかったんだけど、それよりも後になってやった、渋谷公会堂でのコンサートには行ってたんだけどね。」

——それはラウドネスがセカンド・アルバムをリリースしたときにやった「DEVIL SOLDIER TOUR」だね?

泰司　「そうそう。二井原さん（ラウドネスの初代ヴォーカリスト、現デッド・チャップリン）が羽のついた衣装を着ていてね。」

——どうして、レイジーやラウドネスが好きだったの?

泰司　「最初、レインボーとかディープ・パープルとか聴いていて。日本にはヘヴィ・メタルってなかったでしょう、メジャーでは。レイジーはヘヴィ・メタル宣言をして、『宇宙船地球号』で、それに近い音を出していたから。そのときから、気になってたんだよね。」

——じゃあ、ラウドネスがデビューしたときって、ショックだった?

泰司　「うん。日本であれだけのレベルでやるっていうこともショックだったけれど、まず曲が違う。」

——ラウドネスのデビュー・アルバム『THE BIRTHDAY EVE〜誕生前夜』（81年11月）は、洋楽的だったよね。

泰司　「うん。それで、魅かれたんだ。それまで、洋楽も邦楽も聴いていたんだけれど、洋楽は洋楽って分けて聴いていたんだ。その中で、いちばん洋楽に近かったっていうのかな。」

——その頃、泰司はギター少年だったんだよね?

泰司　「そう。リッチー先生（ディープ・パープルのリッチー・ブラックモア）と並んで、高崎晃はスゴイと思った。」

——それで、あのギターを買ったんだ?

泰司　「ランダム・スター（当時、高崎晃が愛用していたESPというメイカーのギター）のこと?買っていたよ（笑）。赤いボディにフロイド・ローズ（トレモロ・アーム・システムの一種）が付いているタイプのヤツ。その頃、フロイド・ローズがまだ出たばっかりでさ。」

——もしかして、タッカン（高崎晃）と同じように、ボディにミラーが貼ってあるヤツ?

泰司　「ミラーは付いていなかった。ミラーが付くと、5万円高くなっちゃうから、買えなかった（笑）。」

——樋口宗孝から聞いたんだけど、タッカンのギターをコピーしていたんだって?

泰司　「うん、とにかく全曲やってたよ。『DISILLUSION〜撃剣霊化』（84年1月にリリースされた4枚目のアルバム）が出るまでは、ほとんどコピーしていた。」

——それはスゴイな。完璧に弾ける?

泰司　「今はもう、完璧に弾けないけれど、昔は弾いていたよ、それなりに。」

——でも、だんだん自分でもバンドをやるようになっていったわけでしょう?

泰司　「なっていったよね。」

——バンドをやっていて、ラウドネスっていうのは、どういう存在だった?

泰司　「世界に出られる第一線のバンドっていうイメージだった。そのあとで、44マグナムとか、ヘヴィ・メタル・インディーズがどっと出てきて、日本のクラブ・シーンが確立されたとき、ラウドネスはすでにそれよりも上をいっているっていう感じだったからね。」

——日本でヘヴィ・メタル・ムーヴメントが起きた83〜86年頃には、ラウドネスはアメリカに進出していたからね。
　でも、実際に自分でバンドをやっていると、そういうラウドネスを見ていて、〝負けるものか〟って思わなかった?

泰司　「それはあったね。でも、ずっと一線でやっているのを見て、はげまされるっていうか……。ラウドネスが日本のヘヴィ・メタルを引っ張っていたものね。」

——でも、一般の人からすると、ラウドネスがアメリカに行っちゃっている間、ラウドネスのことが見えなくなっちゃうこともあったみたいだね。アメリカで、ポイズンやシンデレラみたいな人気バンドが、ラウドネスのオープニング・アクト（前座）をやっていたとか、モトリー・クルーと一緒にマジソン・スクエア・ガーデンでコンサートをやったっていう歴史的な事件よりも、松田聖子の失敗したアメリカ進出のほうが、話題になるんだからね。

泰司　「オレはその時期、いったいどうしてるのかなとは思っていたけれど、きっとがんばってやってるんだろうなって思っていた。どんどん、ひっかきまわして欲しいなって思っていたし。」

——実際にラウドネスのメンバーと初めて会ったのは、いつ頃だった?

泰司　「Xが『BLUE BLOOD』のレコーディングをしているときで、アキラさんがキラー・ベースのモニターの話を持ってきてね。そこで初めて、会話をしたんだ。
　実は、渋谷公会堂でラウドネスがコンサートをやったとき、リハーサルのときに、オレはサインをもらったことがあるの（笑）。」

——ホントにラウドネスのことが好きだったんだね。この前、オレがスタジオに行ったとき、泰司がベースのピック・ガードかなにかに、頼まれてサインしていたじゃない。

泰司　「してたよね（笑）。」

——あのとき、〝LOUDNESS・TAIJI〟って書きながら、「このサインを書くのを、夢に見ていたんだよね」って言っていたけれど、昔から大好きだったバンドに入れるヤツなんて、めったにいないよ。

泰司　「そうだよね。普通なら、入れないよね（笑）。でも、入ったからうれしいっていうような次元じゃなくて、これからはXでやってきたのとは、ぜんぜん違うことをやっていくわけでしょう。アメリカに行ったりして、初めての経験とかするだろうし。そういうことにも、打ち勝っていかなくちゃなって。」

——プレッシャーがある?

泰司　「プレッシャーっていうよりも、興奮っていうか。そっちのほうがデカイんだよね、今は。」

——それで、タッカンから、キラー・ベースの話が来たとき、うれしくなかった?

泰司　「うん。オレそのとき、こ〜んな頭していてさ。」

——そこから付き合いが始まって、『BLUE BLOOD』が出て少しした頃、ラウドネスの東南アジア・ツアーに、泰司は同行したよね?

泰司　「アキラさんがオレに、『一緒に行かないか?』っていったからさあ（笑）。オレもヒマだったし。」

——そのツアーのときは部外者だったわけだけど、どんな感じだった?

泰司　「なんかこう、ゾクゾクした。韓国でやったときだけど、韓国の人たちって、ヘヴィ・メタルを聴かないでしょう。どうやってのっていいのかも、わからないっていう感じで。だから、最初のうちは客が〝なにをやっているんだろう?〟っていう感じで見ているんだ。でも、そのうち、自然に身体が動いてくるようになってさ。暴れているヤツなんかも、だんだん出てきてさ。
　ラウドネスが、何も知らないヤツらに、ガーンと叩きつけて、それでリアクションが返ってきたのを、まのあたりに見たんだよね。
　〝やっぱり、これが世界に出られるバンドなんだな〟って思ったよ。」

——そのツアーに同行した後、Xもだんだん人気が出てきたから、泰司もいそがしくなっていったよね。そんな中で、ラウドネスとの付き合いはどうなっていった?

泰司　「ちょくちょく家に遊びにいったり、飲みに行ったりしていて。1ヵ月くらい会ってなくても、次に会ったときに前に別れたときと同じテンションで会えるっていう感じで。いつ会っても、フラットな状態っていうか一緒にいてもぜんぜん疲れないし。すごく一緒にいたいって思えるような、そういう感じで付き合っていたんだ。」

——タッカンの家に遊びに行くと、一緒にギターを弾いたりするの?

泰司　「〝泰司もこんなの、やってみい〟って、ギターでタッピングのフレーズを弾いたりして。だからオレ、ベース・ソロにタッピングを入れたりしてたんだよ。」

——去年の11月に、都内某所で、タッカンやMASAKIとセッションしたでしょう?

泰司　「アキラさんとはその前にも、セッションをしたことがあったけれど、MASAKIさんとやったのは、そのときが初めてでね。かなり弾きやすいっていうか、やっていてなにかが伝わってくる感じだったよ。」

——そのとき、ドラムは誰だった?

泰司　「アディクトっていうバンドのTAKAっていうヤツで、男闘呼組のバックをやっているドラマーなんだ。」

——その時点で、泰司はXにいたわけだけれど、ラウドネスで一緒にやりたいとは思わなかった?

泰司　「入れるなんて思ってもみなかったからさ、正直な話。だから、そのときは〝いい経験したなぁ〟って思ってた。」

——そのセッションでは、どんな曲をやった

の？

泰司　「ラウドネスの「CRAZY NIGHT」と、E・Z・Oの昔の曲とか、レッド・ツェッペリンの曲。すごく楽しかったよ。」

――10月にエクスタシー・サミットを武道館でやったとき、泰司のセッションでやったのが、アリス・イン・チェインズとか、カルトのカヴァーだったよね。泰司の洋楽指向が、そこにすごく出ていたと思うんだ。ラウドネスも洋楽指向だから、そういうところで意見が合うんじゃない？

泰司　「それはすっごくいえるよね。ターゲットが広いんだよね、ラウドネスは。日本の国内だけで、〝こうやれば、こうやって売れていくだろう〟っていうような考えは、まったくないから。すべて、考えていることが音楽に向くんだよね。そこらへんが、すごく共感できる。」

――ところで、正式にXから脱退したのは、いつだったの？

泰司　「去年の12月31日。」

――でも、7日の東京ドームまでやっていたと。それで、ラウドネスに誘われたのは、いつのこと？

泰司　「ドームが終わってからだった。」

――そのとき、どう思った？

泰司　「そのとき、オレにできるかなって思ったんだけどね。」

――どうして？

泰司　「けっこうスケジュール的にも、せっぱつまっていたし、精神的にもつらいものがあったし……。」

――泰司自身が？

泰司　「うん。ちょっと、ゆっくり休んで、いろいろと勉強しようかなって感じに思っていたから。

ラウドネスのレコーディングが始まるまで、何日もなかったし。リハーサルもできないのに、いきなりレコーディングできるのかなって。」

――ちゅうちょする気持ちがあったのに、なぜラウドネスでやることを、決心したの？

泰司　「やっぱり、ラウドネスのサウンドがカッコ良かったから。やってみたいと思ったんだ。」

――ずっと、昔から好きだったぶん、樋口クン

やタッカンよりも、泰司のほうが、ラウドネスに対する思い入れは強いかもしれないし、もし入っても満足にできなかったらどうしようっていう不安は、よくわかるよ。だから、逆にラウドネスに参加することを決断したのは、すごく勇気のいることだと思うんだけれど。
泰司 「それは、ダメモトでさ。トライしてみて、みんなが求めているラインまでいってなかったら、それはそれでしょうがない。とにかく、自分というものを出してみて、ぶつかってやろうと思ったよ。どうなっても、出し切ってやろうと。」
——その時点でラウドネスは、ニュー・アルバムのデモ・テープを作ってあって、そのベースはマークン（山下昌良）が弾いていたわけでしょう。いざ、レコーディングに入るときに、そのベース・ラインをまったく変えようと思っていた？
泰司 「うん。どうせやるなら、自分を出そうと思ったから。樋口さんとアキラさんとかと、やっぱり年齢が離れているぶん、フレーズが違うんじゃないかって心配していたんだけれど、昔オレがコピーしていたのが良かったみたいで（笑）。」
——でも、10年間やっていたマークンの後を受けるわけだから、責任も重いんじゃない？
泰司 「うん。やっぱり、オレが入って、ラウドネスがバッドになったみたいに言われたらしょうがないからね。」
——レコーディングに入るまでリハーサルもなくて、レコーディングそのものはどうだった？
泰司 「実際ね、最初の2曲を録り終わるまで、自分のプレイが出せなくて、かなり落ち込んだんだけど。みんな、うまい雰囲気を作り出してくれるのね。だから、3曲目くらいから自分を出していけたなって。」
——最初の2曲はなんだった？
泰司 『PRAY FOR THE DEAD』と『BLACK WIDOW』。遅い曲から録っていったんだ。録る10分前くらいに、アレンジがどんどん変わってさ。樋口さんにしても、ドラムのフレーズを毎回変えていくからね。ベース・ラインもそれに従って変わっていくっていう感じ。ジャム・セッション的なレコーディングだった。
みんなが一丸になって、ひとつのものを作り上げるという。その気持ちがすごくデカイって感じた。」
——ラウドネスのサウンドを作るにあたって、苦労したところは？
泰司 「樋口さんのタイコって、後ノリっぽいでしょう、わりと。スネアの位置とかね。でも、アキラさんはカッチリと弾くタイプで。そこらへんを、オレがうまく埋めるっていう感覚になるんだけど、YOSHIKIのタイコとはノリがぜんぜん違うからね。だから、いつの間にかオレは前ノリになってたみたいで。リズムを溜めるところは、もっと溜めるっていうところで、けっこう苦労した。」
——樋口クンのドラムとからんだり、タッカンのギターとユニゾンで速弾きをやったりしているけれど、そういったところは苦労しなかった？
泰司 「そういうのと、全体のグルーヴを出すのとは違うからさ。ユニゾンのほうは、オレもギターをやっていたから、そんなに苦労しなかったよ。」
——けっこう、ベースが目立つところが多いけれど、やりたいようにやったの？
泰司 「みんなも、オレのアイデアを優先してくれてね。自分の好きなようにやってきた。」
——チョッパー・ベースを弾いている曲もあるしね。
泰司 「遊びの部分を作っていてくれるんですよ。〝泰司、ここでなにかやってくれ〟って。」
——そういう意味でも、今回のアルバムは、それぞれの自由度が高いよね。ファンだったからわかると思うけれど、ラウドネスってカッチリと決めているバンドっていうイメージがあったじゃない？
泰司 「うん。オレ……自分でやってるから言うわけじゃないけど、ラウドネスがこういうふうになればいいなって思ってたんだ。ヘヴィ・メタルっていう感じじゃなくなって、ちょっとユックリと楽しもうみたいな感じがするんだよね。」
——ふたりもメンバーが代わったから、ラウドネスそのものが変わるんじゃないかっていう予想もあったんだけど、ニュー・アルバムをジックリと聴いていると、根本的にやっぱりラウドネスなんだよね。
そこで疑問が出たんだ。泰司は昔から聴いてきたラウドネスっていうイメージを持ったうえで、ベースを弾いているのだろうか。それとも、ラウドネスのイメージを取り去って、ベースを弾いているのだろうかって？
泰司 「今までのラウドネスで、オレがカッコイイって思った部分は残すし、これからどんどん自分のものを出そうと思っているし。全部、変えようとか、そういう次元じゃないから。
ただ、メンバーが代われば、絶対にサウンドは変わるしさ、それをどうアピールしていくかが問題なんだよね。」
——なるほどね。それじゃあ、泰司からそれぞれのメンバーを見て、ひとりひとりはどういう人だと思う？
泰司 「意見を言わなきゃならないのに、誰も言わないときってあるでしょ。樋口さんはやっぱりリーダーで、意見を言える。自分が悪者になってでも、意見を言える人。すごく責任感が強いしね。
アキラさんは、その場をいい雰囲気にするムード・メイカー。重い雰囲気になっても、〝楽しくいこうや〟みたいな感じで。今回のアルバムでは、すごくワイルドだよね。今までになく、ダーティ的なワイルドさが出ているよね。」
——今回、プロデュースもタッカンだったけれど、プロデューサーとしてはどういう感じだった？
泰司 「すごく信頼できる。センスもすごくいいし。コンポーザーとしても、ちゃんと世界の流れを見ているし、そういうところの直観もスゴイと思う。」
——MASAKIは？
泰司 「MASAKIさんは、ほとんど日本人離れしている。感覚にしても、ぜんぜん違うよね。すっげえ、優しい人ですよね。それで、ヘヴィ・メタルを愛していると思う。なんか、一本ドシッとしたものがあって、それが揺るがない人でもある。
ヴォーカリストとしては、エネルギーの塊。声の使い分けにしても、テクニックを意識して使うんじゃなくて、自然に出ているっていうか、ライフ・スタイルから来ているっていう感じがする。歌っているっていうよりも、訴えかけているっていう感じだよね。」
——最後に聞きたいんだけど、5月からライヴ・ハウス・ツアーが始まって、6月からはホール・ツアーが始まるよね。そのツアーにはX時代からのファンも来るだろうと思うけれど、その場所で泰司は〝T・A・I・J・I〟と書く泰司なのか、それとも沢田泰司なのかっていう？
泰司 「オレは沢田泰司。もう……ウソの世界はね、いらない。」
——そこに来たファンになにを見せる？
泰司 「ラウドネスを見せる。オレの本当のさ、今までだってもちろん本当なんだけど、姿をさらけ出すよ……。」

ライヴ・スケジュール
5月28日・29日＝札幌ペニーレイン、6月1日＝川崎クラブチッタ、5日＝名古屋ボトムライン、6日＝大阪モーダホール、10日・17日＝渋谷公会堂、19日＝宮城県民会館、21日＝神戸国際会館、22日＝京都会館（第二）、23日＝浜松市民会館、7月1日・2日＝中野サンプラザ、8日＝青森市文化会館、9日＝岩手県民会館、13日＝愛知県勤労会館、15日＝広島アステールプラザ（大ホール）、18日＝福岡市民会館、8月3日＝大阪厚生年金会館　●問い合せ先＝ステージフライト（☎東京03・5489・2222）

●衣裳協力＝（株）HOT KNIFE（☎3401-2150）、（株）GAIN YOU（☎3464-7036）、（株）DOUBLE DECKER（☎3295-1572）

YAMANO MUSIC INFORMATION
yamano music 100 MANY THANKS & LOVE
ZIGGY復活
約1年半の沈黙を破ってスーパーロックグループ
ZIGGY復活！CMタイアップ曲を含む超話題のアルバム！
『YELLOW POP』
ZIGGY
6月25日発売
この商品には山野楽器のオリジナル特典がついています
〈徳間ジャパンコミュニケーションズ〉CD：TKCP-30589 税込定価￥3,000(税抜価格￥2,913)
MT：TKTP-20242 税込定価￥2,800(税抜価格￥2,718)
"GLORIA"を大ヒットさせ、ロックシーンのトップを突っ走っていたZIGGYが突然の休養宣言と共に活動を停止して約1年半。
復活を望むファンの声が日増しに高まる中、充電十分の、よりパワーアップしたサウンドが6月25日、2年振りのフルアルバムで甦る！
【収録曲】
■HOT GIRL IN BLACK LEATHER
■CLASH! CLASH! CLASH!
■ROCK THE NIGHT AWAY
■LET'S DO IT WITH THE MUSIC
(ナショナル蛍光灯"パルック"CFイメージソング)
■蒼ざめた夜
■SUMMER DAYS FOREVER(8月のMother Sky)
■STAND BY MY SIDE
■IT'S THE SWEET MAGIC
■訪れる夜だけに
■のらねこのKUROくん
■EMPTY HEART
■午前0時のMERRY-GO-ROUND
■眠らない25時の街で……全13曲
山野楽器オリジナル特典
♥「オリジナル"ZIGGY"バンダナ」
予約先着1,000名…お早目にご予約下さい！
◉B2オリジナルポスター(初回特典/Maker Premium)
ご予約・お買い上げはお早めに、下記山野楽器各店でどうぞ！
配送ご希望の方へ(代金引換配送扱い)
商品名（及びCD or TAPE）をご記入の上で、おハガキでお申込下さい。商品到着（発売日より10日前後）時、お品代に送料(￥850)を添えて御支払い頂くシステムです。
〒104 東京都中央区銀座3-10-5 山野楽器 特販課まで
おかげさまで100周年
銀座山野楽器
SINCE 1892
〒104 東京都中央区銀座4-5-6 ☎03(3562)5051
【中央区】●銀座本店……☎(3562)5051代
●東急日本橋店……☎(3274)5608
【新宿区】●新宿マイシティー店…☎(3352)6764
●新宿小田急(ハルク)店☎(3342)1111代
●新宿伊勢丹本店……☎(3352)1111代
【渋谷区】●東急本店……☎(3477)3457
●東急東横店……☎(3477)4574
【豊島区】●池袋パルコ店……☎(3987)0505
【品川区】●阪急大井店……☎(3775)1111代
【台東区】●松坂屋上野店……☎(3832)1111代
【23区外】●町田小田急店……☎0427(27)0382
●まちだ東急店……☎0427(28)2061
【23区外】●吉祥寺サンロード店…☎0422(21)3610
●東急吉祥寺店……☎0422(21)5111代
●調布パルコ店……☎0424(89)5334
●多摩そごう店……☎0423(39)2412
●八王子そごう店……☎0426(26)1399
【埼玉県】●大宮(そごう内)店……☎048(646)2529
●川口そごう店……☎0482(58)2368
●丸広川越店……☎0492(24)1111代
●アトレマルヒロ店……☎0492(26)7346
●丸広飯能店……☎04297(2)7189
●丸広東松山店……☎0493(23)1561
●丸広南浦和店……☎0488(65)5749
●丸広入間店……☎0429(66)1230
【神奈川県】●横浜そごう店……☎045(465)2747
【千葉県】●千葉パルコ店……☎043(225)6331
●千葉三越店……☎043(224)8376
●津田沼パルコ店……☎0474(77)5775
●新浦安店……☎0473(81)2645
【北海道】●札幌パルコ店……☎011(214)2273
●さっぽろ東急店……☎011(212)2505
●札幌そごう店……☎011(213)2342
●新札幌店……☎011(890)2588
●函館店……☎0138(26)3470
【福 岡】●天神IMS店……☎092(733)2130

新世代のための、ハイパーメディアステーション

VOICE ENTERTAINMENT

ボイス・エンタテインメント NEWS ニュース VOL.10

総合案内は無料できけます ▶03-3724-1199 or ＃9005

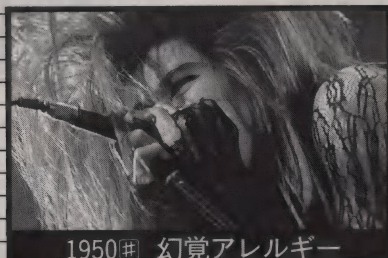
編集・発行／MEDICOM VOICE編集部　☎03-3479-0990

アクセスナンバー▶ 03-5701-9349
●それから好きな番組の４ケタ番号と＃をPUSH！●

東京都内の方は ＃9349

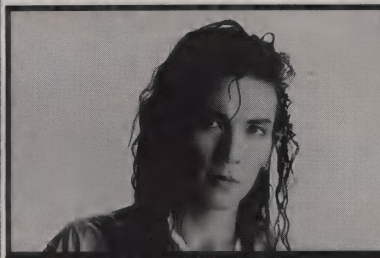
インタビュー番組とインディーズのCD紹介番組とアーティストスケジュールが、通話料のみで情報料のかからないTAKE FREEシステムになったよ！　気軽にアクセスしてみてね！

INDIES SCRAMBLE
●総合インフォメーション●
1900＃

気になるインディーズ界の最新情報は、この番組でチェック！　現在、インディーズ界で注目をあびてるバンドや、これから頭角を現すバンドまで、みんなまとめて応援してね。

1901＃	THE YELLOW MONKEY	1919＃	DEATH BLOW	1937＃	EDIT MODE	1944＃	ジーンジニー
1902＃	GYMNOPEDIA	1920＃	WILD THING	1938＃	VISION99	1945＃	GAUCH
1903＃	東京ヤンキース	1921＃	BAD BOYS	1939＃	手の感触	1946＃	LUCY'S DRIVE
1904＃	HARLEM JOKERS	1922＃	ジル・ド・レイ	1940＃	GUNSLINGERS	1947＃	BRAIN DRIVE
1905＃	SHEEN	1923＃	THE MONSTERS	1941＃	Die-Qual	1948＃	DOKI DOKIパニック
1906＃	PANIC IN THE ZOO	1924＃	ガス・ボーイズ	1942＃	NIRVANA	1949＃	ZIPPER ZIPPER
1907＃	NEW DAYS NEWz	1925＃	WARK	1943＃	DIE-KUSSE	1950＃	幻覚アレルギー
1908＃	IDLE GOSSIP	1926＃	DA BRONX				
1909＃	SECRET GOLDFISH	1927＃	VELVET ENDROIT				
1910＃	SIGHS OF LOVE POTION	1928＃	LIGHT & SHADE				
1911＃	GROOVY SIZE	1929＃	ジョリーピックルス				
1912＃	THE GRIP	1930＃	ZINX				
1913＃	DECAMERON	1931＃	GOATCORE				
1914＃	Billy & the Sluts	1932＃	MIS				
1915＃	死翼紋危異	1933＃	ベルゼルブ				
1916＃	妖花	1934＃	BA-RA-VA-LA				
1917＃	THE NEWS	1935＃	COLOR				
1918＃	JURASSIC JADE	1936＃	LArc en ciel				

1950＃ 幻覚アレルギー

ARTIST INTERVIEW
●総合インフォメーション● 2500＃

アーティストの生の声がダイレクトにキミの耳に届く、エキサイティングなインタビュー番組。

2502＃ MORRIE

2501＃	Zi:KILL	2505＃	米倉利紀
2503＃	B♯	2506＃	ファイター石田&GYM
2504＃	安部　純	2507＃	INFIX

INDIES CATALOGUE CD
●総合インフォメーション● 1400＃

こだわり派のインディーズCD。電話で音をチェックして、気に入れば即、注文できちゃうシステムだ。自分だけの音を探してみてね。約50種類のCDがそろってるゾ！

ARTIST SCHEDULE
●総合インフォメーション● 1500＃

好きなアーティストの頭文字（THEは除いて）の行の４ケタ番号と＃を押して、目的のアーティスト名が出てくるまでは、3＃でスキップしてね。

あ行	1501＃	は行	1506＃
か行	1502＃	ま行	1507＃
さ行	1503＃	や行	1508＃
た行	1504＃	ら行	1509＃
な行	1505＃	わ行	1510＃

アクセスナンバー▶0990-307-556 or ＃9003

●そして各番組の４ケタ番号と＃を押せばOK！

このエリアは、１分毎に40円の情報料が通話料に加算されます。未成年の方は保護者の了承を得て、電話をかけて下さい。

MEET TOWER ●総合インフォメーション●3300＃

FREE-WILL Telephone Summit
3301＃

フリー・ウィル・ホット・ラインがパワーアップ！　なんと、トミー自らが出演！6／23までは、毎週水曜日にゲストを替えてエキサイトな対談を繰りひろげるぞ。モチロン、キミたちの伝言にも、トミーがチェックして答えてくれるからね！（伝言は※3301＃で残してね）

ⓒⓓⓝ KENCHANの言いたいこと言ってみろ！
3303＃

大反響のKENCHANワールド。「最近のインディーズ・シーンについて」というテーマについて残してくれた伝言をピックアップして、KENCHANが吠えまくるぞ！　息巻く彼のパワフルボイスを聞いてくれ！（伝言は※3303＃で残してね）

WARK MO' BETTER LINE
3302＃

２人組のサムライラッパー、WARKの、絶妙なコンビネーションが楽しいトーク番組。番組を最後まで聞いてくれた人、先着100名に彼らのデビューCDをプレゼント！（伝言は※3302＃で残してね）

LIVE REPORT
●総合インフォメーション● 3100＃

VOICE ENTERTAINMENT 伝言板

上のアーティスト・インタビューの伝言は※1200＃、アーティスト・スケジュールの伝言は※1100＃、そしてインディーズ・スクランブルへの伝言は※とアーティストの４ケタ番号と＃で残せるよ。

◆バンド伝言板◆
音楽仲間を探しだせ!!　伝言きいて、伝言しちゃえ!!

アクセスナンバー▶0990-312-899（東京）　アクセスナンバー▶0990-309-170（名古屋）
アクセスナンバー▶0990-335-482（札幌）　アクセスナンバー▶0990-320-342（福岡）

クロック伝言ダイヤル
アクセスナンバー▶0990-318-033（東京都内、大阪府内の方は＃9609）

クロック伝言ダイヤルは、好きな時間に、好きな番号に向けて、オートダイヤルで伝言を送るシステム。24時間以内の指定した時間になると、自動的に伝言に残したメッセージを送ります。キミのアイデアで活用してね！

VOICE PLAY LAND
アクセスナンバー▶0990-319-316　東京都内の方は＃9234

●総合インフォメーション●2000＃

3500＃
邦楽クイズと洋楽クイズ、キミの得意な方にチャレンジ！全問正解者には、CDチケットが当たるよ。

8888＃
TVドラマやCMのクイズが登場！　10問正解者にはシングルCD、20問正解者にはビデオチケットをプレゼント！

5555＃
ロック道
〜キミはビッグに〜
〜なれるか!?〜
初級編

シミュレーション形式でキミの性格にあったジャンルと、どんなタイプのミュージシャンかがわかってしまうぞ！

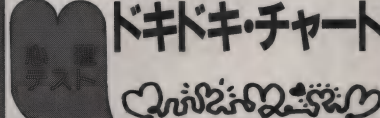
7500＃
THE GREAT BATTLE

バンドマンの中にも根強いファンを持つ、プロレスのクイズ。20問正解すると、ビデオチケットをプレゼント。

アクセスナンバー 0990-319-313（都内の方は＃9345）

監修／ムッシュ　ムラセ

あなたの愛の形と新しい恋を射止めるための

ドキドキ・チャート

チャート形式であなたの性格判断をしながら、新しい恋を実らせる方法をアドバイスしちゃうぞ！　アクセスナンバーのあとに5100＃をプッシュしてね。

注：VOICE ENTERTAINMENTの0990から始まる番組には、１分40円の情報料と、地域によっては遠距離通話料がかかります。未成年の方は保護者の了承を得て電話をかけて下さい。（発信地：東京都目黒区）

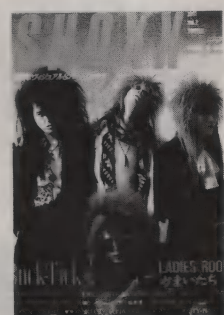
VOICE ENTERTAINMENTの番組のすべてがわかる雑誌を無料で差し上げます
御希望の方は03-3587-2155メディコム・インフォメーションセンターまで
（AM9:00〜PM6:00）※土曜〜PM3:00、日祝日休み

BACK NUMBER

バックナンバーのお知らせ

■バック・ナンバー申し込み方法■
▼定価金額＋送料（1冊260円、2冊310円、3冊以上は540円）分を切手か、現金書留、または小為替で〈〒104東京都中央区銀座5の1の7　数寄屋橋ビル音楽専科社経理部SHOXX○年○号〉係まで送って下さい。（○の中には希望の号数を入れる）ご自分の住所、氏名、電話番号を忘れないでネ。

SHOXX VoL.1

表紙＋巻頭＝ZIGGY（パーソナル・インタビュー他）／かまいたち／BY-SEXUAL／対談＝Zi:KiLL VS COLOR／LADIES ROOM／AURA／DERLANGER／JACKS'N JOKER／筋肉少女帯／GRANDSLAM／MARCHOSIAS VAMP（700円＋送料260円）

SHOXX VoL.2

表紙＝LADIES ROOM 巻頭＝BUCK-TICK（インタビュー、ライヴ・リポート他）／LADIES ROOM かまいたち ガーゴイル／JUSTY-NASTY／JACKS'N JOKER／対談＝AURA VS カブキロックス／COLOR ストロベリーフィールズ他（700円＋送料260円）

SHOXX VoL.3

表紙＋巻頭特集＝Zi:KiLL（ポスター・ロング・インタビュー）／対談＝かまいたち VS LADIES ROOM／STRAWBERRY FIELDS／筋肉少女帯／AURA／デカメロン／LUNA SEA／JNJ／GRAND SLAM／東京ヤンキース／AION／DEVILS他（700円＋送料260円）

SHOXX VoL.4

表紙＋巻頭特集＝かまいたち（アルバム・インタビュー、対談、速報・けんちゃん入院）／BY-SEXUAL／LADIES ROOM／ストロベリーフィールズ／ガーゴイル／MORRIE／AURA／LUNA SEA／Zi:KiLL／対談＝TATSU&RUDY他（700円＋送料260円）

SHOXX VoL.5

売り切れ

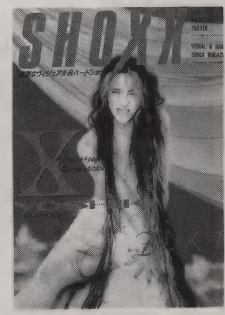
SHOXX VoL.6

表紙＝GRAND SLAM 巻頭＝X（8・23東京ドーム速報、トシ・インタビュー）GRAND SLAM（ロング・インタビュー）かまいたち、Zi:KiLL、LADIES ROOM、DEEP、LUNA SEA、GARGOYLE、J、N、J、AION、COLOR、東京ヤンキース他（750円＋送料260円）

SHOXX VoL.7

売り切れ

SHOXX VoL.8

表紙＋巻頭特集＝X（45ページ大特集、YOSHIKI 神秘世界・ヴィーナスの誕生、心象風景インタビュー、最新独占ロング・インタビュー、Xジェラシー・ツアー全記録、YOSHIKIのプロジェクトV2、X with オーケストラ、X at 東京ドーム'92・1・5）／新生Zi:KiLLの正体／レディース・ルーム他（750円＋送料260円）

SHOXX VoL.9

表紙＝LADIES ROOM、巻頭特集＝HIDE with RYÖ（フォト・ストーリー）／HIDE（「無言激」メイキング）／LADIES ROOM（巻末企画）／モーリー／ストロベリー vs ルイマリー他（750円＋送料260円）

ARENA37℃

アリーナ サーティセブン

▼91年6月号

表紙十大特集＝BAKU・全20頁（アルバム・インタビュー、仙台追っかけ、パーソナル・インタビュー、やじうまワイド、アルバム・ベスト5、双六）　吉川晃司（アルバム・インタビュー）　BUCK-TICK（ビデオ取材）　UNICORN（シングル、ソロ）　SOFT BALLET（アルバム）　J(S)W、ストロベリーフィールズ、COBRA、BY-SEXUAL、かまいたち、JUSTY-NASTY、AURA、KUSUKUSU、B・J・C、16TONS、PRIVATES、（620円＋送料76円）

▼91年7月号

表紙＋巻頭大特集＝J(s)W（デビュー3周年記念・ジュンスカはライヴが命!!／ピンナップ、ロング・インタビュー、ライヴ大百科、コメント、ツアーの歴史、全33ページ）／BAKU（シングル・インタビュー、パーソナル・インタビュー、新連載「答えのない悩み相談」）／ブランキー・ジェット・シティ（福岡にて）／かまいたち（ジキルとハイド）／BUCK-TICK、BY-SEXUAL、SOFT BALLET、ストロベリーフィールズ、Zi:KiLL、吉川晃司、（620円＋送料76円）

▼91年8月号

売り切れ

▼91年9月号

表紙＋巻頭大特集＝BAKU（パーソナル・インタビュー、6大ふろく、クロスワード・パズル、悩み相談）／X（ビデオ撮影レポート、名古屋キャンペーン取材）／J(S)W（パーソナル・ストーリー・スタート）／かまいたち（野音レポート、インタビュー）／THE・B・J・C（パーソナル・インタビュー、ツアー総括、ツアー日記）／EBI（初ソロ・インタビュー）／JUSTY-NASTY、Zi:KiLL、ストロベリーフィールズ、プライベーツ、GRAND SLAM、Ji æn、ラフィン・ノーズ、コブラ、マルコシアス・バンプ他（620円＋送料76円）

▼91年10月号

売り切れ

▼91年11月号

表紙十巻頭大特集＝BY-SEXUAL（インスピレーション・トーク、「CRACKER」インタビュー、クロスレビュー、クロスワード・パズル）／BAKU（8／31EAST詳報、スタボー・レポート）／麗蘭（アルバム・インタビュー）／J（S）W（パーソナル・ストーリー最終回）X（8／23東京ドームライヴ）／UNICORN（「ヒゲとボイン」レビュー、EBIインタビュー）／スチャダラパー、かまいたち、ブランキー・ジェット・シティ、THE MODS、すかんち連載スタート、G・D・フリッカーズ他（620円＋送料76円）

▼91年12月号

表紙＋大特集＝BAKU・全16頁（サンフランシスコ道中記、アルバム・インタビュー、パーソナル・インタビュー、悩み相談）／J(S)W（TOO BAD徹底インタビュー、アンケート）／KATSUMI（アルバム・インタビュー）／UNICORN（「ヒゲとボインは何位でしょう」）／すかんち、THE MODS、かまいたち、B・J・C、X、BY-SEXUAL、LUNA SEA、らんまるのわがまま、スピッツ、LADIES ROOM、COBRA、De-LAX、AION、他（620円＋送料76円）

▼92年1月号

巻頭＋大特集＝JUN SKY WALKER(S)（正月号はJ(S)Wで決まり! 1日、年中J(S)W、パーソナル・朝・昼・夜・深夜インタビュー、久々4人全員インタビュー、92年大予想企画）／UNICORN（さよなら中島悟・ユニコーンが語るF1のすべて（笑）、ライヴレポート）／X（最新衝撃フォト）／BY-SEXUAL（シングル・リリース）／THE MODS（モッズとスカーフェイスのすべて）／シスターズ・ノー・フューチュアー、MAGE、ブランキー・ジェット・シティ、布袋寅泰、ルナシー、プライベーツ、すかんち、スパゴー、らんまるのわがまま他（620円＋送料76円）

▼92年2月号

売り切れ

▼92年3月号

売り切れ

▼92年4月号

表紙＋巻頭大特集＝BUCK-TICK（「殺シノ調べ」ロング、インタビュー、完全ディスコグラフィ、美麗フォト）／ZOO&DEER／NOKKO／江口洋介／大事MANブラザーズバンド／P-MODEL／UNICRN／BAKU／LUNA SEA／吉川晃司 vs 原田喧太他（620円＋送料76円）

▼92年5月号

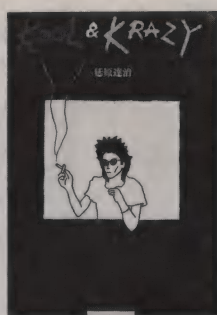
表紙＋巻頭大特集＝THE BLANKY JET CITY（パーソナル、インタビュー、三人の相関関係、ライヴの現在・過去・未来）／THE ALFEE／UNICORN／カラー＝TOSHI、HIDE、ZOO、BUCK-TICK、LUNA SEA他（620円＋送料76円）

増刊、書籍

バックナンバーおよび増刊、書籍を申し込みの方は、定価＋送料分を現金書留又は小為替（切手代用も可）で 〒104 東京都中央区銀座5－1－7数寄屋橋ビル音楽専科社経理部ＢＯＯＫフェアー係 まで送って下さい。申し込みの際、必ず希望商品名を書いて下さい。増刊、書籍を２冊の場合は送料310円、３冊以上540円です。

KOOL & KRAZY
延原達治

アリーナ本誌で大好評連載していたプライベーツ、延原達治の「ＫＯＯＬ＆ＫＲＡＺＹ」がついに単行本化。本年度最高の話題作！ 連載されていた本文はもちろん、対談などの追加もバッチリ。直木賞はいただいた。

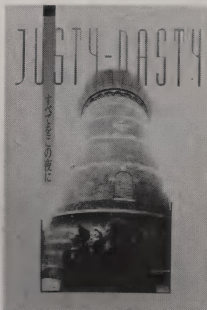
（１５００円＋送料２６０円）

人に歴史あり
ユニコーン

87年にアリーナに登場して以来、90年7月号まで、ユニコーンの全ての記事を一冊にパック。まさにバンドに歴史ありです。その上、追加取材あり（テッシーエッセイ書き下ろし、奥田民生対談、巻頭特写、人に歴史あり）でガンガンせまる。

（１５００円＋送料２６０円）

JUSTY-NASTY
すべてをこの夜に

ジャスティ・ナスティ初の写真集。アルバム「すべてをこの夜に」のコンセプトそのままに再現。オール・ヨーロッパ・ロケ。パーソナル・インタビュー、バンド・ヒストリー、インディーズ時代も含めた完全ディスコグラフィーなど、ジャスティの全てがわかる一冊

（１６００円＋送料２６０円）

ARB大研究
DAYS OF ARB

おしくも解散してしまったＡＲＢの大研究復刻本。音楽専科の復刻を初め、アリーナの復刻も含めた大豪華本。

内容＝フォト・ドキュメント、メンバーからのメッセージ、アリーナ＋専科復刻（石橋凌・俺の生き方、各アルバムインタビュー、新メンバー加入インタビュー他）対談（石橋凌vs大友康平、キースvsサンプラザ中野、石橋凌vs氷室京介他）白浜久エッセイ、ライヴ・ヒストリー他。

（１３５０円＋送料２６０円）

D'ERLANGER MOON AND THE MEMORIES

1月に正式に解散を表明したデランジェの結果的に最後のツアーとなってしまったツアー〝ＭＯＯＮ ＡＮＤ ＴＨＥ ＭＥＭＯＲＩＥＳ〟を完全パッケージしたライヴ写真集。最後のインタビューとなったパーソナル・インタビューも掲載。

（１６００円＋送料２６０円）

SHOXX SPECIAL
筋肉少女帯

ついにでた!! 筋少本の決定版。

▼パーソナル・インタビュー／ヒストリー／ロッキン・コミック／エッセイ／対談、などなど、やれることは全てやりつくしてしまった。もうやることはない（笑）。

（１５００円＋送料２６０円）

SHOXX SPECIAL
Zi:Kill

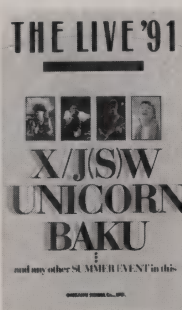
ジキル初のアーティスト・ブックがついに登場

▼個別ロング・インタビュー／13アイテム・インタビュー／趣味の世界／ライヴ徹底取材／ジキル・ストーリー／8ビート・ギャグ・Ｚｉ÷ＫｉＬＬ版他

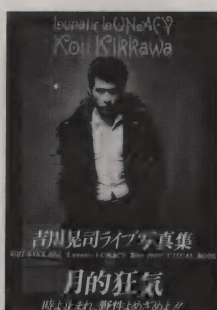
（１５００円＋送料２６０円）

THE LIVE'91

91年の夏のイベントをこの一冊にギューづめ。夏の決定版。Ｊ（Ｓ）Ｗ（名古屋、金沢、仙台）／ＵＮＩＣＯＲＮ（名古屋、金沢）／ＵＮＩＣＯＲＮ VS Ｊ（Ｓ）Ｗ（名古屋）／Ｘ（新潟、仙台）／ＢＡＫＵ（よみうりＥＡＳＴ）／その他のイベント多数！

（１３５０円＋送料２６０円）

吉川晃司
LUNATIC LUNACY

吉川晃司初のライヴ写真集。１９９１年５月～７月の〝Lunatic LUNACY TOUR 1991〟を完全再現！ さらにオフ・ステージでの素顔、スタジオ撮り下ろしフォト、ライヴ・レポートなど、ソロ再始動後の吉川晃司を全てを収めた豪華本。

（２５００円＋送料３１０円）

ZOO&DEER NATIVE

ＺＯＯ＆ＤＥＥＲ初の写真集。彼らの魅力を十分に味わってくれい。

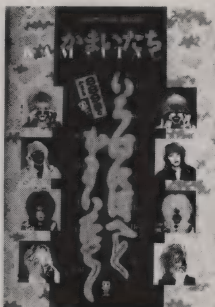
▼ロケ、スタジオ・ＰＨＯＴＯ、ビデオＭＡＫＩＮＧ、ディスコＧＯＬＤ、竹芝でのＰＨＯＴＯ、など、ボリューム満載。

（１８５０円＋２６０円）

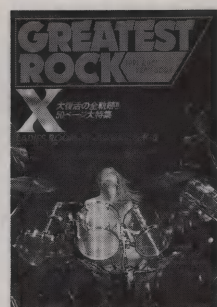
かまいたち
いろはにほへとかまいたち

解散してしまったかまいたちの全てを網羅した初のアーティストＢＯＯＫ

▼ＬＩＶＥ ＨＩＳＴＯＲＹ、ＭＥＭＯＲＩＡＬ ＳＴＵＤＩＯ ＰＨＯＴＯ、かまいたちＨＩＳＴＯＲＹ、はちゃめちゃ日記、かまち年表、ディスコグラフィー、ＬＡＳＴ ＴＯＵＲ完全レポート他

（１９８０円＋２６０円）

GREATST ROCK

巻頭50ページ大特集＝Ｘ（91年Ｘの大復活の全軌跡がこの一冊で）／かまいたち解散!!／ＢＹ-ＳＥＸＵＡＬ／ＢＵＣＫ-ＴＩＣＫ／ＬＡＤＩＥＳ ＲＯＯＭ／Ｚｉ：ＫｉＬＬ／ＬＵＮＡ ＳＥＡ他

（１５００円＋送料２６０円）

8ビートギャグVOL・1

ロック・マンガの元祖・シマあつこ。ベストセレクションＶＯＬ・１は、「ビバ・ロック」に掲載された4コマまんがを全て収録した。「8ビート・ギャグ」を知らずして、ロック・マンガを語るなかれと言われた程の永遠の迷作（７８０円＋送料２６０円）

8ビートギャグVOL・2

ファンの熱いラブ・コールに答えて登場したのが、ベスト・セレクションＶＯＬ.２。第2弾は「音楽専科」に掲載された4ページ・ミュージシャン達も腹をかかえて笑ったという伝説のストーリーが満載されている。

（７８０円＋送料２６０円）

8ビートビートVOL・3

4コマ、4ページ・ストーリー、そしてベスト・セレクションＶＯＬ.３では、36ページの新作描き下しと過去の長編作品の再録。第一、第二、第三弾のこの三部作を全てそろえて、シマあつこのロッキン・コミックの真髄に（７８０円＋送料２６０円）

残りものには㊌があるまる(笑)

バックナンバー

Vol.② Zi:Kill のすべてが1冊に!!

Vol.① 筋肉少女帯 がまるごと1冊に!!

SHOXX SPECIALシリーズ
好評発売中!!
各1,500円
A4判132ページの豪華版

胸の中で響くこの声が、あなたに聞こえますか。

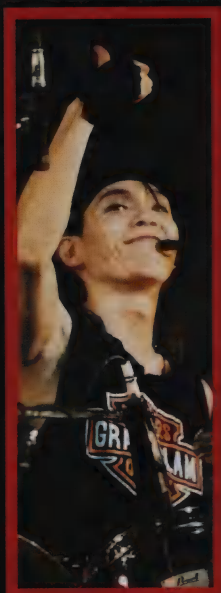
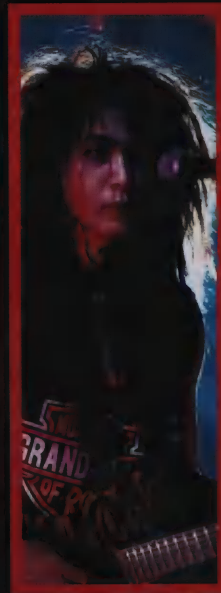
断罪!断罪!また断罪!!
キンショーボ〜〜〜ン!!

主な内容

▶80ページにも及ぶカラーページには未公開最新フォトがいっぱいだ。
▶全メンバーの個別ロング・インタビューを一挙掲載
▶幼時〜子供時代の珍しい写真も公開されるノンフィクション・ストーリー。
▶最新ステージを完全密着独占レポート!バックステージでの素顔ものぞけるぞ、と。
▶全メンバーの特技・趣味・宝物etcを公開。
▶項目別インタビューは興味深いテーマで、今まで誰も知らなかったことが…。
▶全アルバムそしてビデオを自己解説。
▶ロッキン・コミックまである。

■購入方法■
直接当社に注文する場合は、定価+送料(1冊260円、2冊[illegible]円[illegible])、切手[illegible]は現金書留、小為替で、〒104 東京都中央区銀座5[illegible]寄屋橋ビル5F 音楽専科社経理部「ショックス・スペシャル Vol.◯」(◯の中には希望のナンバーを入れる)係まで送って下さい。

DANCE! DANCE! DANCE!

VOCAL
JUN-YA KATO

DRUMS, BACKING VOCAL
YOSHIHIRO TOYOKAWA

GUITAR, BACKING VOCAL
KAZUHIDE SHIROTA

BASS, BACKING VOCAL
HIRONORI YOSHIKAWA

LIVE VIDEO
GRAND SLAM
LIVE AT NHK HALL '92

5/21 ON SALE!

「DANCE! DANCE! DANCE!/LIVE AT NHK HALL」

VHS-ALVA-72 ¥4,900(INCLUDE TAX)・LD-ALLA-72 ¥4,900(INCLUDE TAX)

「RHYTHMIC NOISE」「HERE WE GO」「DANCE DANCE DANCE」「FARAWAY」「CRY AGAIN」「I WANNA TOUCH YOU」「NO NO NO (SHOCK YOU)」「WITHOUT DREAMS」「LET IT GO」「KEEP ON DANCIN'」「HEARTACHE」全11曲60分収録。

初回特典　GRAND SLAM特製[illegible]を抽選で500名様にプレゼント（応募券は初回プレスに封入されています）

INFOS03-3455-1793 ALFA RECORDS

SPECIAL LIVE
「SCREAMY-BOPPERS」

5/2.3 NISSIN POWER STATION
即日SOLD OUT! THANX!!

NEXT LIVE ➡ TOKYO, OSAKA, NAGOYA / AUG '92
NEXT RELEASE ➡ SPIRITUAL ALBUM / JULY '92

「GRAND SLAM」の[illegible]を送ります。[illegible]円切手を2枚[illegible]付の上、下記住所「SCREAMY-BOPPER」係まで 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-21-5ミサワビル[illegible] DANGER CRUE INC. 03-3356-9648

D.C

虚偽の扉

筋肉少女帯の橘高文彦とBY-SEXUALのDEN。音楽シーンの中で近い存在にありながら、ごく最近まで二人は挨拶をかわす程度の仲だった。お互いにその存在は気になりながらも、なかなか親しくなるチャンスがなかったのだ。その二人が心を割ってうちとけることが出来たのは、同じステージに立ったのがきっかけだった。その日、二人はステージの上で火花を散らし、音楽を通じて無言で友情を確認しあったのである……。

DEN

BY-SEXUAL

PHOTOGRAPHY: YOUSUKE KOMATSU
HAIR & MAKE UP: TETSUYA KAMEYAMA
DEN'S COSTUME STYLING: EMI TAKAHASHI
[DEN'S COSTUME by CHRISTOPHER NEMETH(SECTOR)]

橘高文彦 with

筋肉少女帯

DENちゃんとは似たような環境だし、がむしゃらにやってたのも同時期だし、なんか同志的なものを感じてたんだ。
●橘高

FREE TALKING

初顔合せ対談

俺、ブームがどーのっていってワ～っとなってる頃より、今の方がバンドやってて楽しい。
●DEN

——まず、この間の筋少ちゃん祭りの感想を聞かせてもらおうかな。

DEN その節はどうも。バンマス、お世話になりました。

橘高 こちらこそ。あの「スーパースター」は、お化粧がお好きバンド」はすごかったよね。ベースをDENちゃんに弾いてもらって、ヴォーカルはエックスのHIDEちゃんで、ドラムをかまちのけんchanに……あ、かまちじゃな～い！

DEN 現シスターズ・ノー・フューチャーのけんchan（笑）。

橘高 そう（笑）。そもそもあのバンドはね、筋少のお客さんのなかでも俺寄りの、SHOXXの読者系列のファンへの恩返しっていう感じで考えたんだ。それと、なかなか俺たちってセッションする機会がないから、なんかやってみたいなと思ってたからさ。DENちゃんは、けんchanの紹介なんだよね。

DEN だから、この話を聞いたときは、「お、ラッキー」って思いましたよ。これは、面白くなりそうだなって。

橘高 もともとこのセッション自体、テッちゃん（亀山哲哉）の「美粧画廊」出版記念パーティの打ち上げで、俺とHIDEちゃんが隣同士で飲んでたのがきっかけなんだよ。

——DENちゃんは、けんchanの紹介だったんだ？

DEN そう。突然、電話がかかってきて。

橘高 けんchanにはね、レコード会社も一緒だから、「こういうのがあったら、やってね」って話してたんだ。それで、「ベースに誰か、いい人いないかな」っていったら、「あ、DENがええやん」っていって。それで決まったの。

——二人は、それ以前に面識あったの？

橘高 DENちゃんに最初に会ったのは、エックスのパワステ3DAYSの打ち上げでかな。そのときに、ちょこっと話したのが最初だよね？

DEN そう。あのすごい人数がいた打ち上げで、しゃべったのが最初。

橘高 でも、その前に会ったことがあるの。知ってる!? 代々木のオリンピックプールで、TOYS FACTORYっていううちのレコード会社のイベントがあったとき、バイセクの皆さんがかまちの陣中見舞いに来てて、そこでチラッと会ったんだよね。

DEN 「おはようございます」って、挨拶した覚えがある（笑）。

橘高 でも、そのときはみんな素顔だったから、いったい、誰なのかわからなかった。

——ひどい（笑）。

橘高 なんて、俺がいちばん、いっちゃいけない人なのにね（笑）。でも、今回のバンドのメンバーもそうだけど、お化粧してるビジュアル・ショック系のミュージシャンって、メイクしてビシッと衣装着てるときの印象が強いから、普段、普通の格好してるとわからない人が多いよね。

——それ、フォローのつもり？

橘高 一応（笑）。でも、事実だから。

——DENちゃんは、どうして、かまちを知ってたの？

DEN 昔から。こぉんなに小さい頃から。知ってた（笑）。もともと俺たちは大阪でかまちは京都だから、しょっちゅう会ってたんだよね。一緒に飲んだりとか。そういう関係で、「出ないか」っていう矢がスパっとこっちに飛んできたんだ。

——それで、本番の前にリハってやったの？

DEN 一回だけ。

橘高 なにしろ、連絡を回すのが大変なんだよ。ミュージシャンって自分の電話番号をなかなか他人に教えないから、最初は第三者を経由してウダウダやってたんだ。

DEN 俺、もう、その話を忘れかけてた。

橘高 DENちゃんとこの話を直接したのって、一月に入ってからだもん。

DEN リハに入る何日か前だった。やること自体は覚えてたんだけど、全然連絡こないし、「どうなってんのかなぁ、いつやんのかなぁ」って。そうしたら、ようやく連絡があって、一回だけスタジオに入った。

橘高 本当は一回やろうかって、いってたんだ。でも、セッションだし、あんまりうまくなってもつまらないしって、余裕で話してたんだよ。とかいって、本当はみんな忙しくて、スケジュールの都合がつかなかった（笑）。

DEN 音を出したのは、2時間くらい。それで、本番当日もちょっと手違いがあって、わたくし、ちょっと遅く行ったんで、ほんのちょっとしか出来ず……。

橘高 その日っていうのが、ちょうど（筋少ちゃん祭り）パワステ2DAYSの2日目だ

撮影協力 RONDE CLUB（☎3589-6707）

俺、唐揚げばかりを食ってみたい。

DEN

ったんで、俺はホテルに泊まってたのよ。それで、チェック・アウトの関係で、メンバーは1時入りでいいところを11時には会場に入ってたの。そんなことって、俺のミュージシャン人生のなかでも、初めてのことだったんだよね（笑）。そしたら、俺が入ったときには晴れてたのに、他のメンバーがくる頃には大雪になってたという（笑）。

俺が時間前になんか入るから雪が降るんだなんて怒られてたら、普段は遅刻しないHIDEちゃんが15分遅れてきたのよ。それで、けんchanちゃんも遅れてきて「あれ？」って思ってたら、リハの時間になってもDENが来ない。他のバンドを先にやってもらってもまだ来ないから、仕方なく3人でリハ始めたんだ。なんか、ベースレスでアマチュア以下みたいなリハーサル。歌があるときはまだいいんだけど、ギターソロのとこなんか、ドラムとギターだけで、なんか掛け合いやってるみたいだった。

それでギターソロが終わったところにDENが突然現われて、入り口から真っすぐステージにあがってきて、それで4人でちょっとだけ音をあわせたんだ。

DEN 「もうリハなんか、とっくに終わってる」と思ってたから、俺もびっくりした。

橘高 客入れの時間も過ぎてたもん。

DEN 入ってったら、自分が一緒にやるはずの皆様がステージの上にいて、一瞬「どうしよう」って考えたんだ。楽器はまだ来てないしって。

橘高 なんだ、あの時、いたんだ。ずるいよ、それ（笑）。

DEN そしたら、3分ぐらいで楽器が来たから、それを持ってステージにあがっていった。みんなもう目がこんなになってて（釣り上げる真似）、「申し訳ないっ」って。

橘高 なってない、なってない（笑）。

——そのとき、DENちゃんはどうしてそんなに遅れちゃったの？

DEN リハをやってて、早めに出たんだけど、すごい渋滞で。

橘高 その日って、新宿駅からハワステまで、タクシーに乗ったら45分かかるっていう日だったの。

DEN 1時間前に出たのに、結局、2時間半かかった。途中で「もう絶対に間に合わない」と思って、これは平謝りして本番で頑張るしかないって思ってたんだ。

橘高 そのときに楽屋で飛びかってたのが、「今日はDENに、唐揚げをあげないと」っていう不思議な会話だったんだよ。あの「唐揚げ」のもつ意味は、何？

DEN あれはね、エックスのハワステの打ち上げのとき、俺、唐揚げばかりを食ってたみたいなんすでよ、どうやら。「これ、うまいっすよね」とか、いいながら。

橘高 唐揚げにはまってた？

DEN そう。それで、その日の打ち上げの時に「おまえには、唐揚げを食わしてやんないよ、フン」って（笑）。

橘高 俺にはその意味がわからなくて、「それが何なんだよ」って思ってたんだけど、みんな、とっても重大な罰のようにいうわけ。

DEN 結構、つらい罰だった（笑）。目の前をどんどん唐揚げが通りすぎていくのを見てるのは。

橘高 結局、唐揚げは食えなかったの？

DEN 隠れて、食ってた（笑）。

橘高 ずる〜い！ でも、俺、普段、遅れてばっかりいるでしょ。だから、楽屋にいたスタッフやイベンターやローディに、「いつものみんなの気持ちがわかったか」って、散々いじめられましたよ（笑）。

DEN 極悪人になってしまいました。

——DENちゃん、普段は遅れないの？

DEN リハにはときどき行かないこととかあるけど（笑）、ライヴには滅多に遅れない。朝起きるのが早くて、7時には目が醒めてるから。

橘高 1月の筋少ちゃん祭りで、ア・ルージュ（橘高ちゃんが、以前在籍していたバンド）の再結成ライヴをやったんだけど、そのときも普段遅れない人たちが遅れてきたの。だから、それは、普段遅刻ばっかりしている俺への天罰だと思って、深く反省しましたよ。

DEN そんな。めっそうもない。

橘高 だけど、楽しかったよね。

DEN うん、面白かった。またやりたい。

橘高 ライヴが始まったら、チューニングとかバラバラだったんだけどね。でも、そんなこと、いいの、どうでも（笑）。

DEN ワーッと盛り上がったよね。

橘高 始まる前にHIDEちゃんにね、「うちの客は、エックスのファンにはいないタイプが多いよ」っていったの。

DEN HIDEちゃん、緊張してたよね。

橘高 そしたら、HIDEちゃん、必要以上に緊張しちゃってさ。出てきた途端に、「どうもすいません」って謝ってんの（笑）。

DEN 「歌います」とかいって（笑）。でも、俺、あれは客を威嚇してるんだと思ってた。

橘高 俺もそう。そしたら、マジにおびえてたらしい。でも、始まったら、そんなに緊張してたHIDEちゃんがグイグイ（ステージの）前に行くもんだから、俺もDENちゃんも気がついたらいちばん前に行ってた。アマチュアのバンドが、ライヴの時にひたすら前に行きたがるじゃん。そんな感じ。

DEN 俺、ああいう雰囲気、久々に味わった。

橘高 HIDEちゃんが前行くもんだから、俺、コーラスをとるのやめて、前に出てっちゃったもん。リハーサルでは真面目にコーラスをやってたのに、いざ本番になったら、DENちゃんとHIDEちゃんの動向が気になって仕方がない（笑）。

DEN 俺はもう、最初から真面目に、前に出ていくことだけを考えてた。マイクを通さずに、歌えばいいやって。

橘高 客に生で伝えようって（笑）。けんchanはけんchanで、うしろ振り返ったら、椅子の上に立ってるし。

DEN すごかったよね。

——すごかったといえば、「スーパースターはお化粧がお好きバンド」というネーミングもすごいよね？

橘高 最初は「スーパースターはブロンドがお好き」にしようと思ってたんだ。前はけんchanも金髪だったし、「DENは緑だけど、1日くらい金髪にするからさ」ってけんchanがいってたからさ。そしたら、けんchan、いつのまにか、黒髪にしちゃってさ。DENなんか、黒くしたうえに切っちゃって、普通のナイス・ガイになってやんの（笑）。

DEN 申し訳ない。

橘高 でも、本番前の楽屋でメイクをし始めたら、みんな、こういう人たちじゃない？ どんどん、深い世界に入ってっちゃってさ（笑）。これは、ブロンドの代わりにお化粧にすれば、はまるとこにはまるなって。

DEN さすが、バンマス。

——でも、それぞれのバンドでいちばん目立ちたがる人ばっかり集まったような気がする。

DEN そう、そう。

橘高 大概に、ずるいっていわれた。おいしいとこばっかり、集めてるじゃんって。

DEN でも、本当に気持ち良かった。

橘高 ライヴやるのは久しぶりだったの？

DEN 今年の1月くらいから、やってなかった。

橘高 HIDEちゃんも（東京）ドーム以来だっていってたし。

DEN けんchanも、ドラムは久しくたたいてないっていってたよね。

橘高 リハーサルで、一回たたくことにうまくなってくる（笑）。

DEN あれはおかしかったよね。だんだん勘が戻ってきたみたいで。

——曲は、どうやって選んだの？

橘高 最初はいろいろ悩んでたんだ。まず、HIDEちゃんがギター弾きながら歌うのかなって思ってて、それだったらKISSとかやりたいなって思ってたの。でも、メンバーが決まってHIDEちゃんと話したとき、「このメンツだったら、パンク寄りのハードロックがカッコいいよね」ってことになったの。そこから、ハメられ始めたんだけどね。「ニルヴァーナって、知ってる？」なんていいだして、結局、自分がニルヴァーナをやりたかっただけなの（笑）。俺なんかアルバム持ってないし、DENちゃんも持ってなかったでしょ？

DEN 持ってなかった。

橘高 けんchanも持ってなくて。それで、俺らはわざわざ買ったんだよ。

DEN 俺のとこには紙が来たんだけど、そこに「ニルヴァーナ」って書いてあって、なんだろうなぁ、これって、首を傾げてた。

橘高 俺なんか、ニル・ヴァーナっていう人の名前だと思ってた（笑）。それで、レコード屋の店員に聞いて、「これです」って持ってこられたときは、恥ずかしかった。

DEN 俺もみんなに「ニルヴァーナって持ってない？」って聞いて、NAOが「それ、ニルヴァーナじゃないの？ だっせー」っていいながら、アルバムを貸してくれた。

橘高 だって、そのとき、全米でナンバー・ワンだったんだよ、そのアルバム。なのに、俺ら、全然知らなかった（笑）。

DEN 世間を知らなすぎるよね。

橘高 それでまた、HIDEちゃんの説明がおかしいんだ。「どんなバンドなの？」って聞いたら、「ハードロックで、ちょっとパンクっぽくて。でも、ハードロックで……」って。なんだか、よくわからん（笑）。

DEN でも、曲を聞いたら、あ、なるほどねって思ったよ。

橘高 うん、さすがHIDEちゃんだよね。結構、みんなのことを考えて、選んでくれたみたい。

——最初、KISSをやるって聞いてた。

橘高 ん〜、KISSもいいんだけど、ちょっと恥ずかしかった。

DEN けんchanと話してて、「やっぱは、星を書いたほうがいいのかな」「ジーン・シモンズの顔にするのかな」って悩んでた（笑）。

BY-SEXUAL バックナンバー ■VOL. 1→カラーピンナップ&インタビュー■VOL. 4→SHO&RYO、DEN&NAO スペシャル対談カラー9ページ■VOL. 9→HIDE（X）with RYO スペシャル特集44ページ

橘高　ちょっときついな～って？
DEN　髪、切っちゃったしな～って。
――それで、このバンドはまたライヴやる予定はないの？
橘高　このバンドはね、お客さんがたくさんいるところでは演奏しません。所詮、内輪遊びだから。な～んて、本当はまだ皆さんに見せる自信がないだけです（笑）。
DEN　あと5年ほど、待っていただきたい。
橘高　だってさ、本番前のリハーサル、キーが半音ずれたままやってたんだよ。
――誰が、ずれてたの？
橘高　二人して、ずれてた。
DEN　あってるもんだと思ってて、本番前に楽屋でメイクしながら、「ひょっとして半音ずれてない？」って。
橘高　そんなの、アマチュア以下だって（笑）。
――それで、あの日は打ち上げで、みんな遅くまで飲んでたんでしょ？
橘高　あなたも、いたじゃない（笑）。
――いや、あの日は早く帰ったから。
橘高　そうだっけ？
――4時頃、帰った。
DEN　早く帰ったといって、4時（笑）。
橘高　そっか～。そのあとが面白かったんだよ。それから、みんなでフグ食ったんだ。
DEN　ロシアン・ルーレット・フグ。
――なんだ、それ？
橘高　24時間営業の居酒屋に、朝の7時頃行ったのね。そしたら、フグ刺しが千円弱なのよ。それをみんなで頼んで、ひとりずつ順番に食べていくの。
DEN　誰が当たるかって。この時間にやってる店だから、絶対に当たるぜって（笑）。
橘高　結局、みんな、大丈夫だったのかな。誰か、死んだかな（笑）。
DEN　いや。連絡がないから、大丈夫だったんじゃない？
橘高　俺ら以外、みんな死んでたりして（笑）。
DEN　結局、店の外に出たのは、9時だった。
――外は、明るかった？
DEN　一般勤労者の方々が、会社に向かって歩いてた。
橘高　あれがいいんだよね。
DEN　みんなが着々と会社に向かって歩いている中、ヨレヨレになりながら帰る。「フグは、うまかったな」とかいいながら（笑）。
――え、おいしかったの？
DEN　いや、もうああなっちゃうと、何を食っても一緒なの。
橘高　それで、二人で仲良くタクシーに乗って、帰ったの。一応、出ていただいてありがとうということで、DENちゃんち経由で。
――最後まで、誰がいたの？
橘高　俺らとHIDEちゃんというメンツ。けんchanちゃんは5時頃に帰ったかな。
――でも、本当に橘高ちゃんもDENちゃんも、酒の席にはよくいるよね？
橘高　人のこと、いえないでしょ。
――すまん（笑）。
DEN　俺はもともと、酒自体が好きだからね。「飲もうぜ」とかいわれると、すぐに集まっちゃう。さすがに、ライヴの前の日だと、「今日は4時までにしてね」っていうんだけど（笑）。
橘高　DENちゃんの偉いとこはね、ちょうどその頃ってバイセクはフリフロの最中で、俺、そのことを知らないで誘ってすごく申し分けなかったんだけど、その日も朝の9時まで飲んで、それでちゃんとフリフロ行ったんだよね。そのあと、NAOと飲み屋であったら、「死にそうな顔をして、来てたよ」っていってた。
DEN　あの日は、寝ずに行ったの。寝ちゃうといけないと思って、家に帰ってからも飲み続けて、それでその勢いで行ったんだ。それで、スタジオ行って「昨日は飲んだよぉ。さっきまでなんだけどね」って（笑）。
――でも、この二人が最近まで、あんまり一緒に飲んでなかったというのも、不思議。
橘高　そうなんだよ。俺もそれが不思議でなんでかって考えたんだけど、きっとちょっと前までバンド・ブームとかでワーッとなってたからだと思うの。俺も他人のライヴに行けるようになったのってわりと最近だし、バンド・ブームが終わって本来のペースに戻ったからこそ、このセッションも実現したし、朝の9時まで飲めたと思うんだ。
DEN　でも、俺、ブームがどーのっていってワ～っとなってる頃より、今のほうがバンドやってて面白い。ツアーに行っちゃうといつも同じメンツで飲んでるし、他のバンドと交流するチャンスがあんまりないでしょ。だから、今はいろんな人と飲めて、すごく幸せ。
橘高　それで思うのはさ、ブームが終わったなんだといっても、俺らって残ってるじゃない。これは、いい酒飲めるよ。結局、今回のセッションのメンツにしてもそうだけど、この界隈の人たちって、今だに集まって飲んで騒いでるわけじゃない。世間がどうなってても、俺たちはこのままのペースでやってきたし、これからもやっていけるしさ。いい励みにもなるし、当然だったっていう自信にもつながるよね。あと、DENちゃんとなかなか遊べなかったもうひとつの理由は、プロデューサーが同じ人だったっていうのがあるのよ。
――ああ、是永さんね。
橘高　そう。だから、筋少のレコーディングが終わると、バイセクがレコーディングに入る。筋少がツアーから戻ってくると、バイセクがツアーに出かけるっていう感じ。
DEN　時間差攻撃（笑）。同じプロデューサーだと、そうなっちゃうんですよ。だから、是永さんを通して噂はいつも聞いているのに、なかなか会えなかった。
橘高　DENちゃんとは、同じプロデューサーだし、似たような環境だし、がむしゃらにやってたのも同時期だし、なんか同志的なものを感じてたんだ。だから、あのセッションまで親しくできなかったんだけど、前から知ってるような気がするんだよね。
DEN　僕も「会いたい、会いたい」って、ずっと思ってたんだ。でも、突然、飲みに誘うのも変だしね（笑）。
橘高　俺たちみたいな連中って、最初から「よぉ」って感じじゃなくて、一回目は「ど～も」って感じなんだよね。だから、DENちゃんとは二回目がそのセッションだったから、とっても良かった。
DEN　あんまり話をしてなくても、音を一緒に出すと「ああ、こんな感じか」ってわかるんだよね。
橘高　だから、音楽をやってると、口下手でも仲良くなれるんだよ。それに、音楽って、本当にキャリアとか年令の差って全然ないからさ。セッションやってるとき、俺は全員から何かを吸収してやろうと思ってるし、人にも刺激を与えられたらいいなと思ってる。
DEN　今回のセッションでは、俺がいちばん年下だったでしょ。けんchanちゃんなんか、僕は彼のバンドに入りたいと思ったことがあるくらいの先輩なんだけど、ライヴのときにはそんなこと思うのがいやでね。自分の持ってるものをバーンと出して、それで、「おまえ、いらないよ」っていわれるほうがいいし。出し切らないのは、やっぱりいやだった。だから、思う存分バーッとやったら、和気あいあいと出来た。
橘高　DENちゃんのそのパワーが、俺ら3人のケツを蹴りあげた感じが、すごくあるよ。俺らも、DENちゃんが「みんな先輩だから、僕は目立っちゃいけない」なんて思うやつだったら、セッションしても楽しくないもの。ライヴのときなんて、まさに「生きざま」のぶつけあいだったよね。俺、ア・ルージュと筋少以外、バンドをやったことがないから、そういう他人の生きざまを垣間見れる瞬間って、あんまりなかったんだ。それがさ、あのときは4人が4人とも、今まで歩いてきた生きざまとプライドを、バーンとぶつけあったっていう気がするんだよね。ちょっとでもひるむと、負けてしまう。
理想としては、そのぶつかりあったエネルギーが客席に全部伝わればいいなと思ってたんだ。ステージでつぶしあうことになったら、いやだなと思ってたんだけど、やっぱり、誰も負けなかったね（笑）。誰もが、「俺のことを見てほしい」って思ってたもの。あれは、さすがだね。
DEN　それが、俺にはすごく気持ち良かった。「この人をたてなきゃ」って思ってる人がひとりでもいると、全体のボルテージが下がっちゃうんだけど、みんなオリャーって前に行ってるでしょ。だから、何も気にすることなく、気持ち良く出来た。
橘高　最初はね、筋少のイベントだから、みんなが無理して俺に絡んでくれたりしたら、いやだなと思ってたの。でも、絡んでなんか、くれやしない（笑）。みんな、このステージは全部、俺の立ち位置だって思ってたみたい。
DEN　思うに、目立ちたがり屋が集まったからじゃないかな。
橘高　それで、みんな、それぞれのバンドを背負ってきてるんだよね。だから、すごい緊張感あったし、終わったあとも嬉しかった。
――橘高ちゃん、自分でヴォーカルをやろうとは思わなかったの？
橘高　え、それは……。ほら、HIDEちゃんはヴォーカル歴があるし。
DEN　俺、この前、チッタ（フリーウォルのお祭り）のイベントで歌っちゃったんだけど、やっぱり気持ち良かった。
橘高　そりゃ、気持ちいいよ。ステージの真ん中で、スポットライトを浴びていられるんだから。ヴォーカリストが、人格変わっちゃうのって、わかるような気がする。
――次にこのバンドやるときは、全員がヴォーカルじゃなきゃイヤだっていったりして？
DEN　4人でマイク持って、ステージの真ん中に立つ。それで、アカペラでも（笑）。
橘高　ヴォーカルねぇ。まあ、うちのバンドのメンバーが「橘高ちゃん、どうしても歌って」っていえば、考えてもいいな。
DEN　本当？　じゃ、歌ってよ、バンマス。
橘高　ただし、東京ドームでなきゃ。俺は歌わないからね（笑）。

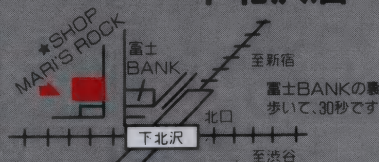
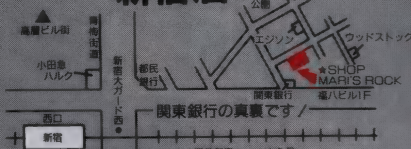
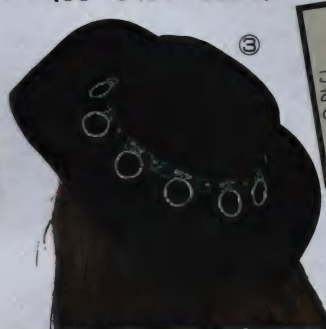
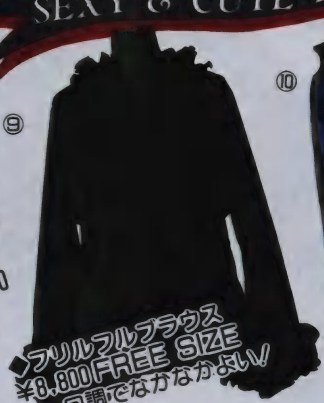
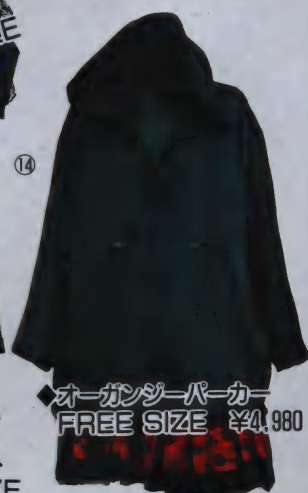
《筋肉少女帯バックナンバー》■VOL.1→橘高文彦インタビュー■VOL.8→橘高文彦ソロ・インタビュー■VOL.9→大槻ケンジ・ソロ・インタビュー

ライヴ・スケジュール　7月8日＝仙台イズミティ(小ホール)、10日＝札幌市民会館、13日＝福岡都久志会館、16日＝大宮市民会館、21日＝千葉文化会館、23日＝神奈川県立青少年センター、25日＝愛知勤労会館、26日＝広島アステールプラザ(中)、28日＝神戸フィッシュダンスホール、30・31日＝大阪御堂会館、8月10日＝盛岡AUNホール、11日＝青森クォーター、19日＝渋谷公会堂●問い合わせ先＝PCM(☎03-5273-0844)
BY-SEXUALライヴ・スケジュール　6月27日＝日比谷野外音楽堂●問い合わせ先＝ディスクガレージ(☎03-5704-3200)

REPORT: AKEMI OHSHIMA
PHOTOGRAPHY: MOTOI OHNISHI

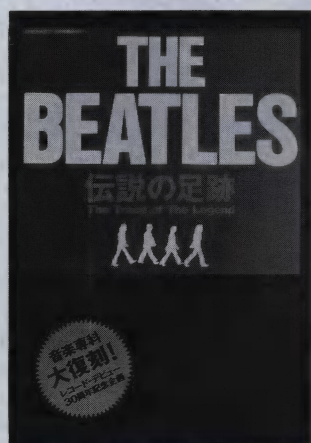
スーパースターは お化粧がお好きなバンド

場内はもう パニック状態だ!

橘高文彦(g)
HIDE(Vo)
DEN(b)
KENchan(ds)

SHOP
下北沢店
★SHOP MARI'S ROCK
富士BANK
至新宿
富士BANKの裏
歩いて、30秒です
北口
下北沢
至渋谷
〒155
東京都世田谷区北沢2-26-25
久保ビル1F（下北沢店）
TEL 03-3485-6907
アルバイトSTAFF・社員募集中!!
MARI'S ROCK
商品をおいて下さるSHOPも随時募集しています。
お気軽にお問い合わせ下さい！（03-3481-9639）
SHOP
新宿店
★SHOP MARI'S ROCK
福八ビル1F
関東銀行の真裏です！
〒160
東京都新宿区西新宿7-8-2
福八ビル1F（本店）
TEL.03-3363-2270
SEXY & HARDに
この他にも各種の商品をとりそろえてあります。カタログ希望の方は、上記のどちらかのお店まで300円分の切手を同封の上、住所・氏名を書いて、「カタログ希望SHOXX Vol.9係」までどうぞ!!
①
◆ノーマルぺっちんスパニッシュ帽
赤・紫もあります。 ¥4,800
②
◆1 Zipper ロングTシャツ
¥5,900 FREE SIZE
③
◆RING付ぺっちんスパニッシュ帽
¥8,800 FREE SIZE
他に赤・紫があります。
⑦
◆フリルブラウス
¥8,800
赤・黒・紫もあります。
SIZE FREE
④
◆ROSEポイントW・JK
¥19,800 SIZE:FREE
黒・赤・エンジもあります。
⑤
◆2 Zipper ロングTシャツ
¥5,900 FREE SIZE
⑥
◆エナメルショートパンツ
ノーマルタイプ¥4,800
サイド あみあげタイプ¥6,800
（M：63cm/L：66cm）
SEXY & CUTE FOR YOU!!
⑪
◆ノーマルレーススカート
FREE SIZE
（赤・黒・紫）
¥4,980
⑧
◆魔女帽 ¥3,900
⑨
◆フリルフルブラウス
¥8,800 FREE SIZE
ボレロ調でなかなかよい！
⑩
◆アンバランススカート
¥9,800 FREE SIZE
（紫・黒）
MAIL ORDER
お申し込み方法
◆必ず電話にて、商品の在庫確認をお願い致します。
◆商品は受付後、1週間から3週間でお届けします。
◆代金のお支払いは、商品のお届け時にお払い下さい。（代金引換です。）
◆現金書留でも受け付け致します。（商品代金＋消費税＋送料¥1,000を添えて下さい。）
◆サイズ変換・不良返品は、受け取り後、1週間以内にお願い致します。
◆サイズ変換・不良返品以外の商品返品は固くお断り致します。
◆送料は一律¥1,000です。
（輸入Tシャツのみ送料は無料です）
◆尚、上記商品に消費税は含まれておりません。
⑫
◆シースルースカート
¥3,980 FREE SIZE
⑬
◆3段レーススカート
¥3,980 FREE SIZE
⑭
◆オーガンジーパーカー
FREE SIZE ¥4,980

ビートルズ，レコード・デビュー30周年記念！

ARENA37℃5月号臨時増刊

THE BEATLES

伝説の足跡

『音楽専科』大復刻

＜内容＞

60年代
- 来日記事，フォト，ライヴ・レポート
- アルバム・リリース時のレヴュー
- フォトセッション，フォトレポート
- ニュース

70年代
- 特集記事
- 評論記事
- ソロ・インタヴュー
- 再結成関連記事

その他
- 広告復刻
- ザ・ビートルズ周辺年表

ロックの歴史はビートルズ誕生から始まったといっても過言ではないだろう。いまや伝説から神話へとなりつつある彼らの60年代から70年代の姿を幻のロック雑誌『音楽専科』を中心に増刊『ザ・ビートルズ栄光の足跡』，『ザ・ビートルズ・カタログ』，『ウイングス，幻の日本ライヴ』から精髄を抜粋。

★ 絶賛発売中!!
完全限定発売！

B5判　全196ページ

定価1600円（税込み）

問い合せ先◆㈱音楽専科社
〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F ☎03(3574)0201 FAX03(3574)8548

キリトリ線

雑誌注文書

●受注　年　月　日	●部数　冊	●担当者	●書店名
●書名　ARENA37℃5月号臨時増刊　THE BEATLES／伝説の足跡　定価1600円（税込）			
●あなたの名前	●TEL	●預り金	●出版社名 ㈱音楽専科社
●あなたの住所〒			

幻覚アレルギー

MOUTH TO MOUTH

ついに、あのふたりが動き始めた！その威力を思い知れ!!

ついに、ついに、あのふたりが動き始めた。"かまいたち"というバンドは、いたずらボウズの集団といったイメージが強かった。４人のメンバーの中でも、特にやんちゃなイメージが強かったのが、KAZZYとSCEANAだった。このふたりに、つい先日解散したベルゼルブのふたりが加わって結成されたのが、この幻覚アレルギーだ。ミニ・アルバム『MOUTH TO MOUTH』で、その威力を思い知れ！

INTERVIEW : YOSHIYUKI OHNO
PHOTOGRAPHY : SEIICHI KAGAYA

幻覚アレルギー

—いやはや、ついにこのおふたりのご登場と、なってしまったねぇ(笑)。

KAZZY「まあ、どういうワケか、そうなりましたねぇ(笑)。」

—ここのところは、どうしていた?

KAZZY「いや、べつに変わったことはないですよ。あっ、そうそう、オレついに歯医者に通い始めたんですよ。」

—ZIGGYの戸城クンといい、ミュージシャンっていうのは、休みにならないと、歯医者にいかないっていうのは、どういうわけなんだろうね?

KAZZY「そんなもんじゃないですか、やっぱりヒマがないから(笑)。」

—とりあえず、ふたりでやろうということになったのは、どういういきさつだったの?

SCEANA「なんとなく、そうなったみたいな……。まあ、おたがいに、やろうと思っていたことが近かったっていう。」

—それは、かまいたちにいた頃から、そういう方向性に気がついていたの?

KAZZY「解散が決まった後のツアーのときって、みんな仲が良くて、いい感じだったんだけど、そのときに〝こういう曲、かっこええんちゃうか〟って、話をしていて。」

SCEANA「そのとき、〝解散したら、コピーのバンドでもやろうか〟って、話をしていた。遊びでね。」

KAZZY「国内のバンドでも、ふたりとも同じようなバンドに影響を受けていたりしたから。」

—どういうバンドのコピーをやろうと思ったの?

SCEANA「それは、国内のバンドばっかり(笑)。」

KAZZY「ストリート・スライダーズとか、スターリン、マッド・カプセル・マーケットとか。幅広くやろうかと(笑)。」

—最初は、自分たちでオリジナルを作ってどうこうっていう気はなかったの?

KAZZY「そうですね。メンバーもいなかったし。やまちゃん(D. LEE)がセッションで、解散した後にライヴとかやっていて、オレらもライヴとかしたいなっていう感じで。」

—それじゃあ、メンバーを集めてから、ライヴをやろうと考えていた?

KAZZY「なにも考えてなくて、たんに曲を作って、ツレでドラムを叩いているヤツをスタジオに連れてきて、合わして叩いてもらったりしていた。」

—意見が合ったというところで、曲作りもふたりでやっていた?

KAZZY「そうですね。でも、最初はぜんぜん曲なんてなくって、シーナっちが何曲か作っていて。それをスタジオで、自己満足的に遊んでいたっていう感じだったんですよ。」

—どういう曲を作っていた?

SCEANA「ハードコアっぽい曲とか、カオスUKみたいな曲とか(笑)。」

—それが、去年の……?

KAZZY「10月よりあとで。それから、考えていた音を、なんとか形にしたいって思っていたんですよ。でも、能力不足でなかなか形にならなくて。それでも、20時間くらいスタジオにいて、だんだん形になっていって、最後の1時間くらいで、なんとか思っている音に近づいてきたかなっていう感じになったんですよ。シーナっちも、ちゃんと歌を歌い始めて。それが年末くらいだった。」

—そうやって、音楽をやる以外には、何をやっていた?

KAZZY「けっこう、ふたりはバラバラに動いていると思う。まだ、なんか解散直後と同じペースだから、それ以外にはなにもやっていないっていう感じで。」

SCEANA「ボクもダラダラとしていて、かまいたちの頃と変わらない生活をしてますね。」

—じゃあ、去年の暮れから、メンバー捜しのほうは、どうなった?

KAZZY「ところが、CDを作ろうという話になって。いよいよメンバーをどうしようかっていうことになったんです。最初、どうしてもメンバーがいなかったら、ベースも自分で弾きたいなと思ってもいたんだけど、それだとあまり音楽的にも広がらないし。

それで、友達でボクらの言っていることを、いちばんわかってくれる人にベースを頼んで。ドラムもそのベーシストのツレで。」

—それが、元ベルゼルブのTETSU(ベース)とKIMURA(ドラム)だったわけだけれど、そのことは隠していたよね?

KAZZY「やっぱり、ベルゼルブの解散とかがあって、ちょっと分が悪いかなという感じもあったから(笑)。」

—なるほど、幻覚アレルギーが、ベルゼルブ解散のきっかけだと思われたら、困るという?

KAZZY「まあ、そういうことですね。それで、ちゃんとCDのレコーディングに入る前に、デモ・テープを録ったんですよ。その頃から、幻覚アレルギーというバンド名はどうかっていう話になったんです。」

—誰のアイデアだった?

SCEANA「それがいちばん、響き的にもカッコイイんじゃないかと。」

KAZZY「どっちからともなく、言いだして。他にもいろいろと候補はあったんだけど、これがいちばんカッコ良かった。」

SCEANA「ジツは、ボクがアレルギー体質で、よく幻覚を見るんで、それをくっつけて(笑)。」

—でも、具体的な形もまだないうちに、レコーディングが決まっていたっていうのは、どういうことだったの?

KAZZY「レコーディングをすると、自分の力量とか表現力が、思いっきり明らかにされて、自分のいたらないところがリアルに出てしまうでしょう。だから、自分が今までやったことがなくて、これからやっていきたいと思っている音を録音して、試してみたいっていうのが、いちばんの理由でした。CDを作りたいと思った理由としては、もうそれだけって言ってもいいくらい。」

—実際にレコーディングに入ったのは、いつ頃だった?

SCEANA「2月の半ばで、それまでに曲をまとめるっていう感じで。」

—フル・アルバムじゃなくて、6曲入りのミニ・アルバムにしたのはどうして?

KAZZY「フル・アルバムを録るくらいの時間をかけて、これくらいの曲数を録ってみたかったから。要するに、時間をかけたかったんですよ。

他にも曲はあったから、フル・アルバムにすることもできたんだけど、曲にばらつきもあったし、アレンジも全曲が1本にまとまってなかったんで、とりあえずまとまった曲を、時間をかけて満足できるまで、録ってみたっていう感じですね。」

—それで、どれくらい時間がかかった?

KAZZY「いや、短かった(笑)。」

—フル・アルバムを作れるくらいの時間をかけたんじゃなかったの?

KAZZY「当初はそういう予定だったんだけど(笑)。10日くらいだったっけ?」

SCEANA「2週間くらいだったと思う。」

KAZZY「結局ね、なんやかんや言いつつ、時間が余ったんですよ(笑)。もし、時間が足りなかったら、もっとスタジオの時間を押さえようと話していたのに、予想外にスムーズにいったから。

なんか、雰囲気が気楽だったし、プレッシャーもなかったし。ボクがギターを録るときなんて、ミキサー・ルームで横になりながら弾いたくらい気楽でしたから。」

SCEANA「ボクはプレッシャーがすごくあったんだけどね。やっぱり、1発目に出すものだから、これで判断されるんだなっていうのが、すごくあって。だから、気分的には重かった。全体的には、うまくいったと思うけれど、個人的にはうまくいった部分と、いかなかった部分の両方があった。」

—詞の面で、かまいたちとは違う世界を書いたりはしなかった?

SCEANA「いや、別にそんなに変わりはないですね。思っていることを書いたっていう感じで。変える必要もないかなと思ったし。きっと、変わったところもあるんだろうけれど、そんな大きくは変わっていないと思います。」

—レコーディングまでに、歌詞は全部書き終わっていた?

SCEANA「書き終わってましたね。それもあって、レコーディングがスムーズにいったのかもしれない。やっぱり、デモ・テープを録ってからレコーディングしたぶん、すごくラクだった。」

—レコーディングで、いちばん凝ったところは、どういう部分だった?

KAZZY「あまり凝ったことはしていないんですよ。でも、1曲目の『SPEEDアレルギー』なんかは、ノイズっぽいギターを弾きたいと思っていたから、それに1歩半くら

ボクらの持っていた内面的な部分が出せたと思う。

《かまいたちバックナンバー》

■VOL. 1 →ロケーション・カラーフォト&個別インタビュー全14ページ特集■VOL. 2 →けんchan&SCEANA、KAZZY&MOGWAIスペシャル対談、カラー・グラフィックフォト全15ページ特集■VOL. 3 →かまいたち&LADIES ROOM爆笑座談会、スペシャル・ギグ競演レポート、カラー全14ページ特集■VOL. 4 →表紙・巻頭大特集、SCEANAロング・インタビュー、KAZZY&MOGWAI対談、けんchan&SCEANA10項目インタビュー他、カラー30ページ
■VOL. 6 →SCEANA&けんchanスペシャル対談カラー5ページ

〈ライヴ・スケジュール〉5月31日=新宿パワーステーション●問=バックステージ TOKYO (☎03・3226・7312)

MOUTH TO MOUTH

いは近づけたんじゃないかと思うんです。あとは、アコースティック・ギターを入れられたんで、良かったと思います。」
SCEANA「やっぱり、その曲の声なんかは、半歩前進っていう感じで、気にいってますよ。」
――サウンド的にパンクっぽくなっているけれど、それはふたりが最初から持っていた音楽性なの?
KAZZY「ボクらの持っていた内面的な部分が、出せたかなと思う。そのへんで、すごく満足しているところなんですよ。」
――レコーディングが終わったとき、どんな感じだった?
KAZZY「終わったときには、〝アーッ、クソッ!〟っていう感じで、自分にたいして歯がゆい思いがありましたね。頭の中で描いていたものがもっと良かったから、それに較べると、ちょっと……。」
――たとえば、かまいたちのファースト・アルバムを作ったときよりも、KAZZYクン自身も成長しているだろうし、理想も高くなっているから、歯がゆい思いをしたんじゃないかな?
KAZZY「どうなんでしょうね。自分自身も変わってないような気がするし、理想も変わっていないように感じるから、よくわからないんですよ。」
SCEANA「ボクは録り終わったとき、少し不満みたいなものがあったんですけれど、デモ・テープを録ったときはイマイチだったのが、実際にレコーディングしてみたら、けっこう良かったから、気にいっています。」
――アルバム・タイトルの『MOUTH TO MOUTH』って、どこから考えついたのかな?
KAZZY「その言葉は、曲を作る前からあったんですよ。」
SCEANA「これを、バンド名に持ってきてもいいかなって思っていたんですよ。それから、曲名にしようかっていうことになって。最終的に、アルバム・タイトルにしたほうがいいっていうことになったんです。」
KAZZY「なんか、単語のイメージが先にあったから、そこから想像してもらうのもいいなと思って。」
――〝くちうつし〟って感じのイメージを持ったんだけど、それが男と女がキスをしているんじゃなくて、海辺で溺れた人に、筋肉モリモリのライフガードが人工呼吸している姿が目に浮かんじゃってね(笑)。
SCEANA「それは、ちょっと違いすぎますよね、あまりにも(笑)。」
――〝こういうのが、やりたかった〟っていうのが、いちばん出ている曲はどれ?
KAZZY「ずっとっていうわけじゃなく、ここ1年くらいの間、やりたかった感じっていうと、やっぱり1曲目の『SPEEDアレルギー』なんかですね。ボクらがこのアルバムでやりたかったことの精神的なものが、いちばんこの曲に出ているかなぁって思うんですよ。だから……。」
SCEANA「ボクは5曲目の『メリーゴーラウンド〜東京プラトニック・ロマンス〜』なんかが、イメージしていたのに近いですね。あと、シャッフルっぽい曲がやりたかったから、そういうのができて、違った感じがしていいんじゃないかと思うんですよ。」
――かまいたちからのファンに、このアルバムがどういうものかということを、説明してもらいたいんだけれど?
KAZZY「自分では、幻覚アレルギーっていう言葉のイメージを感じさせるアルバムになったと思います。ハードな仕上がりだけど、ただハードっていうわけじゃなくて、ボクらなりのハードさっていうか、幻覚アレルギーっぽいハードさっていうのをかもし出しているんで、それを感じて欲しいですね。」
SCEANA「とりあえず、聴いてもらうことが先決ですね。誰かが買って、それを借りてでもいいから、1度は聴いてみて欲しい。あとは、なにも言いません。」
――メジャーっていうのは考えていないの?
SCEANA「それは、幻覚アレルギーをかってくれるところがあれば、メジャーでやっていってもいいと思っています。」
KAZZY「曲を作ったりっていう部分では、インディーズもメジャーも、そんなに変わりはないんだけれど、やっぱりレコーディングの規模とか、段取りを決めたりとかいうところで、メジャーだとボクらの労力が少ないでしょう。その分、音楽だけに打ち込めるから、メジャーでやりたいとは思いますね。」
――ツアーはいつからやるの?
KAZZY「5月からやるんですよ。5月の後半は、新潟とか札幌ですね。ちょっとヘンタイちっくな、わけのわからないライヴにしたいなって思って。〝いったい、どこがいいんだ?〟っていわれるかもしれないけれど。」
SCEANA「楽しめるライヴにしたいと思っているし、カヴァーも何曲かやるかもしれない。」
――かまいたちのカヴァーをやったりして?
SCEANA「かまいたちは、かまいたちのメンバー4人でやるのがいちばんいいでしょう。だから、あえてやる必要もないでしょう。それ目当てで、幻覚アレルギーを観に来られても困るし、そんなことをしなくても、きっと楽しめるライヴになるから、だいじょうぶですよ。」

ALUCARD

LONDON AFTER MIDNIGHT

昨年９月のかまいたち解散以来いよいよ D.LEE モグワイ改め D.LEE が本格的に始動。元ロージー・ブッシーズの AKIROU と新バンド ALUCARD(逆から読むと…)を結成、サポート・ドラムに元 WOLF の Mr.HORIE を迎え、1st アルバム『LONDON AFTER MIDNIGHT』を発表した。そしてこの度、元 HARLEM DEADS の HIROKAZU がギタリストとして正式加入、ますます目が離せない ALUCARD だ。

INTERVIEW : YŪSUKE KATŌ
PHOTOGRAPHY : SEIICHI AOYAMA

今はバンドがやりたいし、バンドが楽しいからやってるんだ

LtoR➡Mr.HORIE(Ds), D.LEE(B), AKIROU (Vo), HIROKAZU(G)

――まずはもう何度も聞かれてるとは思うけど、アルカード結成のいきさつを。

D・LEE（以下D）「どうやったっけ?」

Mr・HORIE（以下Mr）「何度も答えてるんやろ（笑）。」

D「AKIROUとは（かまいたちを）解散する前から友達で。それで好きな音楽がよう似てたから『一緒にやりましょか』て。」

AKIROU（以下A）「で、動き出したのが去年の12月ぐらいからですね。」

――共通して好きな音楽は何だったの?

A「イギリスのパンクを中心に、幅広く、ポップな物で共通点が多かった。」

――じゃあこの二人でやると決めた時点で既に出て来るであろうサウンドは見えてたと?

D「全然(笑)。今でも見えてない(笑)。」

A「一応『こんなんしよか』みたいな感じでいろんなバンドを挙げて曲を作り始めたんですけどね。」

――ということはバンドのトータルなコンセプトよりも1曲1曲ずつ仕上げて行ったと?

A「ていうか、別にアルバムにトータルなイメージがなくて、入ってる曲の感じがバラバラでもいいんじゃないかという考え方だったんですよ。」

D「ロカビリーくさい物もして、ポップな物もしてっていろいろバラバラなのを組み込んだっていう感じなんですよ。
　で、1曲めのインストの曲は去年からあったんですけど、それ以外の曲は今年に入ってから作ったんです。年末・年始はテレビばーっか観てギターに触らなかったんで(笑)。」

A「7日過ぎからですね、ちゃんと曲を作り始めたのは。『やらなあかんな』って(笑)。」

――じゃあ、かなり焦って作ったと?

A「一応焦りはしたんですけどね（笑）。」

D「気持ちは焦ってるんですけどね、手の方が動かないんですよ、なんかテレビの方にフラッと行ってしまって（笑）。
　スタジオに入っても構成とか覚えてなくてね、『どないなんのやろ?』とか思ってたんやけどね、なんとかHORIEさんのおかげでね（笑）。」

A「HORIEさんがちゃんと（曲の構成を）書き留めておいてくれたっていうのが助かりましたね（笑）。」

――サポートなのに実はHORIEさんが一番大変だったと?

Mr「ボクは今まであんまりこういった感じの音楽やったことがなかったんで、わりと手数でごまかすみたいな感じのドラムだったんで、また違った難しさがありましたね。これってシンプルでしょ?　シンプルな中にノリを出すのが難しかったですね。」

――曲を聴いたときの印象はどうでした?

Mr「いろんな曲があって面白いかなと。ポップな部分はすごくポップやし、ハードな部分はすごくハードやし、ヘンな曲もあるし(笑)。
　これからどれをメインにして行くのかっていうのはボクにはわからないけど、1作めやしいろんな方向性っていうか可能性が出てると思うんでいいと思いますけど。」

――希望としては今後どれをメインに?

Mr「ヘンなの（笑）。でもボクの方も全然把握せんとレコーディングに入ってったんですけどね（笑）。」

――それで出来ちゃう物なの、CDって?

D「どうなんでしょうねぇ（笑）?　きっとダメでしょう（笑）。」

A「出来上がってジャケット見たらPCエンジンかと思ったもんな（笑）。」

D「このアルバム・ジャケット、PCエンジンのソフトみたいでしょ（笑）?」

A「『ドラキュラの伝説』とか（笑）。」

――（笑）。で、バンド名はそのドラキュラから来てるんだよね?

D「別に深い意味はないんですけど、聞こえがええかなと思って。」

A「挙げたのが知らん間に『ロストボーイ』とかバンパイア映画的なのがすごいあって、そっから段々選択してくような感じで『これが一番カッコええんちゃうけ?』って。」

――でもこの名前からイメージするサウンド、やっぱりヘヴィメタル系だと思うんだけど。

A「歌詞にはちょっと（ドラキュラ的・オカルト的なイメージを）考えたりしたんですけどね、3曲ぐらいは。ただそれだけであんまり気にせぇへんかったなぁ。」

D「音自体はそんなん何も考えんと、聴きやすーい物を作ったつもりなんですけどね。」

――そのギャップを狙った、みたいな?

D「狙ったゆうか、基本的にポップが好きやからね。」

A「出来た物がポップになったゆうだけで。
　″アルカード″逆から読んだら″ドラキュラ″でサウンドもイメージと逆という(笑)。」

D「うまいなぁ（笑）。」

――で、今回HIROKAZUが正式にギタリストとしてメンバーになったわけだけど。

A「このアルバムでは彼は弾いてないんですけど、昔一緒にバンドやっててこういう曲調には彼がいいんじゃないかな?と思って。とりあえず関西人やし（笑）。」

――それが基本（笑）?

D「そうですね（笑）。」

――音楽性よりも出身地（笑）?

A「とりあえず実家が印刷屋やから、ステッカー刷るのも安く上がるし（笑）。」

**――それは重要なポイントだよね（笑）。ステッカーやポスターの印刷代とかってバカにならないもんね（笑）。
　昔HIROKAZUが、AKIROUと一緒にやってたバンドって、どんなサウンドだったの?**

HIROKAZU（以下H）「ロックンロール・バンドですね、よくいえば（笑）。」

A「形的にはグラムでしたね、めんたいロックっていうか。ボク柴山（俊之、博多の伝説のバンド、サンハウスのボーカリスト。現ルビー）さんとか昔から好きですからね。」

H「ボクもヘヴィーメタルとかあんまり知らないんで。」

――で、実際にアルカードに入るということになってどう?

H「別に入るからどうっていうことはなくて好きなことしようかなと。このバンドに合わせようというのをしてしまったら、ボクのギターが無くなってしまうんで。」

A「あったんか（笑）?」

H「いや、考えたことはない（笑）。」

――（笑）。でもやっぱりユニットよりバンドっていう考え方なのかな?

A「ええ。このアルバムはこの二人（D・LEE&AKIROU）っていう形になってますけど、これもバンドと捉えて欲しいです。」

――例えばソロ・アルバムを作るとかは考えなかったの?

A「それは出来るもんやったらなんぼでも作りますけどね（笑）。
　だから別に出来たらなんでもやっていいと思うんですよ、D・LEEがベースのソロアルバム作っても。でも今はバンドがやりたいし、バンドが楽しいんでやってるんですよ。」

――なぜそこまでバンドにこだわるんだろう。

D「一人ではなんにも出来ないですからね。それに一人やったらツアーとか行っても面白くないでしょ?　夜一人でビデオ観るとか出来ひんから（笑）。
　やっぱその辺が、バンドやったらいろいろタッグ組めるし(笑)。」

A「ギャグも飛ばせるしな（笑）。」

――でも女の子を独り占め出来るよ（笑）?

A「そんなことしませんから（笑）。」

D「ボクたちそういうことしませんから、その辺はひとつ誤解のないように（笑）。」

A「今回かてな、HORIEさんが女の子連れて来ただけやもんなぁ（笑）。」

Mr「おーいっ（笑）!」

〈ライヴ・スケジュール〉6月21日＝大宮フリークス●問＝バックステージプロジェクト（☎048・883・2711）

SISTER'S NO FUTURE

Live At Shinjuku-Alta '92.5.3

REPORT:TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY:MOTOI OHNISHI

例え周りに嫌われようと、何を言われようと、ロック界に革命を起こす!!

結成以来、何かと話題を振りまき続けているSISTER'S NO FUTUREの2人。さて今回はゴールデンウィークの真っ只中である5月3日に、新宿アルタの2F特設ステージにてパフォーマンスを繰り広げてくれた。また、7月14日には川崎クラブチッタにプールを特設してのパフォーマンスライヴを行ったり、7月21日にはシングルを発売したりと、今後の展開も続々と決まりつつある。そんな彼らの現在の心境を、その日のパフォーマンスの模様を追いながら紹介してみたいと思う。

5月3日ー14：00。新宿アルタ前。メンバーが楽屋入りした午後2時には、既にステージ前の歩行者天国になっている道路には、沢山のファンの子達が詰めかけ、警備員とファンの間で押すな押すなの問答が繰り広げられていた。そんな全身黒づくめのファンの子らの様相を、訝しげに見る通行人達。やがてその黒い波は、時間を追うに従って大きく膨らんでいく。しかもそんな彼女達に興味を示した通行人達や、これから何かイベントが始まるのかと興味を持った人達が、ステージ前を中心に放射線状に人垣を作っていく。そうそう、中にはSISTER'S NO FUTUREのステージの模様を撮ろうと、報道陣に混じって多数のカメラ小僧も押しかけていた。

15：00。やがてスタジオアルタ2F特設ステージにて、アルタ提供の番組『ウィークエンド情報局』がスタート。実はSISTER'S NO FUTUREは、この番組にゲスト出演する為に呼ばれていたのである。

路上では、多数のファンの子らが2人に向かって大声で声援を送っている。そんなファンの興奮した様相を見て驚愕しながらも、淡々と番組を進行していく女性キャスター。

15：15。SISTER'S NO FUTUREのプロモビデオ『SONIC BEAT』が流れ出すと同時に、興奮し騒ぎだす観客達。その後CMを挟み、CO_2がステージ上を覆う中、2人が登場してきた。曲は『CLASH&CLASH』だ。

KEN-CHAN「思えば昨年のゴールデンウィークは入院してて、一人でベッドで寝てて寂しかったですからね。だから1年後のゴールデンウィークには、こうやって何千人ものファンの子らの前に顔を出せて、ホンマ僕は幸せ者ですよ。だから今日は全員の顔を覚えていこう思て、端から端までしっかりとみんなの顔見てたからね、僕は。」

TOMMY「そう、KEN-CHANいきなりマイク持って喋り出したかと思たら、入院してどうのこうの言い出してな。しかも帰ってきたら目ぇ赤くして泣いてんねん。最初は横からチャチャ入れようかな思ったんやけど、感動的なシーンやから邪魔しちゃマズいかな思て。」

そう言えばKEN-CHANは、SISTER'S NO FUTUREでライヴを行う度に感動して、ステージ上で泣いている。

TOMMY「インク鈴江の時はバラードで泣いてたし、チッタの時は泣きかけてポカリスウェットを頭からかぶって誤魔化してたし。それで今回のMCでの涙やろ、もう3連覇やねん。だから次のチッタのライヴの時に、KEN-CHANがプールに顔つけたら、泣いてるってことだと思ってもらってもえぇよ。」

と突然、TOMMYちゃんが次なるライヴの予告を口ばしってしまったので、レポートの途中だが、次回のライヴの報告をしておこう。実は7月14日に川崎クラブチッタでSISTER'S NO FUTUREの次なるパフォーマンスが行われる。しかも今回の演出は、チッタのホール内にプールを特設し、その中でライヴを行うというとんでもないパフォーマンスなのだ。

TOMMY「チッタの客席にプールを作るんですよ。しかもその中と後方にステージを作って、そこで演奏するという。で、お客さんはプールサイドからステージを見るという感じになると思います。」

まぁ具体的な内容はこれから詰めていくという事なので、そのステージの模様は追って報告していきたいと思う。では再びアルタのパフォーマンスの報告に移ろう。

やがて『CLASH~』の演奏が終わり、再びCMを挟んで、今度は2人のデュエットナンバーである『NEVER SAY DIE』が演奏された。ステージ前の手すりに足をかけ、前につんのめりながらシャウトしまくる彼ら。そんな2人の興奮した様相に拍車をかけるかの如く、手を振りかざし声援を送る観客達。

TOMMY「アルタの人が言ってたんやけど、なんかこの日は薬師丸ひろ子のイベント以来の動員記録らしいんですよ。」

――そういえばTOMMYちゃんて高所恐怖症の気が多少あるんだよね。あの高い所で歌ってて怖くなかったの?

TOMMY「最初は怖いかな思てたけど、もう勢いで歌ってたでしょ。で、歌い終わって手すりの所まで行って下を覗いたんやけど、まぁ余裕かな思て。」

KEN-CHAN「実はあの手すりが丸くなってて、勢いで足をかけたらツルッて滑りそうになってしまったんですよ。でもね、あれだけのお客さんが見に来てくれてたでしょ。だからもう歌ってるうちに頭の中がパーッと白紙の状態になって。もう足を骨折してでもいいからダイビングしたいと、ホンマに思いましたからね僕は。」

TOMMY「でもな、そういうKEN-CHANも、4~5回目くらいに手すりに足をかける時は、ソッと足を置いて、足下確認してから歌ってたのを、僕は見逃しませんでしたからね。」

今回のステージは、演奏の間毎にCMが挿入されたり、PAの出音の異常な劣悪さで、2人の歌どころか、演奏さえもマトモに聞こえないという、最悪の状況であった。とはいえ、3曲目の『READY STEADY GO』ではTOMMYちゃんがギターを弾いたり、途中のインタヴューコーナーでは、2人のボケと突っ込みを披露してくれたりと、彼ら自身の意気込みと、楽しんでる様は見てる側にも充分伝わってきていたのではなかろうか。

KEN-CHAN「最後の曲に行く前に今後の予定を喋ったんですけど、その時にアルタのスクリーンに7月14日のチッタの告知とか出てたんですよ。で、僕が〃『今度はプールやぁ』〃ってMCで言ってんのに、みんなスクリーンを見てるか、その時に舞い上がっていった沢山の風船をおっかけてるかで、誰も聞いてくれてなかったんですよ。もう僕は悲しかったわ。」

そうそうKEN-CHANちゃんの話に出た風船じゃないが、この日もお馴染みのCO_2を筆頭に、巨大なバルーンが観客の前へと転がっていったり、アルタ前から飛び出した沢山の風船が、ビル風に吹かれながら空高く舞い上がっていったり、ラストナンバーの『SONIC~』ではテープ弾が発射されたりと、番組のゲスト出演という形でのパフォーマンスとはいえ、しっかりと見せ場を披露してくれた彼ら。

そんな7月のパフォーマンスの予告的な意味あいを持ったこの日のステージ。では最後に今後の各自の予定と、気になるSISTER'S NO FUTUREとしての今後の展開を聞いておこう。

TOMMY「COLORとしては、6月発売予定で12曲入りのアルバムを現在製作してます。で、アルバムが出たら全国ツアーも演るんじゃないかな。」

KEN-CHAN「最近は犬を飼い始めて、ズッと家で子守ばかりしてます。まぁ肝心のバンドの方は、未だメンバーが決まってないので、それは焦らずゆっくりと演っていこうかなと。それとライヴハウスでの演説会も相変わらず演ってますし、ANTI-FEMINISMとしてのライヴも入ってますから(7月3日ーKEN-CHANバースデーライヴが目黒鹿鳴館で行われる)。とにかく僕は、例え周りに嫌われようと、何を言われようと、ロック界に革命を起こそうと思てますから。」

TOMMY「なんだロサンゼルス燃やすんじゃないんだ(笑)。

でSISTER'S NO FUTUREとしては、7月14日のチッタでのプールライヴと、7月21日にシングルを発売するのが今の所正式に決まってます。ちなみにシングルはポップな曲とゴリゴリの曲とのカップリングになりますから。それと今、パフォーマンスばかりを集めたビデオも作ろう思って、今年頭にやったホコ天等のいろんなパフォーマンスライヴの模様も収録してるし。セカンド用の曲も殆ど出来上がってるので、レコーディングの日程が決まれば、即レコーディングしたいとも思ってるし。それに前から言ってるブタも、今度はもっとデカいのを登場させたいと思ってるんで。だからきっと、あのブタが大きくなった頃には、最高のパフォーマンスを披露出来るようになると思いますから。」

優朗（Vo）

VISUAL & HARD SHOXX INVASION

ショックス連続企画 第10回

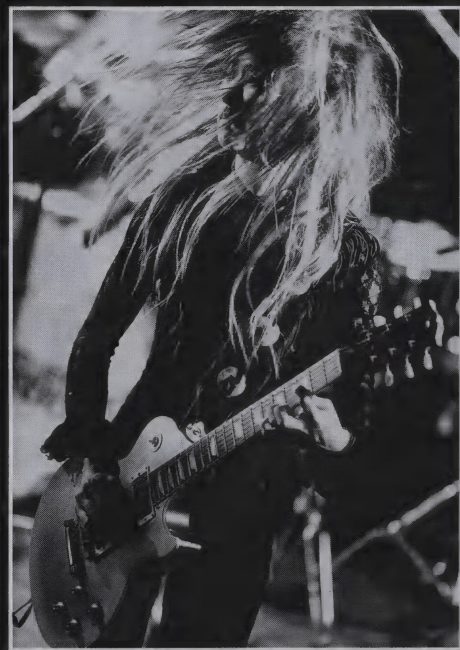
ヴィジュアル&ハード・ショックス・インヴェイジョン

INTERVIEW : TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY : MOTOI OHNISHI
（AT INKSTIC SUZUE（'92.4.19））

様変わりする自分を、忠実に映す鏡――。

OTHERSIDE

これまでに『Waters of Forgetfulness』と、『RIDE AN ANGEL'S HAIR』をリリースしているTHE OTHERSIDE。実は、主要都市では既にワンマンで多数の観客を動員するまでに成長してる彼らが、5月25〜26日に目黒鹿鳴館で、自らの企画による2DAYSライヴを行う。そのライヴに込めた彼らの思いとは。そんな彼らの心境を、5月25日発売のオムニバスCD『OPERATION "Z"』に収録したナンバー『Sub Rosa（Perfect Ve.）』の話を挟みつつ聞いてみた。

KNOB（G）

――最近バンドのテンションもかなり高くなってきてるんじゃない？

KNOB：うん。過去最高って感じ。しかもまだどんどんテンションが高まってきてるし。

優朗：ただ、爆発するテンションってわけじゃなくて、自分達のテンションに無限のものを感じると言うか。もっと自分達は凄い事が出来るんじゃないかという自信を、最近持てるようになってきたんです。

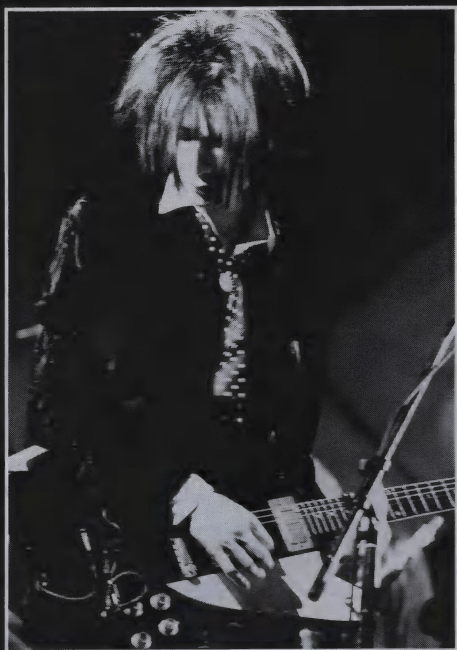
――バンドとしては、今どの辺に一番ポイントをしぼって演ってこうとしてるの？

優朗：実はこれまでにも作品の連続的なリリースや、ツアーやイベントへの出演等々、連続的な仕掛けの中で勢いだけは絶対に殺さずにと演ってきたんですよ。当然その勢いを止める気は毛頭ないんですけど、これからはもう少しバンドを結成した時の様な原点に立ち帰った所で演っていこうかなと思ってます。

――その原点というのを、もうチョット具体的に言ってもらえれば。

優朗：僕がステージで提供してるのは、SEXのシミュレーションなんですよ。つまり俺達が持ってるイメージや伝えようとするテーマというのは、実は物凄く抽象的なものなんです。ただ、それを音楽という形態でより解りやすく提供していく為にはどうするか。それが物凄く官能的なメロディとビートの中で、俺達の気持を歌っていくことかなと。

だからもしSEXを崇拝する宗教があるとしたら、僕はそこで教祖様になりたいなと思ってる。そういうSEXのような行為を通して伝えたい思いというのは、女の子なら一番良く理解してくれるかなとも思ってるし。それがアザーサイトとしての基盤を成してるっ

て感じなんですよ。

HAL：マジで？ついてけねぇよ俺達（笑）。

―例えば自分達でバンドのカテゴリーを作っていこうとかは思ってないんだ。

MIST：と言うか、アザーサイドって一つのスタイルを求めて演ってるバンドじゃないから。

RYO：例えば他のパートが気にいらないフレーズを弾いたとしても、僕達はその演奏を辞めさせようとはせずに、そのまま進行してしまうんです。で、気がついたらいつの間にかその演奏が普通になっちゃうんですよね。

MIST：臭いギターソロを弾いてても、いつの間にかそれがなきゃいけなくなってたり。

―言うなれば、自然な流れに身を任せてるって感じなのかな？

HAL：みんな人に言われるよりも、自分の中から出てきたモノの方が正直な答えだと思って演ってるから。

優朗：それに僕達ってみんな音譜が読めないんですよ。だからこそ、例えばウェーバーみたいな楽典の中から音楽を創造している作家に俺達が対抗しようと思ったら、俺達はもっと感覚的な作り方をしていくしかないんじゃないかなというのを凄く感じてるんです。

KNOB：つまり感覚的な面でピッタリ会った時に一番いい作品になるというか。例えば5人がバラバラに演ってても、その波の頂点がピッタリと会えば、すごくいい作品が出来上がるだろうし。逆に5人のテンションの波が全く会わない時は、どんなに演奏がしっかりしててもいい結果は出ないだろうし。

―言うなればアザーサイドって、何かに向かって進んでいくというわけではなく、色々と試行錯誤していきながら、今の現状を築き上げていったという感じなんだ。

KNOB：そうですね。

じゃあこれまで出した2枚のアルバムっていうのは、そのバンドとしての形を作っていく中でのプロセスをまとめてきた作品って感じなのかな？

優朗：そうですね。だから作品自体に完成形を求めないって言うか。それ以前に、アザーサイドって完成形を求めていくタイプのバンドじゃないと思うんですよね。確かに昨年は2枚の音源を発表したけど。実は裏を返せば、楽曲としての完成形を求めてないからこそ、ファーストインスピレーションで生まれてきたものの輝きを一番重要視し、その段階で次々と音源を録音しちゃったんです。だから後から聴くとその作品が、自分達の中では凄く稚拙だったりもするんですけど。でもそこが俺達のスタートであって、そこをますリスナーに聴いて欲しいなと思って。しかも、その後にライヴなり一定の時間なりをリスナーと共有する事によって、様変わりしていく俺達の音楽を、今度は一緒に分かちあえたらいいなと思って。

KNOB：音源は、あくまでも基本みたいなもので、それが決してライヴで同じように演奏されるとは限らないんです。

優朗：つまり、時間と共に曲も成長してるんですよ。だから俺らはその過程を見せていきたいなと思って。

―で、5月25～26日と鹿鳴館で2DAYSを演るわけだけど、それって今のアザーサイドが進んできてるプロセスの中での節目って感じなのかな？

MIST(G&Kb)

THE

HAL(Dr)

優朗：やっぱ日本人だから、節目節目が必要なんですよ。それに昨年1年間は、そういうリリース・ラッシュの中で自分達を見せていく事に明け暮れてた時期だったんですよね。そこで影響を受けてきたものが、今年に入ってから物凄くバンドの中に反映されてきてるなと感じてるんです。だからこそ、昨年から今年前半にかけてのアザーサイトを総括したいなという意識が凄く強くて、今回の2DAYSを思いたったわけなんです。

しかも俺らはその思いを1日じゃ表現出来ないから2日間のメニューに分けて、1日目を『GENTLE DAY』として静の部分を強くアピールし、2日目を『RADICAL DAY』と分けて動の面を強く表現していこうと思ったんです。しかもそれはまた、これから少しずつバンドの動向を変えていく次なるステップを求めたアザーサイトに対しての序章でもあるんです。

HAL：だからこそ、このライヴでは、未発表の曲から通常のライヴでは出来ない曲、そして昔からの曲までと、アザーサイドの歴史の全てを見せていこうと思ってるし。

―じゃあ、この2DAYSを演る事によって、自分達の原点にも立ち帰るし、また同時に新たなプロセスを見つけだしていくのかも知れないしと。

RYO：ええ。そういう期待感を俺ら自身も持ってるし。言うなれば自分達自身に対しての挑戦みたいなものですよね。

―なるほどね。でも実際その後の展開も色々と考えてたりもしてるのかな？

優朗：実は今年も7月にインク鈴江でジム・モリソンの追悼ライヴをやります。しかもこの日はアザーサイドのワンマンと言いつつも、演奏は全てドアーズのカバーばかりですから。またそのライヴを皮切りにツアーを演って、8月からは毎月ロフトでシリーズワンマンを行っていく予定です。

―そういえばZazzleからリリースされるオムニバス『OPERATION"Z"』にも『Sub Rosa』という1stに収録されてた曲を入れてるよね。

優朗：そうなんです。実は今回『Sub Rosa』をパーフェクトバージョンという形で収録したんですよ。この曲もまたファーストインスピレーションのみで収録した曲だから、そのレコーディングした時点から、1年経った未来の姿という事で、聴いてる人に捉えてもらえたら幸いですね。

―なるほどね。では最後にシメの言葉をお願いしようかな。

優朗：僕達にとってアザーサイドというのは、様変わりしていく自分を凄く忠実に映しだしていってくれる鏡みたいなものなんですよ。そんな様変わりしていく俺達の姿を、5月25～26日のライヴでは見せる事が出来ると思うので、その覚悟で見にきて欲しいです。

《ライヴ・スケジュール》5月25・26日＝目黒鹿鳴館、6月2日＝LOVE DUST／HEAVENS DOOR（優朗's UNIT）、18日＝目黒鹿鳴館、21日＝徳島スエヒロプラザホール、23日＝高松クラブハウス、25日＝新宿ロフト、7月17日＝インクスティックスズエファクトリィ、8月3日＝新宿ロフト●問＝各ライヴハウス

RYO(B)

アルバム『殺意』の発売を記念して行われたGilles de Raisの全国ツアー。1月28日の大阪ミューズホールから3月17日の横浜7thアベニューまでの合計11本、1ヵ月半の長期に渡って行われた今回のツアーの模様を振り返りながら、彼らにライヴで培った手応えを語ってもらった。

ところで今回はJACKがインタヴューだけ欠席してますが、あくまでも諸事情による欠席なのでご心配なく。

INTERVIEW:TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY:YOICHIRO NAKAMARU

Gilles de Rais

もっともっと、ヘヴィになりますよ。

――今回のツアーを終えての手応えを、メンバー自身はどう捉えてるんですか?

JOE：やっぱり『殺意』が出たことによって、東京でもホールがSOLD OUTになったし。しかもライヴでお客さんの手応えがダイレクトに伝わってくるようになりましたからね。やっぱりそれまでのライヴって、君らはお客さんだ、俺らはライヴを演る側だという、なんか一線があったような気がするんです。だからお前らノラへんのならそれでも構へん、俺らは勝手に演るわみたいな所もあってんけど。でも今回のツアーではお互いにいいコミュニケーションがとれるようになりましたからね。

――やはりアルバム1枚を出した効果って、かなり高かったんだ。

JOE：そうですね。しかもアルバムが出る前までの約1年間、『殺意』の曲を中心としたライヴを演ってたし。それが音源になって、こういう曲やったんか、こういう歌詞やったんかとわかったのが大きかったみたいですね。

――じゃあアルバムを出して、客層がガラッと変わったわけでもなく。

JOE：確かに新規の客もついて動員は増えましたけど。でも、うちのバンドは昔からコツコツと演ってくバンドでしたからね。実際コツコツと演ってきて、着実に動員も増えてきましたし。俺ら自身は状況にのっかってバーンと上がって行く言うのもなかったし。ほんまチョットずつ固めていって、それでアルバム出したら、そのチョットがええ感じで増えていったかなみたいな感じやな。

――やはりアルバムを出したおかげで、演る側もやりやすくなったっていうのは、すごく感じてるんだ。

DEE：そういう部分はありますね。実際にライヴで一緒に歌ってる客もいますし。しかも俺ら自身も、アルバムを聴いてファンになってくれた子達が、また来たいと言ってくれるようにと頑張ってるし。今までのお客さんに対しても、更に良くなったステージを見せていくことによって、お客さんとステージの境界線を無くして、一つになって盛り上がれるようにもなってきてますから。

――やはりバンドのテンションとしても、今が一番いい時期って感じかな?

JOE：かなりいい状態です。しかも今回はツアー自体がゆったりとしてたから、一回ライヴを終える毎に、メンバー内でも色々と考える事が出来たんですよ。だから、しょっちゅうミーティングもしてたし。しかもローディやスタッフとのチームワークも、更に深まってきましたからね。

――やはり毎回のミーティングは、バンドの成長にもかなり繋がってきてるんだ。

JOE：それはあります。それに俺って、こうみえても神経質な方なんですよ。だからメンバー内でお互いに言い合って確認しあったりもしてましたし。そういう面ではすごくいいツアーでしたね。

SINN：バンド内の結束力にしても、昔と全然違ってきてますからね。なんかホンマにええように固まって、バンドとしてのゆとりも出てきたし。しかも、そのゆとりが直接音に跳ね返ってきてますから。

――例えば『殺意』を作った事によって、バンド自体の音の再確認が出来たというのもあるのかな。

SINN：それはあります。プレイ面では特にそうなってます。

JOE：以前『DAMNED PICTURES』を出した時も、こんなんで良かったのか俺らはとか思ってたし。やはり昨年1年間の地道なライヴ活動が、結果的にアルバムのクオリティに繋がったんで、ホントに良かったと思いますね。

――アルバム自体もコンセプト的な作品だったもんね。

JOE：けっこう起伏に飛んでるでしょ。13曲入ってて56分なんだけど、それが56分も感じない出来に仕上がってたし。メロディや詞にしても今回はこだわって作りましたから。

――やはりアルバムを作る前と後では、バンド内としても、何処かしら成長を感じたりもしてるのかな?

JOE：バンド内というよりも、客が過激になってきましたね。こちら側も客にノセられるということはないんやけど、その場の客の勢いって、ごっつうこっち側の気持ちに跳ね返ってきますから。

SINN ホント今回のツアーって、客の勢いが俺ら自身に返ってくるという手応えがすごく感じられたんですよ。いわゆる客との一体感って言うのかな。

――客との一体感って、今回のツアーが一番手応えとして感じられたんだ。

JOE：それはあります。だからアンコールが終わった後に「ありがとう」って素直に言えたのも、今回のツアーが初めてでしたからね。それまでは、そういう感謝の挨拶なんて客に言ったことなかったんだけど、今回は気持ちいいっていう顔も素直に出来たし。それに前のSHOXXのインタヴューで、俺が「アイラブユーは歌えません、安楽死です」って言ってたけど、でもその臭い「アイラブユー」っていうセリフが、今は素直に言えますから。

SINN：ホントにその素直な気持ちが、今はバンドを取り巻く状況の全部に出てきてるんですよ。

――そういった面では気負いは全然ないし、気取るつもりもないし。

SINN：ないですね。ホンマ何でも自然に出来るようになったな。

後列左から、JACK(G)、JOE(Vo)、SINN(Ds)
前列　DEE(B)

——しかも今回はホールのワンマンも成功させてるしね。

JOE：やっぱ気持ちいいですよ。確かにホールコンサートということで、構成立ててしっかり見せないかんという面では大変やけど、人間大変やったら大変なだけ、それを演り終えた時の満足感いうのがホンマに気持ちいいですから。それに1時間半くらいのステージやったんけど、俺らとしては30分くらいのステージかなという感覚やったし。

——じゃあホント今回のツアーというのは、ジル・ド・レイにとっても一番いい状況を得られたツアーだったんじゃないのかな。

JOE：そうですね。やっぱ今が一番旬でしょ（笑）。

——やはり今回のツアーを大成功に収めたことによって、更にバンドとしての欲求も強くなってきたんじゃないの？

JOE：今度は夏頃にまた大きい所をと、既に考えたりもしてますから。

——ところで今後、東京に拠点を構えて演ってこうって気はないのかな？

JOE：今はまだないです。別にチョット人気が出たからいうて、ホイホイ東京に出てきたくはないし。その前に俺らは全部をしっかりと固めていきたいし。だからレコード会社も事務所も一切合切決まってからでないと、東京に住もうとは思いません。中途半端な状況で東京に出て来るのは嫌ですから。

——なるほどね。では今後のバンドとしての展開を最後に聞いておきたいんだけど。

JOE：『殺意』出してからメンバー4人が向かないかん位置や照準いうのが見えてきたんですよ。しかも今ってシーンがチョット停滞してきてるでしょ。だからこそ俺らはズーッと尖っていきたいんです。

——その見えてきてるというのは？

JOE：もっともっと（音が）ヘヴィになりますよ。しかも今後はもっともっとええ意味で（音の）幅が広がるだろうし。だから、例えポップな面が今まで以上に出てきたとしても、みんなが音を出して、そして俺が歌ってればジル・ド・レイなんやなというのを俺らは見つけましたから。

SINN：ホンマに見えましたよ。

JOE：あとは大将（X）を抜くだけやな。

《ライヴ・スケジュール》5月21日＝大阪ミューズホール、30日＝名古屋ハートランド、7月10・11日＝目黒鹿鳴館●問＝エクスタシー（☎03・3958・3359）

INTERVIEW : TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY : MOTOI OHNISHI

JOLLY PICKLES

黒というイメージをひっくり返したい。

5月21日フリーウィルよりCD『黒じゃない世界』をリリースしたジョリーピックルス。メンバーはエバカンことSexual Love Me 一郎 KANchan(G)、A.K.I.R.A(Vo)ITOTAN(B)HIROchan(Dr)の4人。小学生時代からの遊び仲間が集まって結成されたという彼ら。その悪ガキ精神は、未だこのバンドでも脈脈と息づいてるようだ。そんなジョリーの魅力をインタヴューでチェックしてみよう。

—まずは結成の経緯からお願いしようかな。

エバカン：元々みんな小さい頃からズッと遊んでる仲間同士で、ちょうどバンドが流行り始めた頃に、俺らも女の子にモテたいからと思ってバンドを結成したのがきっかけです。

—じゃあ最初のきっかけは、単純に女にモテたいからなんだ。

A.K.I.R.A（以下A）：それだけです。

—当時は音楽的にどういった感じで演っていこうとしてたの？

エバカン：最初はポップなパンク。略してポンクというのを演ってたんです。

—じゃあ元々パンクは基盤にあったんだ。

A：パンクは大切な要素ですから。

—でも、いつ頃から本格的にバンドに賭けようとしてきたわけ？

エバカン：バンドを結成した当時に、うちらを面倒見てくれてた人に、「お前らこの勢いのままなら行けるぞ」って言われた時に、これでいけんのかなと思い始めて、徐々にタカピーになってきたんです。

—しかも女にモテまくりだし？

ITOTAN：そんなことないですよ。もうガキには指さされるし、女には笑われるし。

—昔はそんなにバカにされまくってたの？

エバカン：昔はみんな髪の毛が赤や青や緑やオレンジだったりしてたから普通の人達から見れば、あいつら何、みたいに笑われてたんですよ。でもその時に覆す精神というか、バネになる精神力が宿ったおかげで今日に至ってるんです。

—そう言えば2年前には、ヤングバトルというNHKのコンテストにも神奈川地区で選ばれて出場したんだよね。

エバカン：そんな事もありましたね。あん時はテレビにまで出て。その後に別の企画で渋公のイベントにも出てという状況があったから、俺らってもしかして凄いバンドかなという錯覚に陥ったりもしてたんですよ。
　でも当時面倒見てもらってた人が辞めてしまってからは、俺らも同時に路頭に迷ってしまって。それから全部自分達でバンドを動かすことになって、ブッキングから何から全てやり始めたんです。

A：1着で走ってたのが、突然3コーナーで落馬って感じだったよな。

—例えば当時のエピソードってどんなのがありました？

エバカン：うっぷんがたまった時に、車に乗りながら歩いてる人に生卵をぶつけたり。飲んだジュースの瓶を他人の家に投げ込んでガラス割ったり、車のマフラーを直管にして嫌いな奴の家の前でおもいっきり吹かしたり。

—いや、そういうんじゃなくてステージでのハチャメチャ話を聴きたかったんだけど。

A：メチャクチャなのは演奏だけです。

エバカン：前に、工事現場から回転塔を20個くらいかっぱらってきて、それをステージのいたる所に置いて演った事があったんだけど、なぜか単なるパチンコ屋みたいになった事があったよな。しかもその時のSEが軍艦マーチだったし。
　とにかく俺らって、雰囲気で面白いと思った瞬間に、その思いたった事を演ってしまう奴らなんですよ。だからCD発売記念のチラシにしても、手書きのビラを1500枚書いて、お客さんに渡したりもしたし。

—なるほどね。例えばバンドとして、ライヴに賭ける意気込みってどうなのかな？

エバカン：やはり女にモテたい精神で言うならば、どこにイイ女がいるかに思わず目がいっちゃうな。

—でもステージに対しての気持ちは、すごく前向きなんでしょ。

エバカン：というよりも、今は楽しければいいやという何でもありの姿勢ですね。

—でも、ジョリーってパンキッシュなナンバーはかりなんだけど、実はポップなメロディというのが、楽曲として一番基盤になってるなという気もしてるんだけど。

エバカン：て言うか、メロディから先に曲を作るからポップになっちゃうんですよ。だからアルバムにも入ってるんだけど、リフから作った曲は物凄くヘヴィになっちゃうし。

—なんか聴いてて歌謡パンクって感じもするし。

エバカン：そういうノリはありますね。

—例えばジョリーの魅力って、メンバー自身から言うと、どうなるのかな？

エバカン：僕の体型じゃないですか（笑）。と言うのは置いといて、ジョリーの魅力というのは、他人に媚を売るのが嫌だから、自己満足に浸ってるバンドという所かな。とにかく俺らが楽しければそれでいいし、俺ら自身が楽しくなかったら機嫌が悪くなるし。

—確かに気にいらない奴らに対しては、真正面から文句をつけてるもんな。

エバカン：文句をつける前に手が出るから。どうも子供心を忘れないようにとしてたつもりが、変な面で子供に戻ってしまうんですよ。

—所で今回、フリーウィルから『黒じゃない世界』が発売になったけど、そもそもこの作品を出すことになったきっかけは？

エバカン：実は、CDシングルを出そうという話が別の所から来てた時に、たまたま僕とヒロちゃんがBAーRAーVAーLAのヘルプを演ってて、そのCDの話をイクオさんに話してたら、TOMMYさんがCDシングル出すくらいなら、うちからフルアルバム出しゃえぇやんという話が出たので。だったらこっちをとろうかなと決めたんです。

—実際、中身の方はどういった感じなの？

エバカン：11曲入りのフルアルバムなんだけど、トータル時間26分という作品なんです。曲は速いです、日本最速だよな。

A：最速って言うよりも、曲が短いだけなんだよ。

—確かにジョリーって1曲が短いもんな。

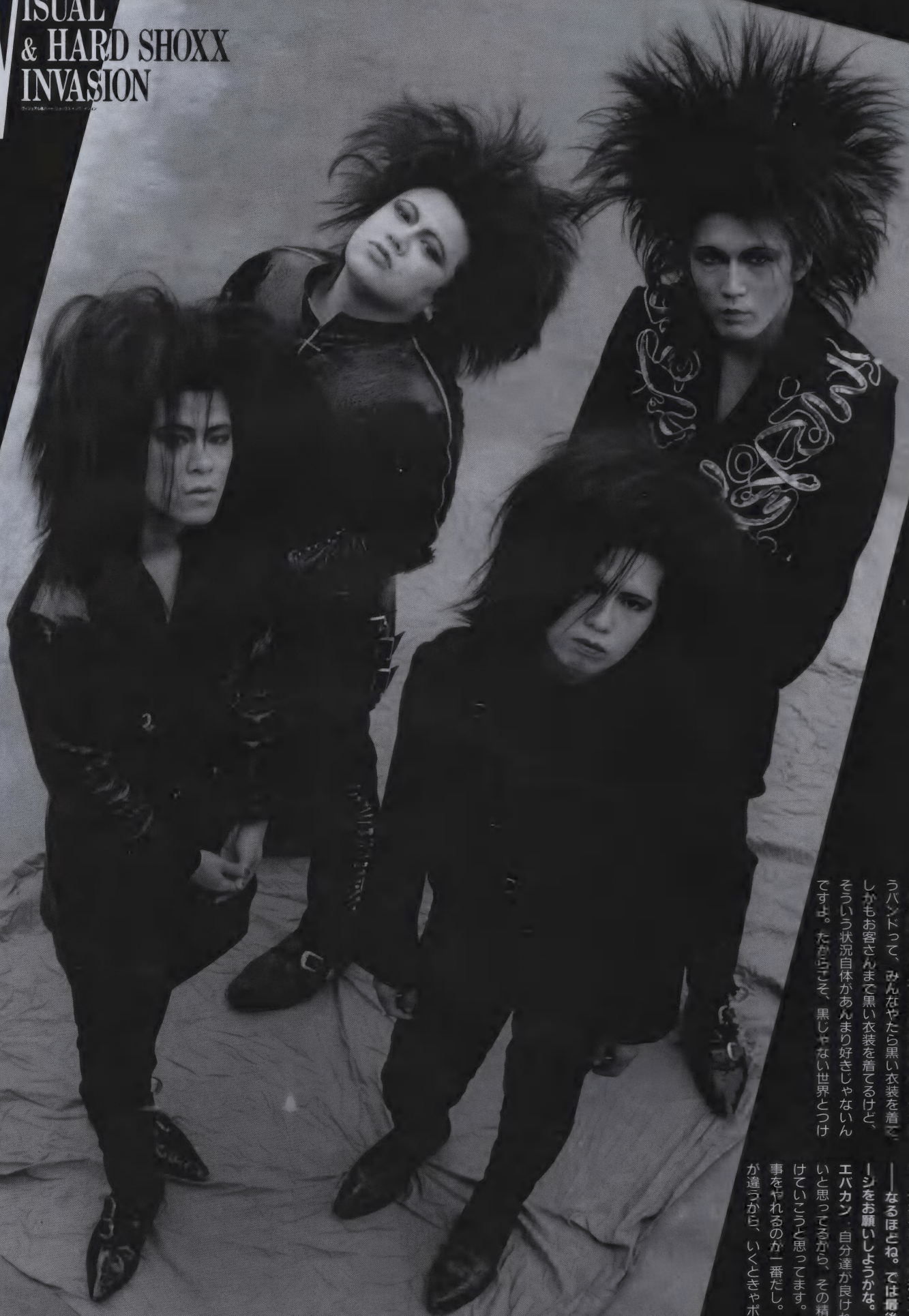
エバカン：というか、僕、頭がいいからかも知れないけど。曲の構成を思いついたら、次はこうくるという展開がドンドン出来てくるんですよ。で、それを演奏してみると結果的に短い曲に仕上がってるんです。

A：あんまし曲が長いとアキちゃうしな。

—実際、今回のアルバムは、自分達にとってはどういった作品に仕上がったのかな？

エバカン：まぁ、これまでフリーウィルの中から発売してる作品の中では、ジョリーの

VISUAL & HARD SHOXX INVASION

LtoR、後2人、Sexual Love Me 一郎 KANchan(G)、A.K.I.R.A(Vo)、前2人、ITOTAN(B)、HIROchan(Dr)

作品が一番いいんじゃないかなと僕は思ってます。

A：いいんじゃないかじゃなくて、いい！

——『激突』も『FOOLS GET LUCKY』もメじゃないぞと。

エバカン：もう余裕でブッチギリよ。

——でもこの作品を聴けば、ジョリーの本質がわかるソッて作品には仕上がってるんでしょ。

エバカン：確かに今のジョリーって言うのにふさわしい感じが出てますね。

——ところで『黒じゃない世界』というタイトルを付けた理由というのは？

エバカン：僕らはビジュアル先行バンドって範疇に入れられがちなんだけど。そういうバンドって、みんなやたら黒い衣装を着てしかもお客さんまで黒い衣装を着てるけど、そういう状況自体があんまり好きじゃないんですよ。だからこそ、黒じゃない世界とつけたんです。ホント俺ら自身もそうは見られたくないし。だから、その願望としてつけたという気持ちが一番強いですね。でも、みんな着てる服が黒いという所で矛盾してるんだけど（笑）。

A：とにかくこの世界って、音楽にしても黒っていうイメージですよね。だからその辺で、それをひっくり返そうかなと。

——なるほどね。では最後に読者にメッセージをお願いしようかな。

エバカン：自分達が良ければそれが一番いいと思ってるから、その精神でズッと演り続けていこうと思ってます。とにかくやりたい事をやれるのが一番だし。しょせん他とは器が違うから、いくときゃポーンといきますよ。

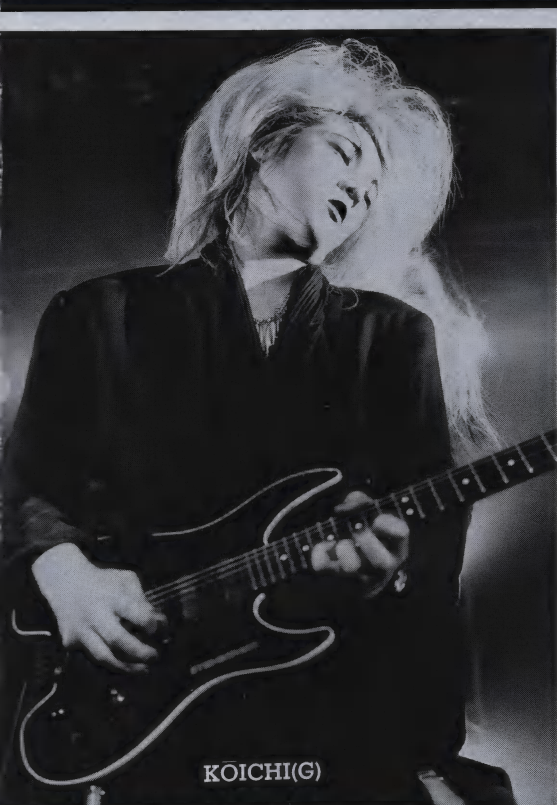
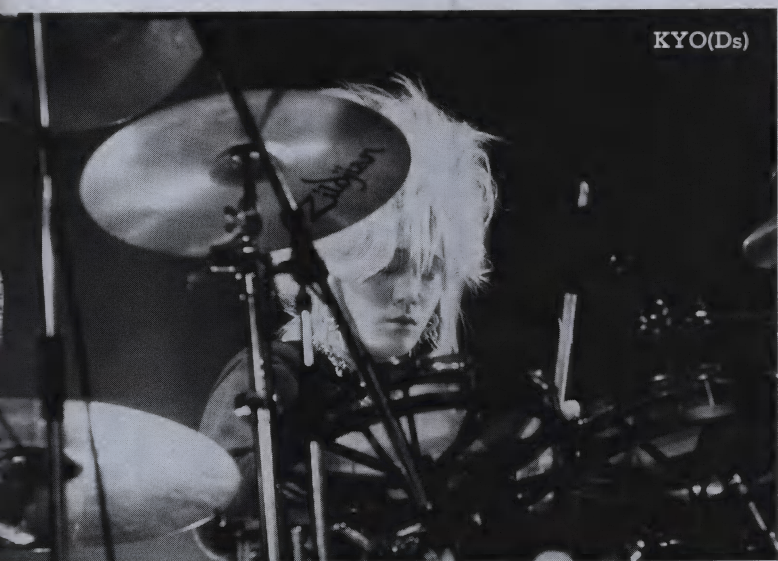
《ライヴ・スケジュール》5月31日＝大阪ヤング鹿鳴館、6月23日＝新宿ロフト●問＝フリーウィル（☎03・5563・9373）

Silver Rose

どんどん前を向いてやっていきたい。

精力的な活動を続け、グングンと注目を集めている５人、本誌初登場のSILVER ROSE──活動の拠点は名古屋ですよね？の問いに“住んでるのが名古屋だから。でもライヴは東京の方が多いんですよ”という答え。ナント彼等は90年には76本、91年には81本のライヴをこなしたという。

その彼等にバンド結成から、６月にリリースのセカンド・アルバムについてまでを語ってもらった。

INTERVIEW:REIKO ARAKAWA
PHOTOGRAPHY : MOTOI OHNISHI

KOICHI(G)

KYO(Ds)

──SHOXX初登場なので、まずバンドの結成から現在までを簡単に説明して下さい。

YOWMAY：結成は86年の12月、去年の10月にギターのKOICHIが加入して５人になって、で今年の１月にドラムがメンバー・チェンジしましてKYOが入って今のメンバーになりました。

──バンド結成のキッカケは？

YOWMAY：元々ベースのKAIKIが、名古屋方面でBOØWYとかBUCK-TICKみたいな感じのビート・ロックやってまして。僕がその頃から知り合いで、そのバンドが解散した時に、じゃ２人でバンド作ろうか？っていう風になったんです。そこにHITOSHIが入ってきて。前のドラムの前はHITOSHIの友達のドラムがいたんですけど、そのコが抜けちゃって。で、３人でリズム・マシンを使ってデモ・テープ作ってそれを無料配布したら、それが次のドラマーの手に渡って、SILVER ROSEで叩いてみたいっていうことになって、４人になったのが88年の12月なんですよ。それから自分達が住んでるのが名古屋周辺なんで、そこから地道に活動をやって90年にはトータル76本くらいライヴをやったんです。

──そんなに？

YOWMAY：もう、練習よりもライヴの方が多かったぐらいで（笑）。で、去年になって４人でレコーディングしたんです、ファーストCDの。それを出して、音が薄いって言うのかな？そういうのを感じて、ギターがもう１人いたらいいなぁって思ったんです。で、前から交流のあったKOICHIが同じく名古屋で違うバンドでやってたんですけど辞めちゃって、じゃあ一緒にやろうか！みたいな感じで。ちょうど僕らがもう１人ギターが欲しいっていう時期と、彼がバンド辞めた時期が重なってたんです。で、去年の10月に彼が入って12月にツアー回ったんですけど、音楽性の違いで前のドラムが抜けて、KYOが入ったんです。

──じゃあ、SILVER ROSEっていうバンド名は誰が？

YOWMAY：KAIKIと２人でやろうか！っていう時に、僕がSILVERっていう響きがいいから使いたいな、っていうのがあって。で、KAIKIが薔薇っていうのを使いたがってて。だったらSILVER R

VISUAL & HARD SHOXX INVASION

OSEにしようかって（笑）。
——何で笑ってるんですか?
YOWMAY：いやいや。まぁ、あとから理由をつければ、幻想的なイメージがあるじゃないですか?銀色の薔薇ってこの世には存在しないものだから。そういう幻想の中に僕らSILVER ROSEが、僕らのライヴに来ればそういうのが見られるっていう感じで。
——最初リズム・マシンを使っていた時は、どんなサウンドだったんですか?
YOWMAY：今とそんなに変わってない…?変わってるか?
KAIKI：曲がハードになっただけだよね。
YOWMAY：そうだね。ちょうど、僕らがSILVER ROSEを作った頃はD、ERLANGERの『LA VIE EN ROSE』がインディーズで凄い売れてた時かな?で、イメージ的にはやっぱり、そういうイメージが強かったかな?ああいうような、マイナー・コードを使ってカッコよく見せるっていうようなのが当時気に入ってて、ファッション的にも今と2年半前と全然違う一（笑）
——もっと過激だったんですか?
YOWMAY：そうですね、今から見るとヘビメタじゃない?って（笑）。サウンドの方はそれからだんだん…基本はもう結成当時からメロディは出そうって。どんなに速かろうが、ゆっくりのバラード調の曲であろうが、メロディは前へ出して、それを主体に自分らの世界を作っていこうって。
——作曲はギターのHITOSHIさんが?
HITOSHI：いや、俺だけじゃないんですよ。今まではYOWMAYさんとKAIKIさんと…。
YOWMAY：で、KOICHIが入ったんで、作曲者が4人いるんですよ、このバンドは。
——そうだったんですか。じゃあ、その辺で個人のカラーが出てきそうですね。
YOWMAY：ええ、KAIKIが作ってきますと、ベース・ラインがやたら動きまわりますね（笑）。
——（笑）皆さん個人的に好きなサウンドとかバンドは?
KAIKI：D、ERLANGERとかU2とか…そういう音が好き。
HITOSHI：俺も似てるんだけど、ZI:KILLとかD、ERLANGERとか聴いてますし、最近AUTO-MODのCDが再発されましたよね?それを聴いてます。洋楽っていうのはほとんど聴かないですね。
KYO：僕は…BY-SEXUAL、僕もあんまり洋楽聴かないんで。
YOWMAY：僕は長いですよ（笑）。僕って兄貴が2人いるんですよ。上の兄貴が昔から凄い邦楽っていうの聴いてて、ARBとかTHE MODS、矢沢永吉さんとか。下の兄貴がもう洋楽オタッキーで、古くは60年代70年代のブリティッシュ・ロック、ビートルズからストーンズまで何から何まで。で、兄貴が中学、高校の時に、当時僕は小学生で、その頃から2人の影響受けてましたから、邦楽も洋楽も何でもござれ!って感じで…聴かないジャンルってほとんどないんですよ。だから今やってるSILVER ROSEって今まで聴いてきた中で、こういうジャンルだったらいいんじゃないかな?っていうか、やってて面白いっていうのがありますしね。そういう意味でも自分でも注目してるバンドなんですけどね、SILVER ROSEっていうのは。今はティン・マシーンとか、STINGかな?その辺を聴いてますね。それと流行ってる曲全般かな?
KOICHI：そうですね、もちろん歌謡曲全般聴きますけど、ギタリストっていうのもあってイングウェイとかも聴きますね。
——ということは、ハード・ロックとかにも興味あり?
KOICHI：ボン・ジョヴィとか好きですし、モトリーとかも大好きです。
——何か1人だけ離れてますね。
KOICHI：ねぇ（笑）そうなんですよ。
——（笑）今までにファーストCDとビデオを出してますよね?今回のセカンドCDは前の作品と比べてどんな感じに仕上がりましたか?
YOWMAY：ファーストでは、聴かせようっていうのが根本にあったんで、ミディアム・テンポの曲をピック・アップしたという感じなんですけど、今回はいつもライヴでやってるナンバーをあげて、速い曲とSILVER ROSEのメロディっていうのに重点をおいた曲を集めたのがセカンドなんです。やっぱりギターが入ったことによって音も厚くなりましたし、KYOのリズムでもイメージが変わってると思うし、だいぶ違いますね。
——これからのツアーはセカンド発売記念ですか?
YOWMAY：発売先行ですね。発売日が6月10日なんで、5月20日の目黒鹿鳴館から始まるツアーではライヴ会場のみ売っちゃうんですよ。
——じゃあ最後にリーダーのKAIKIさんから今後の目標を。
KAIKI：この5人になってまだ4ヵ月だから、まだこうしていこうかというのは分からないけど、下がっていきたくないなっていうのはあるから、どんどん前を向いてやっていきたいですね。

《ライヴ・スケジュール》5月21日・新潟[illegible]、24日＝札幌メッセホール、27日＝川口[illegible]、29日＝広島並木ジャンクション、30日＝福岡[illegible]ホール、6月1日＝高松クラブハウス、2日＝尼崎VIP2ホール、10日＝名古屋[illegible]、以上●問＝ミュージックファーム（☎052・72・2314）6月22日＝インク[illegible]スエアファクトリー●問＝田中プロモーション（☎03・3498・7822）

YOWMAY(Vo)

HITOSHI(G)

KAIKI(B)

インディーズ ハードロック 最新情報

TEXT:RAN HAYASHI

株の出来高は史上最悪と言われ「不景気」のあおりをまともに受けている音楽業界。なかには「○○○○がつぶれる」という怪情報がバンド連中の間で飛び交う始末！　しかし、サウンドは有望というバンドがメキメキとライヴ進出してきている。是非、期待したいものだ。でも、バンドをサポートするのも盛り上げるのもキミ達なんだョ！

●今月の一発目は「曲がイイ！」と評判で、新ベーシストを迎えサウンドも進化してきているディー・キュセが、お友達のシャウト・アンド・デビルマンと5月21日に目黒鹿鳴館でVSシリーズとしてライヴ。ディー・キュセは近い将来ド～ンと騒がしてくれるそうだ。

●星子編集長が気に入るであろう元？？？のZEEDと「カッコイイ」と女の子バンドの憧れ的存在になってきたギルメサイアそしてヒヨリのユース・クエイクが5月22日に目黒鹿鳴館でライヴ。どのバンドも要チェック！

●これまた編集長向け、かまち系で強力な動員力を誇ると言われるバナナ・フィッシュと名古屋の髪の色は色々、スーツ系のお洒落バンドの黒夢が5月23日に目黒鹿鳴館で。

●ウワサのM店長率いる目黒ライヴ・ステーションで5月24日に「男達の欲望シリーズ」という企画第2弾がある。出演はバリバリッとカッコイイと言われそうなシェイプ・オブ・シングスと夜叉、エルドリッチ、エズラ、ワイアードが激熱のバトルをする。

●5月25と26日はアザーサイドの2DAYSが目黒鹿鳴館で。仲の良いお友達バンドのゲストもあるとか。尚6月18日にもロクメーでワンマン、それから6月21日に徳島のスエヒロ・プラザ・ホールでサーカス・マインド（CDシングル配布）、ガーゴイルとイヴェント出演する、お問い合わせはソールドアウトミュージック（☎0886-22-3488）。23日は高松のクラブハウスでワンマンを行うらしい。お問い合わせはミュージック・トリックR（☎0878-23-3483）まで。

●5月27日、exアンセムの福田ヒロヤBAND、FINGERがインクスティック・スズエでライヴを行う。スペシャル㊙ギターゲスト多数あり！お問い合わせは田中プロモーション（03・3498・7822）まで。

●新メンバーを迎えてバリバリのデカメロンは、5月30・31日に名古屋のミュージックファーム、6月1日は岡崎CAMホールだ。お問い合わせはキョードー名古屋（☎052・962・0511）

●6月10日にCD発売を予定している名古屋のシルバーローズが先行発売ツアーを5月20日の目黒鹿鳴館を皮切りにスタートしている。21日は新潟Z—1、24日は札幌メッセホール、27日川口モンスター、29日広島並木ジャンクション、30日福岡ビブレホール、6月1日高松クラブハウス、2日尼崎VIP2ホール、10日名古屋ハートランド。

●5月27日は目黒ライヴ・ステーションでオススメのブリティッシュ・ダーク系の3人バンドロード・クルー（クルーズとは違う）のライヴがある。これからはコレ！　30日はバラエティーとんだR&R系の日。以前在籍していたVoが戻り4人編成になったバット・ボーイズ、関西での人気は根強いというKNOCK、EM　DEAD。ツンツンでヘヴィーロックのWILD　BUNNYDEEの出演で「ノレる踊れる楽しめる日」。31日は「明るい日」だそうで、大阪での動員NO1…？というレイトグリーク、LEGEND、AKOS、エフ・ライン。

●5月28日はLAのキャットハウスの日本版と言われるミュージシャンの遊び場で有名なハードロック・パーティー「クラブアディクト」が西麻布のトレンディー・ディスコで行われる。十八歳未満とガキはお断りで、入場の再は身分証明書が必要。でもイレズミは歓迎されるからアブナイ！　会場の場所柄、ハーレーやチョッパーの乗り入れは残念ながら禁止。21時から朝4時、￥3600。もちろんライヴもある！　次は7月末頃。問い合わせGAIN　YOU（☎3464-7036）まで

●6月の目黒鹿鳴館はスゴイぜ！　3日はXのビデオ・ディレクターで有名な後藤サンや・・あのクマチャンが出演、題して「めざせ！武道館おんぶにだっこ」だ。5日はしいもんきいの2DAYSでお友達も出演する。7日はディー・キュセとメディア・ユース。8日はポジ系のヴェルヴェット・アンド・ロワとベルサーチ。9日はエネルギッシュでドヘヴィーになったピストン・ロッズ。10日は原のライト&シェイド。

●6月2日広島ウッディーストリートで博多のダムゼルが出演。尚12日にはTILTとキャメル・バック、23・24日はガーゴイル。そして7月6日はヴァラン・タインがライヴ。

●6月3日はステーションで日本のジミヘンことシゲオ・ロール・オーバーが出演。7月6日にもロクメーにというウワサも。また、ジミヘンのCD教則本をドレミ楽譜出版から刊行予定している。ギターを始める人、伸び悩む人に大スイセンしたい。まずはライヴ！

●6月5日はディファイアーの浅井率いる新バンドNOT　FOR　SALEのワンマンがステーションで、6日はハードロックのビック・ママのデモテープ発売記念ライヴ、対バンは店長スイセンの女性Voがカッコイイというグレイテスト・ヒッツ、元ファイナルとして有名なジェイル・バーズ。7日はドハデな日、オードリ・ヤーヤーのワンマンで、恰好はまるでスカンチ！　おもしろくて、おかしいライヴが好きな人にオススメ。

●6月9日は元エボニーのVo田中アキラが結成したモビー・ディックがステーションで行われる。サウンドはZEPかジャニス？注目は新加入したルックス良し、ステージはカッコイイ、テクはインディーズでトップと言っても過言でないWベースでも有名だった元スイート・ヴェインのレミー。バンドの連絡先は☎075-791-9247まで。

●元エボニーといえば…、というより伝説のX-RAYの藤本アキラ、ラジャスの福村、テラローザに一時在籍していたバカテクの新バンド、サーカス・マインドが「まるで外タレ」のCDシングル配布ギグを行い、業界を驚ろかせているが6月13日に目黒鹿鳴館で、実力派ジェミー・ロケッツと対バンする。

●6月16日大阪の高速ツイン・ギターに注目のクィーンドールがステーションでデモテープの配布ギグを行う。対バンは同じく大阪のリフ・レイン。

●同じく16日、ロクメーではスレイヤー系のジョリー・ロジャース、パラダイス、大阪の新人、ブレインがバトルする。

●6月17日は最近バリバリと活動範囲を広げPCMのフィールド・ワークス・レーベルからCD「モダン・ジャングル」をリリースした実力派クレイス・モードがステーションでLAY☆SA、ダイナマイト・シェイカーズらとライヴを行う。SHOXXの読者向き！

●6月19日はポップなR&Rを売りとして、ルックスがイイために最近動員が1番だというフィールド・オブ・キッズがハーレムQとステーションで対バン。

●6月20・21日　はEINS：VIERの2DAYSが目黒鹿鳴館で行われるが、ナントCDを各3百枚限定でプレゼントされる。

●6月24日は名古屋のストレンジャーが母体となっているDRUKEN　WISDOMと星子編集長系のダークサイケ、でもマニアックなSCARE　CROWがステーションで。

●最近、エモーショナルでカッコイイ奴がいないなぁ～と思う人に自信を持ってオススメしたいっ！　このVoのために今回、本文を書いているのは事実、GUSTY　BOMBSだ。それとシェイプ・オブ・シングスが、6月26日ライブ・ステーションでライヴ。

●7月3日はけんちゃんのバースデーステッカー・プレゼント・ギグのアンチフェミニズムのワンマンが目黒鹿鳴館で行われる。

●7月8日は広島ウッディー・ストリートで「ステーション・スペシャル」と題した恒例のツアー・イヴェントが行われる。出演バンドはまだ発表されていない。

●7月11日はZINX、INSANITYと大阪ALEXの初ツアーがステーションで。

●7月20・21日は？？？　とりあえず2カ月前の情報なので変更有り、どのギグも事前に各ライヴハウスに確認して下さいね～だっ！

●もちろん8月8日、名古屋ダイアモンド・ホールで行なわれるSHOXX後援イベント「一撃必殺舞踏会」のメンバーもスゴイ。ガーゴイル、東京ヤンキース、デカメロン、幻覚アレルギー、シルバーローズだもんな。

俺のペット自慢

高崎晃(ラウドネス)

「家で白ネコ飼ってます。種類はアメリカン・ショートヘアと雑種のハーフ。結局雑種なんですけど(笑)。

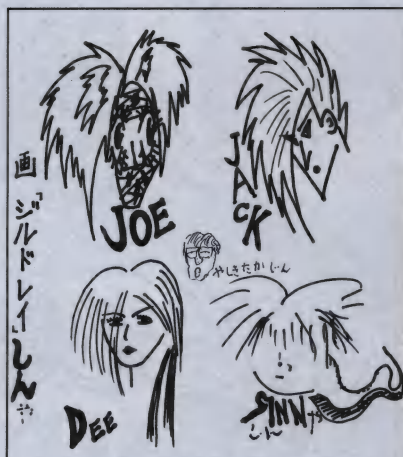
名前はニャンパラというんです。雄なんですけど去勢したからオカマちゃんっつうか、ニューハーフて感じ(笑)。もう2～3年かな。

すごい甘えたやから、いつでも人間のそばにいないと――人間の目の届く所っていうか、自分から見て見える所にいないと気いすまないようなネコなんですよね。

1回、友達とかが来ててね、ネコが発狂してね(笑)。友達の腕とかにへばりついて離れなくなっちゃって、すっげえ怪我さして、血が止まらなくなって救急車呼んだことあるんです(笑)。去勢してけっこうすぐで、なんか不安定な状態だったと思うんです。で、2人ぐらい血まみれになって。すっげぇ凶暴になった時期が一時期あって。今はもうぜんぜん大丈夫やけど。

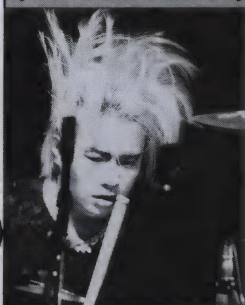
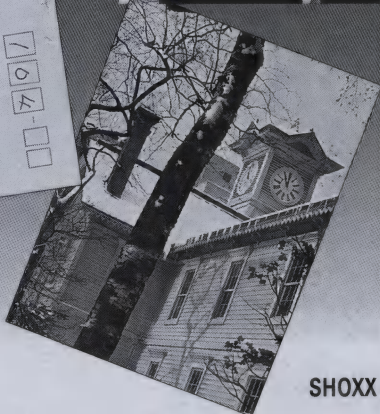
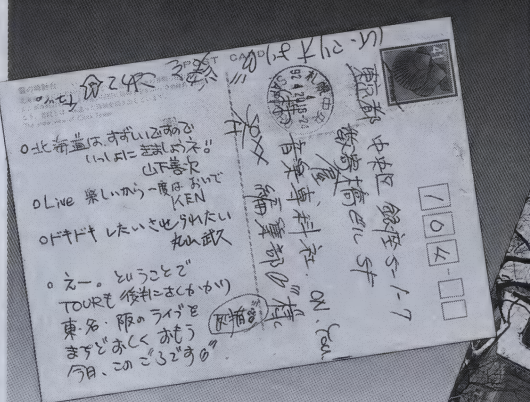
かわいいし、ちょっと普通のネコと違うみたいな。すっげぇ霊感がある。ネコていうか動物って、けっこう人間なんかより見えてるみたいなんですよね、霊とか。うちのネコは特にそういう部分が強烈みたいやねん。

たまに誰もおれへん所ずっと見て、ヘンななったりすることもあるからね。

ネコはウソはつきませんよね。一緒に真剣にやってたマネージャーが逃げちゃったとか、そういう時、わりといろいろ考えた時期もありましたからね。人間不信まではいけへんかったけど。今はぜんぜん大丈夫ですけどね。」

メンバーの肖像

SINN
(Gilles de Rais)

LUiS-MARYからの旅だより

ARTIST'S BOX

ミュージシャンが作るページ

さぁ、お待ちかねのアーティストBOXが始まるョ! 五月病になって、ボーッとしているキミも、このコーナーを読んで、パワーアップだ!!

いつもいつも、〆切をちゃ～んと守って下さるミュージシャンの方々に、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございます。これからもよろしくお願いしま～す♡

私の嫌いな夏がついに目の前にせまってきました。今年も「暑い暑い…」とうなされると思うとゾッとする毎日を送っていますが皆様どうお過ごしでしょうか。私、最近ある事情で引越ししまして今度は三階のなんと和室にすむ事になったのですがこの暑い夏にむけて風通しの良い事はもちろんの事よけいな恐い物まで一緒に住む事になった様なので今年の夏はどうやらすずしく過ごせそうです。機会がありましたらこの話はくわしくするとしてさっそく今回も〝占い〟いってみましょう。

〈その一〉 私は高校一年になった15才の女のコです。工業高校なのですが卒業したら何の仕事についたらよいでしょう。　（忌多髏）

〈答〉 あなたは、今すぐこの先の仕事を決定するのは良く無いと思われます。何か一つやりたい事を決めそれに向けて努力するのは決して良くない事ではありませんがあなたはこれからの数年間は熱意がすぐ冷めてしまいやすい時期にあると思われます。できる事ならこの時期何か一つと決めつけないでいろいろな方面の事に興味を持ち接してみて下さい。時期が来た時にあなたに残っている物、一番面白い物に対して真剣にとりくめる様に今は準備して下さい。あせりは禁物です。

〈その二〉 LUNA―SEAの真矢さんとの相性を占ってほしいんですけど…　（S）

〈答〉 希望のもてる相性です。しかしあなたの今のおさない心では彼を精神的に満足させられる事は難かしいと思われます。相手をつつんであげられる様な女性に成長する事を望みます。それと相手に自分の存在を印象づける時期・方法には慎重になって下さい。せっかくの相性の良さも第一印象の与え方によっては逆になってしまうおそれは強そうです。気をつけて下さい。

〈その三〉 パチンコに行くと必ず負けてしまうんです…。ギャンブル関係はやらない方がいいんでしょうか?　（みずがめ座　N）

失敬！ DEANの先取りシネ・サロン

BY: DEAN(AION)

ハイランダー2 甦る戦士

こんにちは。AION の DEAN です。

今は、夏ごろ出す予定のセカンド・アルバムのレコーディング（Vo 録り）のまっさい中なんで、前回にひき続き今回もスタジオの休憩中に、これを書いてます。

アルバムの方は、とりあえず今までの中で一番挑戦的で、いろんな意味でびっくりするような内容になりそうやし、進化してる今の AION を思いっきり詰め込んだ自信作なんで、みんな今からぜひお楽しみに。

さて、そんなわけで、今回紹介する映画は5月下旬公開予定の『ハイランダー2／甦る戦士』を取り上げてみました。

ハイランダーっていうのは、首をはねられない限り死ぬ事のない不死身の戦士っていう意味で、見る前は『ターミネーター』みたいなSFX アクションものなんかなと思ってたんやけど、はっきり言ってこの映画、前作の『ハイランダー1』を見てないと、さっぱりわけがわからん（笑）内容で、最初のうちは予想通り SFX バリバリのアクション・シーンが多くて、結構楽しめるんやけど、進んでいくうちに『1』の登場人物が次から次へと出てきて〝何でいきなりここでこの人が出てくんの？？〟っちゅう感じで、途中からはもう理解するのをあきらめてしまった（笑）。

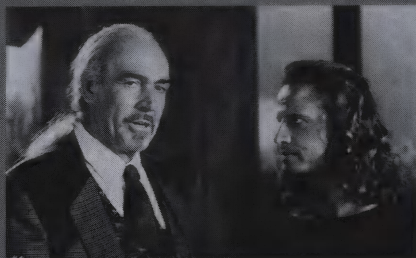
まあ、おおまかに言えば『ウィロー』とか『ロビン・フッド』（個人的には、この路線は単純明快で、ヒーローとヒロインがラストには必ずハッピー・エンドになるので大好きです）のストーリー展開を、もう少しややこしくこねくり回したような感じですが、SFX のシーンだけは、何も考えんと楽しめるんじゃないでしょうか。

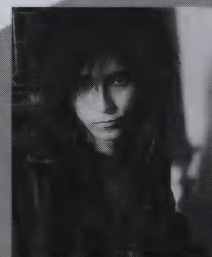
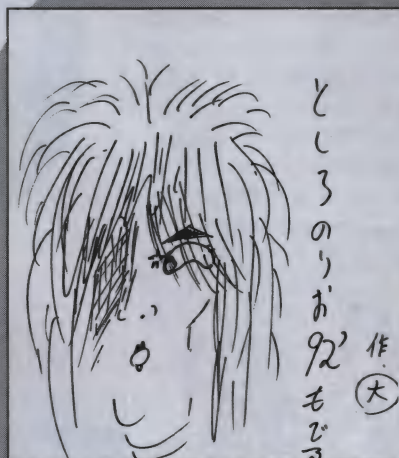
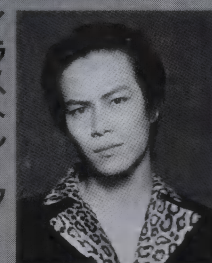
とりあえず、見に行こうと思う人はとにかく『ハイランダー1』をレンタルビデオで借りて、ストーリーを理解してから見ると、よりわかりやすく楽しめるんじゃないかと。（俺も、後から『1』を見て、ようやく把握できたんで、先に見とけばよかったなと後悔した。）

あ、NOV の声が聞こえてきたんで、そろそろスタジオの方に戻ります。

まあ、そんなわけで、これからもいろんな映画をジャンル不問で紹介していきますんで、よろしく。それでは、今回はこれにて失敬!!

P.S

少し前になるけど、こまばエミナースでの『ドラマ・シューティング GIG』（笑）に参加してくれたみんな、どうもありがとう。ほんとにお疲れさまでした。

監督／ラッセル・マルケイ　製作／ピーター・S・デイビス＆ウイリアム・パンツァー
主演／クリストファー・ランバート　ショーン・コネリー　バージニア・マドセン　UIP 配給　5月下旬公開予定

PICTURE GALLERY

イラストレーター
大山(ZIGGY)

イラストレーター
福井(STRAWBERRY FIELDS)

OH, MY CHILDHOOD!

真矢(LUNA SEA)

「子供の頃は凄い口の悪い子だった。その頃のしゃべってるテープがあるんだけど、凄いの。おばあちゃんに『クソババア』とか言ってて（笑）。でもね、外に出るとおとなしい子だったんだって。内弁慶。デパートとかに買い物に行くと本当、借りてきた猫みたいで、お母さんに『ここで待ってなさいね』って言われると1時間でも2時間でもずっとそこにいたの。人の家に遊びに行っても凄くおとなしい子でね。

でも、家に帰ると『クソババア』とか。いやなやつだよね（笑）。」

ARTIST'S BOX

ミュージシャンが作るページ

〈答〉ギャンブルにかぎらず何事にもあなたの自信のなさや、勇気のなさが裏目にでている様に思われます。手紙には就職の事も悩んでいた様ですがやりたい事がないと思うよりも「これで生活するんだ」という精神力の強さをもってすればあなたは何事にも成功すると思われます。自信をもって何事にもチャレンジして下さい。必ずギャンブルにも勝てると思います。

〈その四〉私、今TAIJIさんの色々な事で落ちこんでいます。これからもTAIJIさんの事を応援し続けて良いのでしょうか…　（Y・N）

〈答〉あなたの視野の狭さが逆にTAIJIさんのこれからの活動を直接ではないけれども苦しめてしまうのではないかと思われます。女性らしい愛らしい心でこれからのTAIJIさんの活動を見守っていてあげて下さい。必ず彼はあなたを裏切る様な生き方はしないと思われます。

〈おまけ〉TAIJIさんについて占ってほしいという人が沢山いましたので失礼ながら尊敬する一人でありますTAIJIさんのこれからについて簡単に占ってみましたところ「新しい力（ちから）」とでました。皆さん心配せずにこれからも応援し続けて下さい。

今回はこんな所で失礼します。

相変わらず沢山手紙をいただいてとってもうれしく思っています。返事がなかなか書けずに迷惑をかけていると思いますが気長に待っていて下さい。もし本当に急ぎならば封筒の表にでもわかる様に書いておいて下さい。努力はしてますんで何とぞお許しの程を…。中にはベルゼルブ解散後の自分の事を心配して下さる人もいてとっても感謝しています。実はあっちの方でがんばってますんでよかったら見に来て下さい。詳しくは次回にという事で…。

P.S.㋖情報　天皇賞はどうでしたか?
2月・9月生まれは赤で勝負!!

◆返事の欲しい人は、占ってほしい内容と一緒に、62円切手を貼った返信用封筒に自分の住所・氏名を書いて同封して、SHOXX「TETSUの占いの部屋」まで送ってね。
なお、返事が届くまでけっこう時間がかかるので、気長に待っててね。

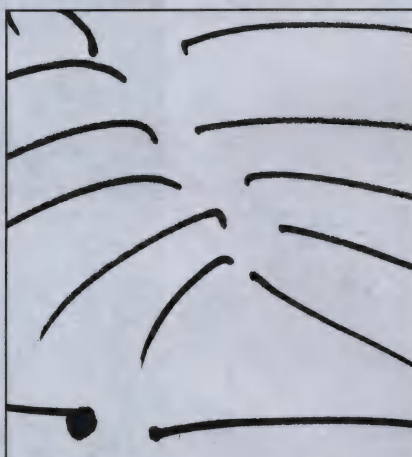
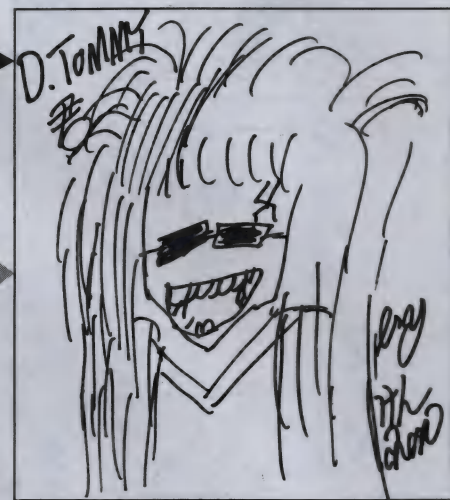
似顔絵コーナー

今回は、Sister's No Future の２人の登場だ〜！

D.TOMMY が画いた
KENchan

KENchan が画いた
D.TOMMY

by D.Tomy

クイズ「これは何だ!?」第4回

出題／SEIICHI（ZI:KILL）

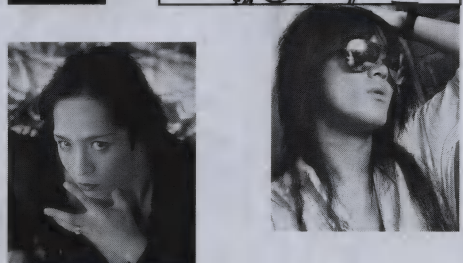
問題。この絵は何かの一部を拡大したものですが、さて、SEIICHI が画いたこの絵は何でしょうか!?　わかったらハガキに答、住所、氏名を書いて〒104東京都中央区銀座５－１－７　数寄屋橋ビル５F　音楽専科社 SHOXX「これは何だ!?」係まで送ってくれ。正解者の中から、抽選で１名様に SEIICHI 直筆のこの絵をプレゼント!!（〆切は６月20日必着）

SHOXX VOL.9の解答

●久保田さんのイラスト

正解は、わが SHOXX 編集長、星子誠一氏でした。当選者は埼玉県の久保田奈穂に決定!!　たくさんのおハガキど〜もね!!

自画像公開　私は誰でしょう!?

戸城（ZIGGY）

NAO（BY-SEXUAL）

我が青春のクラブ活動

BY：RYÖ（BY-SEXUAL）

「中学の頃は、帰宅部です。で、暇だから何かしようって時に、放送部が女の子ばっかりだったんで、それで放送部に入ってそこをたまり場にしていた。

その後、３年生になったら仲間みんなで生徒会をやろうってことで、オレ、生徒会長をしていたんですよ（笑）。DEN も SHO もいたんですけど。立候補して、何人か候補者がいたみたいだけど。どんな悪い演説でも目立ったやつが勝ちの世界ですからね。目立って、アイドル性のあるやつが勝つんですよ。楽しかったですよ。生徒会室を乗っ取って、昼になったら集まってそこを拠点にして遊んでた。

今のバンドも、結構そういう感じで“暇だから、ちょっとバンドでもしようよ”って始めたから。その頃から、SHO やんや、DEN と仲良かったから。で、良く行ってたスタジオで、NAO にあって。そこでまた、たまるようになって…。まっ、こうやってみんなで遊べてるうちが花かなっ。やっぱり、仕事って感じるようなことはイヤなの、昔から。」

IZUMIのポレポレ人生劇場

それではこの前のテストを返すぞ!! では、

ネズミくん!
ハイ!

20点だ。ろうかに立ってろ!!
タラタラ

次ーッ リュウくん! 15点。同じく立ってろ!
ぽっ!

ふ~…
テケテケ

パカッ

ええ~いっ! 江戸丸の参上だい。
シャキ シャキ

い、いかんっ! エネルギーがなくなった。
タタタタ

明日に夢見て……
くーん
いじいじ

「とくにこのへん」

ますます絶好調のネズミくんとリュウくんコンビが、またまた大活躍だ!

作/イズミ(AION)

ズ・ズズズズ

くおおっ
ククク

江戸丸ーっ 気合いだ!
いいかん!! エネルギーが…
ククク

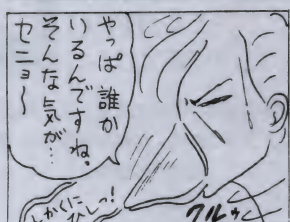
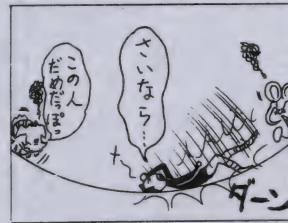
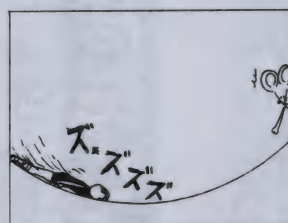
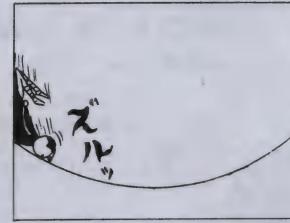
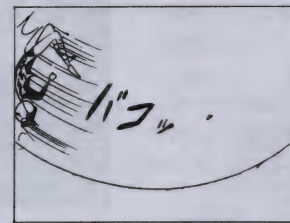
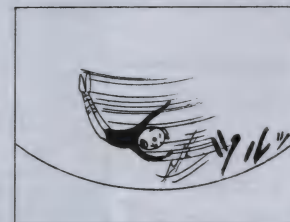
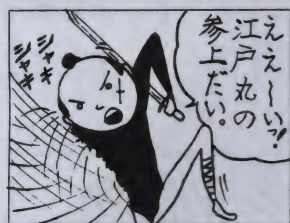
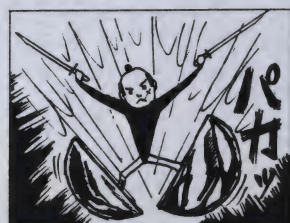
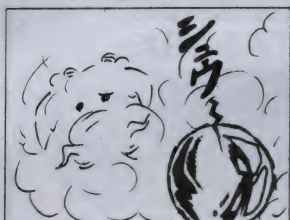
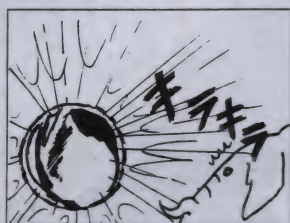
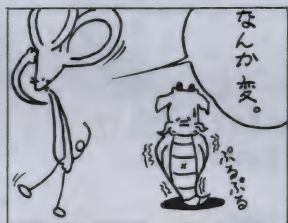
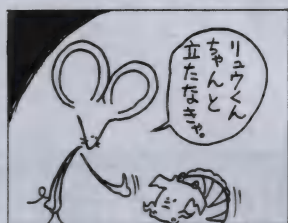
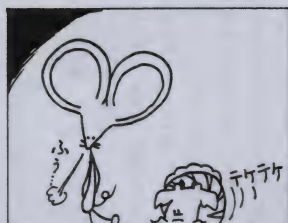
さいなら……
このへんだめだっぽ
ダーン

IZUMI 先生へのファンレターのあて先は〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F 音楽専科社 SHOXX イズミ大先生係まで。

SHOXX恒例

ミュージシャンが語るシリーズ

「病気・ケガのエピソード」

今回のテーマ

大好評のミュージシャンが語るシリーズ、今回は病気やケガにまつわるいろんなエピソードを聞いてみたゾ。とにかくミュージシャンは体が資本ですから、病気やケガなんてしない様に気をつけてもらいたいよネ!!

ARTIST'S BOX
ミュージシャンが作るページ

DECAMERON

KYOICHI「昔、急性アルコール中毒になったんで、みなさんもお酒の飲み過ぎだけは気をつけましょう。3千円で飲み放題とかいう所は、あんまり行かんように。」

TAKEchan「高校2年の時に、連れの家に遊びに行って。連れが犬飼ってたんですよ、でっかいドーベルマンを。僕、動物好きなんで、すぐ近づいてしまう人間でね。えさ食べてるのを知らんと、顔を近づけて頭なでとったら、いきなり犬が機嫌悪くなって、ワン!って吠えたんですよ。その時、顔にあたってね、目の下のまぶたが切れて、目玉にも白目にも傷みたいのがついて、アゴとかも切れたんです。で、その晩にいきなり熱がでて。体中にジンマシンがでて。そこらじゅう紫色になるぐらい腫れあがって、人相変わるぐらいまで顔がボコボコになりました。注射とかうってもらったけど、それが1週間ほど続いて。実はそれ、狂犬病やったかもしれないですけどね、1週間でひきましたけど。みなさん、おとなしい犬でも気をつけて近寄りましょう。」

MASAYUKI「高校の頃、バーベル持ち上げるのが流行ったんですよ、誰が何キロ持ち上げるか。ひとり70キロぐらいのバーベルを上げたヤツがいて、オレけっこう負けず嫌いなもんで(笑)、くやしいと思ってオレも持ち上げたら、その70キロのバーベルをひざの上に落としてしまって、ひざの皿が割れたんですよ。でも、そのまんま歩けて、1ヵ月ぐらいたつまで気づかなくて(笑)。痛かったけど、サッカー部だったんで試合とか出て、練習中に先輩に蹴られてまた痛くなったんですよ。それで初めて医者に行ったら、ひざの骨が欠けてるって言われて、そこで初めて知ったという。」

NAOKI「ケガとか病気とかないんですけどねぇ。ケガさした事はあるな。
　僕、弟がいるんですよ。幻覚アレルギーとかいうバンドやってるんですけどね(笑)。小学校の頃に野球をやってて、僕がバッターでSCEANAがキャッチャーやったんですよ。バット振ったら目にあたってね、病院に行くのがあと何時間か遅かったら、失明という寸前までいかしてしまって。それが2回もあったんですよ(笑)。ほんまにもう、家中から怒られて。僕もそんなに罪悪感とかなかったんですよ、わからへんかったから。プラスチックのバットとか、あまり普及してへん頃で、まだ木のバットやったんですよ。一時期、野球やったらあかんて、親戚じゅうからボロクソ言われてね、そんな事があって。本人も、家族のみなさんも、ファンの人も、すいませんでした(笑)。」

GARGOYLE

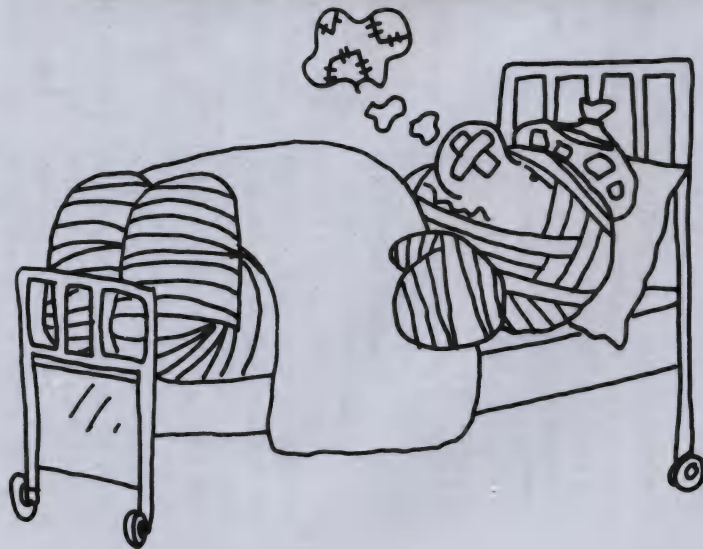
KIBA「バンドを始めてから言うと、大きいのは、顔を7針縫ったことと、いっぺん急性胃炎で倒れたことですかね。顔を縫った時は、ケンカとかそんなんじゃないんですけど、まぁ事故で。ちょうどアゴと顔の境を7針縫ったのと、あと、去年の8月に渋谷公会堂あったでしょ。それでいろいろ精神的に自分を追いつめようとして。例えば、食うもん食わなかったりね。今日は水だけにしようとか、いろんな事やってるうちに倒れてしまって。それで2~3日病院にいたと。
　子供の頃で、人にないだろうなって思うのは、左足のスネのところをヘビにかまれて縫ったことがあることぐらいですね。小学校2年の時に、山に遊びに行って、走り回ってて、〝うわぁっ〟て思ったら血が出てて。2針縫ったんですよ。その時は両親も一緒に行ってたんで、両親と妹と犬との4人と一匹で、そのまま病院に行きました。」

Ber : Sati

KIKU「五月頃っていうのは、季節的にはすごい好きな時期で、その頃までは元気なんですよ。だけどこれを過ぎて、六月とか七月とか暑くなってくると、だんだん体調が崩れてゆき、見るも無惨な姿になってしまうので、まだこの時期は頑張らなければと言うか、その後に来る恐怖の季節を前に、最後のはしゃぎ時かなっていう感じです。」

YUMITO「小学校6年ぐらいに、右手を複雑骨折して。サッカーやってて、中2の先輩のシュートか何かがもろに当たって、それで〝痛いなぁ、病院に行かなきゃいけないなぁ、明日ぐらいに行こう〟と思ってたら、掃除の時間にころんでしまって。右手をついたからそこで折れちゃったみたいで(笑)。」

KYOSUKE「ある夜に、友達とお酒を飲んでて、そのまま帰る時になって、友達の家に寄った時に、バイクがあったんですよ。友達のバイクで、俺は免許持ってないんだけど酔っぱらってて、歩いて帰るのがめんどくさいから〝借せーっ〟とか言って借してもらって。それが、雨降ってたんですよ。で、〝じゃあねー〟とか言って帰って。無免だから、よく知らなくて、思いきりアクセルふかしたらバーッと前に出て〝うわーっ〟と思った瞬間に、ブレーキかけたらスリップしちゃって。そのまま手をザーッとやって。血みどろになって、のたれ死んでたという。」

RIO「僕は、2年前ぐらいまでけっこう酒飲んで暴れるようなタイプだったんです。飲むと、怒りっぽくなって。で、飲んでて何かで怒りだしちゃって、持ってたグラスを割って左手の薬指を切っちゃって。切ったはいいけど2日ぐらい病院行かないで、そのまんまにしといて。その時は5針ぐらい縫ったんですけど、もしそれ以上ほっといたら、指を切断することになってたんです。その傷跡が残っちゃって、それ以来酒をひかえるようにしました(笑)。」

EARTHSHAKER

シャラ「ちっちゃい頃、すっごく身体弱くてね、しょっちゅう病院に担ぎこまれてて。その日もオレ熱だしたのかどうか覚えてないんやけど、おかぁの背中におぶらされて、病院に向かってたわけなんよ。で、その頃って病院に向かう道がジャリ道で、夕方近くで〝あぁ熱出てしんどい、太陽が赤い〟とか思ってる時に、おかんが足踏み外して、オレをほっぽり投げちゃって。オレは〝あぁ太陽が回ってる〟みたいに思ってて。二人してドロドロになりながら病院に着いて、外科まで受けてしまったという思い出がある。」

マーシ「3~4年前の中野サンプラザのコンサートのリハーサルの時に、足を踏み外して靱帯を切ってしまったんですよ。で、そのまま病院に行ったらすぐに手術しなきゃダメ

だと言われたんだけど。これからステージがあるからダメだって言って。しかも〝俺はサンプラに客を待たしてるんだ〟って啖呵をきってたらしいんよ。で、病院の人に〝どうなっても知りませんから〟と言われながらも、痛み止めとなるべく動かないようにテーピングをして、そのままステージに立って。で、その後に続いた大阪と名古屋のライヴでは、松葉杖つきながら、椅子に座りながらやったんですよ。こんな経験も滅多にないやろと思ってさ。」

X

HIDE「小学校の時、ローラースケートで手の骨折って治ったら、足の骨折った。一ヵ月、二ヵ月ぐらいずっとギブスして学校行ってた。そのぐらいだな。
　オレ、スケートはできるよ。オレなんか、男版ジャネット・リンだよ（笑）。」

LUNA SEA

真矢「幼稚園の時、だ菓子屋に行って。だ菓子屋にお菓子が置いてある四角い木のカウンターみたいのがあるじゃない。その前をワーッと走ってたんですよ。そしたら転んで、その角にくちびるをぶつけて（笑）。もうくちびるが凄くはれちゃって、開かなくなっちゃったの。で、物が食べられなくて毎日おかゆを食べてたっていう思い出があるね。今、思うと大笑いだけど、その時は真剣勝負よ。
　それと小学校1年位の時に、近所のおねぇーちゃんが猫の顔をオレの方に向けて抱いてたのね。で、オレは〝猫だ〟とか言って見てたの。そしたらそのおねぇーちゃんに〝猫の顔に向かって、フーッてやってみ〟って言われて、〝フーッ〟ってやったんだ。そしたら目の下をひっかかれちゃって（笑）。あれは驚いたね。
　あと、小さい頃は病気ばっかりしてた。で、親が心配して小学校の6年間だけなんだけど、名前が違ってたの。姓名判断で強い名前にしてもらったというね。」

RYUICHI「高校生の時盲腸になって。ずっと痛いのガマンしてたんだけど、もうガマンしきれなくなって。その時家にオレ1人でいたんだけど、救急車を呼ぶのはちょっとカッコ悪いと思って、救急病院を電話で聞いて苦しかったけどバイクでそこまで行こうと思ったの。そしたら途中の赤信号で鈍痛におそわれて記憶を失って、何分間かバイクのタンクの上に寝てた。で、調子悪くってそこから家に帰ってお腹を暖めて寝てたの。全然吐きけがなかったから、盲腸だと思わなくて。そしたら、もう発狂寸前の痛みがおそってきて、もう今度は歩けなくて救急車を呼んだの〝すみませんけど、サイレン止めて来て下さい〟って。病院についた時には、もうハレツしてた。その日は点滴を打って寝て、次の日〝30分で終わるから〟って言われて手術台に上がったのはいいけど、4時間30分位かかった。破片がお腹の皮にくっついちゃって、それをメスではぎ取る作業をしてたらしいんだよね。
　ちょうどその時、LUNA SEAじゃないんだけど、バンドをやっててテイクオフ・7で入院、14日後位にライヴをやる事になってたのね。だから、10日位で無理矢理退院したの。で、残りの3日で気合い入れて練習してライヴをやった。その後も海に行って遊んだりしてたけど、全然平気だった。医者に必ず来て下さいって言われたけど、1回も行かなかったし。でも、それでやせたんだよね。入院前は、57kgあったんだけどその時計ったら40何kgだったからね。凄いビックリしたもん。
　でね、それも笑い話があって。親友でMr.Tってやつがいて、そいつが盲腸で入院してたわけ。で、そいつを見舞いに行って〝お前バカだなぁ。盲腸になんかなって〟って言ってたら、その晩オレが盲腸で入院（笑）。入院中そいつが、せんべいとか持って来るわけ。オレ、意地で食べてたからね、ガリガリ。」

INORAN「2つか3つ位の時かな。昔住んでた家の階段から落っことされて。お母さんに抱いてもらってたんだけど落っことしちゃったんだよね。で、ガシャンガシャン〜って転がっていったら、道を車がブーッて走って行って……。もうちょっとずれてたらひかれていたという。その時アゴをちょっと切っちゃった。後、缶ケリをやってて友達がけった缶が顔にあたって縫ったとか、滑り台から落っこって縫ったりとか、かな。」

SUGIZO「8才か9才の時、トランポリンかなんかで遊んでて落ちて、肋骨を折っちゃって呼吸が出来なくなった事があります。それが、凄く痛かった。後はあんまりケガってないですね。」

J「親知らずで死ぬかと思った事がある。1年半位前、目黒の養老乃瀧の前で夜中に屋台のラーメンを食べてて、グッて一口かんだら親知らずが痛みだしちゃって、2分位動けなかったもん。その時RYUに送ってもらったんだけど、もう死ぬかと思った。でまた、RYUが車を飛ばすからガタガタ揺れるでしょう。天井に頭ぶつけたり、余計悪かったんじゃないかって（笑）。それと、合宿中にまた違う親知らずが出てきちゃって。それは合宿先で抜いた。もう親知らずの痛さを知ってるから早く抜いた方がいいと思ってね。」

LUiS-MARY

山下善次「大阪でライヴ終わって、デニーズ行っとったんですよ。帰ろうと思ってお金払おうと思ったら、ぬいぐるみ投げてるヤツがおるんですよ。お店で売ってるぬいぐるみあるでしょう、それをポンポン外に投げてるんですよ。何や、こいつと思ってたんだけど、何かちょっと狂ってるみたいな、若いんですよ。それで外出て、無視して駐車場に行って車乗ろうとしたら〝パンクー、何してんのやパンクー〟言うてくるんですよ。振向いたらボコボコにしばかれて。ラリってるヤツでした。」

丸山武久「小学校の時、運動会の前の日になると毎年、熱が出てたんですよ。緊張して、気合いが入り過ぎて。いつも家族を困らせつつ、でも熱が出ても行ってたんですよ、運動会。扁桃腺が弱かったんです、小学校の時。手術もいっぺんせなあかんて言われてたんですけどイヤや言うて、そのままほったらかしなんですけどね。」

KEN「50ccのバイク乗ってて車にぶつかって。思いきりぶつかって、僕飛んだんですけど、何ともなかったんです。すり傷程度で、右全身うちみやったんですけど。」

HAINE「まだ若かりし頃のある夜、もう朝方でしょうかね、12時回ってましたから。妹に〝兄ちゃんピアスあけぇ〟言われて、あまりの妹の説得に負けまして、安全ピンであけたんですよ。で、その日に友達のライヴがあって、行ってたんですよね。その頃僕はPAのバイトやってまして。ライヴハウスとかないもんで、外注でPA運ぶんですけど、たまたまライヴ会場をそのバイト先がやってて、僕はバイトがオフやったもんで、ライヴ終わって帰ろうかなと思ったら、〝あ、西川君、撤収〟とか言われて、僕、友達待たしてますんで〝かまへんから撤収〟って。じゃあさっさとやりましょうかって片づけとって最後にスピーカーを下ろす時、角を持ってたんですけど、あと地上から10cmから20cmあたりの状態で、向こうの人が手をひいたんですよ。長方形のスピーカーでして、ちょうど角が点になるわけですよ。で、薬指がつぶれまして一瞬何が起こったかわからなかったんですけど、とりあえず抜いて。その頃、僕も一応バンドを地元でやってて、周りに女の子とかいはって、その子らが〝キャー〟とか言うてるんですよ。何言うてんのやと思ったら、〝おーっ、血が出てる、痛いー〟とか言うて（笑）。粉砕骨折して米粒状に第一間接から崩れてまして。
　つまりピアスの話っていうのは、よくピアスあけると運命変わるって言うでしょ。そんなのが気になって、あけたその日にケガしたっていう印象が強くて。それから以降ピアスはしないようにしました。」

ZIGGY

戸城「幼稚園の時、滑り台から飛び降りて足を折って、折ったんじゃねぇな、ヒビ入ったのかな、ちょっと覚えてないけど。2〜3ヵ月入院したぐらい。あ、いや1ヵ月ぐらいだったかもしれない、それぐらい。」

大山「病気とケガは俺いっぱいしたからね。一番印象に残ってるのはね、去年人間ドックに入ったんだ。その時にね、人間ドックに入るの初めてだったからさ、バリウム飲んだりするのは慣れてたけど。変な話、ケツの穴に指をつっこまれてさ、すげーカルチャーショック受けた。俺、絶対オカマにはなれないなっていう（笑）。たまんないものがあったなっていうね。それからはもう、人間ドックに入るぐらいだったら、そのまま天命をまっとうした方がいいなとかね（笑）。
　あと右手の薬指を骨折した時に、ずっと小指立て状態でギブスを固められて、一月半ギブスが取れなくて。その時、〝ああ、左手ってけっこういいじゃん〟っていうのを体験しましたね（笑）。体っていうのは不必要な部分なんて一つもないんだなと（笑）。うまくできてるぜ、えらいぞ神様って感じで。」

森重「俺は子供の時、むちゃむちゃ体が弱かったんだけどもね。すごいですよ。かかりつけの医者がね、いくつあったかなぁ。小学校の時ねぇ、ほんと病弱な子だったから。頻繁に通ってる医者が4つぐらいあったのかな、けっこうお世話になってね。中学で野球部に入って、もう恐るべき健康体を手に入れたなっていう。
　ケガはしょっちゅうしてるんだけどね、もうバンドエイドがかかせない（笑）。大人なのに何かいつもそういうのを貼ってるというね。でっかいケガでは、人差指のすじが一本切れてるけど。これはちょっと酔っ払ってて、えらい目にあったね。4本あるんだって、指って。それが一本切れちゃってて。最初に救急病院にこもった時にガラスの破片が中に残ってて、手術して全部で16針ぐらい縫って。神経切れたままで、今も感覚ないから煙草の火つけても熱くない。俺ギターすげぇ下手になったもん。再手術しないといけないのかもしれないんだけど。ちゃんとそういう専門の神経科とかでやれば、治るかもしれない。去年は骨折もしたし。階段から落ちて（笑）。酔っ払ってパンタロンの裾を踏んでねぇ。何やってるんだろう、休みなのに。」

ZI:KILL

EBIちゃん「小学校5年の時に、生まれて初めてスキーをやって、そしたら案の定、転げ落ちて、右の足首がはずれちゃってね、つま先が後ろ向いたぐらい。ゴロゴロゴロゴロ転がって、板がぬけないでこっち向いちゃって、その板がえびぞりになって頭にひっかかっちゃったの。」

KEN「小学校4年の時から、6年の時までね、足の関節が重度な病気らしくて、水泳とか一回もできなくてね。で、体きたえる為に柔道始めた。今でも風邪ひいたりすると足の関節がおかしくなって動かなくなる。
　小学校4年の時に左の腕の骨を折ったな。それは自転車で手離し運転してて、マラソンていう、その当時はやってた手離ししながら走ってるポーズをするっていうのでこけて、ポキッていったな。ケガなんて、しょっちゅうだったからさ、柔道部だったから。」

SEIICHI「額のところにキズがあるでしょ、斜めに入ってる。これはね、小学校入る前に、家の近くとか歩いてててね、ちょうど通りかかった家の窓が開いてて、中でテレビをつけてたのね。パッと見たら自分が好きな

番組やってて、〝あ、帰って見なきゃ〞とか思って急いで走ってってたら、石か何かにつまずいて思いっきりこけて、ここ切ったの。そんなもんかな。」

TUSK「まさに入院だね。それはSHOXX VOL.6参照ってやつだよ。参考にして下さい。」

幻覚アレルギー

SCEANA「ちっちゃな風邪とかはしょっちゅうですけどね。一回、ツアー中に腹痛で熱が出て、ライヴ前に点滴うって、始まる5分ぐらい前まで寝ててね。ツアーの一発目やったんですよ。点滴うったら気分的におちついて、楽になったんですけど。

いくら寝てもしんどいんですよ。寝過ぎや言われるんですけど（笑）。でも、それが4時間寝た時と、8時間寝た時と同じなんですよ。それは病気ではなく体質ですね（笑）。虚弱体質なんです。」

KAZZY「昔、カキ（貝の）食うて食中毒になって腹こわしたんが、人生で2回目ぐらいの大きい病気ですね。一回目は、小学校の時に腐ってたタケノコ食って、それ以来。もうすごいですよ。ちょうどライヴの日やったんですけど、腹痛くて、ホテルで寝てたんですけど。ホテルの壁に向かってゲロ吐いて、壁がまっ黒になって。もう熱は出るし、寒気するし。広島でカキ食うて、次のライヴが大分やったんですよ。その大分のライヴの日になって。ライヴの事は覚えてないですね。

中学の時、遊んでて鼻陥没してね、ちょっと骨格おかしいんですよ、鼻の軟骨が。病院行ったら、力わざで出すんですよ。ペンチで軟骨の先をガーッと。バーッと涙出て、血ぃ出て。生きた心地しませんよ、鼻ちょっと凹んだだけでも、人間て。もう触るのも気色悪いし。軟骨ってほっとくと固まるんですよ。それが一番の治療法で。」

THE OTHERSIDE

HAL「小さい頃、教会に通ってたんです、何故か。毎週日曜日行ってて、一カ月ぐらい通ってたんだ。そこの教会にデッカイ犬がいて、飛び出しナイフってありますよね、そのナイフを犬にさして遊んでたんですよ、その犬が餌食ってる時に。ケツの穴とかにさして（笑）。そしたら犬が急に怒って、足にガブッとかみついてきて。俺の犬よりでかい犬だったからすごい怖くて、何だったんだろうと思って足をパッと見たら、10㎝ぐらいの穴が開いちゃってたんです。そのまま俺倒れちゃって、そしたら神父さんが出て来て、耳元で何かごそごそ言ってるんですよ、神は守ってくれるとか何とか（笑）。そんな事言ってるなら救急車呼べっていう。」

優朗「ケガとかしても異常なほどに回復力が早いんですよ。16ぐらいの時、クリスマスにみんなでどんちゃん騒ぎしてて。友達が掌にジッポオイルをたらして、それを燃してふって消して、すごいだろうとか言って。それで意地になっちゃった僕が、ベロベロに酔払った状態で右手にオイルをベチョベチョにかけて火つけて、そのまま寝ちゃったんですよ。次の朝起きたら腕が一面ケロイド状態になってて（笑）。医者から、半年は治らないぞって言われてたんだけど一週間ぐらいしたら、カゲもカタチもなくなっちゃって。今となっては、もう跡さえ残ってないという。超人並の回復力で、自慢のタネです。」

MIST「2才ぐらいの時に、スクーターにひかれて耳が裂けました（笑）。ガキの頃の写真には耳が包帯ぐるぐるのゴッホかっていうようなのがあるんです。」

KNOB「小っちゃい頃に台湾バナナを食い過ぎて、脱水症状にみまわれて、病院に連れて行かれて、点滴をうたれたことがある。隣に寝てた少年がジュースを飲んでるのがうらやましかったという記憶がある。」

RYO「去年の11月にあばらにヒビ入れまして。原因は、カッコ悪いんですけど、バスの通路を歩いてて、転んだ所に尖った物が落ちてたんです（笑）。それで、京都と大阪と東京のアンティノックでその状態で3本ライヴやりまして。これは、はっきり言って、死ぬ思いをその日々治るまで送ってました。」

STRAWBERRY FIELDS

福井「むちゃくちゃカッコ悪い骨折をしたことがあって、高校の時に黒板殴って（笑）、左手の小指のこぶしのところが、ボクサー骨折になって、今も曲がったままです。みょうに痛いツキ指だなと思って、一週間ぐらいして医者に行ったら折れてたという。で、もう治りませんよって言われて、一生そのままです。」

LEZYNA「まつげが昔長くて、逆まつげだったんですよ。それを手術したっていう。小学生ぐらいの時なんですけど。」

SHU-KEN「16の時ちょうどね、日本でバイクブームみたいなのがバーっときた時で、その頃、学校休んで友達と京都から軽井沢まで遊びに行ったんですよ、しかも原付きで（笑）。その頃、『汚れた英雄』っていう映画があったんですよ。その中で主人公が、若い頃レーサーになるまでに練習した臼井峠へ行くことになって。そしたら、もう大クラッシュして、バイクは山から下に落ちて、親指が変な風に曲がってしまって。医者も行けずに、とりあえずバイクだけみんなえっちらおっちら上げて、泣きながら京都に帰りました。また帰り大雨に降られてね、ふんだりけったりでした。」

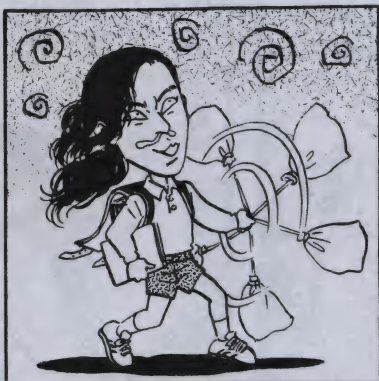
SEISHIRO「中学の時サッカーやってて、その時から始まったんですけど、腰を痛めたんですね。走れなくなって、しばらく運動できなかったんです。ずっと整形外科に通って治してたんですけど、その後今度はバイクで事故って膝を痛めて、また整形外科に通ってたんですけど。最近は、どうもベースを持ってるせいで、何か体がねじれていくみたいで（笑）。今度カイロプラクティックに行こうかなと思って（笑）。一回、鼻をガーンとぶつけて鼻血が止まらなくて、レントゲンを撮りに整形外科に行った事もある（笑）。整形外科にはお世話になってます。」

筋肉少女帯

大槻ケンヂ「すぐ扁桃腺が腫れる子だったのね。で、鼻も悪いのね、今だに悪いんだけど慢性鼻炎で。オレねぇ、鼻よかったら勉強できたと思うんだ。鼻悪いと集中力なくなっちゃうのよ。オレ小学校の時ずっとそうだったからさ、グズグズグズいってたから。それで入院したなぁ。扁桃腺とアデノイドを取るの。両腕をこう、縛られてさぁ、すごく痛いの。あとね、鼻の中にウミがたまるっていうんで、鼻の穴から太い管を通すの。鼻の骨の中に穴があいてるんだって。そこに通すんだけど、木づちで叩いて入れてくの、あれは恐かったよ。それは20回ぐらいやったなぁ、通院して。

ケガは、一度足の骨を折ったことがあります。オレ、よく足をくじく子どもだったのね。クセになっちゃってたの。子どもの頃、5～6回くじいたよ。そうすると近所のほねつぎっていう所に行って、よくやってもらってたけど。」

橘高「高校2年の時東京にでて来て、親元を離れた生活がたたったのかもしれないけど、左眼が緑内障っていう失明寸前の病気になったのね。その頃部屋にクィーンのポスターとか貼ってて、ベッドに寝てもクィーンのロゴが見える位置にあるのに、どんどん見えなくなってきたの。おかしいなぁーと思って近くの眼医者さんに行ったら〝結膜炎です〞って言われて、ほっといたら本当に見えなくなっちゃったのね。で、大きな病院に行ったら〝緑内障だ〞って言われ入院させられて。その頃バンドもアマチュアで屋根裏とか、レギュラーで決まっていたんだけど、全部でれなくなって、バンドのメンバーに〝治るまで待ってくれ〞って言って2、3ヵ月入院してた。その時、メンバーに対して家族愛を感じたのがひとつの思い出でね。もうひとつの最も嫌な思い出がね、失明するかもしれないから眼を切るっていう話もあって、髪の毛をそって横から注射をうつっていう。それは髪の毛を切るのも嫌だから、頑張ったの凄く。いい看護婦さんも一杯いてね、きれいな若い子が（笑）。

そしたら、眼に注射をうちますって言いだしたの。眼球に注射をうつって、最初眼薬で麻酔するのね。だから痛みはないの。でも、白眼に打つから、眼をちょっとでも動かすと針が折れますからねって最初に言うのよ。針が通る時って、まず角膜のプツっていう感触があって、次に眼にキューと異物が入ってきて目ん玉が倍位にふくれあがる感じがするの。で、抜いた後は、赤い血のもれる点が出来る…。オレ結局、それを2回やって手術しないで治ったんだけど。今回はちょっと、サスペンス・スリラーの話でした。」

BY—SEXUAL

DEN「幼稚園の時、肺炎になったのね。でもそれも、最初近所の病院に行ったら〝ただのカゼです〞って言われて、ずぅーと40度位熱をだしていたの。オレ、平熱が35度3分位で低いんだ。だから40度でたら、意識がなくなる位で、ホヘェーとしてたの。で、ある日違う病院に行ったら〝肺炎ですよ、よくここまでほっておいたね〞って言われて。それから、あんまりカゼをひかなくなったけどね。

あと、中学に上がる前かな。高校野球を見てて夏だったからあまりにものどが渇いてお茶を3ℓ位いっぺんに飲んだの。そしたら急性胃腸なんとかっていうのになって、運ばれて。3日位の入院ですむはずだったのに主治医が海外旅行に行っちゃって、2週間出れなくなったという。」

DEEP

JYUICHI「小さい頃の覚えてないケガが一杯ある。2才か3才の時、頭蓋骨にひびが入った事があって。それも自分では全然覚えてないんですけど、保育園の水の入ってないプールに落っこったらしいという。後、おしりに傷があるんですよ。それも聞いたら壊れた滑り台から滑って、何かがささって7針縫ったって。

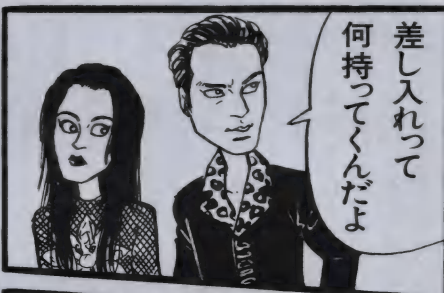
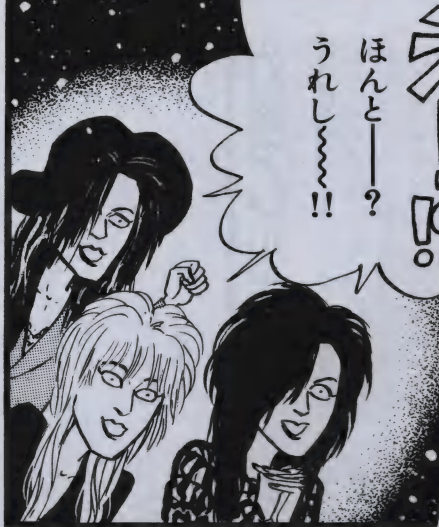
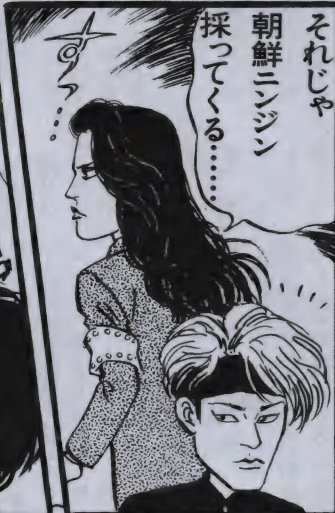
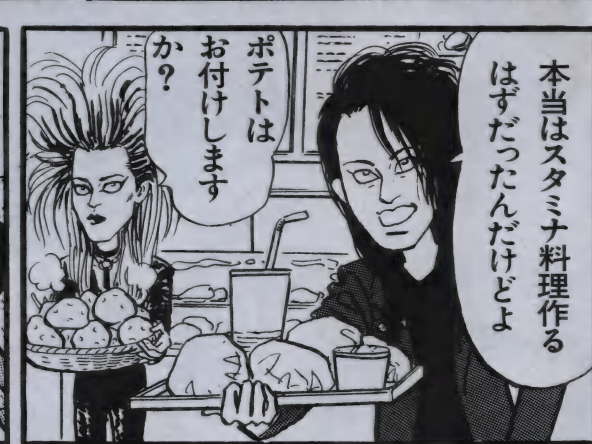
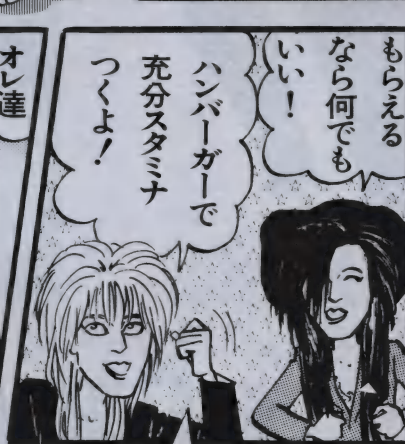
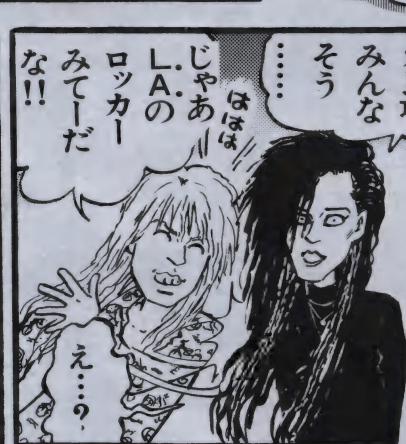
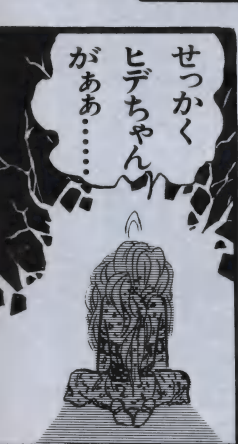
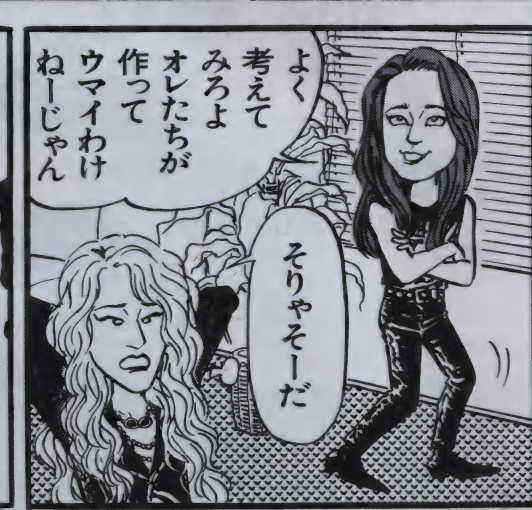
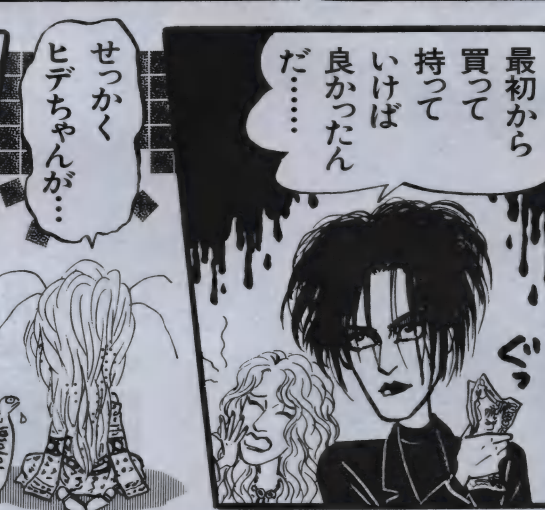
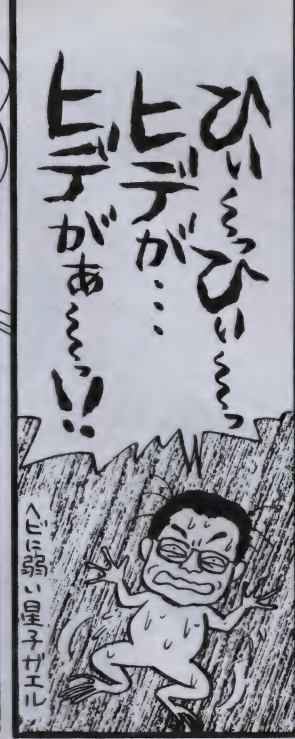
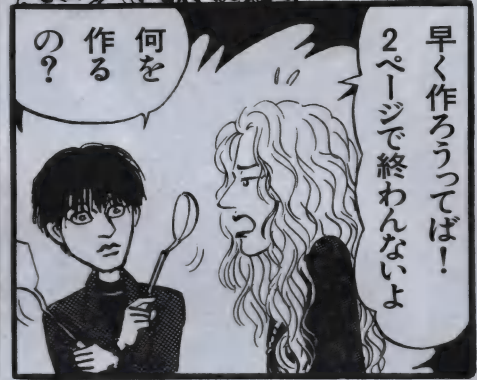
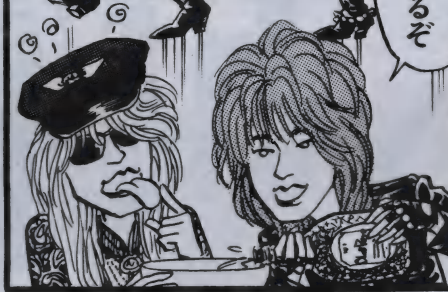
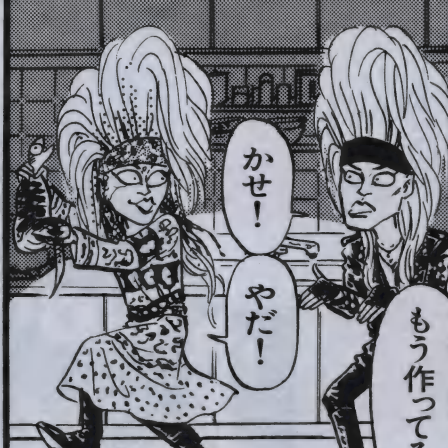
小学校の1年の時、指の先が取れちゃって。ドアに挟んで切断して縫いつけたの。小学校2年の時には、どこかの屋根から落っこってアゴの骨がでちゃって、5針位縫ったのかな。」

RAY「4、5年前なんですけど、車を200万で買って300万かけて色々いじったんです。でも、先輩とレースをしててガードレールにつっこんで1ヵ月で廃車にしてまった。で、その時病院に麻酔がなくって、麻酔なしで口を2針縫ったという。

後、中学の時鉄棒で大車輪っていうのをやってて。女の子が沢山見てたんで調子にのってやってたら、そのまま上に行って戻ってきちゃって、手が離れて後ろにビューと飛んでケガをしてしまった。それ、すっごい痛かったんだけど、何にもなかったようにスッと立ってね。」

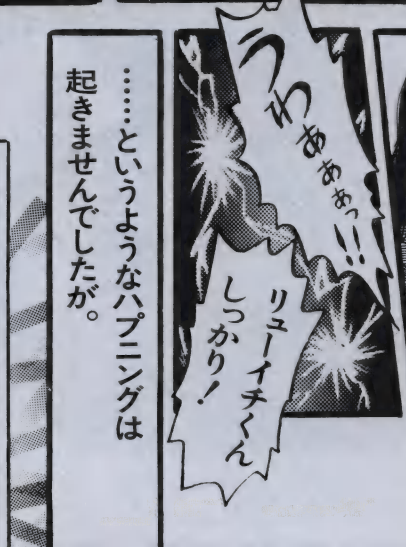
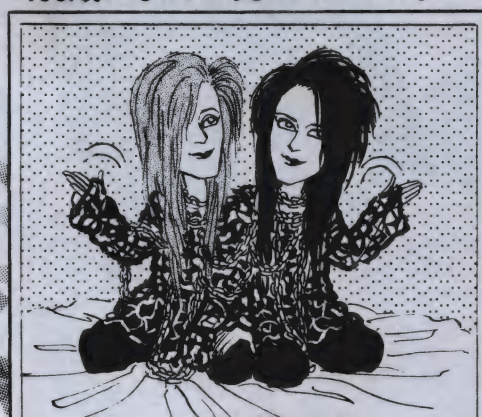
JUN「幼稚園の時オヤジの自転車の後ろに乗ってて、足をブラブラしてたら足をはさまれちゃって、13針縫ったり。滑り台でふざけてたら後ろから押されて……。で、近所に外科がなかったから目の前にあった産婦人科につれていかれて、1針額を縫った。その時麻酔もきいてない状態でギャーギャー泣いた思い出がある。」

イラスト/シマあつこ

4月某日、某所で行なわれたLUNA SEAのフォトセッションをチラッと見てきました。登場する人物・団体名は実在しますが物語もノンフィクションです……ウソウソ、フィクションです。
8ビートギャグ（国内版）
乱入（差し入れ）
シマあつこ
オレたち明日撮影が入ってるんだ
チェ〜ッ一緒に飲みに行きたいよ〜〜〜！
じゃあ差し入れ持ってってあげようか
えーっ!?
ほんと——？うれし〜〜〜!!
差し入れって何持ってくんだよ
スタミナ料理！
だったらやっぱスッポンかヘビだよな
じゃあヒデちゃんヘビ取ってきて
えーっ何でだよー
この時RYUICHIくんがしてたさるぐつわを「読者プレゼントすれば？」と誰かが言った…。
オイオイ勘弁してよ
SHO
ワタシじゃありましぇん
日頃ヘビに慣れ親しんでるんだからしょうがないじゃん、ね？
何それー
それじゃ朝鮮ニンジン採ってくる……
すっ
バタン!!
あの人どこ行ったの？
さあ……朝鮮じゃない……？
冷てーなぁ一緒に行ってやれよー
オイ待てよ漢方じゃないんだからさ
はっ!!
もぉ〜それは拳法でしょ！
相手にしないように
おりゃー！
はい……

こ〜んなお遊びも撮ったのでした。
コンセプトは「双子」だそうです。
100歳になった時またやってね。

waku waku PRESENT

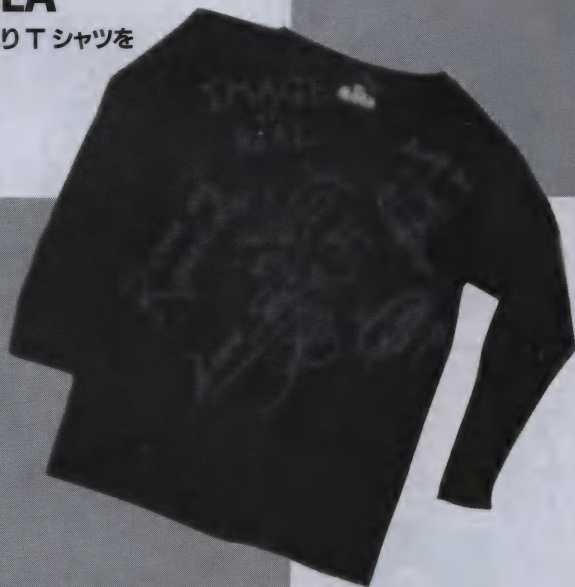
SHOXX 恒例スペシャル企画

やっほー！　おまたせしました、
プレゼントのコーナーだヨ～ん。
いつも選ぶのに苦労させてゴメン、ゴメン。
まぁ、じっくり見ておくれ。
どれが欲しいか決まったら、
P128を読むのだーっ!!

1 LUNA SEA特集記念豪華3大プレゼント!!

まずはサイン入りポラⒶSUGIZOⒷRYUICHIⒸINORANⒹ真矢
ⒺJⒻSUGIZO&INORANⒼJ&RYUICHI をそれぞれ１名様に。

Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ Ⓔ Ⓕ Ⓖ

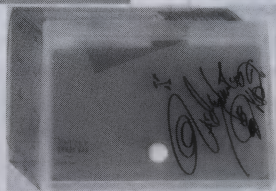
2 LUNA SEA

メンバー全員のサイン入りＴシャツを
１名様に。

3 LUNA SEA

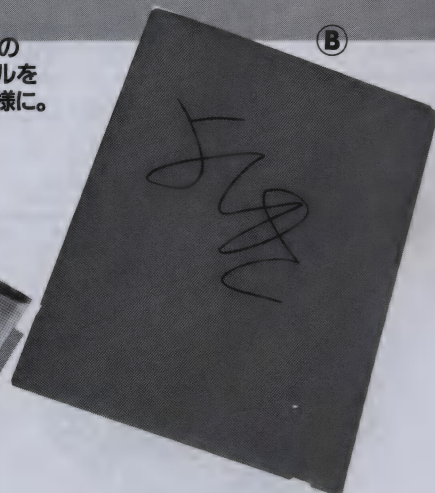
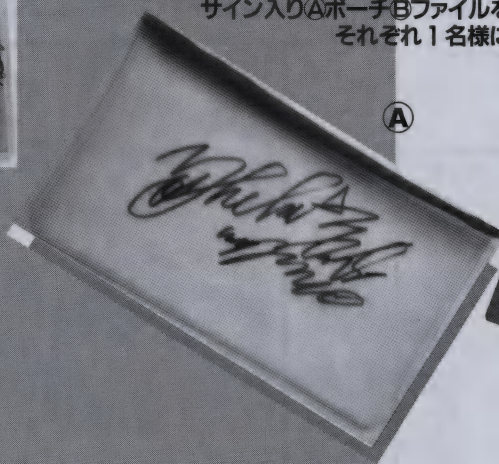
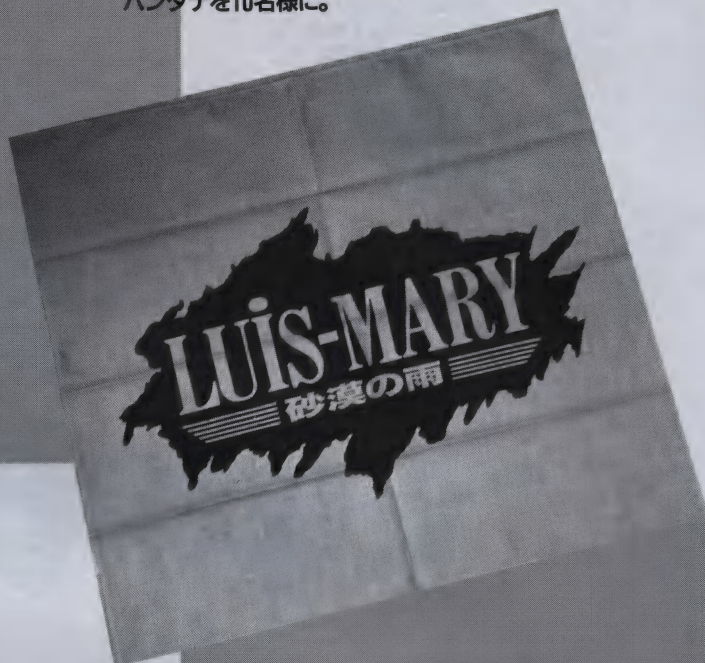
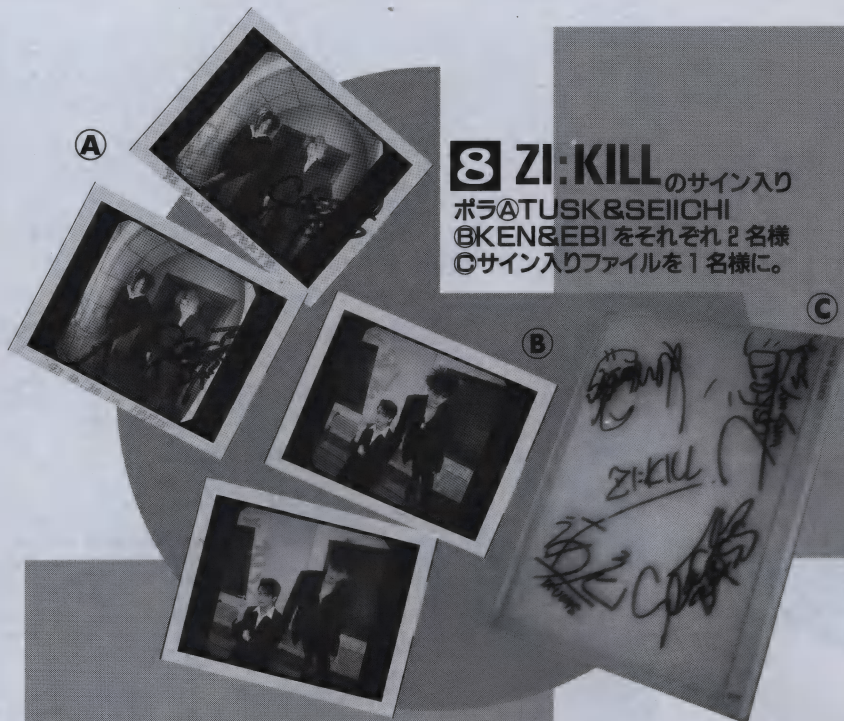
各メンバーのサイン入り
手形色紙をそれぞれ１名様に。誰のが欲しいかも
忘れずに書いてね。

5 HIDE(X)の

サイン入りⒶ便せんⒷハンディ
BOXをそれぞれ１名様に。

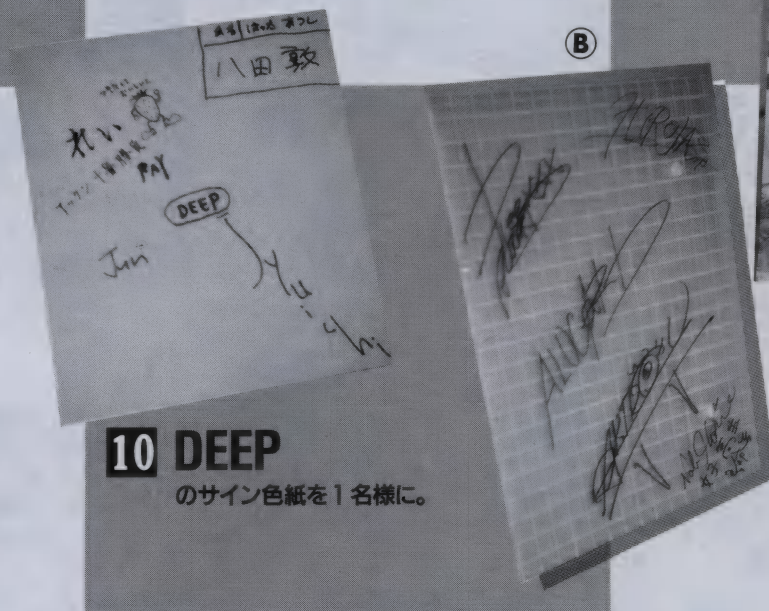
Ⓐ Ⓑ

4 YOSHIKI(X)の

サイン入りⒶポーチⒷファイルを
それぞれ１名様に。

Ⓐ Ⓑ

6 LUiS-MARYの
バンダナを10名様に。

8 ZI:KILLのサイン入り
ポラⒶTUSK&SEIICHI
ⒷKEN&EBIをそれぞれ2名様
Ⓒサイン入りファイルを1名様に。

9 福井祥史 (STRAWBERRY FIELDS)
のイラストを1名様に。

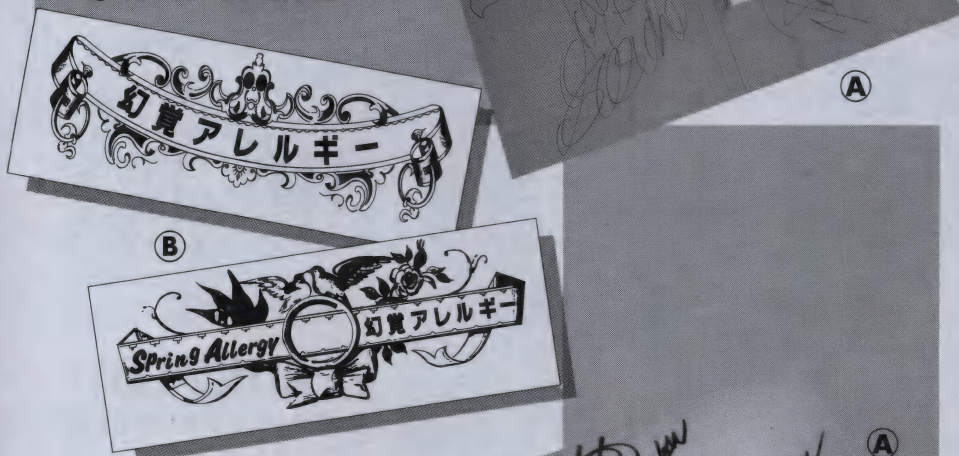
7 ALUCARDの
Ⓐポスターを5名様Ⓑサイン入りファイルを1名様に。

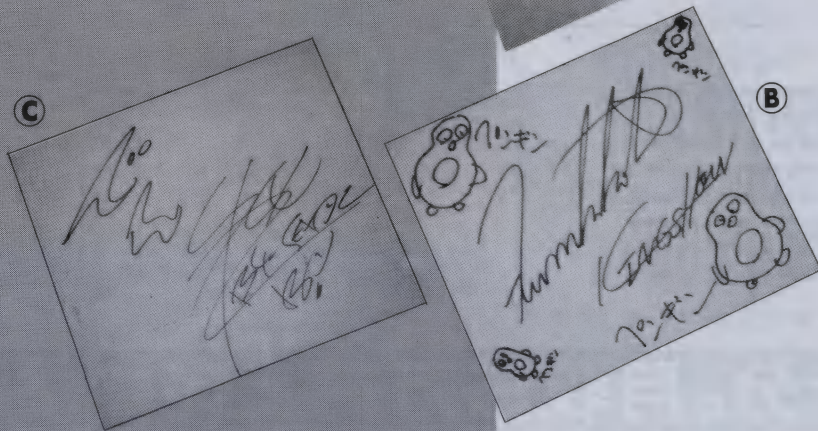
11 LOVE MISSILE
のリップスティックを10名様に。

10 DEEP
のサイン色紙を1名様に。

12 LOUDNESSの

Ⓐサイン色紙Ⓑ各メンバーのサイン入りポラをそれぞれ1名様に。誰のポラが欲しいかを書いて。

13 幻覚アレルギー

のⒶサイン入りファイルを1名様Ⓑステッカーを10名様に。

14 橘高文彦&DEN

のⒶサイン入りファイルⒷ橘高のサイン色紙ⒸDENのサイン色紙をそれぞれ1名様に。

アンケートのお願い

●下のアンケートに答えて、用紙を切り取り、ハガキに貼ってくれ（コピーはダメ）
●わくわくプレゼント（P126～129）の中から欲しいプレゼントの番号を選び、アンケート用紙に書いて送ってくれたら、抽選で当たるっつーわけ。
●あて先は、〒104　東京都中央区銀座5-1-7　数寄屋橋ビル5F　音楽専科社 SHOXX 編集部まで。
●〆切＝92年6月20日（当日消印有効）

●Vol. 9 プレゼント当選者発表
（敬称略）①三重県　内田桂子、北海道　越野千春、名古屋市　長野種雅、他7名②山口市　永木美保、他2名③福島県　大河内久美、府中市　野沢洋子④板橋区　市川梢、柏市　鈴木ひろみ、他2名⑤前橋市　堀川美代子、大阪府　日高あかね、他2名⑥徳島市　市川美紀、新潟県　渡辺江里子、他8名⑦横浜市　皆川彩子、別府市　宮崎誠、岐阜県　戸田優子、他2名⑧新宿区　河合朋子、他2名⑨秋田県　阿部幸子、他2名⑩奈良県　三輪典子、埼玉県　高橋智子、他2名⑪長崎市　鶴田陽子、広島県　橋本広美、北海道　白川和子、北九州市　高安奈緒子、他3名⑫金沢市　供田百恵、他2名⑬江戸川区　進尚子、他2名⑭岐阜県　永谷寿美、愛知県　谷川清香、熊本市　山本佳代、他6名⑮山形県　佐々木亮、他2名⑯江東区　柳沢直美、荒川区　大熊恵美子、他6名⑰福岡県　倉地悟⑱上尾市　野崎由香⑲川崎市　竹山陽子、他2名⑳神戸市　門永昌子、船橋市　小川明子、彦根市　池山紀子㉑鳥取市　米田尚美、沼津市　林万佐美、品川区　広瀬かおる、本庄市　八木祥江、寝屋川市　片山明美、一宮市　内藤佳子

●今月号の記事一覧（アンケート★1～2）

①LUNA SEA②グランドスラム③YOSHIKI（X）④Zi÷Kill⑤AION⑥DEEP⑦ラブ・ミサイル⑧ラウドネス⑨橘高文彦&DEN⑩幻覚アレルギー⑪アルカード⑫Sister's No Future⑬ジ・アザーサイド⑭ジル・ド・レイ⑮ジョリーピックルス⑯シルバー・ローズ⑰インディーズHR最新情報⑱アーティストBOX⑲8ビートギャグ⑳プレゼント㉑ロックンロール日記㉒ZIGGY㉓HIDE（X）ポスター

（キリトリ線）

SHOXX アンケート用紙 VOL. 10

住所	〒　　　TEL（　　）			
氏名		年齢		男・女

★印今月号の記事一覧参照

★1．今月号で良かった記事の番号を3つあげて下さい。
□□□ ●その理由

★2．今月号でつまらなかった記事の番号を3つあげて下さい。
□□□ ●その理由

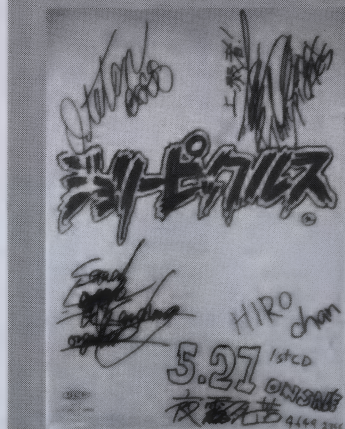
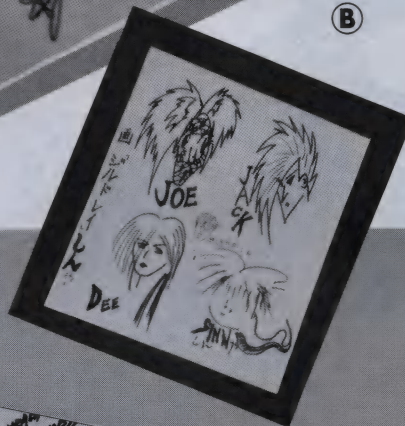
3．あなたの好きなアーティストは？
（　　　）（　　　）（　　　）

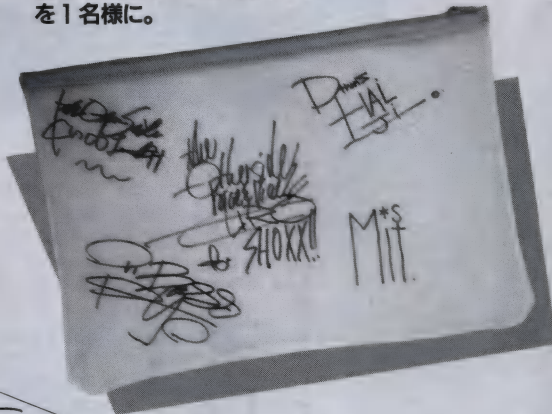
4．上記以外で好きになりそうなアーティスト（インディーズ含む）は？
（　　　）（　　　）（　　　）

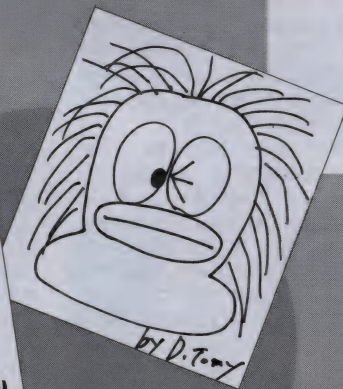
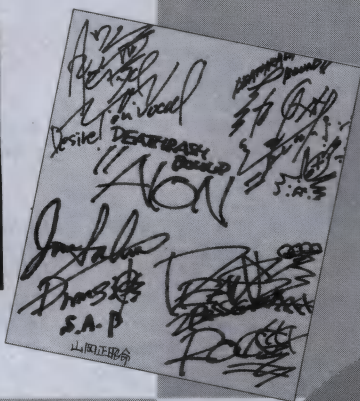
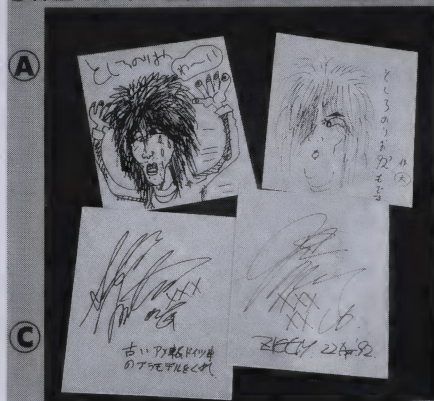
5．今月号（VOL.10）に対する意見、不満を聞かせて下さい。

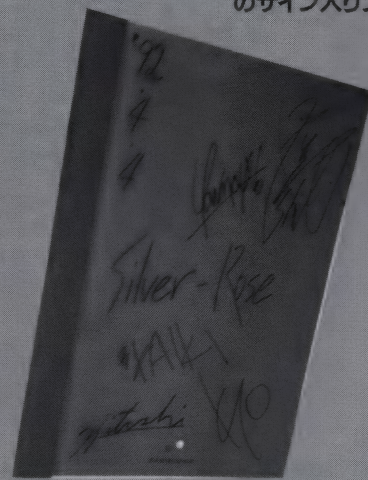
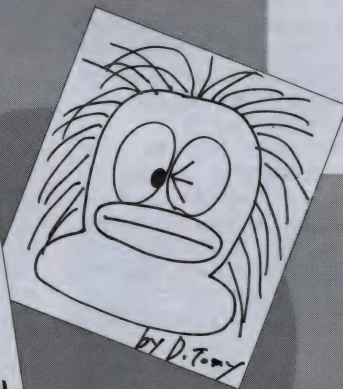
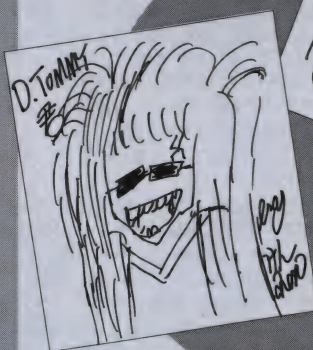
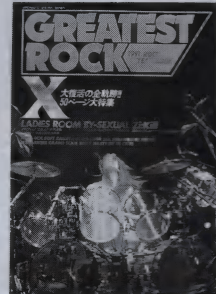
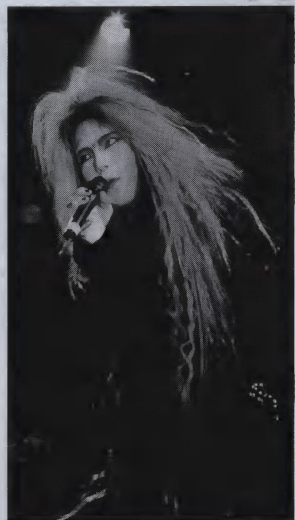
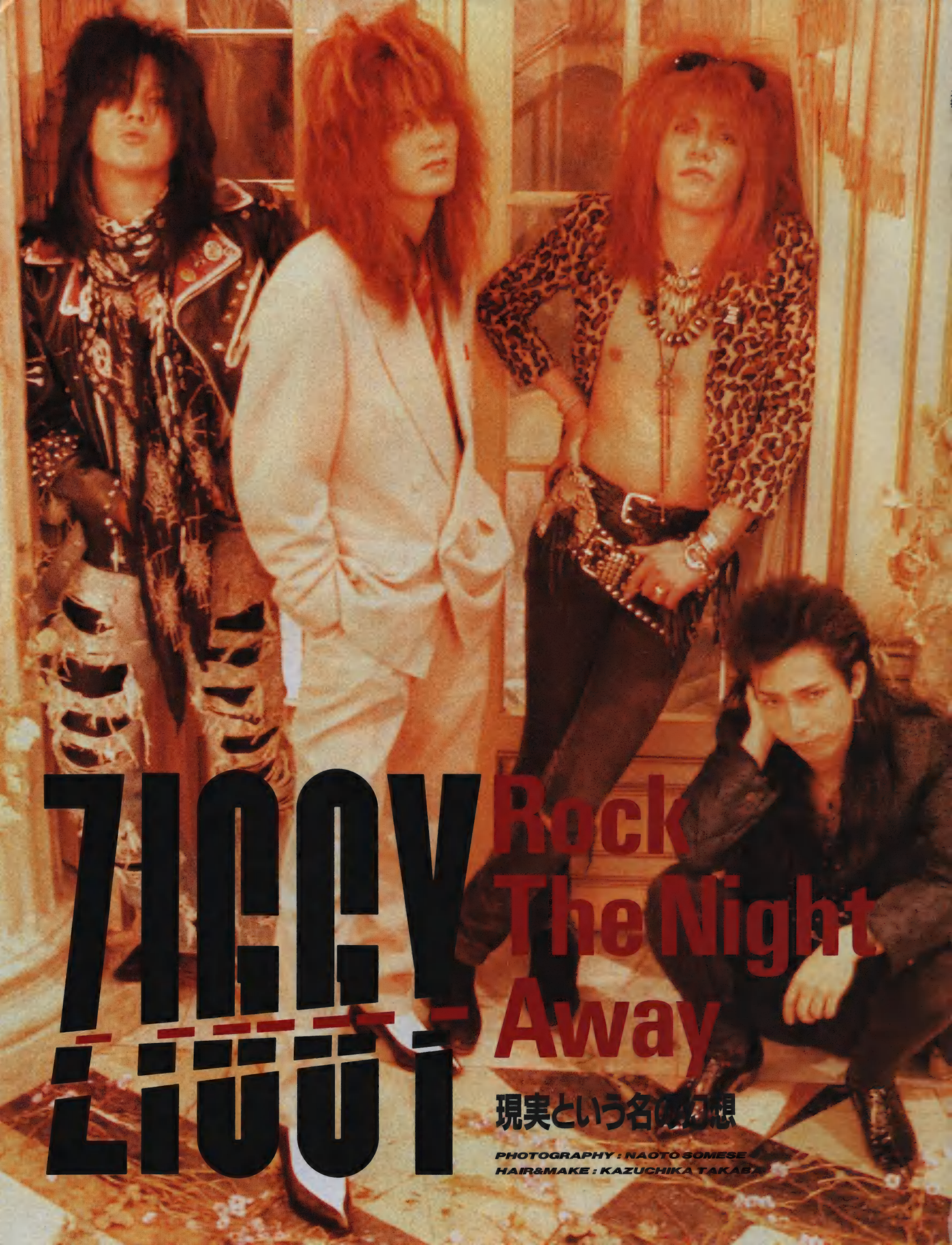
6．欲しいプレゼントの番号
（P126～P129参照）

第1希望	第2希望	第3希望
番	番	番

19 JOLLY PICKLES
のサイン入りファイルを１名様に。

18 Gilles de Rais
のⒶサイン入りファイルⒷSINNのイラストをそれぞれ１名様に。

15 橘高&DEN
のサイン入りポラをそれぞれ１名様に。どれが欲しいか書いてね。

16 THE OTHERSIDE
のサイン入りビニールバッグを１名様に。

20 GRAND SLAM
のポスターを５名様に。

21 AION
のサイン色紙を３名様に。

17 SILVER ROSE
のサイン入りファイルを１名様に。

23 ZIGGY
のⒶ戸城のイラストⒷ大山のイラストⒸ松尾のサイン色紙Ⓓ森重のサイン色紙をそれぞれ１名様に。

22 D.TOMMY と KENchan (Sister's No Future)
のイラストをそれぞれ１名様に。欲しい方を書いてね。

取材コボレ話、イッキにあれこれ
ここまで書いてイイのか?(笑)

●×月×日
哲ちゃんの作品展が大阪のパルコでも開催されることになり、わたしはまたまたトークショーの司会をおおせつかり、一緒に大阪へ。今回のゲストは、KIBAくんだ。無事、トークショーも盛況のうちに終わり、大阪はあまり詳しくないわたしたちのために、GARGOYLEの皆様が、あちこちを案内してくれた。いちばん面白かったのが、午前1時から開店するというてんぷら屋。魚河岸の中にあり、新鮮な魚介類が届くと同時に店を開けるという通好みのお店だ。
さて、この時に以前から噂には聞いていたKATSUJIの大食漢ぶりを、目のあたりに見てしまった。まず、夕食を食べに行った店で軽く3人前は食べ、その後に行った居酒屋でもよく食べよく飲み。てんぷら屋に向かう車の中で「俺、もうこれ以上食えない。店が閉まってるといいな」などといいながら、店に着いたら、みんなの2倍はてんぷらを頼み、ご飯とあさり汁をおかわりしてた。それから、行ったバーでもみんなの御通しを食べて……と、まさに噂以上の食いっぷり。でも、本当においしそうに食べるので、見てるほうもなんか楽しかった。今度東京に来た時には、カツカレー(KATSUJIの大好物)のおいしい店を探しておくから、また、みんなで行こうね!
●×月×日
今日は、LOUDNESSの取材。TAIJIに会った途端、「久しぶりじゃん、元気?」なんて、声をかけられる。でも、雅樹は3年ぶり、タッカンと樋口つぁんは5年ぶりくらいの超久しぶりのご対面だったのだ。TAIJIとは4ヵ月ぶりくらいだったので、「俺らのほうが、ずっと久しぶりやん」と、タッカンに笑われてしまった。でも、以前は取材で毎月のように顔をあわせてたから、ご無沙汰してたような気になっちゃったんだよね。相変わらず口数の少ないTAIJIだったけど、新しいバンドへの意欲は満々。すごく元気そうだったので、みんなも安心してね。
さて、そのちょうど前日。HIDEと会ったときにわたしがLOUDNESSのテープを聞いていたら、「いいな。俺も聞きたい。貸してよ」とおっしゃる。「明日、取材だから、ダメ」といったら、ちょっぴりショボンとしてた。それをTAIJIに伝えたら、「金出して、レコード屋で買えっていっといて(笑)」なんて、いってる。でも、取材が終わったら、「やっぱり、元のメンバーには、いい音のテープを渡さなくちゃな」などといって、前日にニューヨークから届いたばかりのTD済みのテープを、レコード会社の人からHIDE用にともらってたよ。
その取材が終わってから、PATAの取材で六本木へ。そしたら、偶然、LOUDNESSも同じスタジオで撮影だったのだ。一足早く撮影を終えたタッカンとTAIJIが、撮影中のPATAのスタジオに乱入し、一緒のショットを撮るなんていう微笑ましいひとコマもあった。
さて、PATAの撮影が終わったのが、夜中の12時過ぎ。なんと、それからインタビューを始めることになった。場所は、当然(?)居酒屋。ところが、PATAは隣のテーブルで飲んでいるスタッフの様子が、気になって仕方ないらしい。そこへ、前日から「飲むときは、絶対に呼んでね」といってたHIDEが、姿を現した。そしたら、PATAはもう、気もそぞろ。早く仕事を終えて、みんなの仲間入りをしたくて、うずうずしている。結局、「ね～、インタビューはまたにして、そろそろ飲もうよ」というPATAのひとことで、取材は延期されることになってしまった。う～む、最近、居酒屋で取材すると、途中でただの飲み会になってしまうことが多いような気がするな。トホホホ……。
●×月×日
デビューを目前に控え、取材攻めのLUNA SEA。なんと1週間に4回も顔をあわせることもあったが、彼らはいつも元気いっぱいだ。一度、彼らがスタッフとジャケットの打ち合せをしている場所に居合わせたのだが、そのミーティングがすごかった。かしましいというか、パワフルというか、とにかく、大騒ぎなのだ。どこまでがギャグで、どこまでがマジなのか、わからないくらい。でも、無謀と思えるような意見の中に、彼らの斬新なアイデアが含まれていて、若さのパワーをとても感じてしまった。
その時、突然、INORANから「今日、優しそうな顔してる。お化粧、変えたでしょ?」とのご指摘。ほんのちょっと、アイシャドウの色を変えただけなのに、鋭い! 「ちょっとだけ、色を変えたの」と答えたら、「僕は、ちゃんと見てるんですよ～」なんて、いってる。いつもボワワンとした雰囲気のINORANなのに、しっかり見てるとこは見てるのね。こりゃ、油断できないぞ。でも、「今日は優しい顔してる」ってことは、いつもは恐い顔ってことなのかな? くすん。
●×月×日
LADIES ROOMのキャバレー・ライヴを見に、名古屋へ。ライヴの翌日は、中京テレビのイベントで、ドッチボール大会だった。GEORGEと百太郎が選手として出場すると聞いて、試合会場に行ったのだが、前日……いや、当日の朝5時まで飲んでいたGEORGEは、重度の二日酔い。体調最悪で一時は出場も危ぶまれていたが、さすがに試合が始まると持ち前の運動神経で大活躍していた。
さて、その閉会式でのこと。わたしは1メートルくらい高い段の上で、ぼーっとその様子を見ていたのだけれど、突然、GEORGEが後から人のことを押したのだ! あっという間もなく、段から落ちてしまったのだけど、なんと下は昨夜の雨でドロドロになっていたぬかるみ。足を取られて、もう少しで顔から泥に突っ込むところを、横に立っていたマネージャーの大谷さんにつかまりまくって、なんとか転ばないですんだ。
バカヤロー! あんなとこで転んだら、みんなの笑いの種になっちゃうじゃないのさ。300人以上のファンが、近くで見てたっていうのに……。なのに、GEORGEときたら、「大島さん、なにひとりではしゃいでるんですか? 静かにしてなきゃ、駄目ですよ」だって。もぉ、絶対にいつか、復讐してやる! プンプン!
●×月×日
哲ちゃんのアトリエに、MORRIEが元EZOのSHOYOを連れてきてると聞き、ちょこっと顔を出した。MORRIEはファースト・ソロ・アルバムをニューヨークでレコーディングしたとき、ずっとSHOYOの家に滞在してたんだって。SHOYOが金髪を細いドレッドにしている間、久しぶりなのでいろんな話をしていた。そして、ようやくロットを全部巻き終わったとき、彼が友達の家に電話をして、大変なことが発覚してしまった。ニューヨークでお世話になった人が家族と共に、SHOYOを夕食に招こうとしているというのだ。
それを全然知らなかったSHOYOは、焦りまくってる。今からではもうキャンセルできないし、かといって4時間以上もかけて巻いたロットを外すわけにもいかない。そこで、苦肉の策として、SHOYOは頭に布を巻き付けて、ロットを隠して夕食会に行くことになった。しかし……。200本以上のロットがついた頭は、異常に大きく、どう見ても普通の人には見えない。もう、その場にいた哲ちゃんもMORRIEもわたしも、目に涙をためて大笑い。
結局、どうせならとことん変な人になってしまおうということになり、SHOYOは哲ちゃんのペイズリー柄のロングコートを借り、丸いサングラスをかけて、外出していった。それにしても、その姿は本当におかしかった。あの日、SHOYOを町で見かけた人、いったい、彼のことをどう思ったかなぁ(笑)。
●×月×日
今日は、橘高ちゃんとDENの対談。最初は撮影が終わったあと、喫茶店でインタビューするはずだったのが、撮影が押して喫茶店がNGになったため、またまた居酒屋での取材になってしまった。この時に、対談のなかにも出てくる「DENの唐揚げ好き」の実態を、わたしはしっかりとこの目で見てしまった。対談をしながら、テーブルの上にあった山盛りの唐揚げを、DENはひとりでペロリと食べてしまったのだ。ん～、やっぱり、本当に好きだったんだね。
さて、その日の深夜。都内某所のライヴハウスを借り切って、不思議なパーティが開かれた。まぁ、みんなでセッションしながら飲むっていう趣旨のパーティなんだけどね。そのために、橘高ちゃんとDENは撮影が終わってからもメイクを落とさず、あのままの姿で道を歩いたり、居酒屋や普通のスナックに入って飲んだりしていたのだ。きっと、一般ピープルの方々は、さぞ驚かれたことでしょうね(笑)。
パーティには、DENちゃんと橘高ちゃんのほか、HIDE、YOSHIKI、ちょうど東京にいたGRAGOYLE全員、けんchan、TOMMYちゃん、KYOちゃん、SHIN、HARAちゃんと、そうそうたる顔触れが集まった。もちろん、ごくごく内輪で行なわれたパーティだけど、普段から「酒を飲むと、音が出したくなる」人たちばかりだったので、即興でいろんなセッション・バンドが飛び出し、とても面白かった。
やっぱり、みんな、本当に音楽が好きなのね～と、感心してしまったわたしです。
P.S 皆様から山のようにたくさんのお手紙をいただき、とても嬉しい大島ですが、なかなかお返事を書く暇がありません。切手を同封してくれる方も多く、とても心苦しいのですが……。その代わり、もっともっとこの日記でいろんなミュージシャンの素顔をお伝えしていきますから、それで許してくださいな♥

ZIGGY
Rock
The Night
Away
現実という名の幻想
PHOTOGRAPHY : NAOTO SOMESE
HAIR&MAKE : KAZUCHIKA TAKABA

なが～い、なが～い1年半もの有給休暇が終わって、ZIGGYがロック・シーンに帰ってくる日がやってきた。復帰第1弾となるアルバムは、その名も『YELLOW POP』と名付けられてレコード店に並ぶ時を待っている。レコーディング直後のZIGGYは、すっかり疲れ果てていて、またもや休暇に突入しそうな雰囲気もあったけれど、とりあえず復帰記念の第一声がこれだ！

森重樹一

INTERVIEW : MARI ITOH

?があるから頑張れるってところもあるな。なんか前向きだな、最近(笑)。

約一年半、休んだから変わったというわけでもないんだろうが、森重樹一は大きくなったようだ。今の彼は、自分にとっての音楽、ZIGGY、そして自分自身というものを、しっかりととらえている。もちろん、これは森重に限ったことではなく、ZIGGYの各メンバーに言えること。そこから、さらに可能性を広げていこうとする前向きな姿勢が、今回、『YELLOW POP』のようなアルバムを完成させたのではないだろうか。

——そろそろ、約1年半の休暇が明けるわけだけど、休暇中、アルバム用の曲はコンスタントに書きためてたの？

森重　うん……と言うか、できないときは、ひと月ぐらい何もできないんだけど、できるときはいっぺんにできるじゃない？　テープ三本ぐらいあったよ。でも、アルバムに入れたのは、その中からは二曲ぐらいかな。今年に入ってからできた曲のほうが多い。

——ニュー・アルバムの方向性は、前々から考えてたのかな？

森重　戸城が絶対、エクストリームとかの線で来ると思ってたから、それならそういうのも聴いとかなきゃって勉強はしてたんだけど、スタジオに入りたての頃、意外とコケましてね（笑）。彼は最初そっちの路線で曲を作ってきたけど、クオリティとかを考えたとき、これはZIGGYじゃできねぇなっていうのがあったし。もともと、ああいうのってテクニカルな人たちがリズムっていうものを追求した音楽じゃない？　俺たちがやるべきではないんじゃないか、と。

——森重個人としては、どういう構想を持ってた？

森重　自分の趣味で言ったら、もっと違うものやりたいっていうのもあるけど、バンドに持っていく場合、ある程度のクォリティが出せて俺がバンドに貢献できるもの……って言うと、今回のような曲になっちゃうんだな。メロディ指向だとか、一般の人がZIGGYの森重樹一っていうソングライターに対して持ってるイメージってあるでしょ。そういうものへの自分なりの抵抗も試みたんだけど、それは今回は形にならなかったと言うか……。

——今までのアルバムを見ると、オープニングはハードなものとかロックン・ロール路線で来てたけど、今回、ちょっと違うぞ、と。

森重　うん。これだったら俺たち一番じゃないかっていうものをやりたいってのが基本的にあるからね。今さらロックン・ロールでもないんじゃねぇか？　って……戸城なんかは、すごく感じたんじゃないかな。

——ソングライティングで考えたとき、戸城のおいちゃんは、どちらかと言うとハードな部分を担当してたような気がするんだけど、今回、変化球を投げてるという感じだよね。

森重　ZIGGYっていうバンドの今までの活動のしかたとかアルバムの作り方とかに対する？マークがあったんだと思う。自分たちにとってパターン化してるやり方を、ちょっと変えない？　っていう感じだよ。で、俺は今のZIGGYの中では、ある種、保守的な部分をキープしながら彼の変化球との兼ね合いでコントロールするっていう感じだけど、賛成だったし、バンドの可能性っていろいろあるわけだから、前向きにトライするのはいいことだし。

——メロディ・センスとかポップ・センスっていう部分でZIGGYらしさは変わってないけどね。ライヴではロックン・ロールだってやるんだろうし……。

森重　より音楽的になってきてるよね。なんかさ、ロックン・ロールの旗を振りかざすのはダセぇじゃんってのが、戸城の中にあったんじゃないかな。俺はダサくてもいい人だからいいんだけど（笑）、あいつはバンドの方向性とかを考えてる。でも、離れてみて、みんなバンドのあり方を冷静に、客観的に見るようになったんじゃないかな。自分はバンドにとって何ができるかとか、そういうことを前向きに考えるようになったんじゃないかっていう気がしてる。

——ZIGGYの森重として、シンガーとして、休む前と今で変化した部分は？

森重　こだわりがなくなった……って言うか、自分の好きなラインだけがいいものだっていう考え方はしなくなった。少し視野を広げてものごと見て歌ったら、もうちょっと広がりが出るんじゃないかっていう気はしたんだ。詞の部分でも、今までやらなかった方法論でも書こうかなっていうのがあったし。

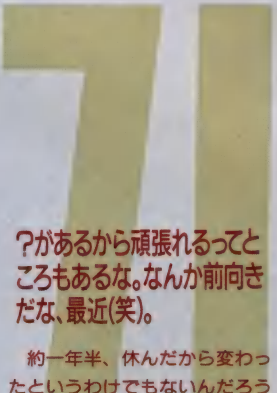
——詞も書きためてたんだ？

森重　ネタ的なものは常にメモったりしてるからね。そういうのがタイトルとかに、ちゃんと来たりしてる。

——曲のタイトルに日本語が多いよね。

森重　素晴らしいー（笑）。俺は今回、それがうれしいんだな。英語でものを考える人間には英語じゃかなわねぇってのがあるからさ。日本語だったら絶対、負けない。だったら、日本語で作ってもいいな、と。ただ、日本語で作ると、どうしても日本人の音楽にしか聴こえないところがあって、そのへんが洋楽カブレとしては、ちょっと辛いんだけどね。

——でも、サウンドは洋楽寄りだから……。

森重　うん。だから……日本のロックって、すごく混血児っぽいところあるじゃない？　そういう宿命と正面から取り組まなきゃっていう感じはあるね。たとえば、今まで俺にとってエアロスミスとかがアイドルだった、と。それと同質のものを求めたらだめだけど、日本人であるZIGGYっていうバンドがエアロスミスとは違う方法論で高いクォリティのものを作ることができるわけじゃん。俺がエアロスミスを真似して作るものじゃなくて、これだったらスティーヴン・タイラーには作れねぇっていうものがあると思うんだ。そういうものを作っていきたいな、と思ったのね。

——レコーディングの面で、今までと違ったことはある？

森重　プロデューサーが違うから、いろいろやり方も違うよね。歌に関して言えば、とにかく時間かかった。俺、早いほうらしいんだけど、今回は一日に十何時間とか、そんなペースだった。いろんな録り方したし、けっこう、凝ったつもりだよ。ハーモニーにしても、通常のZIGGYパターンじゃないものもやったし。

——久しぶりに歌声を聴いたせいかどうかわからないけど、歌い方とか声が、今までと違うような気がしたな。

森重　ちょっとずつね。声質も変わったし。俺の声って、セミ・ハスキーっぽいじゃん。で、しゃがれきっちゃうのは今まで自分としてはNGだったんだけど、今回は、それをあえてよしとしたの。表情のある歌……そういうテイクをチョイスしたつもりなんだ。そういう選び方ができるようになったのは、何枚かアルバムを作ったっていう自分の自信だし、もっと深く入ったところの本当の歌のよさにまで踏み込まなきゃな、という感じがしてさ。

——こういう言い方はバンドには失礼かもしれないけど、今までのZIGGYは、森重の歌で聴かせてるところもあったと思うのね。歌のうまさや声で。アレンジとか、バックの演奏より歌が先にきてたような感じね。でも、今回のアルバムでは、歌も全体の中に収まってると言うか……。

森重　より、バンドっぽくなったよね。ヘンな言い方だけど、歌は歌で存在してて、バンドのサウンドはバンドのサウンドで存在してて、こう……歌が馴染まない部分ってあったような気もする。今回、歌もサウンドの一部として取り込まれたって言うのかな。で、それは、すごく考えてやったかもしれない。

——今回のアルバムは、いろんな意味で問題作になるだろうね。

森重　うん。まぁ、お約束もあるけど、予定調和で終わらせてない。ZIGGYがいちばんこだわんなきゃいけないところは充分出せてるからね。ジャケットもすごいし（笑）。これは見てのお楽しみだけど。

——休んでるとき、先のことで不安を感じたことなんてなかった？

森重　ZIGGYに対しては、不安はなかったな。今も、ないんだよね。自分が音楽をやっていくということが自分にとっては基本だから、たとえZIGGYがうまくいかなくなったとしても、それは、しょうがないと思ってる。四人でやってるんだし、それぞれ趣味も違うわけだから。でも、四人でやることに可能性がまだ見出だせるんだったらやってみたいなってことだよね。ZIGGYがバンドとして機能するんだったら、やろうよ、と。そういうふうに考えてるから、個人レベルでの不安はないんだ。カネのためにやってるっていう意識もないし。

——ZIGGYでやることは、まだまだたくさん山積みになってる、と。

森重　うん。やっぱり、アルバム一枚作ったら、また視野も広がるし。今回、こういうアルバム出すことで、また制約が少なくなったと言うか、逆に、もっとハード・コアなものもできるだろうし……なんか、このアルバムが、そういう礎みたいなものになるんじゃないかな。このアルバムを出したことで、次はもっと変化するだろうと思う。「何、あんたたち？」って言われるかもしれない。でも、「何、あんたたち？」っていうぐらいでないとつまんないという気がするんだな。

——ここから先が、また楽しみだけど、再スタートにあたって、今の気持ちは？

森重　リアクションが楽しみだよ。自分たちは自分たちなりに、今回のアルバムを作ったこととか前作からの成長とか変化っていうのを定義づけたりしてる。それを一般の人たちがどういうふうに受けとめてくれるのか、興味深いよ。まぁ、バッドボーイズ・ブームから始まったバンドとしては、素晴らしい変化だよね（笑）。今回のアルバムは音楽の基本であるメロディとリズムとハーモニーっていうものをすごく重視してるし、音楽の音楽たるところを見つめ直してると言うか……。でも、ZIGGYの誠実さって、そういうところでしか見せられないから。誠意を持ってやってるんだっていうのは見せたいからね。自分の中に？マークはまだいっぱいあるけど、？マークがあることが苦しくなくなったよ。ハテナがあるから、がんばれるっていうところもあるな。なんか、前向きだな、最近（笑）。

松尾宗仁

INTERVIEW : YOSHIYUKI OHNO

「オレにはロックしかないぜ」とか言ってるヤツを見ると、〝ヘッ〟と思うようになった。

キレイなオクサンをもらって、新婚気分で突入した長い休暇。新婚旅行にアメリカへ行くという話は、休む前から聞いていたけれど、〝子宝の湯〟にまで行ったとは宗仁も衝撃的なヤツだぜ。しかも、「きっと休みが終わったら、メイクなんてしなくなってるんだろうな」と言っていたくせに、しっかりと厚ヌリは健在。結婚式でも髪を立ててメイクをしていた宗仁は、やっぱり一年位じゃ変わらなかった。三ツ子の魂百までも…ってね。

——休んでいる間はなにをやっていた？

宗仁　去年の1月から休んだでしょう。それで、最初に佐藤宣彦さん（ZIGGYやリンドバーグなどを手掛けたプロデューサー）のライヴに出たでしょう。とにかく、いわゆるバンドっていうのは、誰ともやってない。

　それで、3月に胃を悪くして病院に通ったでしょう。検査が終わって4月に入ってから、温泉旅行に行ったんだ。ホントは4月からLA（ロスアンジェルス）に行こうと思っていたら、湾岸戦争でダメだったから、5月下旬になってからLAに行ったんだ。まあ、それは新婚旅行と観光をかねてね。

——温泉旅行は、まさか〝子宝の湯〟とかいうんじゃないだろうね？

宗仁　あっ、それも行った（笑）。でも、なんか温泉に入って、うまい日本酒が飲みてえなぁっていう感じだった。露天風呂とか4種類くらいの風呂があるところで、オレ全部入って、旅館の人に「そんなに入る人、あまりいませんよ」って言われたもの（笑）。

——LAでは、何をやっていた？

宗仁　LAには、奥さんとふたりだけで行ったから、まずクルマを借りて友達ふたりに会って、あとはひたすら観光。LAには2回行ってたんだけど、2回とも仕事がらみだから、もう昼間はおのぼりさんになって観光して、夜はロキシー（ライヴ・ハウス）とか行って、バンドを観てた。でも、もうサイテーだった。今のLAって、へたしたら日本よりもレベルが低いんじゃないのって感じだった。

　クルマがあったから、砂漠のほうまで行ったり、ヴェニス・ビーチに行ってフィル・コリンズの別荘を見たんだけど、それがものすごいの。ロールス・ロイスが3台並んでいてさぁ。〝ジェネシスで、これを建てたかぁ〟って感心したもんね。そんな感じで、2週間遊んで帰ってきたんだ。

　帰ってきてからしばらくは東京でうだうだしてて、夏になってから、おたがいの実家に帰ったのかな。オレが福岡で、奥さんが宮崎でしょ。同じ九州で遠いわけじゃないから、ついでに両方に行くっていう感じだからね。ヒマだったから、3回も九州に帰ったよ。

　それで東京に戻ってきて、カリ坊（ティラノザウルス）と一緒に何かやろうかっていう話になって、ラ・ママに頼んで、誰かアマチュア・バンドの日に30分だけブッキングしてもらおうって。ふたりだけでやろうということで、コックニー・レベルとかモットの曲なんかを、けっこうマジメに練習したんだ。でも、結局やらなくてさ（笑）。だから、毎年恒例のマーク・ボラン追悼コンサートで、ふたりでやったんだよね。

　そうこうしているうちに、ダイアモンド・ユカイから電話がかかってきて、「今、レコーディングしててさ、参加して欲しい曲が1曲あるんだ。その曲だけ、べつのミュージシャンを集めてやるから、やってよ」って。

　それで、スタジオに行ってビックリした。ホントにメンバーがすごくて、ユカイに「マジかよー」って言ったもの。タイコが村上ポン太さんで、ベースがアルバムのプロデューサーの吉田建さんでしょ、キーボードがホッピー神山に、もうひとりのギターがデル・ジベットのヒカル。そこに、ギターでオレが入って、ユカイがヴォーカルでしょ。「なんだ、オレたちがいちばんヘタじゃねえか」って、ふたりで話してた（笑）。

　それで1曲録ったんだけど、アルバムに入っている曲が洗練されたような感じのばかりになって、結局オレが参加した曲はオーソドックスなロックン・ロールだったから、アルバムから外れてボツになったんだ。幻のセッションだから、なんかの形で出したほうがいいよって、ユカイには言ってるんだけどね。

　オレはしばらく音楽から離れていて、ユカイはバリバリにやっていたわけじゃない。だから、すごく刺激になった。それに、佐藤宣彦さん、白浜久について、他の人のレコーディングに参加したのが3回目でしょう。それぞれ、レコーディングのやり方が違うから、勉強にもなったしね。

　その後は、カリ坊とマーク・ボラン追悼コンサートのリハーサルをやって、そのライヴが終わってからは、また音楽から離れた。

——それ以外はプラモデル作りと……？

宗仁　あと、子作りじゃん（笑）。でも、なかなかできないんだ、これが。

——それこそ、本人の努力がモノを言うと思うけどね（笑）。じゃあ、あとはまったく音楽から離れていたんだ？

宗仁　知り合いで、英国車のツーリング・クラブを作ってるヤツがいてね、そういうヤツとクルマの話とかしていると、また気持ちがクルマのほうに傾いたりして。休みに入る前の12月にクルマを買い直して、トランザムを買ったでしょう。それをまた買い直して、今度はインパラにしたんだ。

　ところがインパラは雨の日には乗れないし、東京は道が狭くて走れないし、都内を走っていても停める場所がないし、これは足にならないぞと。それでしょうがないから、もう1台ワーゲン・ゴルフ買っちゃった。だから、クルマ貧乏になってさぁ（笑）。

——ムダ使いは、他にもしたんだろ（笑）？

宗仁　ギブソンのアコースティック・ギターで、J…200のオールドを買ったんだ。なんと62年製で、本来なら、ウン十万のところを、友達価格で7万円で買ったの。

——それはほとんど、〝きったねえぞ、テメエよー！〟っていう世界だな。それで、またライヴをやりたくなったとか？

宗仁　けっこうアマチュア・バンドをたくさん観に行った。今、いったいどういう状況なんだろうって思ったから。正直に言って、観たバンド全部「あんたたち、もうやめなさい」って言いたくなるようなのばっかだった。ルックスいいし、客も入ってるし、うまいんだけど、どこか違うんだ。

　そんなことをやってるうちに、ZIGGYのリハーサルが始まっちゃったからね。

——休み中に、なにか新たな刺激には出会った？

宗仁　ナイジェル・マンセルに関する本とかビデオを全部買い込んで、オタクになって調べたの。それまで、この世でいちばんオレが尊敬している男って、キース・リチャーズだったけど、変わったもん。ナイジェル・マンセルになったもんね。

　ビートルズよりも2階級上の勲章を、女王からもらった男だからね。それに、ヤツはミュージシャンっぽいし、走りがロックだよ。オレのまわりで、アイルトン・セナが好きだっていうヤツとは、もうクチきかないもん。

　だから、休んでいる間は、音楽以外のところに、視線が広がったからさぁ。休みに入って、いろいろ考えたんだけどさ、音楽ドバカっていうんじゃ、やっぱりダメだなって思った。魅力がある人って、他の方面のことも知っているし、見方も広いんだよね。だから、「オレにはロックしかないぜ」とか言ってるヤツを見ると、〝ヘッ〟と思うようになった。

——人間的な幅を広げることが大切だって思うようになったんだ？

宗仁　だって、音楽ってものすごく人間的なものじゃない。音楽しか知らなかったら、絶対にいいギターなんて弾けないと思うし。

——活動を再開することになったときは、どう思った？

宗仁　休めるなら、もうちょっと休んでもいいなとは思ったけど、ボチボチやってもいい頃かなっていう感じだった。なんか、デケエ音で、自分のギターが弾きたくなったんだよ。それまで、デケエ音で弾いたなんて、数えるくらいしかなかったから（笑）。

　あとは、そろそろヒマに飽きてきたっていうのもあった。でも、こんなに早くレコーディングするなんて、思ってなかったけどね。

——最初にみんなが集まって、音を出したときはどうだった？

宗仁　まず、すっげえヘタだなって思った。自分も含めて、全員が（笑）。とりあえず、昔の曲で音合わせしようと思っても、できないんだもん、覚えてなくってさ。それで、戸城が言ったんだと思うけど、「できねえんなら、新曲を作ろう」って。それで、新曲を作ってボチボチやっていて。これはマズイっていうんで、週に4日くらいリハをやって、なんとか形にもっていったんだ。

——その〝リハ〟って、リハーサルじゃなくて、リハビリだったと（笑）。

宗仁　ホント、最初の2ヵ月はリハビリだったね（笑）。

——レコーディングは短期間だったけれど？

宗仁　実際、時間がなかったから、入ってからがツラかったなぁ。時間がないから、レコーディングに入るまで、リフとか考えないでおこうと思って。とりあえず、構成とおおまかなアレンジだけ決めといて、あとはスタジオに入ってからだと。実際、そういうレコーディングだった、今回は。

——今回の曲って、今までのとはイメージが違うじゃない？

宗仁　正直に言って、最初はとまどった。曲によっては、今までのリフ作りやサウンド作りではダメだなって思った。だから、レニー・クラビッツなんかを聴いて、ちょっと研究したりもした。

——アルバム全体も、今までのZIGGYからすると、変わったね？

宗仁　ウン、変わったと思う。でも、良かったと思う。今ってヴィジュアル先行バンドばっかりでしょ。オレたちがそういうことをやらなくてもいいんじゃないのって。ヘンな意味じゃなくて、もう少し落ち着いて、オトナでも聴けるロックっていうのでも、いいんじゃないかなって思ってたからね。そういう意味では思っていたようなアルバムになったんじゃないかな。

――とりあえず、今までなにをしていた?
戸城 やっぱり、ギャンブルっすよ（笑）。競馬とパチンコの毎日。
――それはウワサには聞いていたけど、ホントだったんだ。
戸城 ウン、ホント。でも、それでオレが破産したっていうのはウソよ。
――1年間で、どれくらいつぎ込んだ?
戸城 わからない。だって、当たれば返ってくるじゃない。
――それ以外には何をやってた?
戸城 べつに……。リハーサルをやったり、レコーディング・スタジオに行ったりっていうのがないだけっていう感じかな。
――結局、セッションでやったりっていうのも、斉藤光浩（元BOWWOW、元ARB）と去年の6月にやったくらいで。
戸城 あれはもう、楽しかった。自分のためにもなったし。自分のまわりにいる人とは違う雰囲気を持った人だからね。それに、オレなんて高校時代に、BOWWOWをコピーしていたクチだからさぁ、本物と一緒にやれちゃうっていうのは、うれしかったりするわけよ。そういうミーハーな部分もあるしね。
なんかさぁ、光浩さんとか一郎さん（田中一郎）のつながりとか、いいんだよね。ああいう友達関係っていいなって思ったよ。オレらのまわりとか、それよりも下のつながりもそうだろうけれど、しょせんはガキのつながりじゃん。だから、ミュージシャンとしてのああいう友情関係に、憧れるよね。
――ほかには、セッションとか、やらなかった?
戸城 森重とラズルの追悼に出たくらい。人に言われてやったセッションていうのもやったけど、客寄せパンダにはなったかもしれないけれど、自分のためになったわけじゃないからね（笑）。
――休んでいる間に、どこかのバンドに誘われたりはしなかった?
戸城 モトリー・クルーから誘われて……。
――んなわきゃねえだろうが。
戸城 いやいや、ヴィンス・ニールの代わりに入ってくれってさぁ（笑）。
――休んでいる間も、音楽はちゃんと聴いていた?
戸城 もちろん。だって好きだもん。中学時代に好きだったけれど、カネがなくて買えなかったレコードがCDになってたりするじゃん。今はカネ持ってるからさ、そういうのを買っちゃったりしたし。新しいところで気になったニルヴァーナとか、聴いてたよ。
――ベースは弾いていた?
戸城 あまり弾かなかった。でも、ギターは弾いてたよ。練習とかじゃなくて、曲を作ったりするのにね。
――じゃあ、再活動に向けて、曲を書き溜めていたんだ。マジメじゃん?
戸城 いや、ZIGGYのためとかじゃなくてさ、そういうのが好きだから。あと、MTRをまわして、自分で多重録音をしたりさ。
――そうなると、生活も不規則になりがちだって?
戸城 そうでもなかった。アマチュア時代にバイトしてるかしてないかわからない頃よりは、ぜんぜん良かった（笑）。とりあえず、すさんだ生活はしてなかったから。
――休んでいる間に、ミニ・アルバムがリリースされたよね?
戸城 あれはぜんぜん頭にないし、あんなの最低だと思っているから（笑）。これは書いちゃっていいよ。オレ、あれを作ったとき、休みに入る前だったから、インタビューを受けられなくて、くやしくてさぁ。"なんであんな曲を書いちゃったの?"って、自分で後悔してるしさぁ……。
――それじゃあ、アニメの「それいけロックン・ロール・バンド」は?
戸城 もう、試写会も行かなかったもん、くだらなさすぎて。ビデオをもらって、試写会があるからって言われたんだけど、ビデオをデッキにセットして、3分くらい見て"サイテー"とか思って消した（笑）。だから、試写会にも行かなかった。
――あれは、メンバーが作りたかったんじゃないの?
戸城 ぜんぜん。自分の意志なんかじゃないよ。「がんばれタブチくん」みたいに、ショート・コントでやってりゃ、まだ良かったのににねぇ。"やめてくれ。そこまでナルシストじゃねえぜ、オレは"っていう感じだよ。なんか王子様みたいなのが出てくるじゃん。最初に観たときの驚きはなかったですぜ。
――あとは、代々木でやった最後のコンサートのライヴ・ビデオが出たけど?
戸城 "若いじゃん、オレも"って思ったよね（笑）。あれには不満ないよ。マンガと違って、普通のものだから。
――1年間休んだ成果は、なにかあった?
戸城 歯をなおしたくらいで、あとはない。
――となると、ムダな1年だったとか?
戸城 いや、有効だったよ。こういう暮らしもいいなぁって思ったもの。
――それで、またやろうかっていう話になったのは、いつ頃だった?
戸城 去年の9月か10月かっていうくらい。けっこう早かったよ。「オレ、ヤダよ」っていったんだけどねぇ（笑）。

1年間の休暇は有効だったよ。こういう暮らしもいいなぁって思ったもの。

一説によると、ひたすら競馬とパチンコの毎日を送り、「グローリア」などのヒットで稼いだカネを使い果たして破産したとも言われていた戸城憲夫。ところがどっこい、トシノリくんはウワサと違って、とっても健康的な笑顔でインタビューにやって来た。
「4月の日曜日は、絶対にオフだかんね。だって、G1シリーズなんだぜ。オレは競馬場に行かなきゃならねえんだからさぁ」。
ウ〜ン、マネージャーも大変だよな……。

戸城憲夫

INTERVIEW : YOSHIYUKI OHNO

――どうして?
戸城 まだいいじゃんって思っていたからさぁ。
――でも、長期休業をするっていう話が出たときに、いちばん反対していたじゃない?
戸城 なんかさ、休んでるうちに、なまけぐせがついちゃって、やりたくなかったんだよね。でも、やりたくないって言っていたのがオレひとりだけだったみたいでさ。
で、知らない間にスケジュールとかが入っていたから、しょうがなかったんだよね。しょせん、歯車のひとつでしかなかったっていう感じですかね（笑）。
――休み明けに、初めてZIGGYのメンバーと音を出したときは、どうだった?
戸城 予想はしていたけれど、"こんなもんか"っていう（笑）。どうも、まいどありぃって感じかな。「新鮮な喜びがあった」とか「新鮮な驚きがあった」なんていうコメントを期待しても、だめだよね（笑）。
――純粋に音が出せて、うれしいっていうのはなかった?
戸城 それはレコーディングに入ってからあった。けっこう、レコーディングが好きになっちゃってさ、楽しかった。
――今回の復帰作『YELLOW POP』って、森重の曲と戸城の曲が半分ずつ入っているけれど、そのアルバム用にも曲を書いてあったんだ?
戸城 いや、書いてなかった。休んでいる期間に書いてた曲は、1曲も使ってないもん。それで、オレの一面として、ビートルズがすごく好きだからさ、ZIGGYではそういう面を出そうかなと思って、今回のアルバムの曲を作ったんだ。
――レコーディングはいつから始まった?
戸城 3月の10日くらいからかな。
――エッ、すごく短いじゃない。
戸城 そうなんだ。だから時間が足りなくってさぁ。
――それにしては、いろんな音が入っているよね?
戸城 そういう意味でも、ビートルズを意識したんだ。だから、べつにロック・バンドと思われなくてもいいって、開き直っているからさぁ。ビートルズの音を聴いて、ロック・バンドだって言える人ならば、オレたちもロック・バンドだろうし、「ストーンズはロック・バンドだけれど、ビートルズはロック・バンドじゃない」って言う人にしてみたら、オレたちもそういう存在だと思うからね。
――頭の中はビートルズだった?
戸城 オレはそのつもりなんだけどね。
――1曲目の「It's the sweet magic」から、2曲目「Summer days forever(8月のMother Sky)」、そして3曲目の「午前0時のメリーゴーランド」の流れが、じつにビートルズ的だよね?
戸城 そうだよ、だって狙ったもん。1曲目はポールが作ったかなっていう感じだとしたら、次はジョージで、3曲目がジョンで、11曲目に入っているオレの曲「のらねこのくろくん」が、リンゴの作った曲っていう感じなんだよね（笑）。リンゴが「オクトパス・ガーデン」とか「イエロー・サブマリン」を歌っているのと、同じ感覚なの。
スタッフの誰が言ったんだか知らないんだけれどさ、この曲を入れないほうがいいって言ったヤツがいて、ケチつけられちゃって、けっこうメゲたんだよね、オレ。「これ入れないんだったら、全部入れないよ」って話してさ。なんか、わかってねえんだなって思ってやんなっちゃったよ。
ある意味じゃ、ビートルズの『ホワイト・アルバム』のあたりに通じるものがあるんだよね。
――シタールの音なんかも入っているしね?
戸城 ホントはエレクトリック・シタールを借りて、オレが弾こうとか思ってたんだけど、レンタル料が1日5万円くらいするんだ。弾けるかどうかもわからないものに、そんなにカネ払うのもバカらしいじゃん。練習するだけで1ヵ月もかかったら、買っちゃったほうが安いもんね。だから、キーボードでシタールの音を出してもらった。
――ZIGGYらしいアルバムになったと思っている?
戸城 いや、今までのZIGGYらしいものを望んでいた人にとっては、ぜんぜんZIGGYらしくないんじゃないかな。正直に言ってさ、「SHOXX」とか「ロッキンf」とかに、相手にされない音を作るのが目標だもん、オレ（笑）。

大山正篤

INTERVIEW : MARI ITOH

——まず、休暇中に何をしてたか聞こうかな。

大山 日記でもつけてればよかったな(笑)。まぁ、タラタラしてたよ。休みを利用して何かを身に付けるとか、勉強するとか、そういうことはまったくなかった(笑)。

——どこかへ遊びに行ったりはしなかった?

大山 旅行はした。休み入ってすぐ、嵐のように行ってね。で、疲れちゃって、やめたの。

——国内? 海外?

大山 両方。外国は、ニューヨークへ行ったんだ。十日弱ぐらいだけど。

——ニューヨークでは、何してきたの?

大山 いろいろ(笑)。

——ヤバいこととか? (笑)。

大山 それはノーコメントだよ(笑)。まぁ、ホテルからあまり出なかったとだけは言っておこう(笑)。

——ニューヨークだと、音楽シーンも盛り上がってないよね。今、何がおもしろいの?

大山 何もおもしろくなかったよ。

——じゃ、なんで行ったのよ?

大山 ハクつけに(笑)。いやぁ、どうせならハワイとか行けばよかったよ。

——そうだよ。リゾートしちゃえばよかったのに。

大山 そう言えば、ゴールデン・ウィークの真っ只中に沖縄に行った。たまたま友達に誘われて、太陽さんさんの沖縄って楽しいかもしれないって思ってさ。でも、なぜかメンツが俺と、そいつと、そいつの彼女なわけ。で、ビーチ沿いのリゾート・ホテルかなんかに部屋とってあるわけ。ツイン・ルーム二つ。むこうはいいわけよ。俺はツイン・ルームでひとり、海を眺めながら……何しに行ったんだかさぁ(笑)。

だいたい、俺みたいなのが沖縄でモテるわけないじゃん。こんな青っちろい日焼けしてない体じゃ、リゾート・ギャルのハートはつかめませんね、やっぱり。

——残念だったね……(笑)。

大山 あと、何ヵ所か温泉に行ったですよ。やっぱり、温泉がいちばんいい(笑)。

——まぁ、リラックスはできたみたいだね。

大山 うん。でも、休んでるときって波があるじゃん。ヒマだヒマだって思ってるときと、こりゃぁ悪くないぜっていうときと。ちょうど、こういう生活って最高だなって思い始めた頃に仕事が始まったからね。タイミング悪いよ(笑)。

——仲間のミュージシャンのライヴやイヴェントなんかには顔出してた? あんまり見かけなかったような気がするけど。

大山 働いてるときのほうが、いっぱい、あちこち顔出してたね。

——音楽シーンから少し離れようっていう気持ちがあったの?

大山 いや、ぜんぜんなかったんだけど、外に出るのがかったるくて……あ、ちょっとはあったかな。どこで誰と会っても、「何やってるの?」とか「どうすんの?」ってきかれるし。でも、おっくうになったっていうのは、すごくあるみたいよ(笑)。けっこう、家でボーっとしてた。

——ところで、ニュー・アルバムを手に復活するわけだけど、各自、休暇中に曲作りはしてたの?

大山 まぁ……。俺も作ったんだよ。今回、MTRを購入してね。かっこ、森重のお下がり(笑)。で、参加したんだよ。何曲か作って提出したんだ。でも、ボツ。

——じゃ、曲はたくさん集まってたわけだ?

大山 うん。でも、実際、おサラ(CD)にしたのは、年明けぐらいから作ったものが多いみたい。

——レコーディングに入ったのは、いつ?

大山 今年の3月。

——去年の秋ぐらいから動きだしてたのは、リハ(ーサル)だったわけだ?

大山 そう。リハ。リハビリ(笑)。もう、ヘタすぎて目まいがした(笑)。

——ドラムは、ずっと叩いてなかったの?

大山 ちっとも(笑)。でも、さすがに夏ぐらいから、ちょっとはやっておかなきゃマズいかなと思って、たまに……。一週間に一回ぐらいだったけど、スタジオ押さえてね。

——マジメだね。エライ。

大山 まぁね~(笑)。

——アルバム・タイトルか、けっこう意味ありげで、インパクトあるけど……。

大山 それ、俺がつけたの。けっこう、やるでしょ? 今回、俺、前向きだったんで森重にほめられちゃった(笑)。

——で、曲や詞をふまえて、つけたの?

大山 曲があがって、ジャケットがあがって、そこから受けるイメージ……それが、この、ワタシの類いまれな感性のアンテナにひっかかって(笑)……っていうのは冗談だけど、なんか、和洋折衷みたいな感じのタイトルがいいねって。

——内容に関してだけど、今までだとアタマは勢いのあるロックン・ロールで一発カマして、みたいな感じ、あったじゃない? でも、今回のアルバムは、違うよね。変化球で来てるかな、という……。

大山 歳だから、直球勝負は難しくなってきてる(笑)。いや、みんなさ、『KOOL KIZZ』の延長線上で来ると思ってたと思うの。俺も、そう思ってたもん(笑)。でも、あがってくる曲が、ぜんぜん違った。

俺だって、いつまでもギャグ担当じゃないんだぞ(笑)。

ニューヨークの街より太陽輝く沖縄の海より、なぜか温泉でおちついてしまったという大山選手。まぁ、リフレッシュできたのならよかったということで……復活第1弾のアルバムを『YELLOW POP』と命名した彼のセンスも、久々にアルバムで聴かせてくれるドラミングも、冴えていると思える。休業明けもあいかわらずギャグが多く、わざと真面目に音楽を語ろうとはしない彼だが、ホントのところは、とても真面目なのだった。

——曲からして、今までと違ってたんだ?

大山 そう。作曲者には、それなりの意図があったんじゃないかな。

——大山クンの意図したところは?

大山 俺自身は、もっとハードでゴリゴリのヤツで、恐れおののけ、おまえらー みたいな感じでやったほうがいいかな、とも思ったんだ。でも、あがってくる曲が違うから。リルビー(ちょっと)不安な時期があったけど、作曲者の意図を聞くと……ね。

——ポップ……って言っていいよね?

大山 間違いなくポップだよね。やっぱ、作曲者AとBは、そのへん意識したみたい。音楽としていいものっていうか……。だって、『KOOL KIZZ』の延長線上みたいな曲って、あることはあったのよ。だから、ああいうアルバムを作ろうと思えばできたんだろうけど、あえてやらなかった。それよりメロディで勝負、みたいな……。で、そのメロディっていうのは、歌謡曲じゃなくて洋楽ポップスの感じを出したかったんだろうと思われる。そういうミーティングしたことないから、憶測だけどね。

——いや、それは『KOOL KIZZ』のときにも森重が言ってたよ。50'Sとかのポップ・ミュージックのニュアンスを出したかったって。だから、その部分が今回、ハードな部分より強調されてきたというか……。

大山 うん。非常にポップでキャッチーで、いいんではないかと思うんですけど。ただ、俺はちょっとウズウズしてくるけどね。

——聴く方も、ハードなのが好きな人は、そう感じるかもしれないね。でも、ホントに作品としていいものになったという感想だな。

大山 うん。作曲者はカッコつけて言わないかもしれないから俺が暴露しますけど、一曲一曲、すげぇ緻密に作ってるからね。すげぇ時間かかってる。こんなに真面目に曲について考えて試行錯誤したのは初めてなんじゃないか、と(笑)。で……今回のアルバムを気に入ってくれる人は、けっこう年齢層が高いんじゃないかな。若いコちゃんたちは、ちょっと欲求不満かもしれない。

——でも、若いコにしてもZIGGYのファンって、メロディのよさ、わかりやすさについてきてたわけでしょ?

大山 けっきょくさ、うちの場合、いいところって曲のよさと歌のうまさ。これしかないのよ(笑)。だったら、それを前面に押し出したほうがいいんじゃないか、と。ヘヴィ・メタルやろうと思ってもできないからね。じつは、これがうちのいちばん得意なジャンルなのかもしれないと思ってる。

——ドラムに関しては、曲調が違うってことで制約があったとか、やりたいことを多少押さえたとか……そういうことはあった?

大山 やりたいことと違うってのはないけど、今までの手グセ、足グセをやっちゃいけない部分があったから、ちょっと苦労したかな。

——聴いてて、なんか、今までの大山クンのドラムと違う感じはするけどね。

大山 大人なタイコ叩いてるでしょ? はっきり言って、テクニックの部分では今までいちばん簡単。むずかしいことはやってない。でも、こういうタッチの曲を表現するのは、じつは非常に難しいからさ。専門的なこと言わせてもらうと、デッドな音……あんまり響かない、最近っぽくない音で録ったつもりだから。パーンッー っていうのが最近の音でしょ? そうじゃなくて、そこでドラムが鳴ってるような感じ。生音っぽいから、アラは出ちゃってるんだけどね(笑)。

——録音方法で、変えたところはあるの?

大山 結果的に変わったヤツはあるよ。俺だけ先にドンカマだけ聴いて他の音なしで録っちゃうっていう……なんでそうなったかって言ったら、ベースの人が寝てたんだ(笑)。じつは俺って、譜面が読めちゃう人だからさ、ピース。だから、譜面があればできちゃう。これでテクがあれば、スタジオ・ミュージシャンなんだけど(笑)。

——そういう録り方した曲は、仕上がりも違ってる?

大山 タッチが違う感じになってる。……今日は真面目にインタヴューが進んだな。音楽誌らしいよね(笑)。

——いいじゃん、いいじゃん(笑)。休んでたんで、そろそろ音楽の話したいんでしょ?

大山 少しはね。俺だって、いつまでもギャグ担当じゃないんだぞって(笑)。

《ツアー・スケジュール》6月27日=渋谷公会堂、28日=札幌市民会館、7月14日=広島アステールプラザ(大)、15日=大阪厚生年金会館(大)、17日=名古屋市公会堂、22日=福岡市民会館、27日=仙台市民会館(大)、8月17日=日本武道館 ●問合せ先=極楽倶楽部(☎03・3791・5483)

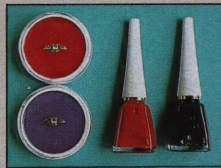
《バックナンバー》■VOL.1→巻頭カラー34ページ大特集

撮影協力:XIANG'S B(☎3464・8555)

ZIGGY

SRC MAIL ORDER

イヤーカフ/シルバー/フリー
①12-319 骨ドクロ ¥1,800
②12-323 ウイングドクロ ¥1,800
③12-320 ドクロ十字 ¥1,800
④12-321 ドクロ ¥1,800
⑤12-322 十字架(大) ¥1,800
⑥12-324 ピース ¥1,800
⑦12-318 ノーマルセット ¥1,600
⑧12-329 ホールド ¥2,000

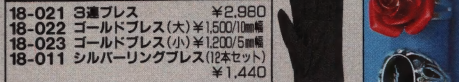
33-006 毛染め 各 ¥4,000
赤、紫、黒、オレンジ、緑、青
33-007 ブリーチ剤 ¥3,000

33-002 リップ&フェイスカラー
各¥1,600 黒、紫、赤、青
33-004 マニキュアセット
(黒&赤) ¥1,280/2色入り

13-305 パールネックレス
¥2,980 長さ230cm

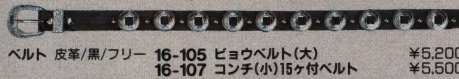
12-316 Y82チョーカー ¥1,500
12-235 K22チョーカー ¥1,500
12-237 E5チョーカー ¥2,000
★3点共、ピアス・イヤリングでもOK。

13-320 ハート(大)刻ペンダント ¥2,000
13-323 サソリドクロペンダント ¥2,980
13-321 ドクロクロスペンダント
(ヘッド10×5cm) ¥3,980

13-328 ラッキーアイ(大)ペンダント ¥2,500
13-329 ラッキーアイ(小)ペンダント ¥2,300

リング(フリーサイズ)
17-046 ローズリング赤バラ ¥1,500
17-043 ブラックリング ¥2,500
17-049 目玉リング(小) ¥1,600
17-051 ボーンハンド ¥1,200

18-021 3連ブレス ¥2,980
18-022 ゴールドブレス(大) ¥1,500/10mm幅
18-023 ゴールドブレス(小) ¥1,200/5mm幅
18-011 シルバーリングブレス(12本セット) ¥1,440

12-307 マグネットピアス(黒&赤)
¥2,000/2ケずつ4ケセット/
穴あけ不要
磁気で付きます

14-021 黒手袋ロング ¥4,700
(レースもあり)
14-022 レース手袋 ¥2,980

ベルト 皮革/黒/フリー
16-105 ビョウベルト(大) ¥5,200
16-107 コンチ(小)15ヶ付ベルト ¥5,500

リアルプリントTシャツ ¥5,800 綿/フリー(バックプリントもフロントと同じです)
35-222 エンブレムA
35-224 ローズ
35-221 エンジェル

35-191 シースルーTシャツ
¥3,980 ナイロン100%/
黒/フリー

02-211 ストラップシャツ
¥8,900
綿/黒/フリー

41-409 編上げスカート ¥6,500
黒/ナイロン、アセテート/フリー

35-159 長袖PND・紫
¥3,820(赤もあり) 綿/フリー

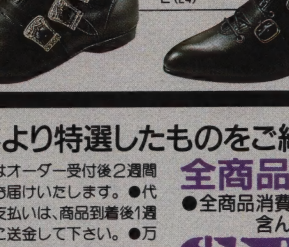
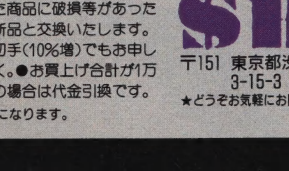
35-128
ベルト付Tシャツ
¥6,800
綿/黒/フリー

35-218 長袖ハーレーミルウォーキー
¥4,980 綿/フリー

41-408 きりかえスカート
¥6,500 黒/ナイロン、
レーヨン、アセテート/フリー

13-325
ブラックネックレス
¥3,980 長さ250cm
01-337 ボレロ(シフォン)
¥5,500 黒/ポリエステル/フリー
41-407 レースロングスカート
¥9,800 黒/ナイロン、レーヨン/フリー

35-074
長袖、黒無地
¥2,200
(白もあり)
フリー

06-004 プレーンビスチェ ¥6,500
黒/ポリウレタン/フリー/B80cm
02-274 ベロアブラウス ¥10,800
黒/アセテート、ポリエステル/フリー
41-404 レースオーバースカート
¥9,500 黒、赤/ポリウレタン、ナイロン/
フリー/W65cm

27-014 ガーゼシャツ
PNDブリーチ・紫
¥9,800(赤もあり)
フリー

①08-402 ワイドパンツ
¥11,800 ポリエステル/
黒/フリー/W76cm
②08-344
ダブルバックルパンツ
¥11,800 ポリエステル/
黒/フリー/W~79cm
③08-101 レザーパンツ
¥8,800 合皮/黒/
28、30、32インチ

02-273 パンクシャツ ¥10,000
綿/黒、白、赤/フリー

01-317 モヘアセーター ¥10,000
アクリル/紫×黒、赤×黒/フリー
08-135 ブラックスリムパンツ
¥8,800 綿/黒/28、30、32インチ

14-010 レザーグローブ
(ビョウ付) ¥3,600
皮革/黒/フリー
14-005 レザーグローブ
(ビョウなし) ¥2,980

シューズ 皮革/黒
09-0817
ブーツ817
¥19,800
メンズ24~27
レディス23、24cm

サイズは23、24、25、26単位です
09-0812
ブーツ812
¥17,800
メンズ24~27
レディスM(23)、L(24)

09-0329
ブーツ329
¥18,800
メンズ24~27
レディス23、24cm

●SRCの商品はスキンヘッド、コンフュージョンのブランドより特選したものをご紹介しております。

お申し込み方法

★ハガキでオーダーする人は
下記の要領で必要事項を書いてポストへ

41 〒151
東京都渋谷区
代々木3の15の3
アベビル205
SRC
SH5係

①〒住所(フリガナ)
②氏名(フリガナ)㊞
③生年月日
④電話番号(必ず)
⑤希望商品名・商品番号
⑥数量・色・サイズ
⑦保護者名㊞18才以上の方は必要ありません

★FAXでオーダーできます
ハガキと同じように必要事項を書いて
03-3378-6300
年中無休 ※必ずSH5係と書いて下さい。

★デンワでオーダーする人は
日・祭を除くAM10:00~PM6:00
03-3378-6200

●商品はオーダー受付後2週間前後でお届けいたします。●代金のお支払いは、商品到着後1週間以内に送金して下さい。●万一届いた商品に破損等があった場合は新品と交換いたします。●郵便切手(10%増)でもお申し込みOK。●お買上げ合計が1万円以上の場合は代金引換です。

●お急ぎの方は電話で確認の上、現金書留でご注文願います。また、急送希望の方は原則的に郵便物500円増、小包1,000円増になります。

全商品、送料は無料サービス
●全商品消費税を含んだ価格です。

SRC
〒151 東京都渋谷区代々木3-15-3 アベビル205
★どうぞお気軽にお問い合せください

原宿駅
●マクドナルド
●クレープ店
竹下通り
★SKIN HEAD
★CONFUSION
原宿店(水曜定休)
●営業時間
AM11:00~PM8:00
●原宿駅竹下通り口より約100m
●SHOP SKIN HEAD 03-3497-9856
●SHOP CONFUSION 03-3497-9867

カタログ無料急送
オリジナル新作カタログVol.13発行中/
ご希望の方はハガキに①住所②氏名③SH5係カタログ希望と書き左記まで

OFFICE & SHOP スタッフ募集!
写真を添えて履歴書急送せよ

TOKUMA JAPAN COMMUNICATIONS CO., Ltd.

JUICHI MORISHIGE

WE'LL BE BACK SOON!

SOWNIN MATSUO

ZIGGY

6/25 NEW ALBUM RELEASE
YELLOW POP

CD:TKCP-30589 ¥3,000(税込) CT:TKTP-20242 ¥2,800(税込)

NORIO TOSHIRO

MASANORI OHYAMA

COME ON EVERYBODY TOUR

★6/27(土) 渋谷公会堂
〈問〉SOGO東京 03-3405-9999

★6/28(日) 札幌市民会館
〈問〉ウエス 011-613-9000

★7/14(火) 広島アステールプラザ大ホール
〈問〉キャンディプロモーション 082-249-8334

★7/15(水) 大阪厚生年金会館
〈問〉サウンドクリエーター 06-361-9900

★7/17(金) 名古屋市公会堂
〈問〉ジェットプランニング 052-937-6651

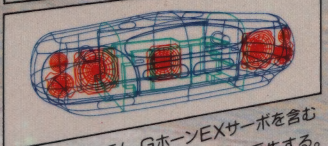
★7/22(水) 福岡市民会館
〈問〉BEA 092-712-4221

★7/27(月) 仙台市民会館大ホール
〈問〉ミュージックギルド 022-222-2033

★8/17(月) 日本武道館
〈問〉SOGO東京 03-3405-9999

OPEN 18:00/START 18:30(日本武道館のみOPEN 17:30/START 18:30)

★チケット発売中 ★5/24(日)よりチケット発売 ★後日詳細発表 全席指定 ¥4,120(消費税込)

企画・制作:パブリック・イメージ/ドライブミュージック 後援:徳間ジャパンコミュニケーションズ

SHOXX 1992 Vol.10 ショックス 92年7月号

発行人:荒井敏行
編集人:星子誠一
発行:音楽専科社 〒104 東京都中央区銀座5-1-7数寄屋橋ビル5F
☎(03)3574-0201(代) FAX:(03)3574-8548

雑誌04537-7 定価750円(本体728円 送料260円) Printed in Japan 株式会社プロスト

T1004537070757